コンビ　運命改変ゲーム

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンビ　運命改変ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ２８２７Ｘ

【作者名】
赤夜叉

【あらすじ】
――おかえり、クズの挑戦者――。ダメ人間的主人公が、再び『リリカルなのは』の世界に帰ってくる。何の取り柄も無い独りの青年と、人に捨てられた独りの少女が出逢い、運命を変える闘いが始まる。――私は、貴方を信じていいの？――。※この小説は、他の『リリカルなのは』の二次創作とは中身が異なります。ご注意ください。

プロローグ

『ようこそ、改運屋（かいうんや）へ』

気が付けば、暗闇の中で女性の声が聞こえた。百貨店等で聞く、アナウンスのような声だ。

よく見れば、暗闇の中に吹き出しのようなモノがある。表記されてる内容は、先ほど聞こえたアナウンスの言葉と同じだった。

『ココは、貴方のように社会から見放された方を救済する場です。社会不適合者で社会の役に立てないのなら、世界の役に立ちませんか？』

アナウンスが問い掛けると、『はい／いいえ』と選択画面が出現した。コレで選べと言う事だろう。

問い掛けられた者は、しばし考えた。とは言え、本気で真剣に考えている訳ではない。その人物は、日々を自堕落に過ごしていた。だから、今後どうするのかなど、深く考えた事は無い。元々、あまり深く考え込むタイプでは無かった。

もうどうでもいいや、と投げやりな感じで答えた。

『はい』

『ありがとうございます。それでは、まず、貴方のニックネームを入力して下さい』

その人物は、ウームとシンキングタイムに入った。正直、何でもいいのだが、本当に何でもいいとかえって悩んでしまう。

ややあって、その人物は学生時代のあだ名を入力した。

『ニックネーム：リン』
『続いて、年齢の入力をお願いします』
『年齢：２３歳』
『続きまして、性別になります』
『性別：男』
『次は、貴方の特技をお願いします』
『特技：無し』
『最後に、貴方が望む物をお書きください』
『望む物：金と彼女』

やっぱ金だよなー、と入力を終えてその人物は思った。
金があれば、大抵の欲しい物は手に入る。
しかし、金を得るには働かなければならない。
その人物は、労働なんかクソ食らえと思ってるダメ人間的思考をしていた。

『ご苦労様でした。これにて登録は完了致しました』

アナウンスの声が終わると、画面も消えて完全な暗闇に戻った。
この時、その人物はまるで思考力が働いてなかった。慎重さが欠如していた。今居る暗闇の空間、謎のアナウンス等について、何の追及もしなかった。
コレは夢だ、とその人物は思った。
その人物は、楽観的だった。

銀髪の少女との出会い

気が付けば、リンは倒れていた。うつ伏せになって、白い地面に倒れていた。地面が白いのは、雪が降ってるからだ。勢いは弱く、パラパラと曇天の空から降ってきて、地面を白銀の世界に塗り替えていた。

冷たい感触で、リンも白の正体が雪だと解った。

しかし、だからどうこうするつもりはない。

――凍死か……凍死なら、もしかしたら楽に死ねるかもな……。

危ない考えを頭に浮かべ、リンは目を閉じた。

寒さで体は震えてるが、苦しい訳じゃない。その内、寒さで感覚も麻痺するだろう。そうなれば、寒さも感じなくなるかもしれない。

リンは、このまま死んでもいいと思っていた。何かやりたい事がある訳でも無い、役に立つ技術や特技も持ち合わせていない。

働かない奴は、この世に――少なくとも人間社会に必要無い。

だからリンは、どうせ生きてて邪魔になるなら、このまま死のうと思っていた。

しかし、そうはいかなかった。

「起きなさぁい」

「ぐべっ！？」

いきなりリンは、頭、いや顔を踏まれた。雪の上に晒していた右頬を、ガッと強めに。

「いってぇ……！　んだよっ……！？」

踏まれて痛い頬を手で押さえ、リンは涙目で相手を睨んだ。

その瞬間、睨みは消えた。

驚く事が幾つかあって、思わず目を見開き、言葉を失った。彼の目の前に、少女が一人居た。その少女は、小柄な少女よりも更に小柄で、人形（ドール）並の大きさをしていた。服装は、逆十字の柄が入った白と黒を基調としたデザインのドレスで、黒のロングブーツを履いている。着ているドレスや頭に付けてるカチューシャ、ロングブーツには薄紫色の薔薇の装飾が付いている。両肩には、黒い羽装飾のような物が付いていた。そして少女の日本人離れした銀色の長髪、透き通るような白い肌、宝石のように紅い瞳は、それこそ人形のような美しさをしていた。

美しい容姿にも驚きだが、更に驚きなのが、その少女が宙に浮いている事だった。空中浮遊のマジックなのか、種は解らないが、とにかく少女は目の前で浮いている。

そんな不思議で芸術品のような美しい少女に、リンは見惚れていた。少女の全てが、リンの意識を一瞬で引きずり込んで虜にした。

出す言葉が見つからず、沈黙してるリンを見て焦れたのか、少女は少し不機嫌そうに言った。

「ちょっとぉ？　貴方、何をボーッとしてるのぉ？」

「え……？　あ、ああ……すいません」

貴女に見惚れてました、とは言えず、我に返ったリンは軽く頭を下げた。

そこでリンは、初めて自分が何処に居るのか疑問に思った。周りを見渡すと、見覚えの無い道だった。住宅街の道など、どこも同じに見えるが、さすがに地元や知ってる街の道くらいは見分けがつく。見覚えが無い、と言う事は、知らない街なのだろう。

そう思ったリンは、また疑問を抱いた。自分は確か、就活もしないで部屋のベッドで寝ていたハズだ。それが、どうして外に、しかも見知らぬ道端に倒れていたのか。

目の前に佇む不思議少女なら、何か知ってるかもしれないと思い、

訊いてみた。

「あの、ここは何処ですか？」と何故か敬語になってしまった。
「ここは、海鳴市よぉ」
「海鳴市？」

街の名前を聞いたが、リンは首を傾げた。外出する際の行動範囲が狭い為、街の名前を聞いても解らなかった。
少女は、そんなリンを値踏みするように見ていた。

「なぁんにも聞いてないのねぇ、貴方。それに、見た目通り地味でパッとしない人間ねぇ」

クスッ、と少女は鼻で笑った。
相手が綺麗な少女とは言え、これにはリンも少しムッとなる。

「失礼な……。キミは誰なの？」
「私は、水銀燈よぉ」
「水銀燈？」

聞き慣れない名前に、思わず聞き返した。名字なのか下の名前なのか、よく判らない。と言うか、本名かどうかも疑わしい。
疑問に眉をひそめていると、水銀燈は身を翻した。

「ついてきなさぁい。仕事を始めるわよぉ」
「え？　仕事？」
「貴方、改運屋に登録したんでしょう？」

改運屋、と言う言葉を聞いて、リンは思い出した。ココで目を覚ます前に、何かに登録した記憶が、ぼんやりとだが覚えている。

「ああ……確か、そんな名前だったような……」
「覚えてないのぉ？　おばかさんねぇ」

少女の言葉に、またリンはムッとなった。言葉そのもの以外に、少女の小馬鹿にしたような猫なで声が、更に神経を刺激する。

「どうせ馬鹿ですよ」

しかし、リンは反論するでなく、ただいじけて呟くだけだった。自分が馬鹿なのは間違いないので、言い返す言葉が無いのだ。

リンの悔しそうな様子が可笑しくて、水銀燈は笑った。

「別に、貴方は何にも解らなくていいのよ、おばかさぁん。どうせ何の役に立たないんだから、おとなしくついてきてくれれば、それでいいのよぉ」

終始小馬鹿にしながら、水銀燈は宙を飛んで移動を始めた。

真っ直ぐ前に飛んでいく水銀燈の後ろ姿を見ながら、リンは舌打ちした。何で初対面で、しかもあんなちっこい少女に馬鹿にされなきゃいけないんだ？　だが、少女の言うことは事実なので、やはりリンは反論出来なかった。

家に帰る道のりも解らないし、改運屋や仕事とやらに少なからず興味があったので、仕方なくリンは水銀燈の後を追った。

「宙に浮いてるのって、ソレ手品？」

すると、「おばかさぁん」と返事が返ってきた。

＊

水銀燈の後をしばらく歩いたリンは、丘にある小さな公園に着いた。

雪が降るなか辿り着いた公園には、一人の女が立っていた。後ろ姿だが、長い銀髪とスカートから女だと判明出来た。

今日は銀髪の女とよく会うな、とリンは思った。

すると、女はリン達の気配に気付いたのか、振り返って後ろを向いた。綺麗に整った顔立ちで、一目で美人だと言える。瞳の色は紅く、若干の違いはあるが水銀燈を大人にした感じだ。胸は大きく、モデルのような体型で水銀燈に勝るとも劣らない魅力的な女だが、雪が降ってるクソ寒い中をノースリーブで丈の短い黒のワンピース姿でいるのは、不自然でならない。

「貴方達は……？」

「ごきげんよう、リインフォース」

「何故、私の名をっ……！？」

水銀燈が挨拶の後に口にした名前を聞いて、銀髪の美女が動揺を見せる。

リインフォース。銀髪の美女の反応から察するに、ソレが彼女の名前なのだろう。二人は初対面のようだが、どうして水銀燈がリインフォースの名前を知っているのかは、疑問に思いながらも深くは考えなかった。まあいいか、とその程度の疑問だった。

だが、本人にとっては重大な問題だったらしい。名前を口にした水銀燈やリンに対して、リインフォースは警戒心を露にした。

「貴方達は何者ですか……？」

「うふふ。そんな怖い顔しないでぇ。折角の綺麗な顔が台無しよぉ

？」

意地悪く笑う水銀燈の傍で、コイツ性格悪いな、とリンは思った。

「安心しなさい。私達は、別に貴女に危害を加える気はないわぁ。寧ろ、その逆……貴女を救いに来たのよぉ」

「何だと！？」

リインフォースが目を見開き、先程よりも動揺する。

話の内容が全く解らないリンは、置いてきぼりの状態で軽く混乱していた。

「あ、あの～」

リンは、遠慮がちに手を挙げた。

「すいません。ちょっと話が全然見えてこないんで……説明してくれると助かるんですけど……」

状況の説明を求めると、水銀燈は面倒臭そうに、それでいて呆れた風に溜め息をついた。

それからリンは、リインフォースから色々と事情を聞いた。魔法や次元世界の存在、過去の超文明の危険遺産（ロストロギア）、海鳴市で起こった事件等々、一度に覚えきれない量だった。

水銀燈はと言うと、説明はリインフォースに全部任せて、ベンチに腰かけて楽していた。

一方で、一通りの説明を聞いたリンは、魔法や異世界の事よりも驚きな事があった。

「あの……正直な感想いいですか？」
「はい、どうぞ」
リインフォースに促され、失礼と承知しつつリンは素直な感想を口にした。
「うん。話に出てきた魔法少女達って、同じ人間とは思えないですよね」
「え……？」
リインフォースは訝り、興味を持ったのか水銀燈も聞き耳を立てる。
「まあ、空飛んだりその他諸々は魔法だから、ある意味当然っちゃあ当然ですけど……特にあの、映像に映ってた高町なのはって娘？　赤髪っぽい女の子に「悪魔め」って言われたら「悪魔でいいよ。悪魔らしいやり方で説得する」とか何とか言って……アレ、普通の小三が言える台詞じゃないですよね？　え？　何かあったんですか、あの娘？　何が小三の女の子を、あんな風にしたんですか？」
「そ、それは……守護騎士達と衝突を繰り返して、彼女も辛かったのでしょう」
答えるリインフォースは、苦笑いだった。
「絶対ヤバいですって。小さい頃からあんなんじゃ、将来ロクな大人になりませんよ？」
見た目は子供、精神はヤバい大人なコ●ンと言ったところか。思考が根暗と言うか、ダークな面に進んでる感じだ。

話に区切りがついたのを見計らって、水銀燈が割って入った。

「まあ、その娘がどんな性格をしていようと、将来どんな大人になろうと、私達には関係無いでしょう。それよりも、事態の方は把握出来たのかしらぁ？」

「ええ、まあ……」

「なら、本題に入りましょう」

本題、とはリインフォースの件だ。

つい先日、この海鳴市で『闇の書』――正確には『夜天の書』を巡る大事件が発生した。夜天の書とは、様々な魔導師の魔法を記録する魔導書で、主を変えて長い旅をしてきた本だ。ところが、歴代の主の中で、何を思ったのか魔導書のシステムを改変させて、闇の書なんて物騒な代物に変えてしまったのだ。主の命ばかりか、周囲を巻き込んで破壊と悲劇を繰り返してきた魔導書は、この海鳴市で新たな主を得て再び動き出した。その魔導書の管制人格が、リインフォースなのだ。他にも、主の警護や魔導書完成の為に魔力の源とも呼べるリンカーコア蒐集に動く四人の守護騎士が存在するが、ソレは今はさほど関係無い。重要なのは、リインフォースの中に破壊の根元となるプログラムが存在してる事である。魔法なのに、何故プログラムなんて科学的なモノがあるのか疑問だが、ソコはスルーの姿勢でいこう。

主の命を蝕み、破壊活動をしてきた防衛プログラムと呼ばれるモノは、先にリンが口に出した高町なのはと仲間達によって消滅された。しかし、そのプログラムを産み出す元となるプログラムは、いまだリインフォースの中に在るのだ。今の主を想ってリインフォースは、プログラムごと自らの消滅をなのは達に頼んだ。

消滅の儀式は、この場所で行い、リインフォースが先に来てなのは達を待っている状態である。ちなみに、なのは達はまだ気持ちの整理がついていない。

話を聞いたリンは、何と言うか、呆れた気持ちを抱いていた。自分を消してくれ、とはつまり、可能性を捨ててると言う事だ。映像を加えた説明で、なのは達がどれだけ頑張ったか、主である八神はやてがどれだけ家族想いか、ある程度解ったつもりだ。

ソレ等を踏まえて、思う。

諦めんの早すぎじゃね？

何度も激しい衝突を繰り返して、苦難困難を乗り越えて、ようやくお互い解り合えたのに、最後はロクに抗いもせずに消える。ロクに解決法を探そうともせずに、消そうとしてる。

自分はダメ人間だから、偉そうな事は言えない。いや、ダメ人間だからこそ断言出来る。なのは達は、可能性を見ていない。可能性を追わない奴は、ダメ人間と同じ。なのは達はまだ子供だから、しょうがないと言えばそれまでだが、防衛プログラムを破壊するところまでは、何があっても決して諦めない根強い姿勢をしていた。だからこそ、最後の最後での諦めの早さに納得がいかず、呆れた。

偉そうな事は言えないから、口には出さないが、何だか妙に拍子抜けした気分だった。

少々しかめっ面なリンの横で、水銀燈は不敵な笑みで告げた。

「リインフォース。貴方の中にある厄介なプログラムを、私が壊してあげるわぁ」

「何っ……！？」

リインフォースは驚き、目を丸くさせた。

しかし、すぐに表情を曇らせた。

「不可能だ……！」

「ふふふ。私を、他の能無しと一緒にしないでくれるかしらぁ？」

能無しって、まさか高町達の事じゃねーだろうな？　とリンは思

った。答えを聞くのが怖いので、事実確認はしなかった。
ネガティブなリインフォースに対し、よほど自信があるのか、水銀燈は笑みを崩さない。

「私が貴女の中に入って、直接プログラムを破壊するのよぉ」
「えっ！？」

リインフォースは、本日何度目かになる驚きの声を上げた。
話を聞きながら、リンは自分が居る必要性を疑問に思っていた。

リインフォース救済の内容は、いたってシンプルだ。体内に在る除去不可能な質の悪い寄生虫(プログラム)を、体内に侵入して直接破壊(タチ)すると言うものだ。

シンプルな方法だが、実際に出来るのかリンは疑問に思った。いくら水銀燈の体格が小さいと言っても、人の体内に入れる程ではない。

しかし、彼の抱いた問題は問題にすらならなかった。

水銀燈は、人間ではなく、リインフォースと似たような存在なのだ。魔力によって身体は構成され、彼女は自分の大きさを自由に変えられる。実際に、目の前で実演してみせてくれた。みるみる小さくなっていき、最終的には米粒並の大きさになった。これには、目を丸くして驚いた。まるで、狐につままれたような、不思議な感じだった。

「それじゃあ、リインフォース。お口を開けてちょうだぁい」

水銀燈が促して、リインフォースの口を開けさせた。

どうでもいいが、とリンは思う。その猫なで声的なしゃべり方は、ナチュラルなのかワザとなのだろうか。

そんなどうでもいい事を一瞬考えた直後、リンは慌てて水銀燈に声をかけた。

「水銀燈」

「なぁに？　気安く名前を呼ばないでちょうだい」

振り返った水銀燈が早速吐いたのは、刺々しい言葉だった。

どうやら、リンの事を快く思っていないらしい。

多少心がヘコンだリンだったが、気を取り直して尋ねた。

「あの……何か、俺にもやる事とかある？」

「無いわぁ。貴方は、ココでリインフォースと適当にお喋りでもしてなさぁい」

小馬鹿にした台詞を吐いて、水銀燈は口からリインフォースの体内に入った。

残されたリンは、しかめっ面で溜め息をついた。これじゃあ、本当に何の為に自分は居るのか解らない。仕事と言って連れてこられたが、実際はこうしてほったらかしにされる始末だ。まあ、体内に入れないなら、他に何もする事が無いのも事実だ。

結局、魔法とは無縁の凡人なリンに、出来る事など何一つ無いと言う事だ。とことんまで使えない自分を、リンは鼻で小さく笑った。水銀燈への怒りは無い。至極真っ当な意見とすら思った。

「大丈夫ですか？」

そんな落ち込んでるリンに、リインフォースが声をかけた。

顔を上げれば、リインフォースは心配した表情でこちらを見ていた。

「はい。大丈夫です」

リンにとって、他人の優しさに触れたのは久しぶりだった。

だからだろう。リインフォースの気遣いが、かなり嬉しかった。

＊

水銀燈がリインフォースの中に入ってから、どれくらいの時間が経ったのだろうか？

多分、三分か五分の短い時間だろう。だが、感覚的には十分位だった。外でリインフォースと待つリンは、特に会話もせず黙っていた。その場の沈黙が、時間経過の感覚を狂わせているのだろう。リンは、あまり自分から話し掛けるような、積極的な人間ではない。それに、仮に会話をしたとしても、きっと長くは続かない。口下手なリンに、初対面の人との長時間の会話は無理だった。

それにしても寒い、とリンは震えた。長袖に長ズボンだが、厚着とは言えない格好をしている。雪が降る中を耐えるには、あまりに頼りない。薄着のリインフォースは寒くないのだろうか？　と目を向ければ、彼女は涼しい顔をして向かいのベンチに座っている。管制人格とやらは、寒さを感じないのかもしれない。

ふとリンは、公園内に設置されてる時計を見つけた。時間経過を確認しようと思ったが、水銀燈が何時体内に入ったのか解らない事に気付き、やめた。

白い息を吐いて、リンは雪を降らす灰色の空を見上げた。

水銀燈の事が、少し気になった。本人はかなり自信満々な様子だったが、大丈夫だろうか？　自分はボケーッと待ってるだけでいいのだろうか？　中の様子ぐらい見れないのだろうか？　自己への問い掛けが、頭の中を飛び交う。次第に落ち着きが削られていき、貧乏揺すりまで始めた。大抵の事は気になっても、すぐに「まあいいか」と考えるのをやめるのだが、この時は違った。

意を決して、リンは沈黙を破った。

「あの……」

「何ですか？」

リインフォースの紅い瞳が、こちらに向く。

「その、中の様子とか見れないんですか？　ちょっと気になっちゃって……」
「ソレは無理です。自分の体内の様子を、映像に流す事は出来ません」
申し訳なさそうに、リインフォースは答えた。
地球の技術よりだいぶ進歩してるから、もしかしたらと思ったが、まあ無理なものは仕方ない。
「じゃあ、他にリインフォースの中に入る方法とか、あったりします？」
言った後でリンは、自分の言葉に顔を熱くさせた。自分で言っといて何だが、言い方が卑猥に聞こえるのだ。周りに人が居なくて良かったと、心底思った。
二つ目の問い掛けに対して、しばし考えてからリインフォースは答えた。
「その方法は、無くはないです。『安らかな夢を見せる』と言う形で、相手を私の中に引き入れる魔法があります。それなら、体を小さくしなくても私の中に入る事が出来る」
なるほど、とリンは頷いた。
答えを聞いて、さてどうするか？　と考える。リインフォースの体内に入るのは、出来ない事じゃないのは解った。それに、やはり魔法と言う未知の力には興味があるし、リインフォースの中に入ってみたい気も少なからずあった。
しかし、と思う。入ってどうする？　もしかしたら、水銀燈は目的を達成させてるかもしれない。例えプログラム破壊に苦戦してた

としても、自分が行っても邪魔にしかならないんじゃないか？
悩むリンは、でも、と思い直す。

「あの、ソレで俺を貴女の中に入れてくれませんか？」

このまま何もせずに、ボーッとしていたら、男として何だか情けない気がした。本当に、何の為に来たのか解らなくなってしまう。
それに、外は寒い。リインフォースは平気みたいだが、このままじゃ風邪を引いてしまう。
そして最大の理由は、やっぱり水銀燈だった。中に入った水銀燈が、どうなってるのか気になる。
リンの頼みに、リインフォースは戸惑いを見せる。

「ですが、貴方は魔導師では無い。普通の人間が入って、安全である保証はありません」
「仮に魔導師でも、安全の保証なんて無いんでしょう？　だったら、同じ事ですよ。それに、水銀燈がもう済ませちゃってる可能性もありますし」

この時点では、まだリンは暢気だった。
基本的に、リンは深く考えない暢気な人間なのだ。
リインフォースは黙って顔を逸らし、迷った。出来る事なら、無関係の人間を巻き込みたくはない。だから、リインフォースは断ろうとした。
しかし、この日、この時、リンは珍しくしつこい位に粘った。どちらかと言えば、リンは消極的な性格の人間だ。リインフォースの救出だって、そんなに乗り気でも無い。魔法等の存在は魅力的だが、危ない目に遭うのは御免だからだ。それでも交渉を粘るのは、彼女の中に入った水銀燈が気になるからだ。他人の事が、こんなに気になったのは、もしかしたら初めてかもしれない。

水銀燈を心配するリンの気持ちを察したのか、それとも単に粘りに負けたのか、最後は渋々と言った様子でリインフォースは承諾した。

リインフォースの魔法で、リンの体が淡い光に包まれていく。アニメの中でしか見てこなかった不可思議な現象が自分の身に起こり、リンは緊張して唾を飲み込んだ。

光は段々強くなっていき、やがて眩しさに目を閉じた。

＊

光が消えたのを瞼越しに感じて、リンは目を開けた。

「わお……」

目の前の光景に、思わず小さな声を漏らす。

リインフォースの体内と思われる場所に、リンは居た。薄暗い通路で、大小のコードのような物が床に伸びている。人が居ないから当然だが、中は不気味な程に静かだった。耳を澄まさなくても、聞こえるのは自分の呼吸音だけだ。

外の寒さとは別の寒気を感じて、リンは自分の腕を擦った。

「ココは、体のどの辺りなんだ？」

特に場所の指定をしなかったので、自分が何処に居るのか解らない。

とりあえず、リンは通路を進む事にした。ココで立ち止まってても、何にも解決しない。暗い場所に一人は心細くて不安だが、仕方ない。

足音を鳴らして、リンは通路を歩いていった。
しばらく歩いて、不意に通路の先から音が聞こえてきた。途中で立ち止まり、耳を澄ませてみると、何か壊れるような、爆発したような音が聞こえる。心を奮い立たせて、リンは足音を殺した忍び足で前に進む。出口に近づくにつれ、心臓の鼓動が高鳴る。出口から数メートルの地点で、爆音の他に振動まで伝わってきた。
辿り着いた出口から、恐る恐る顔を覗かせた。

「なっ……！？」

その瞬間、リンは目を見開いて短い声を上げた。
平凡な日々を生きてきたリンにとって、衝撃の光景だった。通路を出た先は、巨大な空間が広がっていた。その空間に、水銀燈は居た。
いや、水銀燈だけではない。彼女の前に、とんでもなく大きなモノがそびえ立っている。リンは、ソイツを見て度肝を抜いていた。何と言えばいいのか。複数の生き物が合わさったような、複合体のような化け物。頭部は鰐（ワニ）、体はゴリラのような屈強な体躯、その体のあちこちから無数の触手が生えており、蛇のように動いている。有名な怪獣映画に出てくる、植物怪獣を連想させる圧倒的巨体に、リンは息を飲んだ。
何だアレ？　何だアレ？　何だアレ？　何だアレ？　何だアレ？
何だアレ？　何だアレ？　何だアレ？
パニックになって、頭が冷静に働かない。
怪獣にも驚きだが、更に驚かされたのは水銀燈だ。あの人形サイズの体で、何十何百倍はあろうかと言う巨体の怪獣に立ち向かい、闘っているのだ。自分だったら、五秒も持たないだろう。しかし、水銀燈は魔導師のような技を駆使して、怪獣と闘っている。
だが、体格や力の量等に差がありすぎて、押されているのは一目で判った。明らかにピンチだ。

どうすればいい？　どうすれば……？
隠れて見てるリンは、オロオロとしていた。

＊

水銀燈は、苦戦をしていた。
リインフォースの体内に入った水銀燈は、魔力探知で元凶であるプログラムをすぐに見つけた。一気に消しにかかったが、防衛システムが働いて防がれてしまい、激しい戦闘に突入する。
巨大な怪物に変貌したプログラムは、異様な威圧感を放って攻撃を仕掛けてくる。先端の尖った複数の触手を、猛スピードで槍のように突いてくる。襲ってくる触手の群れを、水銀燈は魔力で作った半透明の障壁を張って防ぐ。突きの威力で障壁にはヒビが走り、力負けして後方へ押された。
しかし、水銀燈も黙ってやられてばかりでなく、反撃をする。両肩にある黒羽装飾が、形を変えて黒い龍になった。大きく開かれた口の前に魔法陣が展開され、龍から青い火炎が放射される。だが、プログラムも同じように障壁を張って火炎を防御した。

「くっ……！」

悔しそうに顔を歪め、水銀燈は追撃をする。
複数の羽根に魔力を通して硬度を強化させ、黒い矢のようにプログラム目掛け一斉に飛ばす。全弾が障壁に命中するが、破れる様子は無い。プログラムも受けてばかりはおらず、開いた大口に紫色の魔力を溜め、砲撃のように放った。水銀燈は宙を舞い、間一髪で砲撃を避けた。
攻撃の質量に差がありすぎて、水銀燈は押されていた。しかも、

ココはリインフォースの中であり、彼女と繋がっているプログラムは魔力を得ているので、力尽きる事が無い。
戦況は圧倒的に不利だが、しかし水銀燈は闘う事を止めようとはしなかった。
――私は負けない。
何度防がれ、弾かれても攻撃を続ける。
――私は、一人で勝ってみせる。
迫る触手が、刃のように水銀燈を切り刻む。
――今までだって、一人でやってきたわ。
闘い続ける水銀燈の脳裏に、過去の映像が過った。

「駄目だ……失敗だな」
「ユニゾンデバイスとは、また別の新たなデバイスをと期待していたが……」
「魔力の消費が激しすぎる……これでは、マスターになった者の身がもたんぞ」
「やはり、失敗作か……」

とある研究所での露骨に落胆を表した研究員の言葉に、水銀燈は怒りを込み上げていく。両手を前にかざし、魔法陣を展開させた。

「私は……私は失敗作なんかじゃないっ！」

過去の言葉を振り払い、水銀燈は感情を乗せた魔法を放つ。眼前のプログラムを撃ち抜かんと、青い閃光が宙を駆ける。
青い閃光はプログラムが張った障壁に衝突し、炸裂音を立てて爆発した。空間に振動が広がり、巨体のプログラムは煙によって姿が隠れた。
砲撃を放った水銀燈は、少し息を荒げて煙を睨むように見据える。
晴れてきた煙の中から、無傷のプログラムが現れた。障壁は三枚

重ねになっており、水銀燈が破壊したのは、外側の一枚だけだった。

「そんな……！？」

水銀燈の目が、驚愕に見開かれた。

初めて自分の力が通じない相手と出会って、強いショックを受けていた。自分以上の強大な相手を前に、水銀燈はその場で立ち尽くしてしまう。よろめき、軽く突いただけで倒れてしまいそうだ。

動きが止まった標的に狙いを定め、プログラムは触手を放つ。

精神的ショックを受けた水銀燈は、避ける素振りすら見せない。

触手が迫り来る中、別方向から走ってくる影が一つ。触手の鋭い先端が水銀燈に届く寸前で、影は彼女の小さな体を抱えて走り抜く。

ギリギリのタイミングで、何本かの触手が影の背中を掠(かす)った。

「あわばばば……！」

情けない声を上げたのは、顔を真っ青にしたリンだった。

彼に抱えられた水銀燈は、何が起きたのか解らず、軽く混乱していた。

「なっ……！？　人間っ……！？　貴方、どうして……！？」

「う、うははは！　な、何だコレ……？　何だアレ……！？　恐すぎて凄すぎて、逆に笑えてきたぞ……！」

助けに入った本人も、半狂乱になって涙目で笑う。

人間、恐怖の限界を超えると笑ってしまう時があるようだ。

無我夢中で水銀燈を助けたリンは、プログラムの目から逃れるように瓦礫の陰に身を隠した。

「し……しし、死ぬかと思ったぁ……！」

全速力で走った疲労と精神的な疲労が重なって、リンは汗びっしょりで息を乱す。足も震えていて、恐怖の痺れが抜けていない。高ぶった気持ちを鎮めるように、息を吸って吐く。

いまだリンに抱えられてる水銀燈は、彼の登場に困惑していた。

「貴方……どうやってココに……？」

「え……？　どうやって……ええっと……ああ、そうだ。あの、リインフォースさんに頼んで入れてもらいました。別の方法がありまして……」

混乱してる頭で、リンは何とか答える事が出来た。

答えた後で、そっと瓦礫から顔を覗かせてプログラムを見た。周囲を見回して、リン達の姿を探している。目だけでなく、触手も伸ばして周りを探っていた。

「ヤバッ……！」

即座に顔を引っ込め、リンは水銀燈を抱えたまま、低姿勢で静かに、ゆっくりと移動を開始した。

なるべく、プログラムから離れよう。今すぐ駆け出したい衝動を必死に押さえて、音を極力殺して移動する。

すると、腕の中から水銀燈が抑えた声で言った。

「貴方、何しにきたの……？」

「何しにって、その……水銀燈の事が、気になって……」

「なっ……！？」

信じられないと言った風に、水銀燈は目を見開いた。

「私の事が気になって？　たったそれだけの理由で、ココに入ったって言うの……？　貴方、本当に馬鹿じゃないのぉ……！」
「はい。俺は馬鹿です……」

リンの言葉に、水銀燈は驚いて言葉を失う。
いや、驚きを通り越して呆れてるのかもしれない。馬鹿と言われて、「はい。馬鹿です」と即答した馬鹿さ加減と、気が強い訳でもないのに怪物相手に助けに入った馬鹿さ加減に、水銀燈は呆れたのだろう。
最初の頃より落ち着いてきたリンは、こんな事を語り出す。

「水銀燈……俺は、何をやっても駄目なクズなんです。頭は悪いし、運動も得意って訳じゃない……仕事では失敗の連続で迷惑ばかりかけて、上司からの叱りに耐えられなくて辞めちゃいました……。
俺、何の為に生きてるのか、解らなくなっちゃって……死のうかなって、自殺まで考えました……。でも、結局出来なくて……そんな時に、改運屋を通じて、リインフォースに会って思ったんです。沢山の人から大切に想われて、この人はなんて幸せな人なんだろうって……幸せなクセに、何死のうとしてんだって……。自分を想ってる人が居るのに、死ぬなんてふざけるなって思ったんです。死んでいいのは、俺みたいな誰からも想われないクズなんです……。そう考えたら、何か羨ましくて、悔しくて……」
「……何が言いたいのかしら？」

話を聞く水銀燈の目が、僅かに細くなった。
リンが続ける。

「えっと……すいません。混乱してて、自分でも何が言いたいのか……。だから、その、何て言うか……。
俺、水銀燈が好きです……！」

「……はぁ？」

あまりに予想外で場違いな台詞に、水銀燈は間抜けな声を漏らした。

告白をしたリンも、顔を赤くさせていた。時と場所を考えずに言った馬鹿な告白で、本人は人生最大の羞恥を味わった。他に人が居ない事が、唯一の救いだった。

まだ少し混乱していたリンは、一種の極度の興奮状態に陥り、半ばヤケクソ気味に告白したようなものだった。

自分の爆弾発言に当惑するリンに、水銀燈は冷ややかな眼差しを向けて言う。

「……貴方、本気で言ってるの？」

「え……？　ええっと……まあ、割りと本気、です……」

本人から目を逸らして、リンは途切れ途切れに答えた。

一目惚れ、と言うヤツだった。人間（ひと）では到達出来ない妖しく神秘的な美しさを持った銀髪の少女に、リンは心を奪われ、恋をしたのだ。リインフォースの中に入った水銀燈を気にかけていたのも、彼女を好きになっていたからである。

そして何より、自分を想ってくれる存在が欲しかった。その思いから、先ほどの告白を口にしたのかもしれない。

リンの気持ちが本気だと解ると、水銀燈は呆れた様子で溜め息をついた。

「人形の私を好きになるなんて……貴方って、物好きなおばかさんねぇ」

「……はい。超馬鹿です」

弁明の余地もない。恥ずかしくて、リンは死にたくなった。いっ

そ、あの怪物に殺されたい気分だった。
一方、水銀燈はどうするか考えていた。あの怪物（プログラム）を破壊したいのは山々だが、今のままでは勝てないのは明白だ。
しかし、そこへリンが現れた事で一つの勝機――可能性が生まれた。だが、ソレはずっと独りで闘ってきた水銀燈にとって、苦渋の選択とも言える選択肢だった。過去の出来事から、人間そのものに嫌悪感を抱いている。それは、リンも例外ではない。
ところが、その気持ちが、ここに来て急に揺らいだ。リンが、本気で水銀燈を好きで助けに来たからだ。ついでに、自分は馬鹿でクズだと身の程（わきま）を弁えている。
しばし逡巡の表情で黙っていた水銀燈が、口を開きかけた時だった。
移動していたリンのすぐ横の床に、触手が一本突き刺さった。

「うわあっ！」

驚き怯えるリンは、悲鳴を上げて尻餅をついた。
見つけて攻撃した訳ではなく、探っていた触手が、たまたま近くの床に刺さったようだ。
しかし、今のリンの悲鳴で完全に居所がバレた。悲鳴を聞いたプログラムが、紫色の双眸を二人に向けた。
淡く光る不気味な双眸に見つかり、リンは腰を抜かして立てなかった。水銀燈を抱えて、後ろに後ずさる。

「あ……あぁ……」

立ち上がる事すら出来ないリンは、蒼い顔でガタガタ震えていた。
巨大な怪物の威圧感に圧され、呼吸が乱れる。いや、呼吸をしてるのかさえ、自分でもよく分からない。それほどまでに、リンは精神的に追い詰められていた。

恐怖に支配され、動かなくなったリンが心中で願った事は一つ。
死にたくない。
ただそれだけだった。人間とは、環境次第でコロコロと考えが変わる生き物だ。

「人間……」

我を失ったリンを引き戻したのは、不意に聞こえた水銀燈の声だった。

「貴方……本当に私が好きなの……？」
「え……？」

こんな時に何を？　と思ったが、恐くて口答えするどころでは無かった。
怯えた様子で、リンはガクガク縦に頷いた。もう殆ど声は出ない。否、出せる状態では無かった。
それでもリンの答えは伝わったようで、水銀燈は満足そうに笑った。
リンの腕から抜けると、水銀燈は顔を近付けてきた。紅い瞳と白い肌のせいか、妙に妖艶な笑みに見える。

「そう……。なら、人間……貴方の全てを、この水銀燈に捧げなさい……！」
この水銀燈の糧（かて）となって、この水銀燈の為に生きなさい……！」

言い終わった直後、水銀燈の顔が急接近してきた。
そして、リンの口に、自分の白い唇を重ねた。
突然のキスに、リンは驚いて目を見開き、固まった。
次の瞬間、二人が居る地点に青い魔法陣が出現して、強い輝きを

発した。

私の為に生きなさい（後書き）

感想お待ちしてます。

おやすみなさい、壊れた子

水銀燈とリンの唇が重なり、足下に出現した青い魔法陣の輝きに二人は包まれた。

光の中で弱っていた水銀燈の体に、力（ちから）がみなぎる。魔力が全身を駆け巡り、受けた傷が治癒されていく。ボロボロに刻まれた黒のドレスも、元通り綺麗に修復する。両肩に飾られてる黒い羽装飾が大きくなっていき、成人以上のサイズになった巨大な翼を羽ばたかせ、周囲に黒い羽根を撒き散らす。

唇を離し、魔力を得た水銀燈は不敵に笑う。

水銀燈は、人では無い。魔法技術が発展している異世界・ミッドチルダの研究施設で、人工的に造り出された魔導兵器なのだ。デバイスと呼ばれ、ストレージ、インテリジェント、ユニゾンと様々な種類があるが、基本的には魔導師が魔法を使用する際に補助を行う道具である。水銀燈も一応、デバイスの部類に入るが、他の種類とは別物であった。その力は、人間と“契約”する事で初めて真価を発揮する。

「な……な……！？」

目の前に座っているリンは、間抜け顔で淡い光を纏った水銀燈を見ていた。いきなりのキスと先程の現象に、面食らっているようだ。

そんな彼の反応が可笑しくて、水銀燈はクスリと笑った。自信を取り戻した水銀燈は、淡い光を纏った身を翻してプログラムに向き直る。管制人格の中に巣食い力を一方的に吸い上げている怪物（モンスター）と、“契約”によって人間と繋がって力を得た人形（ドール）が、戦場で再び対峙する。

水銀燈の変化に、プログラムは危険を察知して先攻に出た。数多くの触手を操り、水銀燈を貫かんと高速で伸ばす。対して水銀燈は

右手を前にかざし、半透明の障壁を張って防御する。触手が一斉に容赦なく突くが、今度はヒビ一つ入らない。さっきとうって変わり、水銀燈は余裕の笑みを浮かべている。彼女の後ろでは、リンが怯えて蒼い顔で目を剥いていた。

触手では埒があかないと判断したプログラムは、鰐の大口を開けて砲撃の為の魔力を溜める。相手を逃がさないよう、障壁ごと触手を巻き付けて動きを封じた。捕まった状態に陥ってリンは不安顔だが、水銀燈の表情は崩れない。

そして魔力が溜まり、プログラムの開いた大口から極太の魔砲を放たれる。魔力の塊は紫色の極太閃光となって、水銀燈達に迫り、次の瞬間、障壁を飲み込んで大爆発を起こした。

爆発の衝撃で広い空間が揺れ、天井が軋み、パラパラと塵が降ってくる。空間には煙が広がり、巨体のプログラムの体も下半分を隠す程の量だ。

やがて、徐々に煙が晴れていった。

その中から、笑い声が上がった。

「うふふ。もう終わりかしらぁ……？」

煙の中から、無傷で障壁の中に居る水銀燈とリンの姿が現れた。

さっきと逆の展開に、プログラムの双眸が大きく見開かれる。初めて自分の存在を脅かす敵を前にして、ジリジリと巨体を後ろに退げる。

水銀燈は障壁を解くと、両手を前にかざした。

「今度は私の番ね。さっきのお礼をしてあげる……！」

両手の前に青い魔法陣を展開させ、後退りするプログラムに狙いを定め、

「消えなさいっ！」

魔法陣から、青い魔砲を発射した。

その魔砲は、先程防がれた時より一回りも二回りも大きく、美しく輝き、プログラムの巨体を飲み込んだ。残った二重の障壁が、硝子（ガラス）のように軽く粉々に砕けた。

やがて閃光が消え、砲撃の跡が見えてきた。

水銀燈は舌打ちした。

プログラムは、まだ消滅していなかった。巨体に見合ったしぶとさで、触手を全て失い、鰐顔も右側半分を失い、巨大な体も所々欠けてる箇所がありながらも、生き残っていた。しかし、やはり受けたダメージが大きく、反撃どころか動く事すらままならない状態のようだ。逃亡や敵を倒すより、存在する事を最優先に選んだプログラムは、すぐに新たな半球状の障壁を張り、防御しつつ自己修復を開始する。破損状況が悪く、修復に手間取っていた。

そして、修復が終えるのを待つ程、水銀燈は甘くはない。

すぐにでもトドメの一撃を放とうとした、その時だった。

後ろから、ドサッと倒れる音が聞こえ、水銀燈は構えを解いて振り返った。

「人間っ！」

水銀燈の目に飛び込んできたのは、うつ伏せに倒れているリンだった。

リンは眼鏡の奥の目をキツく閉じて、水銀燈を助けに駆け付けた時以上に呼吸を荒げている。地面にベッタリと倒れ伏しており、まるで起きる様子が無い。まるで、長距離マラソンを終えた後の状態みたいで、起き上がる体力すら無いみたいだ。

ゆっくりと顔を上げ、僅かに片目を開けて、整わない息遣いでリ

ンは言った。

「あ……あの……なんか、急に……ものっそい疲れ、たんです……けど……」

本人は訳が解らなかった。キスの後で水銀燈が闘い始めた途端に、ドッと疲労が襲ってきたのだ。何もしないのに得体の知れない疲れが溜まっていき、とうとう立っている事さえ出来ずに倒れてしまった。

辛そうなリンを見て、水銀燈は僅かに目を細めた。

「私と貴方は“契約”をしたの。言ったでしょう？　貴方の全てを、この水銀燈に捧げなさい……この水銀燈の糧となりなさいって……。貴方の生命エネルギーを魔力に変換して、私が取り込んでるのよぉ」

「えっ……！？　マ……マジっすか……！？」

リンは、もはや大声を出す事も出来ない。それほどまでに、体が弱っているのだ。

水銀燈は、魔導師では無い普通の人間専用のデバイスとして開発された試作品である。通常、魔法とは魔力を操って行使する現象である。だから、リンカーコアと言う魔力の源を持たない普通の人間は、魔法を使用する事は出来ない。そこで研究員達は、新たなデバイスの製作に取り掛かった。

それが、普通の人間専用デバイスだ。人間や全ての生き物が持っている生命エネルギーを、契約によって魔法に必要な魔力に変換して、主となる普通の人間に代わって闘う。

数多の世界を管理している巨大組織・時空管理局で、一般局員でも捜査に参加出来るようにと発案して、試作品が造られた。それが、水銀燈である。

しかし、問題が発生した。それは、主からデバイスへの魔力供給

の量である。デバイスの戦闘は魔力の消費が激しく、主の体力を大量に奪い、魔法次第では寿命を縮める等の命の危険がある事が、テスト段階で発覚されたのだ。例えるなら、燃費の悪い車だ。これでは、主となった局員は皆ベッド行きになってしまう。まさかデバイスが捜査や戦闘をしている間、ずっと寝ている訳にもいかない。局員の仕事は、何も現場での捜査だけではないのだから。一般局員は直接現場や戦地に赴かず、安全にデスクワークをして、デバイスが現場で捜査をする。理想的な役割分担だが、現実は上手くはいかなかった。

結局、問題点は解決出来ず、今回の計画は破棄、水銀燈も『失敗作』として処分された。

過去の記憶に一瞬、水銀燈の顔が険しくなったが、すぐに妙な色気のある笑みに変わった。

「さっきの魔砲をもう一発撃てれば、今度こそアレを仕留められるだろうけど、多分、貴方の体力が持たないでしょうねぇ。最悪の場合、寿命を縮める事になるわぁ。それでもイイと言うなら撃つけど、どうかしらぁ？」

水銀燈の意地悪な問い掛けに、リンは苦笑した。

どうするか考えたが、思考も短い時間で答えた。

「あぁ……別に、イイですよ……撃っちゃって……」

「え……！？」

返答内容が予想外だったらしく、水銀燈は驚いて目を見開いた。

リンは、気の抜けたような、弱りきった声で続ける。

「ちょっと前、までは……自殺も、半ば本気で、考えてましたからね……。まあ、痛いのが嫌で、結局出来なかったけど……そういう

死に方なら、いいかな……？　少なくとも、普通の自殺よりは、痛くなさそうだし……」

さっき、プログラムに殺されそうになったリンは、死にたくないと思った。それは、プログラムに殺されるのは“望まぬ死”だったからだ。喰われる、潰される、切り裂かれる、どれも痛そうで苦しそうだ。

その点、水銀燈への魔力供給自殺は、苦痛の心配は無さそうだ。痛みに比べたら疲労ぐらい、どうって事無い。

それに、口には出さないが、水銀燈の為に死ぬのなら、ソレも悪くない。殺されるのは嫌だが、自分が選んだのなら、ソレは自殺だ。

理由を聞いた水銀燈は、毒気を抜かれたような溜め息をつき、リンに背中を向けた。

「あ～あ……や～めた。嫌がるならともかく、死にたがりなおばかさんを死なせても、なぁんにも面白くないわぁ」

彼女の言葉に、リンは苦笑する。ドSだな、と内心で呟いた。

一方、魔砲でのトドメをやめた水銀燈は、修復していくプログラムを見据えて別の方法を考えていた。

巨体ごと消し飛ばす事が不可能となった今、残された手段は一つしかない。核を破壊すれば、プログラムの巨体も崩れ落ちる。だが、核を破壊するには、巨体を覆うドーム状の障壁が邪魔だ。自己修復と防御に全ての魔力を回してるようで、張られてる障壁が先程破った物より強度が増してる事はすぐに解った。今のリンの体力では、アレを破るのは無理だろう。よしんば破れたとしても、プログラムの核まで攻撃魔法が届くか怪しいところだ。

やはり障壁は邪魔だ。障壁を睨むように見据え、水銀燈は考える。

そして、ハッと気付く。

「うふふ。見つけたわぁ……障壁の穴……！」

不敵な笑みを浮かべ、水銀燈は懐から剣をデザインにしたペンダントのような物を取り出した。待機状態にしたデバイスなのだが、妙な事に刃の部分が無い。

デバイスの待機状態を解いて、水銀燈の手に剣が握られる。翼をデザインにした鍔の先には、やはり刀身は無いままだ。

「今度こそ、終わりよ……！」

そう言った水銀燈は、剣に魔力を流した。

すると、流された魔力が青い刃となり、剣の刀身となった。

しかし水銀燈は、完成した剣を振り上げ、何を思ったのか地面に魔力刃を突き刺した。あらぬ方向に剣を向けた事に、プログラムも疑問を抱く。

自棄になったとも思える行動だが、次の瞬間、衝撃の展開を生む。

突然、場に刺突音（しとつおん）が響いた。その音と同時に、修復作業をしていたプログラムの動きが停止した。プログラム本人には、何が起こったのか解らないだろうが、第三者の視点から見れば明らかだった。

プログラムの脳天から、青い刃が突き出ていた。

突き出た刃を確認して、水銀燈は笑った。

「貴方の障壁は確かに防御能力が高いわぁ。けど、その防御範囲は、あくまで体を覆える地上だけ……地下は範囲外……！」

地下が防御の穴だと睨み、伸縮自在の刀身を床に突き刺して、障壁の隙を掻い潜ったのだ。

伸ばした刃は、プログラム内部にある核を正確に貫いていた。鋭い魔力探知で、核の位置は把握出来ていた。後は、地下に障壁が張られていなければ破壊出来る。

そして、水銀燈は賭けに勝った。

「おやすみなさい、壊れた子（ジャンク）……！」

水銀燈の呟きを合図に、核を破壊されたプログラムの巨体が崩れ出した。その様は、積み木の城が崩れるようだった。巨大な怪物は、数秒で高い瓦礫の山に変わってしまった。

防衛プログラムを生み出す元凶のプログラム。

ソレの消滅を見届けた水銀燈は、ふぅ、と息を一つついた。

ふと後ろを振り返れば、床に倒れているリンは意識を失っていた。体力を限界まで奪われ、途中で気を失ったようだ。失った体力を取り戻すように、穏やか、とは言えないイビキをかいて眠っている。

彼の寝顔を見て、水銀燈は短く笑った。

＊

水銀燈とリンは、無事に外に出た。リインフォースの体内（テリトリー）から出たリンの体は、元の大きさに戻った。

眠っているリンを見て、リインフォースが心配して尋ねてきた。

水銀燈が中で起こった経緯も加えて説明すると、安堵の溜め息をついた。

「そうか……よかった。しかし、にわかには信じがたいな。私の中から、闇が完成に消えているのは……」

リインフォースの言う闇とは、元凶のプログラムの事だろう。

「だが、自分の体だからこそ解る。私の中に巣食っていた気持ちの

悪いモノが、無くなっている」

自分の胸に手を当て、語るリインフォースの顔は、まるで憑き物が落ちたような晴れ晴れとした表情をしていた。完全に諦めていた分、喜びの気持ちが大きいのだろう。

不意に、水銀燈が口を開いた。あの意地悪そうな笑顔で。

「それにしても、皮肉な話ねぇ」

「何？」

「だって、そうでしょう？　貴女のマスターのお友達は、マスターを助ける為に必死に頑張った。長く知り合った訳でも無い、赤の他人なのにねぇ……うふふ、偉い偉い。

でも、貴女を助けようとはしなかった」

最後の一言に、リインフォースは動揺して顔が強張った。

リインフォースの消滅は、本人が申し出た案だ。それを、なのは達が子供ながらに悩んだ末に受け入れ、実行しようとした。気持ちの整理がつかず、今はまだ公園に姿を現していないが、なのは達が先に着いていたなら消滅の儀式が行われ、リインフォースはこの世から消えていただろう。

リインフォースの動揺に構わず、水銀燈は続ける。

「可哀想に……マスターは助けたのに、マスターの部下である貴女の事は救おうともしない。貴女が消滅の話を持ち掛けて、あの子達はソレを受けた。

リインフォース……どうしてあの子達が、貴女の消滅案を受けたと思う？　それはね、貴女はマスターと違って、もう助からないと思ったからよぉ。助からないと判断すれば、簡単に切り捨てる……薄情な子達ねぇ。それが人間よぉ。

でも、結果的に貴女は死ななかった。貴女を助けたのは、安い友

情を掲げるあの子達じゃなく、今日さっき出会ったばかりの、ココで暢気に寝てる人間（おばかさん）」

雪の地面に倒れて寒い中で寝ているリンを見下ろして、「皮肉よねぇ」と嫌味ったらしく水銀燈は呟いた。

黙って話を聞いていたリインフォースは、水銀燈を睨み付けた。確かに、なのは達は他の救済方法を探そうとせず、消滅案を選んだ。しかし、ソレは元はと言えばリインフォースが自ら提案した事であり、なのは達も苦渋の選択だった。だから、助けてもらった恩はあるが、まるでなのは達を悪者みたいに言う水銀燈を許せなかった。

しかし、返す言葉が出てこない。見つからない。感情任せの言い返しでは、水銀燈は簡単にはね除けるだろう。

どう反論すればいいか悩むリインフォースは、先程の彼女の台詞から、反撃の言葉を見つけた。

「そうだな。と言う事は、お前もその人間に救われた事になる」

「何ですって？」

水銀燈の顔から薄笑みが消え、目を細めて睨んできた。

「自分でも言っていただろう？　『貴女を助けたのは、ココで寝ている暢気な人間』だと。そうだ。私は彼に助けられた。それはつまり、お前も彼に助けられた、と言う事ではないのか？」

今度は水銀燈の顔が強張った。

リインフォースの指摘通り、今回は水銀燈一人では解決出来なかった。途中から介入したリンと契約して、本来の力を取り戻してプログラムを破壊したのだ。

嫌味を嫌味で返す形になって、リインフォースは意地悪く笑い、水銀燈は悔しそうに歯を食いしばった。

「言ってくれるじゃない」
「否定はしないのだな」
「うるさいわね！」

声を荒げた水銀燈は、寝ているリンの足を掴み上げ、リインフォースに背中を向けた。

「これ以上、おばかさんの相手なんかしてられないわぁ。……ああ、言い忘れるところだった。私達の事は他言無用にしなさぁい。別に組織からの賞やらお礼なんて、いらないからぁ」

ズルズルと睡眠中のリンを引き摺り、水銀燈は去っていく。

「おいっ！　もう少し丁寧に運んでやれ！」

慌てて声をかけたが、水銀燈は聞く耳を持たず、公園から出ていった。

一人残されたリインフォースは、何だか気が抜けて苦笑した。

「ありがとう」

二人が去った後を見つめて、リインフォースは礼を言った。

＊

後日。

リインフォースの中にあった元凶のプログラムが完全消滅した事

で、長きに渡った『闇の書事件』が解決した事が、時空管理局の本局に報告された。

これまで、何人何十人もの犠牲を出してきた『闇の書事件』の解決は、しばらく局内で話題となった。その事件解決の貢献者が、まだ小学生の魔法少女だと言うのだから、無理もない。ただ、その話題に水銀燈とリンは出てこなかった。リインフォースは言われた通りに、二人の事は秘密にしたのだ。主であるはやてにも秘密と言うのは、些か心苦しかったが、二人にも事情がある事を察しての秘密だった。

しかし、二人の存在を知る者が、局内に居た。

本局の一室で、一人の局員が作業をしていた。デスクに座り、硝子板のような薄いモニターを目の前に展開させ、映っている映像を見ている。

「フフ……廃棄処分されたハズの『魔導人形（ガラクタ）』と、何の取り柄も無い『人間（クズ）』……なかなか面白い組み合わせね」

興味深そうに眺める画面に映っていたのは、公園を出ていく水銀燈と引き摺られてるリンの姿だった。

二人の映像を見ているのは、女性局員だった。

「近い内に、私もそっちに行くから、縁があったら会いましょう。そして出来れば、命のやり取り……殺し合いをしましょう……！」

女性局員は、下品で不気味な舌舐めずりをした。

おやすみなさい、壊れた子（後書き）

感想お待ちしてます。

おばかさぁん（前書き）

事件が解決した、その日の話です。

おばかさぁん

目が覚めると、灰色の空が広がり、沢山の白い点が降っていた。空から降ってくる白い点が、雪だと気付くのに少々の時間を消費した。寝起きのリンは、脳が半覚醒の状態だった。

顔に降り積もった雪を払い、頭を左右に振った時だった。

「あ、目が覚めたのですね」

いつの間にか、彼の前に一人の女性が立っていた。

見た瞬間、リンはドキッとした。自分がベンチに座ってる事に気付き、慌てて姿勢を正す。

彼の前に立っているのは、美しい女だった。艶のある長い黒髪、凛とした顔つきながら柔らかい物腰を感じさせられ、これで着物でも着ていれば完全に大和撫子のイメージに合う。

服装は、清潔感のある上下真っ白の制服で、黒のタイツを履いている。

年齢は十八か十七歳の高校生ぐらいと思われるが、落ち着いた雰囲気のせいか、随分大人っぽく見える。例えるなら、有能な美人秘書と言ったところか。

半ば呆然としてるリンに、美少女は礼儀正しく一礼した。

「初めまして。私（わたくし）、改運屋を営んでおります、森山春香（もりやまはるか）と申します」

「あ、ど、どうも。初めまして」

慌ててリンは、自分も立ち上がって頭を下げた。美少女を立たせて、自分だけ座って対応するのは失礼に思えたのだ。

照れ隠しみたいに頭を掻いたところで、ふとリンは気付いた。

「あの……今、改運屋って……」
「はい。私、改運屋の社長をやらせていただいています」
「しゃ……！？」

衝撃の事実を知って、リンは目を見開いた。

「しゃ、社長って……アレですよね？　あの、会社で一番偉い人ですよね？」
「はい」

動揺しまくりのリンに、春香は穏やかな笑顔で対応する。
懐に手を入れて何か探る仕草をすると、春香は一枚の紙を手渡した。リンは受け取り、紙を見る。手渡された紙は、名刺だった。会社名や名前、連絡先までちゃんと記されている。
マジでか？　とリンは顎が落ちそうだった。自分より年下と思われるの女の子が、会社の社長だなんて衝撃以外の何物でもない。『営んでおります』と言う言葉で察せない事も無いが、誰が十代の女の子が社長だなんて思うだろうか。

「遅くなりましたが、この度は改運屋に入社していただき、ありがとうございます」

非の打ち所の無い丁重な動作で、春香は礼を言う。

「あっ、いえ……！　その、こちらこそ……！」

つられるように、リンも頭を下げた。何だかデジャヴを感じた。
それから春香は、顔から笑顔を消して真剣な表情を作った。向き合っているリンが緊張感を抱くと、春香は口を開いた。

「入社してすぐに危険な仕事をさせてしまい、申し訳ありませんでした。貴方が今後、改運屋でやっていけるか見極める、謂わば短期の試用期間だったのです。命を落としそうになった時は、即座に現場から転移させるつもりでした。それでも、何の説明も無しに危険な目に遭わせた事を、お詫びします」

「あ、いや、そんな……」

謝罪に頭を下げる春香に、リンは困惑した。

確かに、いきなり自分の部屋から寒い外に放り出され、水銀燈に足蹴にされ、ロボット怪獣と闘う目に遭ったり（実際に闘ったのは水銀燈だが）、訳の解らぬ内に命の危機に陥った。だが、不思議と春香に対する怒りは無かった。春香本人に直接何かされた訳じゃないし、結果的には助かり、いまいち現実味が無いので、「まあいいか」と軽い気持ちなのが本心だ。

それよりも、夢オチじゃなかったのか、と言う感想が心中の大部分を占めていた。

「別に恨んでなんかいませんから、頭を上げて下さい」

「ありがとうございます。リンさんは、優しいのですね」

リンに促され、頭を上げた春香はニッコリと微笑む。

彼女の笑顔を見て、リンは顔が熱くなるのを感じた。鏡で見れば、きっと赤くなってる自分の顔が映ってるだろう。

恥ずかしさを誤魔化すように、リンは先程思い出した事を訊いた。

「あの……水銀燈は？」

「ああ、彼女でしたら、多分近くを飛んでるのでしょう。私が、この公園に着いた時には居ませんでしたから」

そうですか、とリンは呟いた。

プログラムとの戦闘が終わる寸前で、リンは体力の限界を迎えて意識を失った。それから、この小さな公園で目覚めるまで、ずっと眠っていた。ココまで運んでくれたのは、水銀燈で間違いないだろう。その前も、プログラムの攻撃から護ってくれた礼を言ってない。礼を言えなかった後悔の念、急に居なくなった寂しさがリンの心中にあった。

謝罪を終えた春香は、少し低い声で言った。

「リンさん。今回の件の成功報酬をお渡しする前に、最終的な意思確認をさせていただきます。強制は致しません。貴方は、このまま改運屋を続けますか？」

問われたリンは、すぐに返答出来なかった。

正直、あんな恐くて危険な目に遭うのは御免だ。一時は自殺志願者だったが、他者に殺される事は望んでない。

だが、しかし、とリンは思う。もし、ココで断れば元の自堕落な、ある意味平和な生活に戻るだろう。その代わり、もう二度と彼女――水銀燈には逢えないかもしれない。改運屋を辞めると言う事は、水銀燈との交流も断つようなものだ。

リンは、水銀燈との繋がりを選んだ。

「えっと、続けます」

「結構です」

春香は満足そうな笑顔で頷くと、足元に置いていたジュラルミンケースを持ち上げた。

ずっと足元に置かれてあったのだが、春香にばかり気を取られてリンは全く気付いてなかった。

「お受け取りください」

「はあ、ありがとうございます」

礼を言って受け取った瞬間、ケースを持つリンの腕が、ガクンッと下がった。

「んなっ……!?」

重い。

ケースの重さが、思っていたよりも重かった。何とか落下は防いだが、たまらずリンは地面に置いた。

屈んだ体勢から、春香を見上げる。

「あの……中、開けてもいいですか……？」

「どうぞ」

気を悪くした様子も無く、相変わらず春香は穏やかな笑顔で答えた。

許可を得たリンは、少々緊張した様子でケースの蓋を開けた。目に飛び込んできた中身は、ギッシリと詰まった大量の札束だった。瞬間、リンは乱暴に蓋を閉じた。

何かの見間違いじゃないだろうか、と思い、もう一度覗いてみる。中身はやはり、札束だった。また蓋を閉め、取り乱して春香に尋ねる。

「あぁ……あの、あの……コ、コレ、幾らくらい入ってるんですか……？」

「ケースの中身の金額は、一億になります」

「いっ……!?　お……!?」

サラリと口から出たぶっ飛んだ金額に、リンは驚愕動転して開い

た口が塞がらなかった。もしかしたら、今日一番の驚きかもしれない。

命懸けの戦闘からの生還で、しかもキッチリと依頼も果たしたので、当然と言えば当然の金額かもしれない。だが、ほんの数時間前まで平凡な世界で生きてきたリンにとって、一億なんて大金は実際に拝んだ事が無い、現実味の無い大金だった。以前に彼が手にした現金の最高金額は、五十万ほど。目の前の大金に比べたら、端金（はしたかね）だ。

「では、私はこれで失礼します。
リンさん。仕事も勿論ですが、これからも水銀燈をよろしくお願いします」
「え……？　あ、は、はあ……」

一億と言う目も眩むような大金を前にして、リンは気の無い返事をした。
最後まで礼儀正しい姿勢で、春香は公園を去っていった。
残されたリンは、唖然とした顔で大金の詰まったケースを見る。
コレどうすんだよ？　と考え込んでいた時だった。

「話は終わったぁ？」
「おおおうっ！？」

突然、何の前触れも無く後ろから声をかけられ、リンは大声を上げて振り返った。普段なら、急に声をかけられても、ここまでは驚かない。
しかし、大金を前にしている今は、過敏に過剰に反応してしまう。
叫びを上げたリンの前に居たのは、宙に浮いた水銀燈だった。

「不本意だけど、契約を結んだから私は貴方と一緒に行動するわぁ。
けど、勘違いしちゃダメよぉ？　主はこの水銀燈で、貴方はこの

水銀燈の忠実な下僕……！　分かったぁ？」
「は、はい……分かりました」

いや、主従関係逆じゃね？　と心中でツッコミはしたが、口に出すと何をされるか分からないので諦めて従った。
ああ、そうだ、とリンは言い忘れていた事を思い出す。

「あの、水銀燈……」
「何かしらぁ？」
「その……リインフォースさんの中では、あの……護ってくれてありがとう。それと、ココまで運んでくれた事も……」
「別に……お礼なんていらないわぁ」

リンの感謝の言葉に対して、水銀燈は素っ気ない返事をした。
この反応は、まあ予想はしていた。短い付き合いだが、水銀燈と接して、大体の性格は知ったつもりだ。なので、素っ気ないからと言って別に落ち込みはしなかった。

「それじゃあ、帰るわよぉ」
「え？　帰るってドコに？」
「おばかさぁん。貴方の家に決まってるでしょう？」

当然のように言う水銀燈に、思わずリンは苦笑した。
コレは予想外だった。
俺の家に泊まる気か？　家族に何て説明すればいいんだ？　と様々な言葉が頭を過った。
まあ、そういった問題は後で考えよう。
金の入ったジュラルミンケースを持って、リンは訊いた。

「水銀燈……俺、何か役に立ったかな……？」

「なぁに？　よく出来ましたぁって誉めて欲しいのかしらぁ？」

相変わらず水銀燈の声は、嫌味の混じった猫なで声だ。

しかし、今は癪に障ったりしない。アレが彼女の味なのだ。

「別に……」

さっきのお返しと言う訳ではないが、リンも素っ気ない返事をした。

内心では、僅かだが誉め言葉を期待していた。無いだろうな、と思いつつも、もしかしたら、なんて淡い期待を抱いてしまう。

トボトボと歩き出すリンに水銀燈が寄ってきて、耳元で言った。

「可哀想な子ねぇ。何の役にも立たず、誰からも愛されない、独りなおばかさん。

でも安心しなさい。これからは、この水銀燈が貴方の主となって、こき使ってあげる」

水銀燈の吐息が、耳にかかってくすぐったい。

気遣おうとしない、寧ろ苛めるような水銀燈の言葉を聞いて、しかしリンは嬉しく思った。受け取り方次第では、「自分（リン）を必要としている」と解釈する事も出来るからだ。

ソレは、自分に都合の良い解釈かもしれない。

それでも構わなかった。水銀燈の言葉で、リンは少し救われた。

「ありがとう」

リンは明るい表情で、水銀燈に礼を言った。

まだ耳元に居る水銀燈は、まさか礼を言われるとは思ってなかったようで、驚いていた。予想外の返事に目を見開いていたが、つま

らなそうに顔を逸らした。

「……おばかさぁん」

いつの間にか雪は止み、雲の隙間から明るい陽の光が差し込み、二人を照らしていた。

リン・水銀燈。

報酬総額・一億円。

第一章～運命の冬～・完。

おばかさぁん（後書き）

第一章終了です。

感想お待ちしてます。

馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ

「疲れたぁ～！」

自分の部屋に入ったリンは、疲労感のこもった深い溜め息をついた。

大金の詰まった重いジュラルミンケースを床に置き、自分もドアを背にして座り込む。

すると、腕に抱えてるモノが喋った。

「もういいかしらぁ？」

「ああ。いいよ、水銀燈」

リンの腕に抱えられていたのは、水銀燈だった。

彼の返事を聞いた水銀燈は、腕の中から離れ、宙を飛んで近くのベッドの上に腰を下ろした。ふぅ、と息を一つ吐き、紅い目で室内を一通り見回す。

そして感想を一言。

「狭いわねぇ」

「正直な感想ありがとう」

今のリンには、水銀燈に反論する気力すら無かった。

ここまで辿り着くのに、大変な苦労をしてきたのだ。

まず、帰り道だが、幸いにも目覚めた公園は駅の近くであり、その上、地元までそう遠くない距離で迷う事は無かった。ソコはいい。

問題は、その道中だった。何せ、一億なんて未曾有の大金が詰まったケースを持ってるのだから、周りの目が気になって気が気じゃない。オマケに、水銀燈まで抱えてるのだから、気になるどころか、

視線が痛かった。道中、水銀燈には黙っててもらい、人形と言う事で持ち歩く事にしたのだ。黙ってジッとしていれば、水銀燈は精巧で綺麗な西洋人形に見えなくもない。痛車（いたしゃ）に乗ってる人やコスプレイヤーは、こんな気持ちなのかな？　と周囲の痛い視線を受けながら、リンは思った。他に方法あっただろう、と後に後悔するが、既に遅かった。

電車で地元に到着して、徒歩で家に向かった。

そして、家に着いたら着いたで、面倒な事態になった。急に部屋から姿を消したので、両親が問い詰めてきたのだ。疲労が溜まっているリンにとって、両親からの質問はウザい以外の何物でも無かった。適当に答えて、とっとと部屋で休みたいと言うのが、リンの本音だ。

無い頭を使い、リンは考えていた理由を両親に話した。黙って出掛けたのは、単に挨拶の声が小さく、両親の耳に届かなかっただけ。出掛けた理由は、内緒で買った宝くじが当たったので、その金を受け取るため。ジュラルミンケースの中身は、一億円。腕に抱えてる人形（水銀燈）は、趣味で買った物。我ながら無茶苦茶だと思ったが、他に上手い理由が思い付かなかった。

しかし、半信半疑ながら、一応は両親を納得させる事は出来た。

重い足取りで階段を上がり、二階にある自分の部屋に入り、現在に至る。

「あ～……マジダリー」

気だるげな声を出すリンは、立ち上がる事すら出来なかった。

水銀燈への魔力供給、重いジュラルミンケースを持って徒歩で帰ってきた事で、リンはもう疲れきっていた。

ベッドにダイブしたいが、立てないので座ってるしかない。

肉体的にも精神的にも、本当にリンは疲れていた。たった一日で、色々とあり過ぎた。平凡平和な世界から一転、魔法が存在し、化物

と闘うファンタジーな非日常な世界に身を突っ込んだ。
疲れてボーッとしてるリンの前で、水銀燈は宙に浮いて本棚の前に移動した。退屈しのぎになる物を、探してるのだろう。目の前の本棚には、漫画がズラリと隙間無く並んでいた。

「漫画ばっかりねぇ」
「漫画知ってるんですか？」
「この世界の文化は、大体把握してるわぁ」

答えながら水銀燈は、一冊の漫画を手に取り、捲って読み始めた。
どうやら、この世界の文字もマスターしているようだ。
漫画に目を落としたまま、水銀燈が言う。

「くだらない物が好きねぇ」
「まあ、物の価値観は人それぞれだから」

好きな漫画を悪く言われても、リンは怒らず冷静に返した。
誰だって、好きな物があれば嫌いな物がある。今回の場合、漫画は水銀燈にとってつまらない物、リンにとって楽しい娯楽品と言う価値観の違いであり、別に怒る程の事ではない。
それに、ただでさえ疲れてるのに、つまらない事で一々怒って無駄な疲労を増やしたくなかった、と言うのもある。
休息を得たリンは、ふと訊くべき事を思い出した。

「水銀燈」
「なぁに？」

気の無い返事を返す水銀燈は、別の漫画を手にしていた。
漫画気に入ったの？　と尋ねたい衝動を押さえ、リンは本題を口にする。

「改運屋って、どんな組織なの？」

リンの問いに、水銀燈は漫画から目を離して、ポカンとなった。

彼女らしくない、間の抜けた顔だ。

「今更そんな事訊くなんて、馬鹿じゃないのぉ？」

「いや、気にはなってたんだよ？　ただ……ホラ、訳の解らない展開の連続で、正直質問どころじゃなかったし、訊くタイミングも逃したし、ぶっちゃけ忘れてたし……」

リンは目を剃らし、頭を掻いた。

あんな状況じゃなくとも、たまにあるのだ。重要な事を聞き逃して、後で聞こうと思ってそのまま忘れ、解らないままにしてしまう事が。以前の仕事でも、ソレが原因で怒られた事があった。

呆れのこもった溜め息をつき、水銀燈は答えた。

「改運屋は、『世界』からの依頼を受けて解決する組織よぉ」

「『世界』からの、依頼……？」

リンは、怪訝そうに眉根にシワを寄せた。

二冊目の漫画を本棚に戻し、三冊目を取って水銀燈は続ける。

「私や人間のような、目に見える姿形は無いけど、世界には意思があるのよぉ。その世界の意思は、悲劇喜劇に問わず、定められた運命を敏感に察知するの。その運命の中には、世界の意思にとって都合の悪いものとかがあって、改運屋は、世界の意思から依頼を受けて、その運命を変える為に動いてるのよぉ。本来介入しないハズのイレギュラーが介入すれば、運命を変えられると考えたのねぇ。

依頼の内容は、『世界に悪影響を与える者の消去』、逆に『死な

すべきでない者の死の回避』とかもあるわぁ。後者の方は、世界の意思の感情的な理由が主ねぇ。可哀想だからとか、可愛いから死なせたくないとか……そんなところかしらぁ」

「はぁ……」

話を聞いたリンは、妙に拍子抜けした気分になった。

世界の意思、なんて壮大なモノが出てきたのに、依頼理由が本当に感情的で、変に思えた。もっと、「世界の危機が迫っているから阻止しろ」とか、世界の意思らしい使命的な理由だと思っていた。だが、どうやら世界の意思とやらは、人間味臭い存在のようだ。例えて言うなら、アニメを見て展開に不満を抱き、二次創作で結果を変えようとする奴みたいな感じだ。

「まあ、春香は純粋に人助けの為に、改運屋で依頼を受けてるようだけど……」

「ああ、あの人……」

春香の顔を思い出しながら、リンは何となくホッとした。

世界の意思みたいな、感情的理由で動いてる訳じゃないと安心したからだ。別に、感情的理由が悪いと言うのではない。ただ、世界なんて壮大さに比べて、少々物足りない感じがしたのである。

納得して、リンは二つ目の質問をした。

「じゃあ、この報酬の金は、どこから調達したの？　まさか、世界から受け取ったなんて言わないよね？」

「そんな訳無いでしょう、おばかさぁん」

鼻で笑い、水銀燈は新しい漫画を取る。

どうでもいいが、出会ってから水銀燈は容赦無く「おばかさん」と言ってくる。今時、馬鹿と言われたくらいで怒りはしないが、こ

こまで「おばかさん」を何回も言われると、いっそ清々しいものだ。

「聞いてないのかしらぁ？　春香、大富豪のお嬢さんなのよぉ」

「大富豪の娘っ！？」

驚いてリンは、目を丸くした。

言われてみれば確かに、春香が着ていた服は高そうな代物に思える。見た目だけでなく、素行や言葉遣いも上品だった。それに金持ちなら、一億なんて巨額の報酬を用意出来たのにも頷ける。庶民からしたら大金だが、本当の金持ちからしたら一億も大した金ではない。巨額の財産の、ほんの一部に過ぎないのだから。

そう考えると、自分はとんでもない大物を相手に会話してたんだなぁ、と思った。

「何か……スゲーな」

コレが、リンの精一杯の感想だった。

今更ながら、自分はとんでもない世界に飛び込んでしまったようだ。水銀燈の言うように、今更だが。

少し間を空けて、リンは最後の質問をした。

「水銀燈……俺なんかで、いいの？」

「何の事かしらぁ？」

「何の事って、パートナーだよパートナー。いや、水銀燈の言い方なら、下僕かな？　その相手が、俺なんかでいいの？」

水銀燈とリンは、主従関係の契約を結んでいる。

人間と契約を結ぶことで、水銀燈は繋がりを通じて契約者の生命エネルギーを魔力に変換して得る事で、本来の実力を発揮する。

契約の中身を理解して、冷静になって考えてみたリンは、自分で

は不適合者ではないかと思った。何かスポーツをやってる訳ではないので、体力は人並みだ。そんな自分と契約してるより、もっと体力のある人間と契約した方が合理的である。

リン個人としては、水銀燈と一緒に居たいと言うのが本心だ。

しかし、水銀燈は解らない。契約だって破棄出来るだろうし、彼女に相応しいパートナーが他にいるかもしれない。

質問を受けた水銀燈は、漫画から目を離し、振り向いた。

その瞬間、リンは思わず背筋を伸ばした。何か来る、と思ったのだ。

何故なら、水銀燈が意地悪な笑みを浮かべていたからだ。

「別に、私は貴方じゃなくても構わないわよぉ。でも、それじゃあ貴方が困るでしょう？」

「な、何がですか？」

クスリと笑い、水銀燈は言う。

「貴方、私が好きなんでしょう？」

「がっ……！？」

聞いた瞬間、リンの顔は急速に熱を帯びて赤くなった。

頭の中では、どさくさに紛れて水銀燈に告白した事を思い出す。

告白に繋がるような話でも無かったのに、場違いにも口から「好き」だと出てしまった。

しかも告白の後、契約の儀式とは言え、キスまでした。リンにとって、ファーストキスでもあった。

これが顔を赤くしないでいられるか。

「あっ、いや……アレは、その……何て言うか……あああああ！」

猛烈な恥ずかしさに襲われ、リンは俯いて頭を掻きむしった。とてもじゃないが、水銀燈の顔を直視出来ない。早鐘の心臓も、簡単には収まりそうに無い感じだ。

リンの反応を見て、水銀燈は可笑しそうに笑う。

「うふふ。貴方のようなおばかさんと居ると、退屈しのぎにはなりそうねぇ」

答えにならない答えを言って、水銀燈は再び漫画読みに戻った。

僅かに顔を上げたリンは、悔しくて歯を食いしばった。

からかわれた。水銀燈は、明らかに自分をからかっている。馬鹿と言われるのは慣れているが、それとこれとは別だ。

何とか仕返しをしたいが、大して頭の良くないリンは苦悩した。

漫画を読む水銀燈を見て、リンは絞り出すように言った。

「……漫画気に入ってんじゃん」

「なっ……！？」

弾かれたように振り向いた水銀燈は、キッとリンを睨んだ。

リンの仕返しは、思った以上に効果を発揮した。

「ほ、他に何もないから、仕方なくよ！」

「はいはい。水銀燈も子供だねぇ」

初めて狼狽える水銀燈を見て、リンは一矢報いたと内心で快哉（かいさい）を上げた。

その喜びが、顔に表れてたのだろう。

不機嫌そうな水銀燈の顔が、みるみる赤くなっていった。子供扱いされたのが、よほど悔しかったのだろう。

「貴方こそ、いい加減に漫画を卒業しなさぁい！　そんな事だから、ガキっぽい上に馬鹿なのよ！」

おばかさん、おばかさん！　本当におばかさぁん！」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ、バーカ！　あっ、俺も馬鹿じゃん！」

リンは、久し振りに家で声を上げた。

馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ（後書き）

感想お待ちしてます。

人物紹介よぉ

リン

性別は男で、一応本作品の主人公。大卒で就職したものの、職場の同僚からのキツい叱りに耐えられず、退職。以降は、就活をせずに家でダラダラとした自堕落な生活を過ごしていた青年。パートナーである水銀燈に一目惚れ。

自分の部屋で昼寝をしていたところに、夢の中で改運屋の勧誘を受け、軽い気持ちで入社する。寝ている間に転移魔法の類で移動させられ、起きて早々に水銀燈と依頼をこなす事になった。その際に、水銀燈と主従契約を結んだ。

見た目は、凡人を絵に描いたような凡人。基本的には暢気で面倒臭がりな性格で、臆病な面もある。金は欲しいクセに、働く意欲は欠片も無い。一言で簡潔に表すなら、怠惰なダメ人間。

これと言った目立つ特技も能力も才能も持ち合わせておらず、物凄く地味な主人公にあるまじき主人公。今後の活躍があるのか、正直怪しいところである。

水銀燈

性別は女で、本作品のもう一人の主人公でありヒロイン。相手を小馬鹿にしたような猫なで声で、「おばかさぁん」が口癖であり、主人公のリンの事もそう呼んでいる。

長い銀髪と、逆十字デザインの白と黒のドレスが特徴。着ているドレスも魔力で編まれているので、自力で修復する事が可能である。

その正体は人間ではなく、過去に時空管理局の技術開発部で生み出されたデバイスである。同じ人型では、魔導師と融合して能力を向上させる『ユニゾンデバイス』が在る。だが、水銀燈はソレとは別種であり、魔法を行使出来ない一般局員専用として開発されたデ

バイスなのだ。契約した相手の生命エネルギーを魔力に変換する事で、自分の力として得る事で行動する。一般局員も職場に居ながら現場捜査に協力出来るようにと計画されたのだが、魔力の消費が激しく、契約相手の体力を大量に奪い、使う魔法次第では命の危険がある欠点が見つかり、結局改善出来ぬまま中止となり、水銀燈も『失敗作』として破棄されてしまった。

自分を『失敗作』と否定した人間を嫌っており、改運屋に入ってからはずっと一人で依頼をこなしてきた。リインフォースの体内で、プログラム相手に苦戦して窮地に陥ったところをリンに助けられる。自分を好きと場違いにも告白してきたリンに興味を抱いたのか、ついに彼と契約して契約者を得る。リインフォースの件が解決した後は、リンとの契約を続けてコンビを組み、彼と同居する事に。

両肩の黒羽をナイフのように飛ばしたり、龍の形に変えたり、掌から魔力の塊を光線のように発射する砲撃魔法を駆使したりと多様な攻撃方法を持っている。他にも、刀身の無い剣型『アームドデバイス』も所有している。自身の魔力を流して、伸縮自在の魔力の刀身で攻撃する等、遠距離、中距離、近距離全ての攻撃に通じている。

何気に万能型のデバイスだが、契約者の体力の限界と言う致命的な欠点はいまだに改善されていない。

日本の漫画を気に入っている様子だが、本人は否定。

リンよりは主人公らしい主人公と言えるだろう。

ふふ……良い子ねぇ

リンは、金が欲しかった。
ある会社に入社して、働いて金を稼いだ。一般庶民にとって、途方もない金額が手に入った。
ただ、あまりに金額が大き過ぎるので、リンは使い道に困った。とりあえず、今までの学費やら何やら親に世話になった分を払い、残りは自分の口座に預けた。
財布の中身は、五、六万程だ。庶民の自分には、これ位がちょうどいい。金を稼いだので、リンは夕飯を買いにスーパーに訪れた。自分の分は勿論だが、仕事で世話になった相棒の分も忘れない。食の好みが解らなかったので、適当に買い物カゴの中に入れて、レジで支払いを済ませた。
用事を済ませたリンは、気だるげな感じで玄関を開け、家に帰宅した。靴を脱いで、階段を上がって自分の部屋に向かう。

「遅かったわねぇ」

猫なで声で迎えたのは、ベッドに腰掛けてる水銀燈だった。手には漫画を持ち、視線を開かれたページに落としている。
本人は、「他に何もないから仕方なく」と言っていたが、誰がどう見ても、ハマっているご様子だ。

「ただいま」

挨拶をして、リンは入室して扉を閉めた。
チラッと時計を見れば、もう七時を回っていた。ふむ、確かに遅い時間だ。
食べ物や飲み物が詰まった袋を片手に、リンは机の前に歩み寄っ

た。

「スーパーで食べ物買ってきたけど、何食べる？」
「いらないわぁ」
「え？」

机に荷物を置いて、リンは水銀燈に顔を向けた。
水銀燈の方は、漫画に目を落としたまま見向きもしない。

「私は人間じゃないから、別に食べ物なんて必要無いわぁ」
「マジで？　それなら最初に言ってくれよ～！」

早くも無駄遣いをしてしまい、リンは頭を抱えた。
食べ物の好き嫌いどころか、人間でない水銀燈は『食事』自体を必要としない事が判明した。出来る事なら、買い物前に知っておきたかった。
あからさまにガッカリするリンに、水銀燈は鼻を鳴らした。

「ふんっ。買い物に行くなんて聞いてないし、貴方が勝手に早とちりしたんでしょう？　おばかさぁん」
「そりゃまあ、確かに……」

外出前に確認をしなかった自分にも責任があり、苦笑いでリンは頭を掻いた。
それと同時に、とんだ無駄足だったな、と溜め息をついた。さすがのリンも、袋一杯の食べ物を全て食べきる事は出来ない。幾つか取り出して、残りは一階（した）の冷蔵庫にでもしまっておこうと考えた。
おにぎり等の今日までが賞味期限なのとペットボトルのお茶を取り出し、残った物を冷蔵庫にしまいに行こうとした時だった。

「でも、飲み物はちょうだぁい」
「え？」

漫画から顔を上げ、水銀燈が飲み物を要求してきた。
食べ物は要らないが、水分は摂取するらしい。よく解らない女だ。
ちなみに、リンは彼女がデバイスである事を知らない。
袋を机に置いて、中身を漁りながらリンは訊いた。

「で？　何が飲みたいの？　一応、一通り買ってあるけど」
「コーヒー・ブラックちょうだぁい」

この時、初めてリンは水銀燈に共感した。
彼も、コーヒーはブラック派だった。

＊

「貴方はいいのぉ？」

缶コーヒーのブラックを飲み終えた水銀燈が、不意に尋ねた。

「何が？」

尋ねられたリンはと言うと、椅子に座って買ってきたおにぎりを食べていた。
机に残ってるのは、具が鮭とハンバーグのおにぎりだ。リンは、好きな食べ物はとっておいて、最後に食べるタイプなのだ。ハンバーグが具のおにぎりは、最近知って以来気に入っている。
口の中で数回咀嚼して、ペットボトルに入ったお茶を飲んで、喉

に流し込む。
タイミングをはかって、また水銀燈は訊いた。
「下で、一緒に食べなくていいのかしらぁ？」
部屋の真下では、リン以外の家族が集まって夕飯を食べながら談笑している。時折、笑い声が下から聞こえてくる。
水銀燈の問いに、リンは微妙な笑みで答えた。
「別にいいよ」
「どうして？」
「仲悪いからだよ。それに、水銀燈も見たでしょう？　俺が一億見せた時の親の顔を……」
人間は、損得勘定で生きる生き物だ。自分にとって得にならない人には、冷たい態度を取る。それは、親子も例外ではない。金を作らないと分かれば、息子でも邪険に扱われる。
最初に帰ってきた時、リンは一億を両親に見せた。すると、それまで冷たかった両親の態度がコロッと変わった。
ソレを見てリンは、虚しくなった。就職した時は優しいが、辞めて金を作れなくなったら掌返しをする。そして、大金を引っ提げて帰ってくれば、一緒にご飯を食べようと優しく接してくる。
結局、金ですか。
「今更、仲良く一緒に食べる気なんて無いよ」
寂しい笑顔で食事を続けるリンを、水銀燈は黙って見ていた。
＊

家族が寝静まったのを確認してから、リンは水銀燈を連れて一階に下りた。

風呂に入る為だ。リンは夕飯を済ませた後で風呂に入ったが、さすがに水銀燈も一緒に入れる事は出来なかった。風呂場に行くまでには家族の目があるし、水銀燈を入れる場面を見られたら間違いなく“変態”のレッテルを貼られてしまう。それにリン自身、人間ではないとは言え、一応女の子である水銀燈と一緒に入るなんて無理だった。

寝ている家族を起こさないように、足音を殺して階段を静かに下りていく。

こういう時、魔法は便利だ。飛行魔法で宙に浮いてる水銀燈は、足音を鳴らす心配が無い。多分、泥棒辺りが一番欲しがりそうな能力だろう。

無事に一階に辿り着き、居間の明かりを点ける。風呂場は、居間の隣にある台所の隣にあるのだ。家族は、別の部屋で寝ている。

「じゃあ、俺はココに居るから」

そう言ってリンは、居間の床に座り込んだ。家族が起きてこないか、見張りも兼ねている。

「そう」

短く呟き、おもむろに水銀燈はドレスを脱ぎ出した。

その瞬間、リンは顔を赤くさせて取り乱した。

「ちょっ……待っ……！　何やってんの!?」

「うふふ。何って、お風呂に入るから、服を脱いでるのに決まって

るでしょう？」

リンの反応が面白いのか、小さく笑いを漏らして水銀燈は脱衣を進める。

水銀燈が脱衣の手を止める様子は無いので、慌ててリンは後ろを向いた。妙に色っぽい仕草だったので、心臓もドキドキと高鳴っている。夜で二人っきりと言う状況が、更に興奮を駆り立てる。

落ち着け。落ち着け、俺。

背を向けるリンは、必死に心中で呟きを繰り返して、気持ちを落ち着かせようとした。

しかし、ソレはあっけなく破られた。

「うふふ。人形相手に興奮してるのかしらぁ？」

「うわっ！」

いきなり目の前に、水銀燈の顔が現れてリンは驚き、後ろに後ずさった。

見れば水銀燈は、ドレスやブーツを脱ぎ終えて裸になっていた。

「おまっ……風呂場で脱げよっ……！」

恥ずかしくて直視出来ず、リンは顔を逸らした。

しかし、それでも興味はあり、水銀燈を横目でチラッと見た。黒かった水銀燈は、ドレスを脱いだ事で色が白に変色していた。真っ白な素肌を、惜し気も無く晒している。胸は控え目な感じで、下品ないやらしさは無い、スラリとした体型が上品な色香を漂わせている。これは、水銀燈の性格にも起因しているのだろう。

そして、彼女の身体で、普通の人とは違う点を見つけた。身体の関節部分が、球体関節仕組みになってるのだ。可動式のフィギュアの手足を思い浮かべていただければ、概ね間違いは無い。

まさしく人形の身体をした水銀燈は、美しかった。興奮を高めるリンだったが、しかし飛び付きたい衝動は無かった。何と言うか、汚したくない、高貴さある美しさで、普通の女とは美しさの種類が全然違う。

顔を真っ赤にさせたリンを見て、水銀燈はからかうような笑みを浮かべた。

「大丈夫？　顔が真っ赤よぉ？」

「い、いいから！　早く風呂入ってこいよ！」

向かいの部屋で寝てる家族を起こさない程度の大きさで、リンは声を上げた。

リンが顔を俯いてると、宙を移動する微かな音、次いで扉の開閉音が聞こえた。ゆっくり顔を上げて、周囲を見回す。水銀燈の姿は見えない。代わりに、風呂場からシャワーの音が聞こえてくる。やっと風呂場に入ったようだ。

リンは項垂れ、溜め息をついた。

「アイツ……絶対俺の反応見て楽しんでるよ」

この後、風呂上がりの濡れ姿の水銀燈を見て、またもリンが動揺したのは、言うまでもない。

＊

水銀燈の風呂を済ませ、さあ寝ようとリンは椅子に座った。

怪訝に思った水銀燈が、首を傾げた。

「ベッドで寝なくていいのかしらぁ？」
「いいよ。水銀燈使って」

疲れが溜まってるせいか、いつもより眠気が強い。出来る事ならベッドで睡眠を取りたいが、水銀燈を除け者にする訳にはいかない。
学生の頃は、よく講義中に居眠りをしたものだ。

「その代わり、電気は消しておいて……。じゃあ、おやすみ……」

消灯を水銀燈に任せ、椅子に深く腰掛け、リンは机に突っ伏した。
今は厚着をしてるので、寒さには耐えられる。
薄れていく意識で、リンは思った。水銀燈と出会って、一億なんて大金を得た。
それで、自分は何か変わっただろうか？
多分、まだ何も変わってない。人間、そう簡単に変われるなら苦労はしない。
意識が途切れる寸前、別の思考に変わっていた。
残ったお金を、さて何に使おうか？
しかし考える間もなく、リンの意識は闇に落ちた。

「起きなさぁい！」
「ん……」

リンを覚醒させたのは、耳元でかけられた水銀燈の声だった。甘い吐息がかかって、少しくすぐったかった。
眠い目を擦り、もたついた動きで体を起こした。ずっと額を乗せていた腕の部分が、赤くなって少し痺れを感じる。

「ん～……何……？」

眠くて細い目で、傍に浮いてる水銀燈を見る。
水銀燈は、上から目線の高圧的な態度で言った。

「寒くて寝付けないから、私と一緒に寝なさぁい」
「え……？」

リンは、自分の耳を疑った。
まさか水銀燈の方から誘われるとは、思ってもみなかった。

「……いいの？」
「私が命令してるのよぉ。下僕の貴方は、主であるこの水銀燈の言う事をおとなしく聞けばいいのよぉ。解ったかしらぁ？」

相変わらず、水銀燈は高い位置から物を言う。
しかし、だからと言って反論する気は無かった。面倒くさいし、何より眠たい。

「はい……」
「ふふ……良い子ねぇ」

短く答えると、水銀燈は満足げに笑った。
一体どういう風の吹き回しだろう、と思ったが、考えるのも億劫なのでやめた。些細な疑問なんて、どうでもいい。ベッドで眠れるのだから、文句も無い。それに、水銀燈と一緒に寝れるなら、寧ろラッキーと考えるべきだ。
大きな欠伸をかき、リンはベッドに寝転がった。
その隣に、水銀燈が横になった。仰向けのリンに背中を向けて、言った。

「変な事したら、容赦しないわよぉ？」
「うん……」
そろそろ寝かせてください、とリンは心中で頼んだ。
「まあ、貴方にそんな度胸は無いでしょうけど……」
解ってるじゃないか、とリンは心中で相槌を打つ。
「じゃあ、おやすみ……」
返事は期待してなかった。
しかし、水銀燈なりの返事がきた。
「ふんっ……」
水銀燈の背中の温もりを感じながら、リンは眠りについた。
リンの長い一日は、ようやく終わった。

＊

リインフォース救済から数日後。

新たな依頼がやってくる。

今度の依頼は、ある親子の救済。
病魔に蝕まれた母親と、短い生涯を閉じた娘。

救済の手掛かりは、不老不死伝説が残る村。

そして――動き出す殺人局員。

シラス村へ、ようこそ！

「俺もやる……！　今度こそ逃げないっ……！」

ふふ……良い子ねぇ（後書き）

次回から、第二章開始です。

乳酸菌摂ったらぁ？

リインフォースを救済してから、約二週間が過ぎた。
あれから、依頼の話は来ていない。水銀燈によれば、『世界の意思』からの依頼はそう頻繁に来るモノでは無いらしい。
ソレを聞いて、正直ホッとした。あんな危険なミッションを、普通の仕事と同じように毎回やるんじゃあ命が幾つあっても足りない。
受け取った報酬も幾らか使ったが、まだまだ有り余っている。
大金を得たからと言って、リンの生活は劇的な変化を遂げたりはしなかった。ダイヤを買ったり、高級車を買ったりと別に派手な買い物はしていない。贅沢の仕方が、よく解らないのだ。それに、綺麗な石ころ等を買うより、普通に漫画を買って読んでる方がずっと有意義だ。物の価値観は人それぞれだが、何で石ころに高値を付け、買う人がいるのか、リンはいまだに理解出来なかった。
他に金の使い道を求め、リンはパチンコを始めた。店の中に入ると、煙草の匂いがした。一応、換気扇を回してはいるが、店内に蔓延した煙草の匂いを完全に消すまではいかなかった。リンは煙草が苦手だったが、我慢出来ない程では無かったので、席に着いた。
何列も並んだパチンコ台の内の一つを睨み、銀玉を発射し続ける。釘に当たりながら落ちていき、殆どが外れ穴へと吸い込まれていく。勿論、真ん中に設置されてるルーレットを回す穴にも入るが、肝心の数が揃わず当たりが出ない状態だった。
そして今も、リーチがかかったものの、真ん中の数字が外れてしまった。更に、銀玉も尽きた。
外れた瞬間、リンは頭を抱えた。

「あ～！　くっそ～！」

天井に向かって、悔しさを声に出して叫んだ。

「お遊びでいちいち怒ってたら、疲れるだけよぉ。乳酸菌摂ったらぁ？」

彼の同伴者が、猫なで声で乳酸菌を勧めてきた。

リンの胸ポケットから、ミニサイズの水銀燈が顔を覗かせていた。体を小さくする事が出来る彼女は、リンと外出する際は、こうしてミニサイズで胸ポケットに入っている。

「……考えとく……」

苦い顔で水銀燈の勧めに答え、敗北したリンは店を出た。

結局、リンは五千円をパチンコで溶かした。しかし、一億近い大金を残している事を考えれば、大した痛手ではない。

「くっそ～。良いとこまではいくんだけどなぁ……外れ台だったかぁ……」

とは言え、溶かした金額に関係なく、負けたのは悔しい。

勝てば調子に乗って再挑戦し、負ければ悔しくてリベンジをはかる。パチンコとは、人の心理を利用した本当によく出来た商売だ。

リンみたいな負け客は、間違いなくカモの部類に入るだろう。店側からしたら、美味しい客だ。

「次は絶対勝って、負け金を取り返してやる」

「私は嫌よぉ」

熱くなってリベンジを誓う単純なリンとは対照的に、水銀燈はもう懲り懲りと言った様子をしていた。

「あんな煙臭い場所、二度と行きたくないわ」
「う……そ、そうか……」

しかめっ面をして、露骨に嫌悪感を露にして言う水銀燈に、リンは反論出来なかった。

リンも煙草は苦手だが、水銀燈は彼以上に嫌っているようだ。あの煙草臭が蔓延した店内で、文句も言わずにパチンコに付き合ってくれた事を感謝すべきだろう。

だが、やはり我慢の限界に達したようだ。この様子では、少なくとも水銀燈を連れてのパチンコはもう無理である。

まあ、そう頻繁に行くつもりは無かったので、別に気にする事でもなかった。それに、我慢出来る程度だったとは言え、リンも煙草は苦手だ。苦手な場所に行く事を控えられるなら、その方がいい。

水銀燈と言うブレーキ役が居て、助かった。

水銀燈と一緒に暮らすようになっても、リンの自堕落な生活は相変わらずだった。

しかし、生活の中身は変化していた。今までは、部屋で漫画を読んでいたり、外をフラついたり、ずっと独りで寂しい時間を過ごしていた。それが、水銀燈と言う同居人を得て変わった。一緒にゲームやたわいもない話をしたり、こうして外出をしている。たまにだが、漫画論で口論になる事もある。リンにとっては、劇的な変化と呼んでも過言では無い。

独りの時よりも、水銀燈と居る『今』の方が同じ堕落した生活でも、妙に生きてる実感が沸いていた。

改めて水銀燈の存在をありがたく思った時、もう片方の胸ポケットに入れてある携帯電話が、バイブ機能で震えた。

「ん？　メールかな？」

リンは、携帯電話を取り出し、開いて画面を見た。

この携帯電話は、リンのではなく水銀燈の物だ。改運屋の社長である春香との連絡手段として、携帯している。携帯電話のメールで、依頼が送られるのだ。ソレ以外にも、たまに仕事とは関係無しに、たわいもない内容のメールが届いたりする。春香なりの、水銀燈とのコミュニケーションなのかもしれない。

今回届いたメールは、依頼の方だった。

若干緊張した様子で、リンはメールの内容を見た。

『先日は、お仕事お疲れ様でした。お休みのところ申し訳ないのですが、依頼が来ましたので内容をお伝えします。

今回も、ある人物の救済になります。その人物の名前は、プレシア・テスタロッサ、アリシア・テスタロッサ。名前を見てお察しがついてると思いますが、この救済対象は親子になります。都合が良い事に、間もなくお二人とも、リンさんの部屋にお着きになります。

救済対象である親のプレシア・テスタロッサは病魔に蝕まれ、娘のアリシア・テスタロッサは若くして亡くなっています。

具体的な救済内容は、病の治療と死者の蘇生となります。無茶な要望だと言うのは、重々承知していますが、どうぞ、よろしくお願いします。

森山春香　』

依頼メールを読み終えて、リンは一言。

「いや、無理だろう」

病気の治療？

死者の蘇生？

どちらも凡人のリンには、不可能な要求だった。医者でも無い自分が病気を治せるハズも無いし、死者の蘇生なんて他の人にも出来

っこない。蘇りが許されるのは、フィクションの世界だけだ。
無茶な依頼に呆れるリンだったが、いや、待てよ、と思い直す。
自分には無理だが、もしかしたら水銀燈なら出来るのではないだろうか。
期待を胸に、リンは訊いてみた。

「ねぇ、水銀燈。病気の治療とか、死者の蘇生とか出来る？」
「そんな事出来ないわぁ。私は戦闘タイプだし、いくら魔法でも死者の蘇生なんて無理よ」

ああ、そうか、とリンは少し残念そうに返事をした。
水銀燈が戦闘向きなのは、プログラムとの闘いを見て予想はしていた。
しかし、そうなると、この依頼は解決不可能なのではないか？
ウームと眉根にシワを寄せ、リンが悩んでいると、今度は水銀燈が言った。

「ねぇ」
「ん？　何？」
「早く家に戻った方が、いいんじゃないのぉ？」
「え？」

言われて、リンは思い出した。
メールには、救済対象の親子はリンの部屋に現れると記されている。

「ヤッバ！」

暢気なリンも、この時は慌てて走り出した。
どんな親子か知らないが、家族に見つかったりしたら大騒ぎにな

る。向こうが部屋に現れる前に、家族に見つかる前に、先に帰らなければ。
全速力で家に向かうリンの胸ポケットの中で、水銀燈は溜め息をついた。

＊

走って家に着いたリンは、鍵のかかった玄関に安堵した。鍵がかかってると言う事は、家族は外出中なのだ。その点は助かった。
だが、視線を落として異変を発見した。玄関の隙間から、液体が漏れ出てるのだ。緑色の液体が、床に広がっていく。

「な、何だ……？　この、バイオ液のような水は……？」

得体の知れない液体に恐れと警戒心を抱き、リンは顔をひきつらせた。
胸ポケットに居る水銀燈は、言葉を発さず冷静に沈黙している。
中で何か異変が起こってると判断して、リンは玄関の鍵を取り出す。動揺して少し手間取ったが、すぐに玄関を開いた。

「うおおおおっ！？」

家の中を見た瞬間、リンは目を丸くして驚愕の声を上げた。
なんと、家の中が緑色の液体で水浸しになっているのだ。壁や天井に被害は少ないが、床は完全に浸水している。

「な、何だコレはァァァァ！　何をどうしたら、こうなったァァァァ！？」

昼間だと言うのも構わず、リンは声を上げた。近所迷惑なんて知った事か。そんな事よりも、目の前の異常事態だ。

急いで家の中に入り、玄関を閉める。取り乱した様子でリンは、家中を見回した。すると、階段も濡れてる事に気付いた。視線を上げ、二階を見る。状況から推測すれば、おそらく浸水の原因は二階にある。

リンは靴を脱ぎ、浸水した床に踏み込んだ。

「冷たっ！」

緑色の液体に足を入れた瞬間、冷たい感触に襲われた。まだまだ寒い時期なので、水も冷たい。

冷たい水浸しの床を抜け、階段を上がって二階を目指す。迷わずリンは、自分の部屋を開けた。

そこで、衝撃の光景を目にした。

「はあ！？」

目の前の光景にリンが出したのは、叫びではなく、短い疑問の声だった。

浸水したリンの部屋に、二人の人間が居た。一人は、明らかな年上の女性で、ベッドの上に倒れている。意識は無いようだ。艶やかな黒い長髪で、黒いマントを羽織り、やたらと露出の多い挑発的な紫色のドレス風の服を着ている。随分な年のように見えるが、倒れてる姿が妙に色っぽい。

もう一人は、大きな透明のカプセルの中に入っている。長い金髪で、幼く見える女の子は裸で居た。

多分、大人の方がプレシアで、子供がアリシアだろう。

カプセルの下の方に、緑色の液体が残っている。透明なガラス部

分が割れてるので、液体の出所は、このカプセルだろう。何かの拍子に割れて、中身が出てしまったのだ。

現場に駆けつけたリンは、混乱していたが、マズイ事態である事は、すぐに解った。

「ヤバいって……！　こんな所、誰かに見られたら絶対ヤバいって！」

こんな場面を目撃されたら、間違いなく誤解される。親子誘拐と監禁罪で、もはや面倒事どころではない。警察介入だ。万が一にも、家族や他の人に見られてはならない。

最悪な未来予想をして、リンは慌てて雑巾を取りに、近くの洗面台に向かった。

「水銀燈も手伝って！」

「嫌よぉ。面倒くさいし、濡れたくないもの」

――この女（アマ）ァ……！

水銀燈に手伝いを求めるも、アッサリと断られ、心中で悪態をつく。

こうなったら、一人でやるしかない。乾いた雑巾を持って、まずは部屋を浸水してる水の処理に取り掛かる。

チマチマと水を吸い取り、洗面台で絞り出す地味な作業だ。作業をしながら、何時家族が帰ってくるか、内心ハラハラしていた。証拠隠滅をはかる犯人は、こんな心境なんだろうか。別に悪い事をしてる訳でも無いのに、落ち着かない気分だった。

何で俺がこんな目に？　と泣きたくなった。

「終わったぁ～！」

壁に寄りかかり、リンは脱力してその場に座り込んだ。
夕方になった時刻に、地道な作業は終了した。苦労の甲斐あって、何とか家族が帰ってくる前に濡れた箇所を全て拭き終えた。おかげで、腰が痛くなった。
ベッドの上では、プレシアがまだ眠っている。当然ながらアリシアも、目を覚まさない。
外から見られないよう、窓は全て締め切ってある。
とりあえず、これで一安心だ。
よく頑張った、俺。
心中で、自分に労いの言葉を呟いた時だった。
部屋の外から、水銀燈が顔を覗かせて言った。

「終わったぁ？」
「アンタねぇ……ちょっとくらい手伝ってくれても、よかったんじゃないの？」

いつの間にか水銀燈は、リンの胸ポケットから出て、自分は見てるだけで楽をしていたのだ。

「今更言っても遅いでしょう？」

リンは溜め息をついた。
水銀燈に手伝いを求める方が、そもそも間違いだった。
それと不覚にも、「終わったぁ？」と顔を覗かせた水銀燈の仕草が、妙に可愛く見えてしまった。
水銀燈にはかなわない、と思った。

こんなハズじゃなかった……！

どえらい状況になった部屋を片付けたリンは、眠っているプレシアが起きるのを待った。

カプセルの中に入っていたアリシアの遺体も、プレシアが寝ているベッドに一緒に寝かせた。少女には不釣り合いな、サイズの大きいシャツを着せてある。いくら遺体とは言え、女の子を裸にさせておくのは忍びない。そうじゃなくても、側には母親が居るのだ。裸のままにしておいたら、起きた時に何をされるか解らない。

プレシアの回復を待っている間、リンは漫画雑誌を読んでいた。二十歳を過ぎても、ジ●ンプだけはやめられない。

水銀燈はと言うと、そんなリンの肩に座って漫画を読んでいる。部屋の後始末を終えてから、随分と時間が経った。家族は外出から戻ってきて、日も沈んで空は暗くなっている。

そろそろ夕食を買いに行こうかな、とリンが席を立った時だった。ベッドの上のプレシアが、呻き声を上げた。

リンは動きを止め、水銀燈も漫画から顔を離してプレシアに目を向けた。

二人が注視する中、プレシアはゆっくりと体を起こした。ぼやけた意識をハッキリさせるように、頭を左右に振る。

「うっ……ココは……？」

部屋を見回して、リンと水銀燈の姿を見つけた。途端に、プレシアは険しい顔で身構えた。

「貴方達は誰……？」

「あ、初めまして。お……僕は、リン。こっちの肩に乗ってるのは、水銀燈です」

恐い顔で睨まれ、臆しながらリンは自己紹介をした。肩に乗ってる水銀燈は、涼しい顔でプレシアを見ている。

「ココは何処……？　アリシアは何処なの！？」

娘の居所を問うプレシアの声には、異様な迫力があった。

「ココは、僕の部屋です。娘さんは、貴女の隣に……」

言われてプレシアは、弾かれたように自分の横を向いた。
ソコには、目を閉じて永眠している娘（アリシア）の姿があった。

「アリシア！」

声を上げ、プレシアはアリシアを抱き上げた。愛おしそうに頭を撫で、ギュッと離さないよう抱き締める。
見てるリンは、プレシアの声が下に居る家族に聞こえてないか、ハラハラしていた。肩に乗ってる水銀燈は、他人事のように漫画を読み続けている。
一旦アリシアから顔を離して、プレシアはリン達に鋭い眼差しを向けた。

「貴方達……アリシアに手を出してないでしょうね……？」

「だ、出してません！」

凄みのあるプレシアの問いに、リンは体を固くして答えた。ちょっとでも答えを誤れば、その瞬間に襲われるような危機感を抱いていた。
沈黙が続く中で、プレシアは睨みを解いた。とりあえず、リンが

嘘をついてないと判断したようだ。

「もう一つ訊くわ。ココは、アルハザード……？」

「ア、アルハザード？」

初耳の単語に、リンはおうむ返しをした。

しかし、漫画を読んでいた水銀燈は、ピクリと反応した。

「アルハザードって、何ですか？」

「……もういいわ」

リンから顔を逸らし、プレシアは憔悴しきった表情になる。

今のリンの反応で、ココが目的の場所で無い事を確信したのだ。

それは、プレシアにとって大きなショックだった。今までの苦労が、全て無駄になってしまったのだから。

第９７管理外世界――名称・地球。全てを捨てて、我が身を犠牲にしてまで辿り着いたのが、目的地（アルハザード）どころか魔法文明も発展していない世界だった。

意気消沈するプレシアの耳に、水銀燈の声が聞こえた。

「アルハザード。またの名を、『忘れられし都』。

遥か昔に存在していたと言われる世界で、時を操り、死者を蘇らせる秘術があると伝えられている。でも、次元断層に沈んで、その存在は伝説上のものとされ、実在しないと言うのが通説」

「え？」

水銀燈の説明に、リンとプレシアは顔を向けた。

「ふふふ。そんな伝説を信じてるなんて、貴女もおばかさんねぇ」

「ちょっ……水銀燈！」

猫なで声で、挑発的するような物言いの水銀燈を、慌ててリンが諫める。
それから、気を悪くしたであろうプレシアに向き直った。
「あの、すいません！　この娘も、悪気があって言ったんじゃないんです！　本当にすいません！」
頭を下げて、プレシアの怒りを鎮めようとする。
しかし、プレシアから怒りの声は上がらなかった。
「貴女……何者？」
前髪で隠れた左側とは反対の右目で、プレシアは疑念の眼差しを水銀燈に向ける。アルハザードを知る水銀燈を、同じミッドチルダ出身の者だと睨んだ。
ソレを水銀燈は、不敵な笑みで受け流す。プレシアが大事そうに抱いてるアリシアを見て、口を開く。
「場所も存在も不確定なモノにすがり付くなんて、よっぽどその眠り姫が大事なのねぇ。随分と熱心で、娘想いの母親だわ。
でも、貴女の頑張りもここまで。目的地に行く手段も無くして、貴女は独りぼっち……」
「何が言いたいの……？」
「うふふ。そんな恐い顔して、怒っちゃダメよぉ。血圧上がっちゃうから。乳酸菌摂ってるぅ？」
――いや、ココで乳酸菌言うか！？
水銀燈の台詞に、リンはツッコんだ。会話に入り込む度胸が無い故、心中に留まってしまったが。

挑発的な水銀燈の言葉に、明らかにプレシアは不快に思っている。
二人の会話に口を挟むか、下手に介入しないで見守るか、リンが悩んでいると水銀燈が言った。

「けど、安心しなさい。私達が貴女を救ってあげる」
「どういう意味かしら？」
「そのままの意味よぉ」

不敵な笑みの水銀燈と厳しい顔つきのプレシアが、互いを見据え合う。
場の空気が悪くなってるのを感じて、リンは口を挟んだ。

「あの……僕等、改運屋って言う会社の人で、貴女みたいに困ってる人を助けるのが仕事なんです」
「改運屋……」

ポツリと呟き、プレシアはリンに目を向けた。

「貴方達に、何が出来るって言うの……？」
「そ、それは……」

プレシアの問いに、リンは言葉を詰まらせた。
生き返りの手段を持ち合わせていないリンにとって、厳しい質問である。こんな時、ザ●リクが使えたり、ドラ●ンボールが在ったりすれば解決なのだが、現実は甘くはない。

「その……一緒に別の生き返りの方法と、貴女の病気を治す方法を探したり……」
「貴方達……私の病気まで知っているの……！？」
「え？　ええ、まあ……」

苦笑いで頷くリンを見て、プレシアは訊いた。

「どこまで、私達の事を知っているの……？」

「え、ええっと……貴女が病気だって事と、娘さんが亡くなっている……って事ぐらいです。その他の詳しい事は……」

「そう……」

リンが答えると、プレシアは僅かに顔を俯けた。

他を威嚇するような威圧感は薄まり、代わりに暗く重い雰囲気が漂う。対面してるリンは、自然と苦笑いを消して、真顔になる。

ややあって、プレシアは重い口を開いた。

「この娘は……私が死なせたのよ」

「え……？」

意外な言葉に、リンは目を丸くして耳を疑った。

プレシアは続ける。

「私は、ココとは別の世界――ミッドチルダの研究所で研究員として働いていたわ。次元航行エネルギーを専門に、チームのリーダーとして研究を続けた。

ある日、上層部から無茶なエネルギー実験の命令を受けたわ。エネルギー制御の難易度、実験の危険性を訴えて延期を試みたけど、命令は覆せなかった。

あの時……あの時、どうして命令に従ったのか……！　命令違反してでも、実験を中止にするべきだったっ……！

実験は失敗して、暴走して爆発したエネルギーは、アリシアを……アリシアを……！」

いつの間にか、プレシアの声は嗚咽に変わり、頭を抱え込んだ。

「こんなハズじゃなかった……！　アリシアが居ない世界なんて、私には考えられない、耐えられない！　だから私は、『人造魔導師』の技術でアリシアを生き返らせようとしたわ！

でも、ダメだった！　姿はアリシアと同じでも、記憶を引き継がせても、ダメだった！　アレはアリシアじゃない！　アリシアとは別人！　私は、あんな『失敗作』を造る為に、耐えてきたんじゃない！　あんな『失敗作』に注ぐ愛情なんか無い！

だから私は、でき損ないの『失敗作』を棄てて、アルハザードで失った時間を取り戻そうとしたのよ！」

プレシアの悲痛な叫びが、室内に響いた。肩を震わせ、涙が止めどなく目から流れている。

初めてプレシアは、他人に胸の内を告白した。

プレシアは、誰かに話したかったのかもしれない。他人が信じられなくなり、独りで抱え込んでいた悲しみ、自責の念、願いを、誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

プレシアの叫びを、リンは黙って聞いていた。

ふとリンは、隣に居る水銀燈の様子をうかがった。

その瞬間、背筋がゾクリと凍った。

先ほどまで、不敵に笑っていた水銀燈の表情が激変してるのだ。眉間にシワを寄せ、相手を射殺すような眼差しをプレシアに向けている。怒りの形相なんてものじゃない。鋭い眼には、激しい憎悪がこもっている。

直接向けられてはいないが、顔を見た瞬間にリンは怯えた。こんな水銀燈を見るのは、初めてだった。

「す、水銀燈……？」

恐る恐る名前を呼ぶと、答えずに水銀燈は身を翻した。
窓を開けると、黒い翼を広げて、無言で部屋を出ていった。

「水銀燈！」

急いで窓に駆け寄り、名前を呼んだが戻ってこなかった。
――何なんだよ？
水銀燈の事情を知らないリンには、訳が解らなかった。

＊

時空管理局本局。
一人の女性局員が、デスクに座っている男性局員の前に立っていた。
男性局員は、白髪混じりの黒髪、顔にはシワが刻まれ、威厳が感じられる。何やら向かい合ってる女性局員と、手続きをしてるようだ。
ややあって、男性局員から許可が降りた。手続きの内容は、休暇の申請だった。
許可を得た女性局員は、一礼して部屋を出た。
廊下を歩く女性局員は、長い金髪に魅力的なツリ目、誰もが目を引く整った綺麗な顔立ちで、青い本局制服を着こなす身体もスタイルが良く、『美人』の一言に尽きる容姿をしている。年齢は若く、十代後半と思われる。凡人から見れば、高嶺の花と呼べる存在だ。
その美人局員は、込み上げてくる笑いを抑えるのに必死だった。
だが、その顔には、既に薄ら笑いが浮かんでいた。
行く前から、心が躍っている。根拠は無いが、目的地に着けば面白い事が起きると予想していた。

「久し振りに、楽しい休暇になりそうね」

美人局員の名は、黒岩聖麗（くろいわせいら）。

時空管理局でただ一人の『無階級局員』。

期待に胸を膨らませ、彼女は舌舐めずりをした。

行き先は、第９７管理外世界に指定されている、地球の日本。

最悪

プレシア達を部屋に残して、リンは飛び出た水銀燈を捜すべく外に出た。

しかし、肝心の水銀燈が行きそうな場所が解らない。教えてもらった携帯電話の番号にかけるも、繋がらない。メールも返ってこない。

何の手掛かりも無いまま、リンは水銀燈を捜す事となった。暗くなった町を、闇雲に駆け回る。近場の公園、商店街、学校、無いとは思いながらもゲームセンター等々、とにかく色んな場所を捜し回ったが、水銀燈の姿は無かった。

何処に行ったのか、皆目見当もつかない。それ以前に、人間の自分(リン)が水銀燈を見つける事自体が無茶に思える。水銀燈は空を飛べるし、その気になれば転移魔法で長距離の移動が出来る。移動範囲は、常人の域を遥かに越えて無限並だ。行き先に心当たりがあるならともかく、そんな人物を足のみで見つけるのは、至難の業を越えて不可能だ。

道の真ん中で、疲れたリンは息を切らしていた。

――勘弁してくれよぉ……！　仕事前に、面倒事は御免なんだよ……！　ああ、面倒くせぇ……！

疲労と水銀燈が見つからない事が、リンをイラつかせる。

まだまだ寒い時期だと言うのに、走り回ったせいで体は熱くなっていた。その熱さも一時のもので、しばらく突っ立っていたら一気に冷えるだろう。吐く息も白く、寒い季節を物語っている。

一人で居るであろう水銀燈の姿を、想像した。寒空の下、決して厚着では無い水銀燈の姿を――。

小さく舌打ちして、リンは再び走り出した。当てはなく、ただがむしゃらに走るだけだった。

結局、何処を捜しても水銀燈の姿は見つからなかった。飛んで別の町に向かったのか、それとも転移魔法とやらで別の世界に飛んだのか。解らないが、結果として水銀燈を見つけられなかった。

疲れきったリンは、重い足取りで帰路についていた。もう走る体力は、これっぽっちも無い。

「ホントに、何処行ったんだよ……？」

疲労感タップリの溜め息をつき、リンは猫背のように背中を曲げた。

ふとリンは、自分の腹に手を当てた。夕飯前に走り回ったせいで、空腹になっていた。ちょうど近くにコンビニがあったので、今夜は弁当でも食べるか、と店内に入る。自分とプレシアの分、それからホットの缶コーヒー・ブラックを買った。

買い物袋を片手に、リンは考える。とりあえず、家に帰ったら社長――春香に連絡して、事情を話して行き先に心当たりがないか訊いてみよう。それで何か聞けたら情報を手掛かりに動くし、無かったら仕方ない、もう一度闇雲に捜すしかない。

今後の行動を整理してる間に、家の前に着いた。

何気なく顔を上げた時、リンの視線が止まった。暗くて確認しづらいが、屋根の上に何か見えるのだ。見つけたモノ自体が黒くて、夜の闇に溶け込んでる。それでも、目を凝らしてよく見てみる。

まさか、と思いながら見ると、予想は的中した。ちょうど二階にある自分の部屋の前の小さな屋根に、黒いドレスを着た女の子が座っていた。

「お前……マジかよ……？」

頭を抱え、妙に脱力した気分になった。

散々街中を走り回って、スタート地点がゴールだったのだ。多分、周りを飛んだ後で戻ってたんだろう。俺の今までの労力を返せ！と叫びたかったが、夜中である事も考え、何とか呑み込んだ。

半面、水銀燈を見つけてホッと安心もした。

やれやれ、とリンは家の中に入った。

＊

「水銀燈」

リンは窓から僅かに顔を出して、屋根に居る水銀燈に声をかけた。

自分の部屋に戻ったリンは、プレシアに買ってきた弁当を渡して、水銀燈を部屋に連れ戻そうとしていた。水銀燈が居る位置は、ちょうど部屋の中からでは見えない死角になっていた。窓から顔を出さないと、見つからない。

寒い夜空の下で、水銀燈はちょこんと屋根に座っている。

「どうしたの？　外寒いよ？　早く部屋に入ったら？」

部屋に入るよう促すが、水銀燈は見向きもしないどころか、ピクリとも反応しない。

気まずい沈黙が生まれ、寒さもあってリンは小さく唸った。

「あのさ、ホントにどうしたんだよ？　さっきのテスタロッサさんの話で、何か気にくわない点でもあったの？」

水銀燈の様子がおかしくなって、家を飛び出た原因があるとすれば、プレシアの話以外に無い。

それまでは、水銀燈も普段通りの態度をしていた。急変したのは、プレシアの話を聞いてからだ。間違いなく、原因はソコだ。

しかし、仮にそうだとしても、何故だろう？　水銀燈とプレシアは初対面のハズだ。あの時の水銀燈は、機嫌が悪いなんて生温いレベルではなかった。鈍いリンでも分かる程に、明確な憎悪を放っていた。初対面の人間相手に、あそこまで憎悪を抱けるものだろうか？　よっぽどプレシアの話が、気に食わなかったのだろうか？

しかし、水銀燈は何も答えない。沈黙を守って、屋根の上にジッと座り込んでいる。

はあ、とリンは根負けしたように溜め息をついた。

「まあ、別に無理に聞く気は無いけどさ……」

出来れば原因を知って、とっとと問題を解決させたかったのが本音だ。仕事前に、面倒なトラブルは御免だからだ。

しかし、今の状態じゃあ、とてもじゃないが理由を話してくれそうにない。だから、ココはリンが折れた。

「窓、開けとくから。風邪ひく前に、中に入った方がいいよ。それと、コレ置いとくから」

言ってリンは、水銀燈の後ろに缶コーヒー・ブラックを置いた。窓を開けっ放しにする事に、特に危機感は無かった。ここら辺には泥棒なんて来ないし、何より水銀燈が居るのだ。家に侵入しようものなら、返り討ちに遭うだろう。

そう暢気に考え、リンは開けっ放しの窓から顔を引っ込め、自分も弁当を食べようと割り箸を割った。

＊

屋根に残された水銀燈は、遠い目をしていた。
寒い夜風が、白い肌に触る。
一人になるのは、久しぶりだった。最近は、初めて出来た契約者と過ごしていた。
しかし、また独りに戻るかもしれない。
水銀燈の脳裏に、プレシアの言葉が蘇る。
――でき損ないの『失敗作』を棄てて――
あの言葉で水銀燈は、薄れていた内にある憎悪が蘇り、そして恐れた。
やっぱり、人間はそういう生き物だ。
一抹の不安を抱き、水銀燈は後ろに置かれた缶コーヒー・ブラックを見た。
また私は捨てられるの？
私は失敗作じゃない。
壊れた子なんかじゃない。
だから、私を――。

＊

『そうですか。その様な事が……』
「はい」
夕飯を済ませ、プレシアや家族が寝静まったのを見計らって、リンは電話をしていた。通話の相手は、社長である春香だ。
水銀燈の飛び出し事件の原因が気になり、春香なら何か心当たりがあると思い、先ほど電話をかけたのだ。幸いにも春香はすぐに出

てくれて、深夜だと言うのに嫌な様子など微塵もせずに、話を聞いてくれた。
ちなみに、水銀燈はまだ屋根の上に居る。
廊下に立っているリンは、困った表情を浮かべた。

「それで、森山さんなら何か知ってるんじゃないかと……」

最初は、春香の事を『社長』と呼んでいたのだが、本人から「気軽に名前で呼んでください」と言われ、今では名字で呼んでいる。
今回が初めてと言う訳ではないが、美少女と電話をするのは、妙に緊張する。用件の内容に関わらず、だ。
一方、春香の方は、いつもと変わらぬ穏やかな口調で言った。

『そうですね……。確かに私(わたくし)は、水銀燈の過去についても知っています。今回の件も、水銀燈の過去に起因してると断言出来るでしょう』
「そうなんですか？」

やはり春香に訊いて、正解だった。
そう喜んだのもつかの間、春香が予想外の言葉を続けた。

『ですが、申し訳ありませんが、リンさんにお教えする事は出来ません』
「え！？」
『他人の過去を、他人の口から勝手にお話するのが嫌いなのです。勝手な理由だとは思いますが』
「あ、いえ……」

春香の気持ちも、解らないではない。
人には、言いたくない事の一つや二つあるものだ。ソレを勝手に

他人の口から明かされるのは、不愉快な事だろう。「何余計な事喋ってんだ！」ってなもんである。

しかし、それでは水銀燈の問題が解決しない。このままでは、ギクシャクした気まずい空気が続く事になる。それだけは阻止したいところだ。

悩むリンの耳に、春香の穏やかな声が入る。

『彼女の過去については、お教え出来ませんが、代わりに一つだけ』

「は、はい。何ですか？」

『水銀燈の側に居てあげて下さい』

ハア、と答えて、リンは前にも似たような言葉を受けた気がした。そうだ。初めて春香と公園で会った時だ。あの時も去り際に春香は、「水銀燈をよろしくお願いします」と言った。仕事の相棒としての意味だと思っていたが、そうじゃないのかもしれない。

『ソレが貴方に出来る最善の行動であり、彼女にとって一番必要な事ですから』

「分かりました」

そう言われては、こちらは了承するしかない。

それに、自分でも良いアイディアは浮かばないのだから、下手な事をするよりはマシだろう。何より、美少女の春香からの頼みだ。もとより断る気は無い。

水銀燈の件が済んだところで、春香が言った。

『あっ、リンさん。実は、私からもお話があります』

「はい、何でしょう？」

『今回の依頼に関する事なのですが、パソコンはございますか？』

「あ、はい。ちょっと待ってて下さい」

リンは一旦携帯電話を側の棚に置き、自分の部屋の扉を開ける。部屋の明かりは消えていて、ベッドではアリシアを抱いてプレシアが眠っている。起こさないように静かに部屋に入り、ノートパソコンが置いてある机に近付く。手に取る際に、チラッと視線を横に移す。相変わらず窓は開けっ放しで、寒い風が入ってくる。ちょっと近付いて、窓の外をうかがう。案の定、水銀燈はまだ屋根に座り込んでいた。気付かれない程度に溜め息をつき、ノートパソコンを手にリンは部屋から出た。

部屋を出たリンは、ノートパソコンを起動させて携帯電話を手に取った。

「お待たせしました」

『いえ。それでは、今から言う言葉を検索して下さい。単語は“シラス村”で、漢字の白に動物の家の巣です』

「ええっと……白・巣・村っと……」

キーボードを叩き、文字を入力して検索をした。

すると、幾つかのサイトが出た。

『一番上に表示されているサイトを見て下さい』

春香の言う通りのサイトをクリックした。

画面にサイトが表示される。

『白巣村（しらすむら）。

死ぬ事が無い、と言うところから来ている。死なぬ、しらす、白巣村』

「ダジャレか？」

名前の由来を読んで、思わずリンはツッコんだ。
気を取り直して、続きに目を通して見る。

『今から約千年前、村は大きな災いに襲われた。大自然の怒りとも言える大災害に見舞われ、多くの住民は死に、村は壊滅状態に陥った。その時、村に一人の少女が現れ、死にかけの村人を助け、更には死人までも甦らせた。村の人々は、自分達を救ってくれた少女を神様と呼んで崇めた。
村では、今でもその神様を祭った洞窟がある』

「ト●ック？」

内容を読んだリンは、某人気推理ドラマの画が脳裏を過り、またも思わずツッコんでしまう。
電話の向こうから、春香が訊いてくる。声はいたって真剣だ。

『どう思われますか？』
「いや、どうって……ただの言い伝えですよね？」
『私は、ソコに記されている事は本当だと考えています』

マジですか？　と言う言葉は、何とか喉の奥に呑み込んだ。
こんなのは、浦島太郎やかぐや姫のような昔話と同じようなもの。
要するに、昔の人が作ったフィクションだ。
春香には悪いが、リンにはとても信じられなかった。

「そんな……あり得ないですよ」
『リンさん。ロストロギアはご存じですよね？』
「ええ、まあ、はい」

ロストロギア。
過去の超文明の文化遺産であり、物にもよるが、扱いを間違えると一つの世界どころか次元世界を崩壊させる程の危険性を秘めている。リインフォースから聞いた事だが、いまだにリンには、その危険性が解らなかった。次元世界の崩壊と言われても、規模が大き過ぎていまいちパッとしない。
そんな訳の解らない物と、この村とどう関係があるのか。怪訝そうに首を傾げるリンに、春香が言う。

『おそらく、その村には不老不死に似た効果のロストロギアがあると思います』
「え！？　この村に、ロストロギアが？」

突拍子の無い意見に、リンは驚いた。
電話の向こうの春香は、冷静に言う。

『ロストロギアは、失われた世界の文明の結晶のような物……言わば、その世界の宝です。宝を隠すには、その宝の存在を知る者が居ない場所が最も安全な隠し場所です。この地球には魔法の文明はありませんし、幸いにも時空管理局からは管理外世界に指定されています。例え管理局が来たとしても、事件現場以外には踏み込みません。隠し場所には最適です』
「な、なるほど……」

春香の意見に納得して、リンは頷いた。
木を隠すなら森の中、と言う諺（ことわざ）があるが、今回はソレとは全く別の類だ。沢山の魔法世界、あるいは魔法道具の中に隠すのではなく、魔法と全く無関係な世界に隠した。
ふとリンは、怪訝そうに訊いた。

「仮にそうだとすると……このサイトの文献っぽい文に出てる子って、千何歳って事ですか？」

『そうなりますね。いかがですか？　調べてみる価値はあると思いますが』

「え？　あ、はあ……」

リンは歯切れ悪く答えた。

＊

翌日の白巣村。

「最悪」

村に着いての水銀燈の第一声に、リンは苦笑いを浮かべた。

結局、リンは春香の意見を聞き入れて白巣村にやってきた。自分達だけでは、何も出来ずにいたであろうから、他に選択肢は無かった。

水銀燈の転移魔法によって、移動は楽に出来た。白巣村は周りを自然に囲まれ、木造の家がポツポツと見える。他には、小さな田んぼがあったり、畑仕事に勤しむ元気なじいさんばあさんの姿くらいだ。都会的な文明は、全く無い。その代わり、静かで空気が綺麗だ。たまには、こんな田舎に来るのもいいかもしれない。

そんな田舎にやってきたのは、リン、水銀燈、プレシア、そしてアリシアの四人だ。何も無い所に急に現れる場面を、村の人間に見られないよう人気の無い場所に転移した。座標合わせに、水銀燈が苦心したのは余談だ。

アリシアは、プレシアが背負っている。遠目からなら、ただ眠っ

てる娘を背負ってるようにしか見えないハズだ。近くでも、そうマジマジと見られなければ、死んでるとはバレないだろう。二人共、服は着替えてある。プレシアが着ていた紫のドレスは、露出が高くて目立ち過ぎる。出発する前に、リンが使ってるシャツとジーンズを貸した。それなりに年齢は高いハズだが、意外にも着こなしていたのでリンは少し驚いた。

そして水銀燈だが、こちらは自分の扱いにご立腹の様子だった。何せ、リンが背負ってるリュックサックの中に入れられてるのだから。不服に思った水銀燈は、「最悪」とさっきの台詞を言ったのである。

刺激しないように、やんわりとリンが言う。

「いや、ほら、水銀燈は子供じゃ通らないから。それに、子供扱いされるの嫌いでしょう？」

「貴方も、この扱いも最悪」

水銀燈の機嫌が悪くなっていき、リンは引き攣った笑みになる。

春香の言う通りに水銀燈の側に居るが、状況は一向に良くならない。それどころか、リュック詰めなんて扱いも上乗せして、更に機嫌が悪化していた。それに、昨夜は結局、水銀燈は部屋に戻らず一晩中屋根に居た。

プレシアとは気まずい空気のまま、リンは溜め息をついた。まだ何もしてないのに、物凄く疲れた気分だった。ああ、泣きたくなってきた。

悲しく思った時、リンは申し訳なさそうに言った。

「あの……すいません。ちょっと、お手洗いに行っていいですか？」

「え？」

「貴方、馬鹿じゃないの？　行く前に済ませときなさいよね」

プレシアは呆れ顔になり、水銀燈も不機嫌に至極当然の指摘をする。

「いや、すいません。大丈夫かなって思ったんですけど、急にきまして……」

「早く行ってきなさい。その子は私が預かっててあげるわ」

「すいません。すぐ戻りますから」

水銀燈の入ったリュックをプレシアに預け、リンはトイレを目指して走り出した。

「……最悪」

リュックの中の水銀燈が、ポツリと呟いた。

トイレを求めて村を駆けるリンは、周りを見渡して公衆トイレが無い事に気付いた。

「まいったな～。こりゃ家のトイレを借りるしかねーな」

困った顔で頭を掻き、さて何処で借りようかと悩む。出来るだけ、一番借りやすそう、貸してくれそうな家を選ぼうとした。

その時、ふと視界に人を捉えた。村の老人では無い。外国人と思われる長い金髪の若い女で、外見から女子高生くらいに見える。明らかに場違いな、どこぞの青い制服を着て、足には黒いタイツを履いている。

横切る瞬間、ニヤッと笑いかけられた。

思わずリンは、強張った顔で振り返り、少女の背中を見た。

「な、何だ……？」

笑いかけられたと言うか、笑顔で睨まれたような、そんな気がした。不覚にも、睨まれた瞬間ビビってしまった。

初対面の少女に睨まれる理由は無いが、と考えたのも短く、尿意を思い出して慌てて駆け出した。

ただ一つだけ確かなのは、少女は美少女だった。

ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに（前書き）

活動報告で、あんな事を書きましたが、思うところあって何とか続けてみようと。
すみませんでした。
情けなく、みっともない作者ですが、これからもよろしくお願いします。

ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに

まだ明るい内に、リン達は例の神様が祭られてる洞窟前に到着した。

『シラス洞窟』と村と同じ名前が付けられてる洞窟は、村から少し離れた森の中にある。まだ昼頃で陽が昇ってると言うのに、森の中は鬱蒼と木々が生い茂っており、空からの光を遮って薄暗くなっていた。動物の鳴き声が一つも聞こえないのが、逆に不気味に感じられる。

洞窟の前に立つリンは、直感する。何かある、と。別にリンは、気配を読み取る武術の達人だったり、感覚が特別優れている訳では無い。それこそ、全ての能力は平均的な人間だ。そんな凡人のリンでも感じられる程、洞窟から漂う雰囲気は得体が知れない異様さがあるのだ。洞窟近辺に動物が見当たらないのは、おそらく、この異様な雰囲気のせいだろう。

妙な緊張感を抱き、リンは喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

「あの、マジで行くんですか？」

「今更何言ってるの？　おばかさぁん」

「……ですよね」

小声でリュックから出た水銀燈に恐る恐る尋ね、冷たく言葉を返されてしまった。

入る前から、嫌な空気を肌で感じて、早くもリンは帰りたい気分になっていた。

しかし、今更後戻りは出来ない。後ろを見れば、プレシアが険しい顔をしている。人造魔導師計画、アルハザードと娘を蘇生させる方法を次々と失敗に終わった今、この洞窟の中にあるであろうロストロギアが、彼女の一縷の望みなのだ。今回の捜索に全てを賭けて

いる、そんな決死の覚悟を固めた顔をしていた。
そんなプレシアの前で、今更引き返す事など出来ない。
逃げられないのは、分かっている。
仕方ない、とリンは諦めの溜め息をついた。自分で引き受けた事だし、ココで引き返すのは格好悪い。だから、洞窟に入るのはいい。けど、とリンは思った。
俺が先頭じゃなくてもよくね？
一行の先頭に立っているのは、リンだった。危険な場所では、男が先頭に立って率先して進む。コレは、全世界共通の常識のようだ。
水銀燈に前を譲ろうと思ったが、「おばかさぁん」と一蹴されるのは目に見えてるのでやめた。

「じゃあ、行きますか……！」

ようやく意を決したリンは、洞窟内に一歩踏み込んだ。

＊

洞窟の中は、当然ながら真っ暗だった。
だが、ソコは水銀燈が力を貸してくれた。手の平に輝く魔力球を作り出して、暗闇の洞窟内を明るく照らした。
水銀燈が明かりを作ってくれて、リンは心の底から安堵した。人間は情報の殆どを視覚から得ているので、コレを塞がれると不安になる。明かりがあるのと無いとでは、精神的余裕が全然違ってくる。
洞窟内に足音を鳴らして、一行は静寂な空間を進んで行く。周囲への注意も怠らない。見た限りでは、何の変哲もない自然が作った洞窟だ。だが、文献通りに不死の少女が存在しているなら、何かあるかもしれない。こういう場合、侵入者を排除する罠（トラップ）が仕掛けられ

てるものだ。
そして、しばらく歩いたところで一行は足を止めた。
「うおっ！？」
足下を見て、リンは驚いて目を剥いた。
目の前に、大きな空間が広がっていた。しかも、その中にはボコボコッと沸騰を繰り返す不気味な液体が満ちている。まさか、と思いつつ、リンは近くにあった石を沼に落とした。リンが見守る中、落ちた石は短い音を立ててあっという間に溶けてなくなった。
「なっ……！？　硫酸の沼か！？」
一瞬で石が溶けたのを見て、リンの顔が蒼ざめる。
第一関門・硫酸の沼。
「初っ端から難問っすよ！　どうするんすか、水銀燈！？」
「貴方、本当に馬鹿じゃないの？」
呆れた様子でリンを見下して、水銀燈が言う。
「こんなの、飛び越えればいいだけでしょう？」
「あ……」
言われてリンは冷静になった。
飛行魔法が使える水銀燈に運んでもらえば、楽に向こう岸まで移動する事が出来る。ソレは、プレシアも同じだ。彼女も飛行魔法は使える。使えないのは、リンただ一人。
「えっと……じゃあ、俺の事、運んでくれます？」

リンが頼むと、水銀燈は嫌そうに面倒臭がりながらも、肩を掴んで運ぶ体勢をしてくれた。
両肩の黒い翼を広げ、リンを掴んで水銀燈は宙に飛んだ。続くプレシアも、飛行魔法で硫酸の沼の上を飛ぶ。
運ばれるリンが下を向くと、沸騰を繰り返す硫酸の沼が目に入る。
アレに落ちたら、と思うだけで鳥肌が立つ。
だが、魔法が使える水銀燈達のお陰で難なくクリアだ。
そう思った時だった。
ハッとした顔で、水銀燈が左右を見た。つられてプレシアも、左右の壁を見る。
そして次の瞬間、左右の壁に野球ボール並の大きさの穴が幾つも空き、中から何かが飛び出た。水銀燈達を挟み撃ちにするように、飛び出た何かの雨が迫りくる。
その時には、既に水銀燈は行動に出ていた。

「はあ!?」

気付いたリンが情けない声を上げた時には、水銀燈の行動は完了寸前だった。
飛来物を防ぐために、水銀燈は黒い羽を更に巨大化させ、掴んでるリンとすぐ後ろに居るプレシア達も一緒に身を包み、防御の体勢に入る。再びリンの視界は真っ暗に封じられ、頼れるのは聴覚のみとなった。周囲で金属が弾かれる甲高い音が連続で鳴り響き、暗闇で反射的に身を震わせる。黒羽は魔力を通して硬質化されていて、鋼の鎧と化していた。
しばらくして、音が止み、羽が広げられて視界が蘇った。
キョロキョロを周りを見回して、リンが尋ねた。

「す、水銀燈……！　今、何が起こったんだ？　一瞬しか見えなか

ったけど、壁から何か飛んできたような……」
「矢が飛んできたのよ。飛んでる私達を撃ち落とす為に……」
二重罠（にじゅうトラップ）。
下の硫酸の沼を飛び越えようとする侵入者を、壁に仕掛けてある矢で仕留める算段だったのだ。
水銀燈の防御が速かったが、もし遅れていたら全員串刺しになっていた。プレシアは病気で身体が弱っていて、反応が鈍っている。水銀燈が居なければ、死んでいた。
最悪の危機を脱するも、まだリンは心臓が高鳴っていた。

「あ、あっぶね～！」
「……礼を言うわ」

プレシアも無愛想ながらも、助けてくれた水銀燈に礼を言った。
水銀燈は言葉を返さず、無言だった。
いまだに両者の間には、わだかまりのような気まずい空気があるが、水銀燈は私情で仕事を放り投げるような真似はしなかった。
無事に硫酸の沼をクリアして、一行は再び洞窟内を進む。
水銀燈が防御の魔法を使ったが、リンの体力はそれほど減ってはいなかった。先ほどの罠を凌ぐのに、多くの魔力を必要としなかったのだ。
水銀燈にとっては、先ほどの罠は全く恐い物では無かった。並の魔導師なら、障壁を砕かれて蜂の巣になっていただろう。水銀燈と並の魔導師では、質そのものが違うのだ。もっとも、プレシアも大魔導師と呼ばれた高ランクの魔導師であり、病に侵されてなければ容易く防いでいた。
しかし、リンは違った。メンバーの中で、ただ一人の魔法が使えない凡人だ。さっきの罠にビビって、弱腰になっていた。
そんなリンは、またも一行の先頭を歩かされていた。

ぎこちない笑みで、リンは後ろを飛ぶ水銀燈に言った。

「あの……先頭、代わらない？」

「貴方、男でしょう？　なっさけなぁい」

取り付く島も無い。

水銀燈に冷たく突き放され、リンは項垂れた。メンバーの先頭とは、最も罠の餌食になる可能性が高いポジションだ。ココは実力者であり度胸もある水銀燈が、リーダーとして先頭に立って引っ張っていくのが妥当なのだが、“男”と言う理由だけでリンは先頭から外されずにいた。リンは、男に生まれた事を呪った。

男女平等なんて嘘だ、理不尽だ、とリンは心中で哀しく叫んだ。

しばらく進んだ一行は、また広い空間に出た。今度の空洞には、怪しげで危険な沼は無い。普通の地面が広がっている。

踏み出そうとして、先頭のリンは動きを止めた。先ほどの矢の罠が、脳裏を過る。もしかしたら、踏み込んだ瞬間に何か罠が発動するのでは？　と疑念が浮かんだ。

しかし、ココで立ち止まってる訳にはいかない。前に進まなければ目的を達する事は出来ない上に、プレシアにはあまり時間が無い。さすがに、今日明日どうなると言う程ではないが、身体が弱ってるのは確かだし、何よりリン達以上に必死だ。

結局、リンは空洞に足を踏み入れた。

理由は二つ。

一つは、長く躊躇してプレシアを苛つかせたくなかったから。

もう一つは、万が一、罠が襲ってきても水銀燈が護ってくれるだろう、と言うこと。

リンは基本的に、臆病であり他人任せな人間だったのだ。

踏み込んだ瞬間に罠が！　と言う事態は起こらなかった。冷たい空気に満ちている空洞内は、静かで今のところ罠の気配が無い。もしや落とし穴か！　と地面を見渡して確認するが、一見しただけで

は罠を仕掛けた痕跡は見られない。もっとも、仮に落とし穴が仕掛けられていたとしても、空を飛ぶ術を持つ水銀燈達には意味を成さない。凡人の自分には効果覿面だが。

しかし、意外な所から罠が来た。

リン達が、ちょうど空洞の真ん中辺りに着いた時だった。

前方の出口と後方の入り口が、突然現れた光の柵によって塞がれた。かと思えば、今度は頭上で何か音が聞こえた。音を聞いた瞬間、背筋にゾクリと悪寒が走り、嫌な予感がしてリンは顔を上げた。高い天井に、黒く巨大な四角い塊があった。何だ？　と思ったのもほんの一瞬で、リンはソレの意味を理解した。

ソレと同時に、分厚い黒い塊が天井から落ちてきた。

第二関門・落下する天井。

「マ、マジかよ！？」

圧倒的巨体が頭上より迫り、リンは目を硬く瞑って身を屈めた。無駄と解っていても、反射的に行う。

侵入者を押し潰さんと落下してくる黒い塊だが、しかし目的は達せられなかった。

反射的に動いたリンよりも早く、水銀燈が頭上に手を伸ばし、素早く魔力球を生成して、迫りくる落下物に向かって放つ。直径二メートルの魔力球と衝突して、空気を伝って重い振動を受ける。屈んでるリンは、大きな揺れを感じて平衡感覚を一瞬失った。黒い塊は、途中で動きが止まった。巨大な黒い塊と魔力球の力は拮抗して、動かない。水銀燈は、空いてる手に更に魔力球を作り、黒い塊と押し合っている魔力球に向けて放った。

二つの魔力球が混ざり合った直後、炸裂音と共に部屋の中心で青色の爆発が起こった。爆発音に混じって、何かが砕ける音が空洞内に響く。屈んでるリンの頭や体に、大小の破片が当たった。

音と破片の雨が止み、リンは恐る恐る顔を上げた。粉々になった

黒い塊の破片が、地面に散らばっていた。リンは、近くに落ちてた黒い塊を掴んで持ってみる。重い。こんな物を受けたら、人間などひとたまりもない。

だが、そのとんでもない物を、水銀燈は容易く破壊してみせた。

悠然とした態度の水銀燈に、震える声で礼を言った。

「あ、ありがとう……！」

お礼の言葉に対して、水銀燈は素っ気なく鼻を鳴らすだけだった。

彼女の反応は、半ば予想通りだったので、特に気にはしなかった。

それよりも、プレシア達が気になる。振り向けば、我が子を抱えて障壁を張ってるプレシアの姿があった。彼女も無事のようだ。リンは、ホッと安堵の溜め息をついた。

プレシアも、安全を確認して障壁を解いた。

「また貴方に助けられたわね」

「別に……」

相変わらず、水銀燈とプレシアの空気は気まずい。

一方、気が抜けたリンは疲労感に襲われていた。今の水銀燈の魔法で、体力を消耗したのだ。だが、押し潰されるより遥かにマシだ。助かる為の代償と考えれば、安いモノである。

「ホラッ。さっさと立ちなさい」

水銀燈が冷たい声で、命令してくる。

軽く文句の一つでも言ってやろうかと思ったが、リンは従順に頷くだけだった。水銀燈に命を救われた身だし、疲れで文句を言う気になれなかったのもあるが、今の彼女に妙な違和感を抱いてるからだ。水銀燈は確かに冷たい態度を取るが、以前は今ほどではなかっ

た。言葉にも、妙に棘のある感じだ。多分、変化はプレシアが来てからだ。彼女だけでなく、自分とも妙に距離を離してるように見える。

しかし、その理由を訊こうとはしなかった。多分、答えてはくれないだろうと思った。

とりあえず、今は依頼をこなす事が先決だ。

そう思い、先に進もうとした時だった。

「思った以上につまらない仕掛けね」

突然、背後から女の声が上がった。

一同は一斉に振り返り、空洞の入口を見た。柵が壊された入口の前に、青い制服を着た金髪の女性が立っていた。

「あっ……」

金髪の女を見た瞬間、リンは声を上げた。村で見かけた、あの女だった。

リンの側で、金髪の女を見たプレシアは表情を険しくさせた。

「管理局……！」

「え……？」

リンは、プレシアと金髪の女を交互に見る。それから、金髪の女が着てる青い制服に着目して合点がいった。

なるほど、アレは管理局の制服なのか。納得はしたが、何故プレシアが険しい顔をしてるのか解らなかった。

プレシアが娘を失い、生き返らせようと研究をしていた事やアルハザードを目指していた事は、知っている。だが、『闇の書事件』以前に海鳴市で起こった『Ｐ・Ｔ事件』の詳細について、リンは全

く知らないのだ。プレシアが事件の首謀者である事を知らない為、彼女の管理局員に対する警戒心が解せなかった。

しかも、水銀燈を見れば、彼女もまた恐い顔で嫌悪感を露にしていた。ソレは、家でプレシアの話を聞いた時に見せた表情と同じだった。自分を捨てた、管理局に対する憎悪の表れだった。

そんな二人の視線を受けても、女局員は笑顔で言った。

「ふふ。プレシア・テスタロッサ……まさか、貴女が生きていたとはね。驚きだわ」

「……私を捕まえにでも来たのかしら？」

目の鋭さを強くして、プレシアは待機モードの杖（デバイス）を起動させて構えた。

女局員と視線を交わすプレシアの側で、リンは話についていけず困惑していた。ついていくどころか、サッパリ話が見えない。

そんなリンを他所に、女局員は続ける。

「安心してちょうだい。別に貴女を逮捕しに来たんじゃないわ。別の用事よ……！」

ニヤリと妖しい笑みを浮かべた。

そして彼女が笑った瞬間、場の空気が凍りついた気がした。何か見えない力に縛られたように、リンは体が動けなくなった。額からは嫌な汗をかき、心臓が早鐘のように高鳴っている。まるで、圧倒的捕食者に睨まれた獲物のような感じだった。

ヤバい。

リンの中で、かつてない警戒信号が鳴り響く。リインフォースの中に巣食う闇、洞窟内の罠、何度も常軌を逸した恐怖を感じてきた。しかし、この女は違う。今まで相対してきた“危険”とは、まるで別物だ。そんな直感があった。

水銀燈とプレシアも、同じ空気を感じたのだろう。警戒心を超えた敵意の目で、女局員を睨んで身構えた。
不気味な程に妖艶な笑みで、女局員は言った。

「初めは、貴女達が洞窟内に仕掛けられた罠を抜けていく様子を見て愉しむつもりだったけど、あまりに罠がつまらないから、予定を少し早める事にしたわ。私が、貴女達の相手をしてあげる！
さあ、愉しい殺し合い(ショー)を始めましょう……！」

舌舐めずりをして、女局員は不気味な笑みを更に歪めた。
女局員の目的は、犯罪者(プレシア)の逮捕などではない。殺し合いと言う、狂気のショーだった。

「テスタロッサ！」

臨戦態勢に入った水銀燈が、鋭い声を上げた。

「ソコで足が竦んでる子を連れて、ココから出て行きなさい！　邪魔よ！」

プレシアは、反論しなかった。
一流の魔導師であるプレシアは、水銀燈に言われる前に女局員と対峙した瞬間に察していた。目の前に居る女局員は、自分以上に高ランクの魔導師であり、何より普通の人間には無い危険な匂いを纏っていること。
プレシアは矛を収め、側で固まってるリンの手を引いた。

「行くわよ！」
「えっ！？　ちょっ……待っ……！」

我に返ったリンは、水銀燈の背中を見る。

「水銀燈！」

彼女の小さな背中に声を投げるが、返事は来なかった。

この時、リンは言い知れぬ不安を抱いていた。胸がざわついて、苦しさが引かない。こんな気持ちを持ったのは、初めてだった。

リン達は出口の先に消えていき、空洞に水銀燈と女局員の二人が残された。

「あら？　貴女一人で私の相手をするのかしらぁ？　ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに、残念だわぁ……！」

狂気の女局員――黒岩聖麗の牙が襲い掛かる。

リン達が場を去って、物足りなそうな様子を見せたセイラだったが、水銀燈の相手をすると決めて気を取り直す。

何も無い両手に、それぞれ待機モードを解いた拳銃型のデバイスが握られた。薄暗い空洞内で黒光りしてる拳銃は、シンプルなデザインをしていて、まるで玩具のように見える。しかし、そのシンプルさが逆に恐ろしく見えた。

対する水銀燈は、以前の闘いでプログラムを仕留めた剣型デバイスを構えた。魔力を流して、青い魔力刃を生成する。距離を離した状態で、飛び道具を持つセイラ相手に敢えて接近戦を狙っていた。

互いに戦闘態勢に入り、セイラが歪んだ笑顔で言う。

「さあ、始めましょう！」

素早く二丁の拳銃を構え、水銀燈に狙いを澄まして銃声を鳴らす。放たれた紅い魔力の銃弾は、空を走って標的に迫る。当たる寸前で、水銀燈は剣を振り抜いた。見事に銃弾を切り裂き、駆け出してセイラとの距離を縮める。初撃を防がれてもセイラは何ら動揺せず、接近してくる水銀燈に銃弾の雨を放つ。

今度は水銀燈は、剣を使わずに広げた黒い翼から羽を矢のように飛ばした。放たれた羽と銃弾は、宙で衝突を繰り返す。弾を相殺させ、その隙にセイラの懐に潜り込む。横薙ぎに剣を振り抜き、一太刀入れようとした刹那、セイラが笑い、刃を弾かれた。

「えっ！？」

予想外の展開に驚き、水銀燈は一旦下がって離れた。

なんと、目の前に対峙してるセイラの手に、先ほどまで握られて

いた拳銃が消えて、代わりに剣が一本あった。西洋風のデザインで、太く大きな刀身の剣だ。

「いつの間に……！？」

怪訝に思う水銀燈だが、構わずセイラは襲ってくる。

頭を狙った上段からの刃を、水銀燈は硬質化させた翼を盾にして防ぐ。閉じた翼を広げて剣を弾き、同時にセイラに斬りかかる。だが、動きを読まれて簡単に刃をかわされた。直後に、反撃の横薙ぎの一閃が流れる。翼の羽ばたきの反動を利用して後ろに引き、紙一重で剣戟を避けた水銀燈は見た。セイラの手首に巻かれている、複数のアクセサリーのような物を――。

再び間合いを離して、水銀燈は問うた。

「まさか……複数のデバイスを持っているの？」

セイラの手首にあるのは、待機モードにされた複数のデバイスなのだ。

水銀燈の問いに、セイラは愉しそうに答える。

「ええ、そうよ。ショーを愉しむ為の工夫の一つよ」

基本的に、魔導師一人につきデバイスは一個である。魔力資質や、その魔導師の戦闘スタイルに合ったタイプを持たせる等、理由は幾つかある。

しかし、セイラは拳銃型、剣型とその他複数のデバイスを所有しているのだ。通常では考えられない数で、彼女の他にこれ程の数のデバイスを持った魔導師は局内には確認されていない。

更に、普通の魔導師と違う点を、水銀燈は他にも見つけていた。

「『カートリッジシステム』が無いのと『非殺傷設定』を解除してあるのも、愉しむ工夫なのかしら？」
「ふふ、よく見てるじゃない」

水銀燈の気付きに、セイラは感心した笑いを漏らした。
『カートリッジシステム』とは、事前に魔力が込められてる弾丸型のカートリッジをロードする事で、瞬間的に魔導師の実力以上の魔力を爆発させ、魔法の効果を高めるシステムである。しかしながら強力故に不安定要素もあり、現段階では並の魔導師では使用出来ない。だが、セイラはランク的には最低でもSランクを超えており、充分にシステムを使いこなせる実力を備えている。しかし、彼女はデバイスにカートリッジシステムを搭載していない。その理由は、水銀燈が言うように愉しむ為の工夫もあるが、それよりも自信があるからだ。そんなシステムに頼らずとも、自力で魔力を瞬間的に高め、操る術を持っているのだ。
そして、『非殺傷設定』とは、物理破壊を伴わない魔力衝撃の事を言う。基本的に、管理局員に限らず魔導師にはこの非殺傷設定が義務付けられている。設定を解除するのは、よっぽどの緊急事態のみ。しかし、セイラは違う。彼女は管理局の中でも、異質な局員なのだ。局内で唯一階級を持たない『無階級局員』であり、組織内でも高い権限を持っている型破りな局員である。高い階級の人間――例えば元帥に意見する権限もあり、独自の判断で非殺傷設定を解き、犯罪者をその場で合法的に殺す事も許されている。設定を解いているのは、勿論、己の快楽の為だ。
昂る興奮の表れか、セイラはデバイスの刃を舌で舐める。
「納得したかしら？　それじゃあ、続きを始めましょう！」
狂気に満ちた目で、水銀燈に刃を向ける。
剣を交えての、二人の攻防が始まった。刃が衝突する甲高い音を

鳴らし、火花を散らした小競り合いが続く。素人目には互角に見えるだろうが、その実、水銀燈は苦戦していた。特定の型に嵌まらない不規則な剣筋、不気味な狂気、ソレ等が水銀燈を押していた。接近戦の技量では、セイラが上回っている。

分が悪いと判断して、水銀燈は戦法を変えた。宙に飛んで離れ、左右の大きな翼を黒の龍へと変化させる。そのまま左右から挟み撃ちにするように攻撃を仕掛けた。タイミングはバッチリで、回避する事は不可能。

確実に捉えたと思った水銀燈だったが、信じられない光景が目に飛び込む。

セイラの手から剣が消え、即座に銃型デバイスが両手に握られ、素早く左右の龍に照準を合わせた。次の瞬間、数発の弾丸が発射され、口を開けて迫りくる龍の顔面に風穴を幾つも開ける。

「くっ！」

神業のようなセイラの反撃に顔を歪める水銀燈だが、すぐに追撃を試みる。

左右の翼を合わせ、先ほどよりも倍以上の巨大な龍を形成して、セイラに襲い掛かる。この大きさの龍相手に、銃撃は通用しない。今度こそ決まると思われたが、またも水銀燈の確信は破られる。

セイラは素早くデバイスチェンジをして、新たな武器を手に構える。今度のデバイスは、身の丈以上の大きさがある巨大な斧だった。黒光りする斧の刃は、相手の命を刈り取るような不気味さが感じられる。迫りくる龍の牙が届く刹那、狂気染みた笑みを浮かべるセイラが巨大斧を横に振り抜いた。豪快に振り抜かれた巨大斧の刃は、龍の頭を横真っ二つに両断した。

「なっ！？」

驚愕を禁じ得ない水銀燈は、目を見開いた。ソコに一瞬の隙が生まれた。

セイラは隙を見逃さず、地を蹴って跳躍する。動揺してる水銀燈の前に、歪んだ笑顔を現す。

我に返った水銀燈は、急いで翼で防御しようとした。だが、僅かに遅かった。既にセイラは巨大斧を構えており、魔力を上乗せして威力を高めた一撃を繰り出す。左肩から斜めに体を斬られ、水銀燈は地面に落ちる。

「ぐっ……！」

地面に強打して、水銀燈は鈍い声を漏らす。

幸い、中途半端な翼の防御で、巨大斧による致命傷は免れた。しかし、傷は決して浅くは無かった。逆十字のドレスは破れ、傷を負った白い身体（ボディ）を露にしている。本来なら滑らかで美しい身体に、周囲にヒビが走った切り傷が出来ている。

傷を押さえて、水銀燈は息を荒くさせる。

弱った水銀燈を見て、セイラは興奮して舌舐めずりをした。

「いいわよぉ、その姿……！　興奮して濡れそうだわぁ……！　でも、もうおしまいなのかしらぁ？　やっぱり貴女はジャンクなの、水銀燈？」

最後の言葉に、水銀燈は目を剥いた。

セイラが、何故自分の事を知っているのか、そんな事はどうでもよかった。ただ、彼女の言った言葉が許せず、怒りが込み上げてきた。憎しみに顔を歪め、鬼気迫る声で叫んだ。

「私はジャンクなんかじゃないっ！」

＊

プレシアに手を引かれ、リンは洞窟内を走っていた。
走りによる疲労以上に、リンは疲れを感じていた。理由は簡単だ。水銀燈が例の女局員と闘って、魔力を消費してるのだ。魔力の消費は、リンの体力消耗に繋がる。だから、水銀燈が闘っている事は解る。
そして、胸の中に巣食う不安も、広がり、強くなっていく。
アレはダメだ。
アレは危険だ。
アレは相対してはいけない相手だ。
アレは闘ってはいけない相手だ。
リインフォースの中に巣食っていた闇よりも、危険なのだ。闇は見た目の恐さがあったが、あの女局員はそんな表層的な恐ろしさではない。狂気染みた外見も恐ろしいが、それよりも常軌を逸した狂気が渦巻く中身が恐い。
そして、強い。単純な戦闘能力でも、闇よりも上のハズだ。
リンは、相手の実力を的確に見極める能力など持ち合わせていない。だが、確信はあった。能力把握の能力など無くても、大まかな危険度は解る。
体力の消耗以外にも、収まらない胸騒ぎにリンは顔を辛そうに歪める。
「あの、テスタロッサさん……！」
「何？」
「ちょっと、疲れた、んで……休んで、いいですか……？」
今のリンには、走る体力は残って無かった。肩で息をして、疲労

のあまり足もガクガクと笑うように震えていて、立っているのもやっとの状態だ。

プレシア自身も病の体で無理したからか、異論無く休憩に入った。腰を降ろして、胸に手を添えて呼吸を整えている。

リンも冷たい地面に座り込んで、少しでも体を休める。

走ってる間も、今も脳裏に過るのは水銀燈の姿だった。水銀燈が負けるなんて考えたくないが、相手があの女局員だと不安が拭えない。落ち着かなくて、自然と貧乏ゆすりをしてしまう。

助けに行きたい気持ちが、無い訳じゃない。しかし、自分なんかが行ってどうなる。魔法も使えない自分が行っても、邪魔になるだけだ。だからこそ、水銀燈は弱ってるプレシアと一緒に自分を闘いの場から追い出したのだ。そんな事くらい、解っている。そう、頭では自分の無力さを理解している。だが、感情はそうはいかない。胸の内から、助けに行きたい気持ちが込み上げてくる。

膝の上で握り拳を固め、歯を食いしばって葛藤する。

その時、水銀燈の小さな背中が頭に浮かんだ。

リンは、決心した。

多少整った息遣いで、リンは言った。

「テスタロッサさん」

「何かしら？」

「あの……俺、戻ります」

リンの言葉に、プレシアは驚いたように目を見開いた。しかし、動揺もすぐに収まり、冷静さを取り戻して訊いた。

「貴方、本気で言ってるの？」

「はい」

今までのような歯切れの悪さや曖昧さは無く、リンはハッキリと

答えた。
　決然としたリンの返答に、今度はプレシアは僅かに目を細めた。リンの決意が本物なのか、その真偽を確かめようとしてるようだ。
「彼女が、何故私達を場から追い出したか解っているの？　あの場に居ても、足手まといになるだけだからよ」
「ソレは解ってます。馬鹿な俺でも、力の差くらいは解ります。でも……それでも俺、行きたいんです！」
　これだけは譲れないと、リンは僅かに身を乗り出した。その顔には、普段には無い真剣さが表れていた。
　一歩も引き下がらないリンを見て、プレシアは怪訝そうに訊いた。
「貴方も、あの局員の危険さは感じたでしょう？　行けば自分が殺されるかもしれないわよ？　それでも、行くの？」
「はい。その……後悔したくないから……」
　柄にもない事を言って、妙に気恥ずかしくなるが、リンは続ける。
「ココで動かなかったら、多分、いや、きっと後悔すると思うんです。俺、水銀燈を見捨てたくないんです」
　顔を熱くさせて、自分はシリアスな空気には向いてないとリンは思った。緊急事態だと言うのに、らしくない台詞を恥ずかしく思っているのだから。
　リンの決意が伝わったのか、プレシアは口を閉じて見つめている。ややあって、溜め息をついた。
「……分かったわ。行ってきなさい」
「テスタロッサさん……！　すみません。ありがとうございます！」

プレシアの了解を得て、リンの顔が明るくなる。

「水銀燈を連れて、すぐ戻ってきますから！」

立ち上がり、身を翻してリンは来た道を戻った。

リンの背中が見えなくなり、プレシアは抱いてる娘に目を向けた。

「アリシア……」

優しく娘の頭を撫で、脳裏に過去の記憶が蘇る。

上層部からの指示に逆らえず、無茶な実験を決行したあの忌まわしき日である。次に浮かんだのは、先ほどのリンの言葉だった。

後悔したくないから。

リンの言葉を何度も脳内で反芻して、プレシアは哀しげな表情になる。

「あの時……私も彼のように動いていれば、貴女を失わずに済んだのかしら……アリシア……」

＊

リンは、思った以上に体力を消耗させていた。

もはや走る事は出来ず、歩くのも億劫に思える程に疲労していた。

事実、洞窟内を進むリンは足を完全に浮かせず、引き摺るように歩いている。この明らかな疲労は、水銀燈の魔力消費を表している。

思った通り、水銀燈はセイラに苦戦しているようだ。気持ちばかりが急いで、リンは表情を険しくさせる。

早く。
早く。
早く。
洞窟を進むと、奥から音が聞こえてきた。空洞で起こってる戦闘の音だ。流行る気持ちを必死に抑え、リンは静かに空洞の入り口から顔を覗かせ、中の様子を見た。

「……っ！」

目に飛び込んできた衝撃の光景に、思わずリンは声を上げそうになった。
空洞の中には、体中ボロボロになった水銀燈が居た。ドレスは所々破れ、体のいたるところには傷を負い、ボロ雑巾のように酷い状態になっている。予想はしていたが、予想以上に酷い有様を目の当たりにして、リンは絶句した。
対するセイラは、殆ど無傷だった。制服に埃等の汚れは付いてるが、目立った傷は見当たらない。
戦況は圧倒的に水銀燈が不利で、追い詰められていた。
今すぐにでも飛び出て、水銀燈を助けたい。だが、事はそう簡単ではないのだ。仮に飛び出てセイラの注意を引き付けても、一時的な対処にしかならない。無策じゃ駄目だ。本当に水銀燈を救いたければ、何か策を練らなければならない。
しかし、だからと言って、そう長く考えてる時間は無い。
――どうすればいい？　どうすれば……？
考えるんだ。非力な自分に出来る事など、考える以外に無い。冷静になるよう努め、足りない脳味噌をフル回転させて、必死に考える。
――考えろ……！　考えるんだ、俺……！
水銀燈は明らかに弱っている。相手のセイラの実力は圧倒的だ。真正面から挑んでも、勝てないのは目に見えている。実力で劣る自

分達が勝つには、相手の虚を衝くしかない。
どうしたら相手の隙を作れる？
思考する中、ハッとリンはある可能性に気付く。

「勝てる……！　いや、勝てるかもしれない……！」

思考の末に見つけたか細く頼り無い“理”だが、全く可能性が無い訳では無い。
このまま何もしないで手をこまねいてるより、まずは実行してみるべきだ。
やる決意は固まったが、一つだけ問題があった。ソレは、闘いの場に居る水銀燈に作戦を伝える連絡手段だ。リン一人で勝手に行動すれば、おそらく彼女も動じてしまう。ソレを避けるには、水銀燈にも作戦の内容を伝える必要がある。

「ああ、ちくしょう！　どうすりゃあいいんだ！？」

連絡手段が浮かばず、イラつくリンは頭を掻き乱す。
何かないか？　何か……？
相手にバレずに、仲間だけに作戦を伝える方法。そんな魔法みたいな事が、と思った時だった。
――あ、あああああああ！
またしても、リンの中で閃きが走った。
今日の俺は、自分でも恐い位に冴えてる。閃いたリンは、そう思った。

恍惚な表情を浮かべていたセイラは、傷付いた水銀燈を見て物足りなそうに眉を顰めた。

「残念だわ、水銀燈。もう少し愉しめると思ったけど、『失敗作』の貴女では、この程度で終わりのようね」
「くっ……！」

水銀燈は悔しそうに顔を歪め、見下ろしてくるセイラを睨む。
その目には、自然と涙が浮かんでいた。胸の内から湧き上がる感情を抑え切れず、目から溢れ出てくる。

「違う……！」

感情は声となって、口からも出た。

「私は、『失敗作』なんかじゃない……！　ジャンクなんかじゃ……ジャンクなんかじゃ、ない……！」

自分の肩を抱き、涙声で誰にともなく訴える。
自分を否定する言葉が、彼女の胸に突き刺さり、脆弱な精神が崩れかける。心身ともに追い詰められて、水銀燈は限界間近だった。
私はジャンクなんかじゃない。
出来損ないの『失敗作』なんかじゃない。
だから、だから私を独りにしないで。
私を捨てないで。

（水銀燈！）

縋（すが）るように願う水銀燈の中で、突然声が響いた。聞き覚えのある声に、水銀燈はハッと泣き顔を上げた。

「え……？」

茫然とする水銀燈の中で、また声が響く。

（水銀燈！　聞こえたら返事して！）

（リ、リン……！？）

（水銀燈！　良かったぁ、通じたぞ！）

念話。魔導師同士で行われる、テレパシーのような会話手段である。本来なら魔力を持つ魔導師にしか使えないのだが、水銀燈と契約して繋がりを得ているリンも、彼女とのみ念話が可能となっていた。

魔導師の話を聞いて、念話の事は知っていた。水銀燈と念話が通じるかは、正直なところ自信は無く、賭けだった。

しかし、リンはその賭けに勝った。

連絡手段を得たリンの声は、心なしか弾んでいた。

（実は今、水銀燈達が居る洞窟の入り口前に居るんだ）

（なっ……！？　あ、貴方、何しに来たの！？）

（何しにって、その……水銀燈を助けに……）

弱々しい様子から一転して、声を荒げる水銀燈に、リンは気圧されながらも答えた。

理由を聞いた水銀燈は、目を見開いて動揺を顔に表した。対峙してるセイラは、水銀燈の変化を怪訝そうに見ている。

目の前のセイラに意識を向けつつ、水銀燈は訊いた。

（……どうして戻ってきたの？　どうして私を……？）

（いや、その……ほら、前に俺言ったじゃん？　水銀燈が好きだって。だから、水銀燈の事見捨てたくなくて……）

理由を聞いて、水銀燈は心が大きく揺れた。

認めたくない、けれど求めていた気持ちが、心中に生まれていた。
そして、その気持ちをリンに悟られるのを嫌った。今まで水銀燈は、自分の弱味を他人に見せまいと強くあり続けてきた。隠し続けてきた弱味を、リンに見せたくなかった。
リンに心の内を悟られないように、努めて水銀燈は普段の調子で答えた。

（貴方って、本当におばかさんねぇ）
（自覚はしてるよ。でも、この窮地を乗り切る策は考えてきたよ）

複数のデバイスを操り、水銀燈を圧倒するセイラ。
この怪物攻略に、リンが見出した突破口とは？
怪物　対　落ちこぼれ。
その勝負が、大きく動き始める……！

俺もやる……！　今度こそ逃げないっ……！

空洞の入り口前で、リンは胸に手を当てていた。

作戦決行前の激しい鼓動を鎮めるように、目を閉じて静かに深呼吸をする。元々、小心者であるリンが緊張を解くのは容易では無かった。それに空洞内からは、再起した水銀燈がセイラと戦闘を再開させて、銃声やら爆音が響いてくる。音にビビって、平静になるどころではない。

仕方なく、リンは鼓動を鎮めるのをやめた。足が動ければ、それでいい。

「……やる！」

自分に言い聞かせるように、リンは言った。

「俺もやる……！　今度こそ逃げないっ……！」

決意の込められた目を開き、リンは覚悟を決めた。

セイラの銃声が、空洞内に響き渡った。

標的は、宙を飛んでる水銀燈だ。黒い翼を羽ばたかせ、羽を洞窟内に撒き散らす。飛行している水銀燈も、ただ逃げてるだけではない。羽を弾丸のように発射して、黒羽の雨をセイラに降り注ぐ。受けてセイラは、機械のように正確な精密射撃で迫りくる羽を次々と撃ち落とす。羽の雨が止んだ隙に、セイラは新たなデバイスにチェンジした。肩に乗せたのは、バズーカ砲型のデバイスだった。魔力を砲口に溜め、狙いを定めてトリガーを引く。次の瞬間、極太の紅い砲撃が放たれた。宙を翔ける紅い閃光は、どこか妖しく、そして

禍々しいさが感じられる色をしていた。空中に佇む水銀燈が、砲撃範囲から逃げられないと瞬時に判断して、翼で全身を隙間無く囲んで防御の体勢に入った直後――閃光に飲み込まれた。そのまま閃光は高い天井に直撃して、大音量の爆音と共に貫通した。

そして、この時を待っていた。音と砂煙に紛れて、全身全霊の力で空洞内を駆ける人影が一つ。地震のような激しい揺れが起こり、洞窟が崩れるのではと危惧した。だが、天然の洞窟は思った以上に頑丈で、破片が降ってきても洞窟自体が崩壊する事は無かった。その事に安堵しつつ、一気に間合いを詰めて行く。死角から接近して、セイラにタックルをかました。

完全に虚を衝かれたセイラは、一瞬何が起こったのか解らず、唖然となった。

「なっ！？」

飛び付いてきたリンを見て、声を上げた直後だった。

ドスッと言う刺突音が鳴った。体に妙な違和感を憶え、セイラは視線を落とす。自分の胸元に、青い線が突き刺さっているのを視認した。青い線の先を目で追うと、宙に溜まってる煙に辿り着く。

線が上に向かって動き、セイラの体が持ち上げられた。重量感タップリのバズーカ砲が、肩から落ちる。タックルで力を使い果たしたリンも、手を離してその場に倒れ込む。

割れた煙の中から現れたのは、青い刀身を伸ばした水銀燈だった。

「私の下僕としては、まあまあの働きねぇ！」

刀身が伸びた剣を勢いよく振り下ろし、セイラを地面に叩きつける。

すかさず水銀燈は羽の弾丸を放ち、制服を突いて地面に張り付かせて、セイラの動きを封じた。刃を突き刺したまま、トドメの準備

に入る。二つの翼を合わせ、巨大な龍を作り出し、大きく開いた口に魔力を集束させる。青い魔力の球体が、徐々に大きくなっていく。増幅していく魔力は、リンの残り僅かな体力で生成出来る物ではない。彼の命を削っているのだ。

宙で生成された巨大な魔力球を見て、セイラは狂喜染みた笑みを浮かべた。形勢を逆転させられ、追い詰められてるにも関わらず、その胸中では現状を愉しんでいた。

水銀燈は、地面に張り付けたセイラを睨みつけた。

「貴女、絶対に許さないわぁ！」

直後、青い魔力球が発射された。

ズンッと重い音を響かせ、空洞内を激しく揺らし、セイラを押し潰す。空気を伝って、離れていたリンも衝撃を肌で感じた。この空洞内にあった罠を連想させるような、ダイナミックな現象だった。しかし、そのエネルギーの質量は魔力球の方が上回っている。硬い地面にめり込み、周囲に何筋もの亀裂を走らせた。

音と振動が止み、魔力球も消えた。

蹲(うずくま)って頭を抱えていたリンは、恐る恐る顔を上げ、驚愕に目を見開く。目の前に、隕石でも落下したような大きなクレーターが一つ出来上がっていたのだ。クレーターの深さ、たちのぼる煙、周囲に広がってる亀裂が、エネルギーの凄さを物語っていた。

最後の水銀燈の攻撃までは、リンの計画通りだった。まず、水銀燈とセイラを再び闘わせる。それも、かなり派手にだ。とにかく空洞内に音を響かせたかった。隙を衝いてセイラに飛び掛かろうとする、リンの気配に気付かれないようにする為だ。魔導師は、魔力を感じて他の魔導師の位置や存在をある程度掴む事が出来る。ソレは言いかえれば、“魔力を持たない者は感知されない”、と言う事になる。そこでリンは、魔力を持たない自分が近づき、セイラの体勢を崩して水銀燈が攻撃をする作戦を立てた。セイラは水銀燈に意識

を向けていたが、万が一足音で気付かれる可能性も考え、戦闘の際に起こる更に大きな音で掻き消す事でクリアした。
ただ、最後に放った水銀燈の一撃の威力は、予想外だった。
こんなの見た事が無い。驚きのあまり、リンは声も発せず、阿呆みたいに口を開くだけだった。
茫然としてるリンの背後で、着地の音がした。我に返り、弾かれたように振り返れば、水銀燈が立っていた。

「す、水銀燈……」
「随分と情けない顔ねぇ」

リンの顔を見て、水銀燈はクスリと笑った。
その瞬間、リンは恥ずかしさ以上の“ある衝動”に駆られ、疲れ切った体を無理矢理動かした。立つ事は出来ないから、匍匐前進（ほふくぜんしん）で水銀燈に近付く。
そして、目の前の水銀燈に抱きついた。

「水銀燈！」
「なっ……！？」

急に抱きつかれた水銀燈は、驚いて目を見開いた。

「ちょっ……ちょっと、何してるのよ！？　離れなさい！」

抱き締めてくる腕を振り解こうとするが、水銀燈自身も殆ど力を使い果たしていて、無理だった。
それでも口で解放を訴える水銀燈だが、その声を無視してリンは声を上げる。

「やったよ、水銀燈！　勝ったよ！　俺達、勝ったんだァァァァ

！」

もう体力は残って無いハズなのに、水銀燈を抱き締めて、勝利と生還を喜ぶ。

リンの腕の中で、水銀燈は鬱陶しそうに顔を歪めていた。しかし、本心は違った。彼女の性格上、その気持ちを表に出す事が出来ないのだ。今まで、誰かと喜びを分かち合うなどした事は無かった。ずっと独りで闘ってきて、生きてきて、心に鎧を纏っていた。

その分厚く重い鎧を、脱ぎかけていた。

脱出を諦めた水銀燈が、リンの腕の中で呟いた。

「リン……」

「え？」

声を出して少し興奮が収まったのか、水銀燈の小さな声に気付いて、リンは笑顔で下を向いた。

腕の中に居る水銀燈は、ギュッとリンの服を掴んでいた。普段とは違う雰囲気を察して、リンの顔から笑いが消える。

リンの胸に顔を埋めたまま、水銀燈が告白した。

「私は……私は、ジャンクなんかじゃない……！　壊れてなんかいない……失敗作なんかじゃない……！

リン……私を独りにしないで……！　私を、捨てないで……！」

水銀燈の声は、途中から嗚咽に変わっていた。

初めて水銀燈は、自分の弱さを見せた。セイラを倒す作戦で、水銀燈が魔法を使う際にリンの寿命を縮める事になると言っても、当の本人は笑って言った。別にいいよ、ソレくらい安いモノだ。自分の命を犠牲にしてまで想ってくれるリンの前で、水銀燈は心の鎧を脱いだ。自分の心を曝け出した。

リンは、すぐに言葉をかける事が出来なかった。いつも悠然としてて、上から目線で偉そうにしてる水銀燈が、今はその小さな肩を震わせている。顔は胸に埋もれて見えないが、声や肩の震えから察するに泣いてるのだろう。水銀燈が泣くなんて、正直想像もしていなかった。だからこそ、驚きに言葉を失い、声をかける事が出来なかった。

けど、一つだけ解った。水銀燈の過去の詳細はいまだに知らないが、電話で春香が『水銀燈の側に居てあげて下さい』と言った意味を、何となく理解した。

ややあって、リンは水銀燈の頭に手を乗せ、自分なりに優しく撫でた。

「うん。分かってるよ。水銀燈は壊れてなんかいないし、失敗作でもない。水銀燈が凄いのは、解ってるよ。俺なんかよりも千倍、いや、万倍は凄い……って、俺なんかと比べても意味ないか。

それに、捨てたりなんかしないよ。言ったでしょう？　俺は、水銀燈が好きなんだよ。まあ、逆に俺が捨てられる可能性があるけどね」

最後に冗談を言ったが、笑ってもらえなかった。

代わりに、胸に顔を埋めた水銀燈は一言。

「……おばかさぁん」

＊

「すみません。遅くなりました」

水銀燈を背中に背負い、リンはプレシア達の所に戻ってきた。
正直、戻るだけで大変な重労働だった。セイラとの闘いで、二人共魔力と体力を消耗させていた。宙に浮く力も残されていない水銀燈に、疲れ切ったリンの体は運べない。そこでリンは、仕方なく匍匐前進で洞窟を進む事にした。背中に水銀燈を乗せて、体に鞭打って前進するのは、並大抵の事では無かった。水銀燈からプレシア達との距離が近い事を知ると、今度は意地で立ち上がり、徒歩に切り替えた。何故かって、匍匐前進じゃ恰好悪いからである。
正直、もう死にそうだった。気持ち的に。努めて平静を装うとしていたが、疲労は完全に顔に出ていたらしく、プレシアは心配そうに尋ねた。

「貴方達、大丈夫なの？　かなり疲れてるみたいだけど」
「え？　ええ、まあ、いや……」

心配かけまいとしていたリンだったが、ごまかせずに苦笑いになる。
背中に背負われてる水銀燈は、少し頬を赤くさせてバツの悪そうな顔で目を逸らしている。空洞内でのリンとのやり取りを、まだ気にしてるようだ。
二人の様子をどう受け取ったのか、プレシアは溜め息をついた。安堵か呆れか、おそらく両方だろう。
するとプレシアは、待機モードの杖型デバイスを取り出した。怪訝に思うリン達の前で、意外な行動に出る。
杖の先端に紫色の淡い光が灯り、その光は水銀燈に流れていった。
最初は警戒した水銀燈だったが、すぐに体の異変に気付く。

「貴女……！」

光の正体はプレシアの魔力であり、ソレを水銀燈に分け与えたの

だ。

「これ位はやらせてちょうだい」

答えたプレシアの顔は、普段の厳しさが抜けて、若干柔らかい表情になっていた。

彼女の変化に、二人は茫然となった。しかしリンは、プレシアの変化を喜ばしく思った。理由は解らないが、この心境の変化で水銀燈との気まずい空気がいくらか払拭されている。だから、深くは考えなかった。

水銀燈も礼こそ言わなかったものの、嫌悪はしていなかった。

＊

洞窟の奥を目指す途中で、リンが口を開いた。

「あのさ、水銀燈……」

「何？」

無表情に返す水銀燈は、疲労困憊のリンを掴んで飛んでいる。プレシアの魔力を分けてもらい、少しだが回復していた。

躊躇していたリンだったが、意を決して訊いてみた。

「いや……事実を知るのが恐くて、目を逸らしてたんだけど……。あの、空洞で倒した女局員の事だけど……アレ、どうしたの？　まさか、殺ってない、よね？」

出来る事なら、人殺しは避けたい。

水銀燈に手を汚してほしくないし、局員を殺す意味は大きい。イ

カれていたとは言え、仮にも世界を管理している組織の人間だ。その人間を殺すと言う事は、世界権力に牙を剥いた事に等しい。

一抹の不安を抱くリンに、水銀燈は答えた。

「あの女は、殺す気でかからなきゃいけない相手よ。アレで仕留められたかどうか解らないけど、バリアジャケットを身に纏って無かった分、ダメージは大きかったハズ……少なくとも、すぐには起き上がれないわ」

水銀燈の話を聞いて、改めてセイラが危険な局員であった事を知る。

生死は不明と言う事は、水銀燈も非殺傷設定を解いていたと言う事だ。殺す気でかからなきゃいけない相手、と言うのは大袈裟では無いようだ。

最初は局員殺しはヤバいと思っていたリンだったが、バレなければいい、と考え直した。それに、襲い掛かってきたのは向こうだ。正当防衛が成り立つ。

やっぱり、リンは暢気だった。

しばらく歩き、明かりが灯された新たな空洞が見えてきた。罠の可能性も考え、足取りも慎重になる。入口前で中をうかがい、リンは目を丸くした。空洞の中は、その前の物と内装が全く違っていた。壁は人の手が加えられたみたいに綺麗に整えられており、空洞内には寝具、テーブル、おもちゃ、引き出し等の生活用品が置かれてある。明らかに、人が住んでる感がある。

空洞内を見回していた一同の目が、ベッドに集まった。掛け布団が盛り上がっている。誰かが入ってるのは、明らかだ。

一瞬、顔を見合わせ、代表してリンが中身を確認する事になった。やはり、男の自分が選ばれたか、とリンは心中で溜め息をついた。

後ろに水銀燈を連れて、慎重に歩み寄り、ベッドの前で立ち止まって声をかけた。

「あ、あの～」

反応はすぐにあった。声を聞いた掛け布団の山は、ピクリと動いたかと思うと、モゾモゾと中で移動する仕草を見せて、隠れていた人物が出てきた。

掛け布団の中から出てきたのは、一人の少女だった。少し茶色がかった長い黒髪、幼さの残る可愛らしい顔で、黒のゴスロリを着ている。

この少女が、文献に載っていた不老不死の少女なのだろうか？

そんな疑問が浮かぶよりもリンが思ったのは、「結構可愛いな」と言う男として素直な感想だった。

リンの下心を読んだのか、後ろに控えてる水銀燈は眉を顰め、彼の髪を強めに引っ張った。

「いだだだっ！　痛い痛い！　何何？　何で髪引っ張るの！？」

痛みを訴えるリンの髪を放し、水銀燈は不機嫌な様子でソッポを向いた。

水銀燈にタイマンを挑もうかと思ったが、ココは耐えて、リンは少女に向き直る。

「あの……こんにちは」

まずは挨拶をするが、返事は無い。

めげずにリンは続ける。

「えっと……キミ、ココに住んでるの？」

この問いに対して、少女は小さく縦に頷いた。

無言だが、無視されなかった事にリンは安心した。

「じゃあ、キミ……千何歳なの？」

また少女は無言で頷く。

ウーム、とリンは少し顔を顰めて考える。今の反応と外見的には、無害そうな少女に見える。洞窟内の危険な罠の仕掛け主とは、思えない。罠を仕掛けたのは、別の人物だろうか？　しかし、空洞内には他に人は見当たらない上に、入ってきた出入り口以外に道は無い。

リンが考え込んでると、後ろからプレシアが近づいてきた。

「ココには、貴女一人？」

プレシアの問いにも、少女は無言で頷くだけだ。

喋らないのか、喋れないのか。どちらとも判断つかない。

だが、答えてくれる意思があるのは有難い。プレシアは優しい声で、少女に話しかけた。

「私達は、別に貴女に危害を加えに来た訳じゃないわ。ただ、貴女に頼みがあって来たの」

言葉を切り、プレシアは背負っていたアリシアを少女の前に降ろした。

「この娘はアリシアと言って、私の大切な娘よ。私のせいで目を覚まさなくなってしまったのだけど、もし、貴女の力で助けられるなら、力を貸してくれないかしら？　お願い！」

必死の想いで、プレシアはアリシア蘇生を願う。

プレシアとアリシアの顔を一瞥した少女は、おもむろに自分の人

差指を噛み切った。リン達が驚く前で、少女は平然とした様子でアリシアの口に、指先から滴る血を落とした。
一体何なのか、見守る一同が怪訝に思った時だった。

「その子が、不老不死の少女ね」
「え？」

不意に聞こえた声に振り返った直後、一同の間を影が通り抜ける。
次の瞬間、耳障りな音が鳴ったかと思うと、バッと赤い液体が体にかかった。一瞬何か解らなかったが、ソレが血である事に気付くのに、さほど時間はかからなかった。

「うわあああああああああ！」

鉄臭い匂いから、返り血を浴びた事を理解したリンは絶叫した。
顔色を変えて、水銀燈とプレシアは血の出所を見た。ソコには、凄惨な光景が広がっていた。空洞の主の少女が、体と地面を真っ赤に染めて仰向けに倒れていた。右肩から左脇腹にかけて、斜めにバッサリと斬られて夥しい量の出血を起こしている。少女の目は虚ろで、大量出血の影響で顔色も悪くなっている。
刺激の強い光景を目にしたリンは、吐き気を感じて咄嗟に手で口を押さえた。
そして、倒れた少女の側に、“最悪”が立っていた。

「不老不死のロストロギア……確かに、いただいたわ！」

返り血を浴びた顔で、寒気のする不気味な笑みを浮かべるのは、セイラだった。
右目は潰れ、涙のように血を流していた。制服は完全に燃え尽き、下着と黒いタイツのみの格好となっている。ただし、上半身は裸で

出血を起こしてる胸元を晒している。右手には刃を血に染めた剣が握られ、血に濡れた手には真っ赤な球体が握られていた。おそらく、少女の体内から取り出したロストロギアだろう。

「貴女……！」

水銀燈が忌々しげに顔を歪め、射抜くように睨んだ。

受けてセイラは、狂気染みた笑みで答える。

「ふふ……詰めが甘かったわね、水銀燈。でも、貴女の魔法、なかなか良かったわよォ……！　傷を負ったのなんて初めてだから、久々に感じて濡らしちゃったわァ……！」

右目から頬を伝う血に、セイラはケチャップでも舐めるように舌を這わせた。

彼女の尋常じゃ無い狂気に当てられ、完全に腰を抜かしたリンは、金縛りに遭ったように動けなかった。

化け物だ。

かつてない恐怖が、リンの胸中を支配していた。

「さあ、全員揃ったところで、ショーを再開しましょう……！」

迎え撃とうと構える水銀燈とプレシアだが、万全の状態で無い現状では明らかに不利だった。

ソレに対してセイラは、水銀燈の攻撃を防護服のバリアジャケット無しで生身で受けながら、まだ余力を充分に残している。

弱り切った獲物に、セイラが一歩近づいた時だった。何かを感じて、咄嗟に後ろに跳んで一同から距離を取った。

セイラの不可解な行動に、水銀燈達が怪訝に思っていると、後ろから新たな声が上がった。

「そこまでですよ」

新手か、と思い、振り向いた先に居たのは、水銀燈とリンが知っている人物だった。

「春香！」

水銀燈が名前を口にした。

空洞の出入り口に立っていたのは、改運屋の社長・森山春香だった。突き出た大きな胸、白いミニスカートの制服に黒のタイツを履き、手には鞘に収められた刀が握られていた。華奢な体で、ただならぬ威圧感を放っている。

「コレ以上、私（わたくし）の大切な仲間を傷つけるようでしたら、代わりに私がお相手いたしましょう！」

険しい顔を作り、セイラに鋭い眼光を飛ばした。

俺もやる……！　今度こそ逃げないっ……！（後書き）

１０年の時が流れ――

今回の依頼は
ある事件の真相を明らかにせよ

――ようこそ、クズの世界へ――

ターゲットは、巨大組織・時空管理局!?

「来たわね……！　待ってたわよ、名コンビ！」

敵は、狂気の女局員

強大な敵に挑むのは、落ちこぼれコンビ

「始めよう……！」

悪魔が仕掛ける命懸けのゲーム

仕組まれた事件

『聖王争奪戦』

「聖王の器は、私の物ざんす……！」
「俺に出来る事なんて、せいぜい嫌がらせですよ」
「スカリエッティは犯罪者なんですよ！？」
「そうじゃなくて、やり方が無茶苦茶だって言ってるんですよ！」

この闘い、力だけでは、勝てない

管理局の闇を暴き、ゲームに勝利せよ

コンビ　運命改変ゲーム
第三章～欲望の渦～

※内容に変更の可能性有り

また会いましょう……！

静まり返った空洞内に、靴音を鳴らして春香が踏み込んだ。
歩み寄ってくる春香の顔を見て、不覚にもリンは恐怖した。普段は温厚で穏やかな笑みを浮かべてる彼女の顔が、この時は険しい表情をしているのだ。元が綺麗なだけあり、目を鋭くさせた顔は他を圧倒する静かな迫力が感じられる。少なくとも、リンは勿論、そこいらのチンピラ程度なら簡単にビビらす事が出来る。二十歳にも満たない少女が放てる威圧感とは思えない。一体どうすれば、このような業を身に付けられるのだろうか。持っている刀も身の丈１７０以上の長刀で、大きな存在感を放っている。
自然とリン達は、後ずさって春香から距離を離していた。ただならぬ迫力に圧され、側に立っている事さえ出来ない。あの水銀燈でさえ、今の春香に近付こうとはしなかった。
春香が介入した事で、場の空気は明らかに変わった。
歩みを止め、一同の前に立った春香はセイラと対峙する。
厳しい表情の春香とは対照的に、セイラは相変わらず不敵に笑っている。それでも、春香のただならぬ気配を察してか、先ほどから微動だにしない。沈黙を守る二人の間に、緊迫した空気が生まれていた。
後ろで見守ってるリンも、場の息苦しさに渇きを感じて、唾を飲み込んだ。
一分にも満たない短い沈黙を、先に破ったのはセイラだった。手に持っているロストロギアを口に咥え、剣型デバイスを待機させる二つの作業を素早く同時に行い、瞬時に二丁拳銃のデバイスを両手に構え、左の銃口を春香に向けた。そして、銃声と共に火を吹く。十発以上の魔力弾が、春香に迫る。
無防備に構えていた春香だったが、次の瞬間、素早く刀の柄を握り、刃を抜いて銀色の線を宙に引く。目にも止まらぬ早業で、目前

まで迫っていた紅い魔力弾は細かく切り裂かれ、軌道をズラされて春香の周りを通過した。しかも、後ろに下がってるリン達にも被弾させていない。

目の前の光景に、リンとプレシアは目を見開いて驚愕した。何が起こったのか理解出来ず、否、正確には『起きた事を視認出来ず』に言葉を失う。剣で迫る銃弾を斬り捨てた事は解るが、その動きが全く見えないのだ。高ランクの魔導師であるプレシアですら、剣戟の線を追うので限界だった。

一方、春香の早業を見て、セイラは狂気染みた笑みを更に歪めた。まるで、面白い玩具を見つけたような喜びを感じていた。

左手の銃を構えたまま、セイラは射撃を再開した。弾丸の雨は、絶える事なく春香に迫る。

受けて春香も、先ほどと同様に超高速の剣技で弾丸を斬り捨てる。後ろで見守ってるリンとプレシアは、常人離れした春香の早業に見惚れていた。

そして、魔導師であるプレシアは気付いた。春香から、魔力を感じる。それも並の量では無い。推定魔力数値はSランクで、魔導師としての技量は恐らくSSランク以上と見て間違いない。加速魔法を使っての剣戟は、ただ速いだけでなく、狙いも正確で動きに無駄が無い理想的な動作だ。更に驚きなのは、彼女もセイラ同様、カートリッジシステムを搭載してない事だ。

思わぬ実力者を目にして、セイラは喜びを禁じ得なかった。

「いいわァ！　最高よ、貴女ァ！」

左手で弾丸を撃ち続ける一方で、引いている右手の銃に密かに魔力をチャージしていた。

――コレはどうかしら!?

左右の銃を素早く入れ替え、右手の銃口からチャージしていた特大の魔力弾を放つ。

迫りくる魔力弾に対し、春香は刀を鞘に収め、静かに構えて一呼吸した。鋭い目は、目の前の標的を見据えている。

魔刀抜刀術一式・乱閃（まとうばっとうじゅつ らんせん）。

一瞬の出来事だった。抜き身や剣戟を視認させない神速の速さで、眼前の魔力弾を細切れにバラしてしまった。魔力を通す事で摩擦を極限まで軽減させ、高速を超えた神速の鞘疾り（さやばし）で抜き放たれた刃は、剣筋を何閃も描き、魔力弾を斬り捨てたのである。

「うっそォォォォォォ！？」

衝撃の光景に、リンは驚愕の声を上げた。

プレシアも唖然として立ち尽くし、水銀燈も険しい顔で凝視している。

刀を収め、凛とした顔で春香は相手を見据える。

対するセイラは、嬉々とした顔で見据え返していた。

「ふふ……いいわ」

デバイスを待機モードに戻し、口に咥えているロストロギアを手に持つ。

目の前に並ぶ獲物を一瞥して、恐怖を感じさせる笑みを張り付かせた口で言った。

「目的の物は手に入れたから、今日のところはコレで引くわ。ああ、貴女達の事は局には報告しないから、その点は安心してちょうだい。

私、好物はとっておいて最後に食べる方なの。貴女達は、私の獲物……！　愉しむ前に、余計な手出しはさせないわ……！」

足下に紅い魔法陣を展開させ、淡い光に包まれながらセイラは続ける。

「言い忘れるところだったわ。私はセイラ……黒岩セイラよ。また会いましょう……！」

転移魔法で、セイラは一同の前から姿を消した。

狂気が去り、緊張感が解けて場の空気が弛緩する。緊張の糸が緩み、リンは体中の力が抜けるように深い溜め息をついた。アリシアを抱いてるプレシアも、安堵している。

気が抜けた一同に、春香が歩み寄った。

「皆さん、大丈夫ですか？」と尋ねる春香の顔は、普段の穏やかな笑みに戻っていた。

「え？　あ、はい。その、助かりました。ありがとうございます」

「私も礼を言うわ。ありがとう」

リンとプレシアは、春香の柔らかな声に、安心して心の底からの感謝を伝えた。

お礼の言葉を受け取った春香は、水銀燈に顔を向けた。

「水銀燈も無事で何よりです」

「フンッ……余計な事を……」

ぶっきらぼうに返す水銀燈に、春香は笑顔を見せた。彼女の反応には、リン以上に慣れている。

全員の無事を確認して、春香は安心した。

生と死の狭間の極限状態から解放され、安心していたリンは、ハッと思い出す。

「あっ！　そうだ、あの子は！？」

慌ててリンは声を上げ、セイラに斬られた少女の方を見た。
しかし、視線を移したリンは驚愕に目を見開く。

「え、えええええええええええええ!?」

声を上げるリンの前で、なんと少女は無傷で座っていた。
セイラに斬られた傷は、綺麗に塞がって跡すら残っていない。まるで、魔法のように消えていた。
訳が解らず、リンは混乱する。

「え？　えっ……！？　何、何!?　どういう事!?」

怪現象とも呼べる少女の復活に取り乱すリンに、春香が説明した。

「それは、この子の体の中に埋め込まれているロストロギアの効力です」
「え!?　でも、ロストロギアは、あのセイラって女が奪ったんじゃ……」
「彼女が奪い去ったのは、『不老のロストロギア』であり、『不死のロストロギア』ではありません。片方は、この子の体内に残ったままです。つまり、不老不死は二つのロストロギアの効果で成り立っていたんです。そうですね？」

最後に春香が確認すると、少女はコクリと頷いた。
ハア、とリンは阿呆のような返事をするだけで、水銀燈とプレシアも唖然としていた。
しかし、腑に落ちないと言った様子で、プレシアが訊いた。

「だけど貴女、どうしてその事に気付いたの？」
「この場に着いた時、真っ先にこの子の容態を確かめました。その

時、既に傷が塞がりつつあり、出血も収まってきてました。セイラの手にロストロギアが一つある事を見て、もしかしたら不老不死は二つで一つの役割で成り立ってるのでは、と思ったのです」

説明を聞いたプレシアは、納得と同時に彼女の冷静で鋭い観察眼に脱帽していた。

その時、腕の中から小さな呻き声が聞こえた。

プレシアは勿論、声を聞いた全員が視線をプレシアの腕に抱えられてる少女に向けられた。全員が注視する中、抱えられてる少女は小さな身じろぎをした。プレシアの目が大きく見開かれる。

濡れた瞳で見つめ、プレシアが声をかける。

「アリシア……アリシア……！」

「ん……」

小さな声を漏らし、名を呼ばれたアリシアは薄らと目を開けた。寝起きの少女は、目の前にある母親の顔を見て呟いた。

「お、母さん……？」

「あ……あぁああ……！」

感情を抑えていた壁は決壊し、プレシアの目から涙が流れる。

「アリシアァァァァ！」

「きゃっ！　お、お母さん？　どうしたの？」

泣きながら抱き締めてきたプレシアの行為に、アリシアは困惑する。

「……生き返った！」

奇跡の瞬間を目にして、狼狽しながらリンは呟いた。
不死の身となった少女の生き血を得て、アリシアは奇跡の蘇生を果たしたのであった。

「アリシア！　アリシア！」
「お母さん、痛いよ！　それに、何で泣いてるの？」

状況を理解してない幼い娘を、プレシアは力一杯抱き締め続ける。
二度と手放さない意思を表すように、力強く。
感動的な場面に微笑んでると、春香が労いの言葉をかけた。

「リンさん、水銀燈。本当にお疲れ様でした」
「ああ、いえ……」

美少女の春香に労われて、喜んだのもつかの間、一変してリンは声を上げた。

「って、森山さん、いつから洞窟（ココ）に！？」
「手が空いたもので、こっそりと様子を見に来たんです。まさか、あのような危険な方が居たとは思いもしませんでした。ですが、駆け付けるのが間に合って良かったです」
「そ、そうなんですか……」

春香がやってきた事については、とりあえず納得した。
そしてもう一つ、訊かずにはいられない事があった。

「っていうか、森山さん魔導師だったんですか！？」
「はい。あの……もしかして、まだお教えしてませんでしたか？」
「全っ然、聞いてませんよ！　森山さんが魔導師で、あんなに強い

事も！」

春香は目を丸くして、口に手を添えた。

「あら」

あら、じゃねーよ、とリンは思った。

騒がしい様子を一人静かに眺めている水銀燈は、気が抜けたように溜め息をついた。

＊

洞窟の少女の生き血を得た死体は、生き返る事が出来る。また、重い病に侵された者が生き血を得れば、病は癒され、体も良好な健康状態に戻る。但し、ロストロギアを所有してる少女のような、不死の存在になる事は無い。不死の権利は、あくまで所有者にのみ許されるのだ。少女の生き血を得て、プレシアもまた、命を救われた。

少女は、春香が引き取る事となった。また何時、セイラに狙われるか解らない。それに、セイラでなくても、ロストロギアを狙う次元犯罪者は沢山居る。春香の申し出を、少女は縦に頷いて答えた。

そして、テスタロッサ親子は、日本で暮らす事になった。戸籍等の居住の問題は、春香が解決してくれるそうだ。

これから日本に住む二人に、リンは銀行のカードを差し出して言った。

「コレ、使って下さい。ちょっと使いましたけど、まだ九千万くらいは残ってますから」

リンの言葉に、プレシアは目を大きく見開いた。

「でも、コレは貴方の……」
「いいんですよ。デカ過ぎる金額ですから、ちょうど持て余してたところなんです。これから、何かとお金が必要になると思いますから、遠慮なくどうぞ。いいよね、水銀燈？」
「勝手にすればぁ」
あまり金を必要としない水銀燈は、素っ気なく答えた。
「まあ、僕もたまにお金を降ろしてもらいますけど」
「リン……ありがとう」
礼を言うプレシアの顔には、相手を威圧する刺々しさは無く、穏やかな笑顔を浮かべていた。初めて見る、母親としての優しさと温かさが現れた表情だ。
美人のプレシアに礼を言われ、リンは赤い顔を逸らし、照れ隠しするように頭を掻いた。
ソレを見て、水銀燈はムッとした顔でリンの後頭部を蹴った。
「痛(いて)っ！　ちょっ……水銀燈、何すんの！？」
「おばかさぁん、おばかさぁん！　本当におばかさぁん！」
「ええ！？　俺、何かした？　何で怒ってるの！？」
二人の様子を、プレシア達は微笑ましく眺めていた。

改運屋に入り、水銀燈とコンビを組んで見事に依頼をこなしたリン。

しかし、本当の闘いは、まだまだこれからであった。

「セイラ様！」

「セイラ様、そのお顔どうされたんですか！？」

「大丈夫ですか！？」

「ええ、大丈夫よ。休暇中に、ちょっと怪我をしただけだから。心配してくれてありがとう」

手に入れたのは、『不老のロストロギア』だけだったけど、コレで充分だわ。

しばらく時間を置いて、愉しみは後に取っておきましょう。

ふふ、その間に、あの二人がどこまで成長するのか、今から愉しみだわァ。

そして、リンはこれからも水銀燈と共に歩む。歩み続ける。
セイラとの決着をつける為に。
自分の人生を、自分自身を変える為に。

リン・水銀燈。
報酬総額・約二億九千万円。

第二章～生還の穴～・完。

＊

予告編。

「貴女達は、私の獲物……！　また会いましょう……！」

あれから約１０年――。

「どうすればいい？　どうすれば……？」
「ああ、ちくしょう！　どうすりゃあいいんだ!?」
「俺もやる……！　今度こそ逃げないっ……！」

――ようこそ、クズの世界へ――。

改運屋・リン。３３歳。
水銀燈、健在。
今度の依頼は、ある事件の真相を明らかにせよ。

舞台は、魔法の世界・ミッドチルダ。
ターゲットは、巨大組織・時空管理局。
動き出す、運命改変ゲーム。

「会いたかったわよォ！」
「始めよう……！」

悪魔が仕掛けるサバイバルゲーム。

仕組まれた誘拐事件
『逃走』

「嵌められたっ……！」

悪魔との最終戦
『黒岩セイラ』

「彼女達を助けたい？」

この闘い、力だけでは、勝てない。

コンビ　運命改変ゲーム
第三章～欲望の渦～

※内容に変更有り。

人物紹介2よぉ

森山春香

性別は女で、リンと水銀燈が属してる改運屋の若き社長。

年齢は十代後半で、金持ちの娘。容姿端麗で抜群のスタイルを誇り、言葉遣いも良く、普段は穏やかな性格をしている。しかし、仲間であるリン達を殺そうとしたセイラを前に、他を威圧させる怒りを露にして感情的な面も見せている。

一見しただけでは普通の令嬢だが、実は剣術に長けた魔導師である事がセイラとの交戦で明らかになった。刀型のアームドデバイスを操り、魔力によって摩擦を軽減させた鞘疾りで神速の域にまで昇華させた『魔刀抜刀術』の使い手で、並の魔導師を凌駕する実力を発揮する。飛行魔法が使えるかは不明。魔導師ランクは、推定ＳＳランク。

水銀燈を改運屋に誘ったようだが、リンカーコアを宿す魔導師の為、彼女と契約は結んでいなかった。後にリンと契約した事を知り、二人の仲が上手くいく事を祈り、応援している。メールで『世界の意思』からの依頼を知らせるが、水銀燈にたわいもない話題を振ったりと彼女なりのコミュニケーションを取っている。

セイラ（黒岩聖麗）

次元世界を管理する巨大組織・時空管理局の局員。性別は女。年齢は、春香と同年齢と思われる。リン達の最大の宿敵。

綺麗な容姿に、普段は穏やかな面をしているらしく、局内では多くの女性局員から慕われている模様。その本性は、命のやりとりである殺し合いを愉しむ歪んだ狂気に満ちた危険人物である。興奮が昂ると、舌舐めずりをする癖がある。

管理局内では、唯一の異例の『無階級局員』。名前の通り階級の

肩書きは無いが、その権限は局内トップと同等である。階級に縛られず、独自の判断で行動する事が出来る。本来ならば局員に義務付けられてるデバイスの非殺傷設定も解除して、殺傷力、物理ダメージを常に与えられる状態にしている。彼女が『無階級局員』に就いてる理由は、おそらく彼女の今までの功績と秀でた戦闘能力にあると思われる。ただし、休暇等の局を離れる場合の申請は他の局員と同じで行うようである。

局員としても異例だが、更に魔導師としても他の魔導師と一線を画している。本来なら一つしか所有していないデバイスを、セイラは三つ以上所有している。デバイスチェンジの動作は速く、隙が無い。加えて技量に偏りが無く、全ての所有デバイスを使いこなしている。防護服であるバリアジャケット無しで水銀燈がトドメに放った魔力球を受けても、多少のダメージで済む程の耐久力も備えている。それでも右目を負傷して、帰還後は黒い眼帯をしている。魔導師ランクは、推定ＳＳランク。

リンと水銀燈の成長と春香の強さに興味を抱き、いつか再戦する事を愉しみにしている。

……馴れ合いはしないわ

テスタロッサ親子の救済依頼を果たして、リンと水銀燈は平和な時間を過ごしていた。

洞窟内で死闘を演じた分、平穏な日常ではスッカリだらけ切っていた。

前回の一件で、リンは痛感した。漫画のような常識外れの展開は、あくまでフィクションだからこそ面白いのだ。ガキの頃はドラ●ンボールみたいな刺激的な冒険をしてみたいと思ってたし、今でも普段の日常は酷く退屈な時間だと思っている。しかし、実際に自分が、非日常的世界に入り込んだら、笑い話にもならない。本当に命懸けで、刺激的な状況を愉しむ余裕なんか、一ミクロンも無い。

つまらない日常だからこそ、非常識な展開の漫画を愉しめるのだ。退屈な平穏平和万歳。そう思い、部屋で水銀燈とゲームの対戦をしながら、リンが今の時間を噛み締めていた時だった。

突然、春香から誘いの電話を受けた。もし時間の都合が良ければ家に遊びに来ませんか、と言う内容だった。

当然、美少女からの誘いをリンが断るハズも無く、行く事を約束した。

目の前に居た水銀燈は、答える際にデレデレしていたリンの顔を不機嫌に睨んでいた。

そして、誘いを受けた翌日。都内某所。

「わお……！」

顔を上げてるリンは、目を見開いて圧巻した。

目の前に黒い鉄格子の門が聳え立っており、横には侵入者を拒む

高い塀が遠くまで伸びている。立派な門と塀を見ただけでも、相当な金持ちである印象を受ける。

更に圧巻だったのは、門の先だった。リン達の姿を門に設置されてる監視カメラで確認して、鉄格子が自動的に開かれた。足を踏み入れた瞬間、リンは敷地の広さに驚く。とにかく広い。先に見える屋敷まで真っ直ぐに伸びた道以外は、草木によって緑一色に染まっていた。その緑が、どこまでも続いている。東京ドーム何個分だ？

と言う疑問が頭を過った。

胸ポケットに入ってる水銀燈は、以前にも訪れた事があるのか、驚いた様子は無い。

驚きつつも無駄に広いな、と思いながらリンは敷地を進む。

遠くで小さく見えていた屋敷が、近付くにつれて大きくなってきた。そして、玄関前まで着くと、予想以上の大きさに口がポカンと開く。屋根の色は黒く、逆に壁は白一色で外装はシンプルながら、その高さと幅の広さで大きな存在感を放っている。

これまた大きな玄関が開くと、中から春香が笑顔を浮かべて迎えて来た。

「ようこそいらっしゃいました。靴はそのままで大丈夫ですので、さあ、中へどうぞ」

「は、はあ……！　お、おじゃまします」

今更ながらリンは、自分がとんでもなく場違いな所に来た事を自覚する。

屋敷に入ると、緊張感が増して足下がグラつくような錯覚まで感じた。中には大きなシャンデリア、高そうな銅像や額縁に飾られた絵、廊下に並ぶ多くの部屋の扉、所々で雑用の仕事をしている使用人達の姿、完璧に金持ちの屋敷である。

屋敷の中を案内しながら春香は、家や自分の事を語り出した。森山家は、かなりの財力を誇る財閥であり、若き石油王として成功し

た父親の賢蔵が長に就いている。今では石油のみならず、他の分野も手広くこなして更に財力を膨らませて、その勢いは止まる事を知らない。

そんな父親が石油王として成功するキッカケとなったのは、春香の母親のレイナとの出逢いだった。実はレイナは、ミッドチルダでフリーとして活躍していた凄腕の魔導師だったのだ。地球の日本生まれの彼女が、たまたま休みに戻ってきた時に、賢蔵と出逢ったのだ。賢蔵は彼女に一目惚れして、即プロポーズを実行した。いきなりのプロポーズに最初は戸惑ったレイナだったが、直接告白を受けたのは初めてだった事もあり、彼の気持ちに応えた。それから賢蔵は、死ぬ気で頑張って石油王として成功した。

レイナはミッドから日本に居住を移して、賢蔵と一緒になった。そして、二人の間に生まれたのが春香だ。魔導師の才能を継いでる事を知ったレイナは、好奇心旺盛な我が子に魔法を教えた。最初は護身術程度のつもりだったが、呑み込みの早さと高い潜在能力から次第に本格的な魔法まで覚えていき、ついにはレイナの愛刀デバイスを継ぐまでに成長した。

話を聞いたリンは、どうして春香が魔法を使えるのか納得した。

そこで前を歩いていた春香が足を止め、振り返った。

「さて、私の話はこれくらいにして、今日は皆さんで楽しみましょう！　ふふ、男の方を家に招き入れたのは初めてなので、少し緊張してます。それと実は、先にテスタロッサさん達も来てるんですよ」

「え？」

聞いてないよ、森山さん。

＊

まだまだ寒い季節だと言うのに、リンは上半身を裸にして、下は水着に履き換えていた。

水着に着替える理由など、一つしかない。泳ぐ為だ。春香の案内で男子更衣室に入ったリンは、何十種類もある水着を見て目を丸くした。この日の為に、春香が用意した物らしい。無駄に種類が多くて、コレが金持ちの無駄な財力かと唖然となる。数ある水着の中から、リンは青いトランクス型の水着を選んだ。この種類が一番無難なトコだろう。ただ、怠けた人生を送ってきた代償の腹のたるみが、少し気になる。

着替えを済ませたリンは、プールに通じる扉を開けた。スライド式の扉の向こうには、広い空間が広がっていた。天井も高く、壁はガラス張りになって庭の景色が見えて、開放的な空間になっている。

場に設置されているプールには、既に水が張ってあって先客の姿があった。

「あら、リンじゃない」

「あっ、リンお兄さん！」

プールに入っているのは、プレシアとアリシアのテスタロッサ親子だった。

真っ白のビキニを着たプレシアは、モデル顔負けな抜群のプロポーションを惜しみなく晒している。水着の色は白と落ち着いた印象を受けるも、熟された身体が大人の魅力を醸し出している。それに最初に会った時に纏っていた刺々しさは完全に消え、穏やかな笑顔で娘と遊水していた。

アリシアは、フリルの付いた水色の水着で、可愛らしい恰好をしている。母親と一緒に、浮輪を使って水に浮いている。

ちなみに、プールに張ってあるのは温水で、室内の温度は暖かく設定されてるので、冷える心配は無い。

「あはは。どうも」

軽く挨拶をするリンの目は、自然とある物に向けられていた。

男なら誰しも、海やプールで一回は確認する物――そう、胸である。この中で男の目を引く胸の持ち主は、プレシアしか居ない。プレシアの胸は、巨乳を通り越して爆乳の域に達してると言っても過言ではない。動くたびに揺れる胸が、水面に波紋を広げる。それに外見の美しさでも、プレシアは常人と一線を画している。聞いた話では年齢は四十代らしいが、とてもそうは見えない若々しい顔と肌をしている。ミッドチルダの熟女は化け物か？　と某少佐の台詞パロディが頭に浮かんだ。

ふとプレシアは、リンの視線に気付き、頬を少し赤くして胸元を手で隠した。

「ちょっ……ちょっとリン、ドコを見ているの？」

「え！？　あ、ああ……す、すいません！」

慌ててリンは、赤くした顔をプレシアから逸らした。

すると、逸らした先に、もう一人女の子が居た。例の洞窟で春香が保護した、不老不死の少女だ。年はアリシアより少し上と言った感じだ。胸は控え目だが、小柄の少女にピンク色のスクール水着がよく似合う。

少女と目が合い、リンは頭を掻きながら笑って挨拶する。

「ええっと……こんにちは」

リンの挨拶に対して、少女は無言で小さく頷いた。初めて会った時と変わらず、言葉での返答をしてくれない。

嫌われてるのかな？　とリンは少し悲しく思った。

リンが軽く落ち込んでると、プール内のアリシアが手を振りながら声を上げた。

「蓮花(れんか)ちゃ～ん！　一緒に遊ぼう！」

アリシアの誘いに、少女はコクリと頷き、飛び込み台から降りてプールに入った。

その時、ふとリンは引っ掛かりを憶えた。

「蓮花？」

「私が付けました、その子の名前です」

怪訝に思っていると後ろから声が聞こえ、リンは振り返った。

その先には、二人の美少女が居た。

ただ立っているだけで、一枚の画になるような魅惑的な美少女、春香と水銀燈だ。

黒のビキニを着ている春香は、プレシアに勝るとも劣らない抜群のスタイルをしている。普段の白とは真逆の色を身に付け、清楚なイメージとは違った男の本能を刺激する色っぽさを纏っている。

その彼女の横に浮いてる水銀燈は、紺色のスクール水着を着用している。小柄な彼女にピッタリで、その趣のマニアが興奮する事間違いなし。胸元の名札には、平仮名で『すいぎんとう』と書かれてある。

二人とも、それぞれの魅力を出していた。

目の前の光景に、思わずリンは口元がニヤついてしまう。

そんなリンの反応に気付いてないのか、春香が続きを口にした。

「名前が無いと言うのは、何かと不便かと思いまして、勝手ながら私が付けさせてもらいました。本人も気に入っていただけたご様子でしたので、私も嬉しくなりました」

「そ、そうなんですか……」

話を聞きつつも、リンの視線は春香の胸をチラ見していた。

童貞野郎のリンにとって、プレシアや目の前の春香の爆乳は殺人的だった。テレビのバラエティー番組でたまに見かけるグラビアアイドルの物と比べても、恐らく最低でもEカップはあると睨む。

するとリンのソワソワした様子に気付き、春香が歩み寄ってきた。

「どうかされましたか？」

「えっ！？　あっ、いや……」

言葉を濁して、リンは慌てて視線を逸らした。

近付いてくる春香の胸が、歩くたびに上下に揺れるのだ。擬音で現すなら、『ボインボイン』ではなく『バインバイン』の領域である。今まで女に飢えてきたリンが、その爆乳に注目し、興奮しない訳が無い。

赤くなった顔とリンが向けていた視線を辿って、春香は合点がいった。恥ずかしそうに頬を染め、少し怒った口調で注意する。

「リンさんったら、慎みが足りませんよ」

「す……すみません」

リンが謝ると、今度は口調を和らげて言った。

「それに、水銀燈と言う娘がいながら、他の女の子の胸ばかり眺めているのも感心しませんよ」

「あっ……！」

言われてリンは、恐る恐る顔を動かした。

春香の後ろで、水銀燈は不機嫌そうに眉をひそめていた。

ヤバッ。興奮は一気に冷め、リンは苦笑いを顔に貼る。
水銀燈の事を任され、春香は先にプール内のプレシア達と合流した。
残されたリンは、気まずい空気の中で水銀燈と向き合う。

「あ～、水銀燈……怒ってる？」
「別に」

恐る恐る尋ねるリンに、水銀燈は視線を逸らして素っ気なく答える。
プールで遊んでる春香とプレシアの揺れる胸と自分の物を、リンに気付かれないように一瞬だけ見比べ、今まで味わった事がない“女の敗北感”を抱く。

「私なんか放っておいて、貴方もあの仲良し集団の輪に入ればいいじゃない」
「いや～」

困った笑顔で、リンは頭を掻いた。
ぶっちゃけ、男としてプールで戯れてる美人の輪に入りたい気持ちは、当然ある。
しかし、水銀燈をこのままにしておく訳にもいかない。自分のスケベ心で不機嫌にしたのなら、尚更だ。

「あのさ、水銀燈……そりゃあ確かに、テスタロッサさんや森山さんの、その……胸を見てたけど、大抵の男なら誰だって見るって。大きな胸を見て、その……嬉しがったけど、でも、水銀燈が好きって気持ちは変わらないから。それに、水銀燈だって水着似合ってて可愛いよ。お世辞抜きの本音で」

リンが言うと、水銀燈は逸らしていた顔の向きを僅かに戻した。
真っ直ぐに見つめてくるリンの顔を、黙って見据える。この男は、邪な思いはすれど、上手い嘘をつける人間ではない。それに、今のは下手な嘘とも思えない。
ややあって、水銀燈の不機嫌な顔が普段のクールな表情に戻った。
「何必死になっちゃってるの？　バッカみたい」
「う……」

ガックリと項垂れるリン。
落ち込むリンの前から、溜め息が聞こえた。
「解ったわよ。……貴方の言葉、信じてあげるわ」
「水銀燈……！」

頭を上げたリンは、嬉しそうに笑っていた。
彼の笑顔を見て、水銀燈は頬を少し赤くして、また顔を逸らす。
「ホラッ、許してあげたんだから、さっさと行ってきなさい」
「え？　水銀燈も一緒に行こうよ」
「……馴れ合いはしないわ」

ちょこんと床に座り込み、水銀燈はプールから目を逸らしてガラス張りの壁の外を見る。
別にプレシア達が嫌いなのではなく、『馴れ合い』と言う行為を避けてるのだ。他人と接するのは面倒な事だから。それに、春香やリンに出逢うまでは、ずっと人間を嫌って独りで生きてきた。故に、他人と接する術を知らず、苦手としている。
一緒に水遊びする事を拒む水銀燈だが、リンは少し粘ってみた。

「折角水着に着替えたんだから、入ろうよ」
「コレは、春香が強引に着せたのよ。それに、私が居なくても楽しめるでしょう？」
「水銀燈と一緒に遊びたいんだよ。ダメ？」

一緒に遊びたいと聞いて、水銀燈は逡巡した。
以前の水銀燈だったら、ココで断っていただろう。人間と馴れ合うなど、考えただけで不快になる。
しかし、今は違った。断る事を迷い、悩んでいた。
リンの顔を一瞥して、仕方ないと言う風に答えた。

「……今回だけよ」
「よっしゃあ！」

水銀燈の承諾を得て、リンはテンション高く声を上げた。
やはり、好きな女の子と遊べると嬉しいものだ。
二人はプールに入り、遊びに興じてる皆に混ざった。最初こそつまらなそうにしていた水銀燈だったが、アリシアと蓮花の子供コンビに水をかけられ、ムキになって反撃に出た。
やったわねぇ！　蓮花ちゃん、向こうに回って！　無駄よ！　おまっ……翼は卑怯だろ！　あらあら。ポロリッ。きゃあああああ！
テ、テスタロッサさん!?　みみ、見ないでちょうだい！
プール内は、一気にカオス・オブ・バトルフィールドと化した。
巻き込まれて大人達が大変な被害に遭ってる一方で、水銀燈は子供コンビとの交戦を続けている。内容こそ激しいが、ムキになってやり返す様は、普通の子供のように見えた。
そしてハーレムの中で、リア充は爆発――いや、感電した。

コレが私の答えよぉ

リンは掛け布団を被り、ベッドで横になっていた。
疲れた、と布団の中でリンは思った。
春香の屋敷で、彼女達と遊んだその日の夜だ。最初は、夢にまで見たハーレムを満喫出来ると思っていたが、現実は厳しかった。全員が揃ってプールに入った途端、水銀燈とアリシア達が水かけ合いを始め、ムキになった水銀燈が翼まで用いて反撃に転じて、周囲に被害を広めた。その結果、プレシアがプールイベントの『ポロリ』を起こして、ソレを目撃したリンは電撃を受けた。
正直、散々な目に遭って仕事をした訳でも無いのに、物凄く疲れた。
しかし、悪い事ばかりでもない。まず、春香やプレシアの悩殺ボディを拝め、プレシアのポロリまで見る事も出来た。それに、貴重な水銀燈のスク水姿も見れた。
そして何より、楽しかった。自分以外は皆女性で緊張はしていたが、大勢で騒いだのは久しぶりだった。また皆で遊びたい、と心の底から思った。
ただ、一つだけ気になる事が出来た。
ソレは、水銀燈が自分の事をどう思っているか、だ。自分が水銀燈を好きと言う気持ちは、契約を結んだ時に伝えている。だが、水銀燈からの明確な返事はまだ貰っていない。その気があるのか無いのか、イマイチ判別出来ないのだ。
既に告白を済ませているリンとしては、そろそろ水銀燈の気持ちが知りたいところだった。
今、リンの後ろでは水銀燈が背中を向けて横になっている。訊くなら早い方がいい。
しばし迷っていたが、リンは意を決して訊く事にした。

「水銀燈……起きてる？」
「何……？」

すぐに背中から、水銀燈の声が返ってきた。

「あのさ、一つ訊いてもいい？」
「だから何？　眠いんだから、早くしてちょうだい」
「あ、ああ……」

少し間を開けてから、リンは尋ねた。

「水銀燈さ……その、俺の事どう思ってるの？」

今度は、すぐに答えは来なかった。
暗い部屋は静まり返り、呼吸音だけが澄まされた耳に聞こえてくる。待っている間、心臓がドキドキと高鳴ってるのが嫌でも分かった。
早く答えが知りたいリンにとって、『待つ』と言う行為は拷問に等しい気分だった。
緊張のあまり、手には汗が滲んでいた。
まだかまだかと答えを待ち侘びていると、急に後ろからグイッと肩を引っ張られ、仰向けにされた。何事かと動転するリンだったが、

「んっ……！？」

水銀燈の唇で、口を塞がれた。
驚いて目を見開くリンの体に、水銀燈は馬乗りなっている。両手を彼の頬に添えて、動けないように固定していた。
それは、紛れもないキスだった。

「ん……ふぅ……！」

口の中で、水銀燈は巧みな舌遣いで積極的に責めてくる。
舌で舌を舐めまわし、時に絡めて口の隙間から唾液の音をいやらしく鳴らす。初めてのディープなキスに、リンの下半身はしっかり反応していた。興奮が高まって、顔も熱くなり、真っ赤になる。
ようやく唇を離した水銀燈は、小柄な少女とは思えない妖艶な笑みを浮かべていた。

「コレが私の答えよぉ」
「す、水銀燈……！」

急な展開に、リンは半ば唖然となる。
見下ろす水銀燈は、目を細めて意地悪な笑みに変えた。

「うふふ。人形相手に興奮するなんて、貴方って本当に変態なおばかさんねぇ」

ズルイな、とリンは思った。
勘違いでなければ、今ので水銀燈の気持ちは解った。しかし、あくまで行動で示すだけで、決して言葉で伝えてくる気は無いようだ。
しかし、リンはそんな水銀燈を好きになったのだ。
それに、返答の仕方はどうあれ、水銀燈は自分の気持ちに応え、受け入れてくれた。これ程嬉しい事は無い。自然とリンの顔は、笑顔に変わっていった。

「水銀燈！」

嬉しい気持ちを抑え切れず、馬乗りになってる水銀燈を抱き締めた。

急に抱き締められ、最初は驚いた水銀燈だったが、すぐにいつもの顔に戻った。

「そんなに慌てなくても、ちゃんと可愛がってあげるわぁ。その代わり、今夜は寝かせない……！」

魅惑的な瞳で迫られ、リンはゾクゾクした。

今日の夜は、長く忘れられない一時になりそうだ。

舞台は私が用意してあげる……最高のゲームを愉しみましょう……！

その三人は、数多に存在する次元世界を維持・管理している巨大組織のトップだった。

凶悪化していく犯罪を排除する為に、自分達が選んだ優れた指導者と強大な力を求めていた。その為の準備は、着々と進んでいる。

組織の身内からも多少の犠牲者が出たが、崇高なる目的の前では些事に過ぎない。

その三人は、自分達が求める理想世界の創造を願っていた。

その人物は、管理局に追われる身の科学者だった。

自分の中にある夢は刷り込まれたモノで、態よく利用されている事も知っている。

しかし、その実、彼は自分を利用してる者達を逆に利用していた。

自分の研究の為ならば、例え創造主だろうと何だろうと利用する。

その人物は、自身の底無しの欲望を満たす為に動いていた。

その人物は、闇の商人だった。

利益を得る為ならば、人の命を奪う事さえ厭わない。
今日はどのように儲けるか考えていたところに、部下からある報告を受ける。最初はガセネタだと突き放し、相手にもしなかった。しかし、もし報告の内容が事実なら、とんでもない大金を得る事が出来るかもしれない。商人としての血が騒いだ。

その人物は、金儲けの為に動き出そうとしていた。

彼女達は、管理局の魔導師だった。
その内の一人は、自分の部隊を持つ事を夢見ていた。
ある日、親友の能力で不吉な預言が現れた事を知らされる。未来を変える為に、一緒に闘ってきた親友の力を借りて、新部隊を設立させた。
彼女達は、夢と未来の為に動いていた。

＊

時空管理局本局。
建物の中で、一つだけ薄暗い部屋があった。部屋の中には、複数の人影が並んでいる。青い制服を身に纏った、管理局の女性局員だ。微動だにしない彼女達の前に、別の人影が二つ立っていた。
僅かな明かりに照らされ、見える顔は黒岩セイラだった。過去に水銀燈との闘いで潰された右目には、黒い眼帯を付けて隠している。

そして、あれから十年経っているにも関わらず、その外見は変わっていない。蓮花から奪った、不老のロストロギアの効果で若い姿を維持しているのだ。

そんな彼女の前には、一人の女性局員が向かい合う形で立っていた。目の前のセイラに見つめられ、頬を赤らめている。

セイラは、ソッと女局員の首に手を添え、妖しい笑みを浮かべて沈黙を破った。

「貴女……『王』とは何か、答えなさい」

「は、はい！　王とは、世界の頂点に立ち、支配する者です……！」

セイラの妖艶な雰囲気に捕われ、興奮と緊張が混ざった状態で女局員は答えた。

「残念……少し違うわ」

「ぐぅ……！」

突然、女局員は呻き声を上げた。

苦しげな表情をしている彼女の首を、セイラの手が握り締めているのだ。徐々に首を絞める手に力を加えていき、気道を圧迫させていく。

「あっ……くぅ……かはぁ……！　セ、イラ……様ァ……！」

首を絞められてる女局員は、しかし抵抗をしない。

されるがままに、首を絞められている彼女の顔は、窒息の苦しみ以外の感情が表れていた。

快楽。慕っているセイラに首を絞められ、性行為にも似た快感を味わっていた。苦しそうに身をよじり、空気を求めるように舌を突き出し、顔は恍惚な表情をしている。彼女にとって、至福の時間だ

った。

苦しみ、歪んだ快楽に堕ちていく女局員の様子を見て、セイラもまた興奮していた。

「『王』と言うのは、“世界を支配する者”では無いのよ。人を、“人の命を支配する者”……！

自分以外の全ての人間の生殺与奪を握り、命を踏み潰し、弄ぶ事を愉しむ者……！　圧倒的な力を持って、人間の命を虫けらのように蹂躙する事を愉しめる者……！　それこそが、『真の王』なのよォ……！

そう……最高評議会でも、聖王でも、時空管理局でも無い……私が、『真の王』……！」

興奮が昂り、舌舐めずりをするセイラの前では、いまだ女局員が首を絞められていた。

「うぅ……うぅう……！　セ、イ、ラ、様ぁ……イ……くぅ……！　うぇ、えっ……あおう……あっ、死ん、じゃう……！」

苦しみと快感を訴える女局員は、意識が朦朧としていき、一杯に開いた目からは涙を流す。舌を突き出す口の端からは、涎を滴らせていた。

しかし、セイラは首を絞める手の力を緩めない。彼女の顔は苦しんでる女局員に向いているが、その目には別の人物が映っていた。

「愉しみだわァ……！　早く……早く来なさい、リン、水銀燈……！　舞台は私が用意してあげる……最高の殺し合い（ゲーム）を愉しみましょう……！」

抑え切れない興奮に、セイラは女局員を絞め落とした。

黒岩セイラは、リン達との再戦を望んでいた。
二人が、必ずミッドチルダにやってくると確信して。

――ようこそ、クズの世界へ――

そんな事をしても無駄よ。醜悪な人形は、早くジャンクになりなさい

日々、怠惰で自堕落な生活を送っていた平凡な男・リン。
そのリンは、ある日突然、妙な仕事を請け負う事になった。夢で会社登録をしたのが原因だった。
入社したのは、『世界の意思』からの依頼を受けて運命を変える『改運屋』。
リンは、非常識な世界へと誘われる。
魔法、魔導師、ロストロギア――何の取り柄も無いリンは、土壇場の度胸と閃きを駆使する。
そして、パートナーの水銀燈と共に幾多の困難を乗り越え、ついに二人は相対した。
正義の中に巣食う魔王――時空管理局の権力者・黒岩セイラ。
だが、しかし、二人の策と魔法は、常軌を逸したセイラには通用しなかった。
リンと水銀燈は、王との圧倒的実力差を思い知らされる。
こうして、二人の決着は持ち越しとなった。
二人の可能性に懸けられ。

そして、時は流れ――。

＊

暗い室内に、二つの寝息がたっていた。
一つのベッドに、二人の人物が横になって寝ている。掛け布団を被り、眠りについてる男は両腕で小柄な少女を抱いていた。黒のベビードールに、長い銀髪がよく映えている美少女だ。小さな寝息を

立てて、人形のような綺麗な寝顔をしている。
そんな彼女を抱いて寝ているのは、見るからに冴えない地味な男だった。腕の中で眠ってる可憐な少女と一緒に居ると、酷く不釣り合いに見える。
銀髪の少女の名は水銀燈と言い、傍で寝ているリンのパートナーである。
部屋の静寂を破ったのは、枕元に置いてある一つの携帯電話だった。バイブ機能が働き、伝わってくる振動に目を覚ましたのは水銀燈。眠い目を擦り、おもむろに体を起こして携帯電話を手に取る。折り畳み式の機体を開き、電話に出た。

「……もしもし」
『おはようございます、水銀燈。春香です』

電話の相手は、上司だった。
時計を見ると、朝の六時を過ぎたところだ。半眼で眠い顔をして、水銀燈は物憂い感じに答えた。

「こんなに朝早くから、何の用かしらぁ……？」
『すみません。実は、先ほど仕事の依頼がきましたので、その連絡を』
「分かったわぁ。この子を起こしたら、そっちに行くわ」

そこで電話を切り、欠伸を一つかいた。
肩にかかってる銀髪をかきあげ、乱れた髪型を整えた。眠気が覚めていき、チラッと視線を向ける。隣では、暢気ないびきをかいて眠っているリンの間抜けな寝顔があった。
おばかな寝顔、と思いながら水銀燈は顔を近付けた。

「起きなさぁい。仕事よ」

耳元で囁くが、リンは起きる様子が無い。
少しイラつき、水銀燈の表情がムッとなる。彼女の優しさも一回までで、強硬手段に出た。

「起きなさぁい！」
「ぐべっ！？」

顔に強い衝撃を受け、リンは呻き声を上げた。
寝惚けた頭が、何事かと混乱する。暗さに目が慣れてくると、素足で自分の顔を踏んづけてる水銀燈の姿だった。
リンの顔を踏んだまま、水銀燈は言った。

「やっと起きたわねぇ」
「ちょっ……水銀燈、何してるの？」
「さっき、春香から仕事の連絡が来たわ。屋敷に行くから、さっさと支度するわよぉ」
「分かった。分かったから、その足をどけてくれ」

水銀燈が足をどけて、寝起きのリンは気だるげに体を起こした。
リン、３３歳。
水銀燈、健在。
十年経った現在の二人の報酬総額・１９億３千万円。

＊

森山家の屋敷にある一室。
天井には豪華なシャンデリアが吊るされ、室内を明るく照らして

いる。部屋の中に置かれているタンスやテーブル、置物はどれも高価な高級品ばかり。だが、その中に混じって、普通の店で売っていそうな動物のぬいぐるみが何体か棚の上に並べられている。ゴージャスな感じと共に、女の子らしい感もあった。

大きな窓から注がれる太陽の光を背に受ける形で、この部屋の主、森山春香がデスクに座っていた。

部屋に訪れたリンと水銀燈を、春香は笑顔で迎えた。

「おはようございます。今日も良い天気ですね」

「おはようございます。はい。森山さんも、その、相変わらず綺麗ですね」

リンの言葉に、春香は嬉しそうに微笑んだ。

春香の容姿は、十年前とあまり変わっていない。年齢的には二十代後半だが、その肌の艶やかさは十代後半から二十代前半のものだった。

彼女の若い美貌が保たれてる秘密は、過去の依頼に出てきたロストロギアにある。春香が義理の妹として預かっている娘は、今では不死のロストロギアしか所持していないが、初めてリン達と出会った時は不老のロストロギアも備えていた。不老のロストロギア本体はセイラに奪われたが、その際に持ち主が大量出血を起こした。出血はリン達の服に飛び散り、付着した血から僅かながら老化抑制の薬を精製する事に成功した。生き返った娘と長く過ごしたいと言うある母親の願いから作られた物だったが、長く美貌を保ちたいと言うのは女性特有の願望。春香も薬を服用して、今の若さを保っているのである。ちなみに、娘が若いままの状態に親――特に父親の賢蔵は物凄く嬉しがっていた。それ程までに、愛娘が大好きなのだろう。

ついでに、返り血を浴びたリンも外見的変化は小さい。鮮血を受けた際に、偶然開いていた口の中に入り、飲み込んで血を摂取して

しまったのだ。但し、摂取したのは少量だったので、表れた現象は不老だけで効果の期間もあまり長くはなかった。
二人の間に、リンの胸ポケットに入ってる水銀燈の不機嫌な声が挟まれた。

「それで？　今日の依頼は何なのかしら？」

水銀燈の不機嫌さを察して、リンは顔を引き攣らせた。
苦笑を浮かべた春香は、すぐに真剣な顔になって本題に入った。

「実は、今回の依頼は異世界から来たものです」
「異世界？」と怪訝そうにリン。
「はい。その世界の名前は、ミッドチルダです」

ミッドチルダ。魔法技術が発展した世界で、水銀燈と春香の母親の出身世界でもある。
名前を聞いて、リンは露骨に動揺した顔を見せる。

「え？　あの、他の世界からも依頼が来るんですか？」
「はい。基本的には、私達（わたくしたち）が住んでる世界から請け負いますが、今回のように他世界から依頼が持ち込まれる事もあります」
「はあ、そうですか……。ちなみに、ソレって断る事は……」
「申し訳ありません。私も含めて皆さん手が一杯なので、リンさん達に頼むしかないのです」
「ですよね……」

諦めたような笑みで、リンは下がった。
出来る事なら、ミッドチルダは避けたい世界だった。何故なら、その世界に時空管理局があるからだ。時空管理局があると言う事は、あの女が居る事を意味する。過去の依頼で、水銀燈と激しい戦闘を

した黒岩セイラだ。彼女が所属している組織がある世界に行くと言う事は、彼女との遭遇率を高める危険行為とも言える。

春香も、セイラの事を忘れてなどいない。一度手合わせして、彼女がいかに危険な人物なのか解っている。それでも、リンと水銀燈に依頼を頼んだ。ソコには、二人に対する信頼の意がこもっていた。

「全く、十年経ってもなっさけないわねぇ」

不安がるリンの様子に、水銀燈が呆れた声を出した。

胸ポケットから、リンの顔を見上げて言った。

「この私がついてるんだから、貴方は安心してればいいの。分かったぁ？」

「水銀燈……」

不敵な笑みを浮かべる水銀燈の声には、確固たる自信がこもっていた。

余裕と自信に満ちた水銀燈に、胸中にあった不安が和らいだ。小柄な体格だが、とても強く頼りになる少女だ。

安心したリンは、嬉しさもあって自然と笑顔になった。

「分かったよ。ありがとう」

「分かればいいのよぉ」

素っ気なく返し、水銀燈は前に向き直った。

二人の関係を、春香は微笑ましく思った。昔の水銀燈だったら、他人を励ますような言葉は絶対に言わなかった。しかし、リンとの絆が深まった今、彼を気遣う姿勢が見られる。彼女も変わったのだ。

春香が、二人を信頼する理由は、現在の強い信頼関係と水銀燈の実力にあった。セイラに力（ちから）の差を見せつけられた水銀燈は、何もせ

ずに十年を過ごしていた訳では無い。力をつけて、昔よりも実力を上げている。
今の二人なら大丈夫だと、信頼して判断したのだ。
二人の良好な関係を見て、春香は本題に戻った。

「それで依頼の内容ですが、近々大規模な事件が発生するようで、その真相を世間に明らかにしてほしいとの事です」
「真相を明らかにする？　事件防止とかじゃなくてですか？」
「出来るならそうしてくれても構わないそうですが、一番重要なのは真相の暴露だそうです。それと肝心の事件の内容ですが、詳しい事は解らないそうです」
「はあ？」

片眉を上げて、リンは怪訝そうな顔になる。

「『世界の意思』は、運命に敏感なんじゃないんですか？」
「はい。実は、世界によって運命の捉え方が違うのです。未来予知のように映像として視えたり、何か起こりそうと漠然とした予感がしたり、断片的に情報を得たりと様々です」

ハア、とリンは短く答えた。
今回の依頼は、実に面倒な仕事になりそうだ。そう心中に呟いた。
依頼内容の確認を済ませ、春香は席を立った。

「それでは、早速ですがお二人にはミッドチルダに行っていただきます。よろしいですか？」
「はい。あっ、一つだけ」

リンは、極めて大事な事を口にした。

「行く前に、髭剃っていいですか？」

顎を撫でる手に、ザラリと不快な髭の感触がした。

朝早く水銀燈に踏み起こされて、うっかり剃るのを忘れていたのだ。

＊

水銀燈の転移魔法により、少し時間がかかったものの無事に二人は目的地に到着した。

着いた場所は、それなりの広さがある人気の無い公園だった。

肩から鞄を提げたリンは、周囲を見渡した。公園の周りには、自分が居た世界とかけ離れた近未来的な建物が並び、遠くでは宙にディスプレイが浮かんでニュースらしき映像が流れている。

一目で、ココは異世界だと認識出来た。

その世界の名は、ミッドチルダ。

魔法が存在する、水銀燈の生まれ故郷。

「来たなぁ」

元の大きさに戻ってる水銀燈は、リンの横に浮いている。彼女の顔は無表情で、出身世界を懐かしむ気持ちは全く表れていない。水銀燈にとってミッドチルダは、忌まわしい記憶しか残っていない世界なのだ。水銀燈一人だったら、訪れなかったかもしれない。

「さて、と……来たのはいいけど、何処に行けばいいかな？」

ミッドの土地勘が無いリンは、水銀燈に尋ねた。

「とりあえず、寝床を探すわよ。適当に歩いてれば、ホテルくらい見つかるでしょう」

「まあ、それがいいわな」

リンも素直に同意した。

ホテル探しに公園を出ようと出口を求め、歩き出した時だった。

二人の視界に、奇妙な物体が現れた。青と灰色を基調した円筒型で、真ん中には黄色いレンズがある。宙に浮いて移動しているソレは、明らかにロボットだった。その数は、ザッと見ただけで十から十五機確認出来る。

無機質な来訪者は、リン達から数メートル離れた地点で止まった。

ロボットを見て、リンは水銀燈に尋ねた。

「何アレ？　どこぞの会社が開発した、最新型のロボット？」

「知らないわぁ」

素っ気なく返す水銀燈だが、さり気なくリンを護るように前に出ている。

沈黙してるロボットの群れを凝視して、リンが口を開いた。

「あのさ、水銀燈。一つ、ツッコんでいい？」

「どうぞ」

水銀燈に促され、リンは大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

そして、ミッドに着て初めてのツッコミをした。

「何で魔法世界にロボットが居るんだ！？」

睨むようにロボットの群れを見て、リンは続ける。

「いや、魔獣とか魔物とか亜人とかなら納得するよ？　でもさ、ロボットは無いでしょう！　だってロボットは魔法と相容れない科学の産物だよ！？　何で魔法世界にロボットがあるの！？　おかしいよ！」

「知らないわよ」

適当に返事をした直後、水銀燈はリンの体を後ろに押した。

リンが地面に尻餅をついたと同時に、頭上を何かが掠めた。慌てて頭を押さえて、後ろを振り返る。数メートル後ろに立っている木が真ん中辺りに焦げ跡を作り、煙を上げて倒れた。

「はあ！？」

倒れた木を見て、リンは驚愕の声を上げた。

謎のロボットが、ビーム攻撃を仕掛けてきたのだ。

慌ててリンは、前を向いた。

「コ、コイツ等いきなり攻撃してきやがった！」
「リン、下がってなさい」
横に回避していた水銀燈が、ロボットを前にして不敵な笑みを浮かべる。
「貴方達をジャンクにしてあげる……！」
両肩の黒い翼を広げ、水銀燈は戦闘態勢に入った。
即座にロボット軍は反応して、黄色のレンズから青色のレーザーを一斉に発射する。相手のレーザー攻撃に対して、水銀燈は翼を盾に使って防御した。レーザーは漆黒の壁に阻まれ、標的まで届かない。水銀燈は翼の隙間から目で狙いを澄まして、羽の矢を飛ばす。放たれた矢がロボットに当たる寸前、半透明の壁が発生した。生じた障壁に水銀燈は目を細めたが、放たれた羽は障壁を突き破り、標的のロボットの装甲を貫通した。ショートして放電を起こし、射抜かれたロボットは次々と爆発した。
「小細工をしてくれるじゃない」
水銀燈は、今の攻撃で障壁の効果を見抜いた。
魔力を通して硬質化された水銀燈の羽は、鉄をも貫通する威力を誇る。勿論、ロボットの装甲も難なく貫いた。しかし、障壁を突き破ってから僅かに羽の速度が落ちた。いや、落とされたと言うべきか。
おそらく、魔法効果を打ち消す障壁なのだろう。
しかし、水銀燈は全く動じない。
「そんな事をしても無駄よ。醜悪な人形は、早くジャンクになりなさい」

続くレーザー攻撃を防ぎつつ、トドメとばかりに残ったロボットの数だけ羽を発射した。
結果、放たれた羽は寸分違わず全てのロボットを貫き、爆音と共に破壊した。五分にも満たない時間で、全てのガジェットを殲滅させた。

「お、終わった？」
「ええ、見た通りよ」

立ち上がったリンが見たのは、無残な破片と化したロボットの姿だった。
変わり果てたロボットの残骸を見て、リンは顔を引き攣らせた。

「なんか……同情しちゃうな」
「あら？　護ってあげたのに、お礼の一つも無いのかしらぁ？」
「ありがとうございます！」

瞬時に頭を下げ、水銀燈に礼を言ったリン。
すると、

「あの」

頭上から声が降ってきた。
声の出所を辿って顔を上げるリン達の前に、数人の少女が降りてきた。
少女達を見て、リンは驚きを禁じ得なかった。
先頭に立っているのは、栗色の髪を両サイドに分け、先端に赤い球体が付けられた杖を持ち、白いドレスを身に纏った可愛い女性だった。

その隣には、長い金髪を同じように左右に分けた髪型で、白い女性とは反対に黒い衣装に身を包み、手に違うデザインの杖を握っている美人の女性。

「時空管理局・機動六課所属の高町なのは一等空尉です」
「同じく、時空管理局・機動六課所属のフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官です」

ハア、とリンは戸惑いの混じった返事をする。
白い女性がなのはで、黒い女性がフェイトと言う。初めは気付かなかったが、すぐに二人が過去の依頼で間接的に知った魔法少女であると気付く。
なのは達の後ろには、四人の女の子と男の子が居た。少し紫がかった青い短髪、額には白い鉢巻を付け、ボーイッシュな恰好して活発そうな印象の女の子。オレンジ髪を左右に分け、気の強そうな感じの女の子。白い帽子にピンク色の髪、ピンク色の服を着たピンク色の強い、十代前半の小柄な女の子。赤髪が特徴で、ピンク色の女の子と同い年に見える男の子。全員が、籠手やら拳銃やらグローブやら槍と、子供が持ってるとは思えない物騒な得物を手にしている。
子供が武器を持つとは世も末だな、とリンは少しビビっていた。
隣に浮いてる水銀燈は、無感情な顔で警戒していた。
そんな二人に、なのはが声をかけた。

「アソコのガジェットを破壊したのは、貴方達ですか？」
「え？　ああ、いや、やったのはこの子で、僕は何も……」

答えを聞いて、なのはとフェイトは互いに顔を見合わせた。察するに、念話で相談でもしてるのだろう。
ややあって、なのはが言った。

「あの、詳しい話をお聞きしたいので、機動六課まで同行してもらえますか？」
「え？　あぁ……」
言葉を詰まらせ、考える仕草をしてリンは水銀燈に念話を送る。
（水銀燈、どうしよう？）
（癪だけど、こんな所で騒ぎを起こすのは面倒だから、ココはあの子達の言う通りにしましょう）
（分かった）
相談を済ませ、リンは口を開いた。
「分かりました」
「では、私達についてきてください」
と移動を始めようとして、リンが慌てて声をかけた。
「あの……」
「何ですか？」となのはが振り返る。
「貴女達は、その……時空管理局の職員、なんですよね？」
「ええ、そうですけど」
怪訝に思うなのはに、何でも無いです、と返したリンは、なのは達の恰好を改めて、さり気なく見た。
そして、妙に萎えたような気分になった。
傍に居る水銀燈だけが、彼の様子を察していた。

そんな事をしても無駄よ。醜悪な人形は、早くジャンクになりなさい（後書き）

ようやく『リリなの主役勢』を出せました。
出番が遅れて、すみません。

公園でロボットを一掃した後、リンと水銀燈は高町なのは達に機動六課まで連れて来られた。

道中、二人はなのは達からも軽い質問を受けた。出身や素性関係については勿論だが、水銀燈についても訊かれた。しかし、水銀燈は口を閉ざして答えようとはしなかった。慌ててリンが、人見知りが激しいだの性格が暗いだの理由を述べて、場の気まずい空気をいくらか払拭させた。

水銀燈の過去を、以前に本人の口から聞いて人間嫌いの理由も知ってる。気持ちは解らないでもないが、早い段階でわだかまりを生むのはよろしくない。何より、仕事以外の面倒事は御免だ。

移動中のヘリの中は、あまり居心地の良いモノでは無かった。

そして、微妙な空気のまま一行を乗せたヘリは、機動六課なる部隊の建物に到着した。建物はかなり大きく、敷地も馬鹿みたいに広い。だが、これくらいなら春香の屋敷の方が上だな、とリンは心中で密かに呟いた。

四人の少年少女とは途中で別れ、なのはとフェイトが部隊長室まで案内する事になった。ちなみに、隊舎に着いた時には二人の服装は変わっていた。茶色の制服で、いかにも軍の職員と言った印象を受ける物だった。ソレを見た瞬間、またもリンは少々ウンザリした気持ちになった。勿論、なのは達には気付かれないようにだ。

廊下を進んで行くと、一つの扉の前に着いた。文字は読めないが、おそらくココは目的地の部隊長室なのだろう。

「失礼します」

「どうぞ」

なのはが一言断り、中から返事が来ると扉を開けた。

部屋に入ったリンは、自然と室内を見回した。それなりにスペースがあり、応接用のテーブルとソファー、小型のデスクが一つと普通サイズのデスクがそれぞれ二つずつ置かれている。その中の一つ、部屋の奥に位置する所にある普通サイズのデスクに女性が座っていた。

少し緊張した様子で、リンはなのは達の後に続き、座ってる女性の前まで歩み寄った。

女性が立ち上がり、笑顔で挨拶をしてきた。

「初めまして。時空管理局・遺失物管理部・機動六課の部隊長の八神はやてです」

「は、初めまして」

リンも会釈して、挨拶を返した。

傍に浮いてる水銀燈は、相変わらず無愛想な顔で黙っており、彼女達と壁を作っている。

しかし、今のリンにとってそんな事はどうでもよかった。そんな事より、はやてと言う女性が一部隊をまとめる部隊長と言う事実に驚いていた。戦争時代の日本でも、子供を兵士として戦場に送り込んでいた。現在でも、他国では子供が銃を手に持って兵士として扱われている。だが、部隊長なんて高い地位に就いてる子供はいない。なのはやフェイト、目の前に居るはやては二十歳を超えてるかどうかの若さだ。

そんな若輩が、一部隊の部隊長に就いてる事が信じられず、同時に僅かながら劣等感を抱いた。

リンの気持ちなど露知らず、はやては案内役を請け負ったなのはとフェイトに声をかけた。

「なのは隊長とフェイト隊長もご苦労様」

「はい」

二人共敬礼をして返した。
それからはやては、リン達に向き直った。
「では、改めてもう一度詳しい話を聞かせてもらえますか？」
「ああ、はい」
二名の隊長が立ち合いの下、部隊長による質問が始まろうとした時だった。
部屋の扉が勢いよく開かれ、弾かれたように一同は一斉に後ろを振り返った。
走ってきたのだろう、部屋に入ってきた人物は少し呼吸を乱していた。入ってきたのは女性で、かなりの美人だ。本来なら綺麗に流れている長い銀髪も、肩や顔にかかっている。
入室者とリンの目が合った途端、急に彼女が飛び掛かってきた。
「リン！」
「うわっ！？」
「えっ！？」
押し倒さんばかりの勢いで抱きつかれ、リンは危うく後ろのデスクに倒れそうになった。
銀髪の女性の行動に、その場に居る全員が驚いた。
「えっ！？　ええっ！？」
抱きつかれてるリンは、体に押し当たる膨らみと甘い香りに興奮して、声を上げる。
いち早く我に返ったのは、水銀燈だった。

「ちょっ……ちょっと貴女、いきなり何してるのよ!?　リンから離れなさい!」
「リン!　久しぶりですね!　私です!　リインフォースです!」
水銀燈の声を無視して、リンとの再会を喜ぶのはリインフォースだった。

＊

部隊長のオフィスで、リインフォースと驚きの再会を果たしたリンと水銀燈は、彼女と隊舎の中を歩いていた。
リインフォースの知り合いと分かるやはやては、「ほんなら、アインにリンさん達の隊舎案内頼もうか」と素の口調に戻って親しげに提案してきた。仕事上では標準語だが、素は関西弁らしい。ちなみに『アイン』とは数字の『1』を示しており、リインフォースには『ツヴァイ』と呼ばれる妹が居る。
質問に関しては、リンは次元漂流者で水銀燈は主無しのユニゾンデバイスと言う事でまとまった。リインフォースが口裏を合わせ、フォローしてくれて疑われる事は無かった。ついでに、二人は保護される形で隊舎に身を預ける事になった。衣食住を約束されて、至れり尽くせりだ。

「いや、しかし、まさかリインフォースさんまで居るとは思いませんでした」
「私も、まさかこんな所で貴方達に再会するとは思いませんでしたよ」
隊舎内の案内を一通り終えた三人は、建物の外を歩いていた。

緑の芝生が広がっており、木々も立っていて意外と敷地内には緑が多い。日差しも程良くて、気を休めるには絶好の環境だ。

リインフォースとリンは並んで歩き、水銀燈は体を小さくして彼の胸ポケットに入っている。

「それにしても、十年経ったと言うのに、貴方は殆ど変っていないですね」

「ああ、ちょっと色々ありまして……。そう言うリインフォースさんも、全然変わってませんね」

「そういう体ですから」

ユニゾンデバイスであるリインフォースは、時が経っても人間のような外見的変化は現れない。

リインフォースのように、若く綺麗な姿を永久的に保てるのは、世の女性達にとって羨ましい事この上ないだろう。再会して改めて見ても、リインフォースは本当に美人だ。昔と外見が全く変わってないのは勿論だが、ビシッと制服を着こなしていて、有能な美人職員と言う印象を受ける。

今更ながら、こんな美人と知り合えた自分は運が良い。そんな事をリンが思ってると、不意にリインフォースが声をかけてきた。

「どうかしましたか？」

「え？　ああ、いえ……」

慌ててリンは視線を逸らした。

美人が近くに居ると、つい何度もチラ見してしまう。リンの悪い癖。

すると、胸ポケットの水銀燈が不機嫌な声を漏らした。

「鼻の下伸ばしちゃって、バッカみたい」

「水銀燈……いや、その……ごめん」

言い訳できず、リンは素直に謝った。

二人のやり取りを見て、リインフォースは短く笑った。

ムッとして、水銀燈が睨んだ。

「何が可笑しいのよ？」

「いや。あの頃と比べて、随分と仲が良くなったと思ってな」

リインフォースの素直な感想に、水銀燈は無愛想に顔を逸らした。

ふとリインフォースは、何か思い出したように口を開いた。

「そうだ、リン」

「は、はい。何ですか？」

急に声をかけられ、リンはぎこちなく返事をした。

微笑みを浮かべ、リインフォースが言う。

「あの日……貴方と水銀燈に命を救われた時、直接礼の言葉を伝える事が出来ませんでした。もし、また会えたなら、あの時の礼を言おうと思ってました。主や守護騎士達、その友人達と過ごす今の日々があるのは、貴方達のお陰です。

リン。本当にありがとう」

ニッコリと微笑むリインフォースの顔は、陽の光も受けて温かく、そして輝いて見えた。

魅力が増しているリインフォースの笑顔と礼を受けて、リンは顔が熱くなり、照れ隠しするように頭を掻いた。

「いえ、そんな……どういたしまして」

礼を言われるのは悪くないが、妙に気恥ずかしくなってしまう。要は、礼を言い慣れていないのだ。その相手が美人なら、尚更である。

ふとリンは、海上に広がっているスペースに目が止まった。廃ビルが立ち並び、綺麗な隊舎や緑多い敷地内には不自然な光景が見える。

気になったので、リインフォースに訊いてみた。

「リインフォースさん。アソコは何ですか？」

「ああ、アソコは空間シミュレーターです」

「空間シミュレーター？」

何の事か解らず、オウム返しになってしまう。

解説する前にリインフォースは、目の前の空間に操作パネルを出して、指先で何か入力する。操作パネルの真上に半透明の薄いモニターが現れ、海上スペースの映像が映し出された。

「空間シミュレーターとは、市街地や森林地帯等の空間を任意で浮かび上がらせ、訓練を行うシステムです。スペース上にあるのは全て映像ですが、触れる事が出来、本物のような臨場感が味わえる一種の訓練スペースです」

説明を聞いたリンは、ハアと感嘆の声を漏らした。驚き過ぎる技術に、上手い感想の言葉が思い浮かばない。

ようやく出た言葉は、

「凄いですね」

と言う常套句だった。

モニターには、訓練に励んでる少年少女の姿が映っている。公園で、なのはとフェイトの後ろに控えていた四人だ。指導しているのは、なのはと赤髪を三つ編みにして、赤いゴスロリ衣装のような格好をしてハンマー型デバイスを持った女の子だった。赤髪の女の子は、覚えている。確か、ヴィータと言ったか。リインフォースの言う守護騎士の一人で、幼い外見だが年はリンよりも上である。

操作パネルを操り、リインフォースは四人の魔導師の姿をアップで映し出した。

「青髪の子は、スバル・ナカジマ二等陸士。オレンジ髪の子は、ティアナ・ランスター二等陸士。この二人は、高町が隊長を務める『スターズ分隊』に属してます。赤髪の少年は、エリオ・モンディアル三等陸士。ピンクの少女は、キャロ・ル・ルシエ三等陸士。こちらの二人は、テスタロッサが隊長を務めている『ライトニング分隊』に属しています。

皆若く、まだ新人ですが、訓練によってどんどん伸びている優秀な魔導師です。スバルは高い潜在能力があり先天魔法と言う希少な魔法を使い、ティアナは正確な射撃センスと冷静さがり、エリオは幼いながらも魔導師ランクBの実力を持ち、キャロも竜召喚のレアスキル持ちで、この先の成長が楽しみな新人達です」

ハア、とリンは感嘆声を漏らすだけだった。何か、もう、凄過ぎて感想を口にするのも億劫になってきた。

要するに、機動六課(ココ)は優秀で将来有望な人材が揃った、言わば『エリート部隊』なのだ。そんなエリートの中に、一人ポツンと非才な自分が居る事に、リンは居心地の悪さを感じた。ココは、そう長居するような所じゃないかもな。

モニターに映ってる新人四人は、ボロボロになりながらも厳しい訓練をこなしている。

ガキの頃から働いて、頑張ってる姿を見ると軽く嫉妬してしまう。

静かにモニターを眺めていると、隣に居るリインフォースが話しかけてきた。

「リン」
「はい？」
「どう思いますか？」
「え？　どう、とは……？」

唐突な質問に、リンは答えに窮する。

「訓練の様子を見て、何か気付いた事はありませんか？」
「気付いた事？　う～ん」

問われてから、リンはモニターに目を戻す。
ややって、答えた。

「凄いと思います。とてもじゃないですけど、俺は一分も持ちませんね」

あれ？　コレじゃあ気付きじゃなくて、ただの感想じゃね？　と心中で自問した時だった。

「ふふふ」

下から、愉快そうな笑いが聞こえてきた。
二人が視線を向けた先には、胸ポケットで笑ってる水銀燈が居た。

「す、水銀燈？」
「解ったわぁ。貴女が気にしてること」

リンの声を無視して、水銀燈は一人納得したように呟いた。
それから水銀燈は、リインフォースに顔を向けた。

「ティアナ・ランスターと言う子が、気になるんでしょう？」
「ああ」

頷くリインフォースだが、リンだけは解っていなかった。

「あの……ちょっと、俺だけ話解らないんで、置いてかないでくれます？　ねえ？　説明して下さいよ」
「実は、ティアナの様子が他の新人達と比べて違和感があるんです。何か焦っているような、気負った印象が見受けられるんです。単なる私の勘違いか、気のせいかと思ってたのですが……」

自分以外の同意見を得て、リインフォースの中の違和感が確信に近付いたようだ。
この気付きは、まだ他の皆には話していない。自分の勘違いと言う事も可能性もあり、何より直接指導しているなのは達がその内気付く事も考えていた。
しかし、水銀燈もティアナの異変を認めた。それに現状では、まだなのは達はティアナの様子に気付いていない。
後でこの事を、なのは達に伝えようと思った時、水銀燈がタイミング良く言った。

「リインフォース。この事は、他の誰にも喋ったらダメよぉ？」
「え？」

リインフォースだけでなく、リンも怪訝な顔になる。
しかし、リンには水銀燈の意図が何となく解っていた。何故なら水銀燈が、とっても“イイ笑顔”を浮かべてるからだ。

納得いかないリインフォースは、水銀燈に理由を求めた。

「何故だ？」

「その方が、あの子の為だからよ」

多分嘘だな、とリンは思った。

水銀燈の真意は、おそらく『楽しむ事』だ。退屈な場所で、暇潰しになる余興を見つけたと言ったところか。

リインフォースの表情が険しくなり、言った。

「水銀燈……もしかして、ティアナの異変の原因が解っているのか？」

「ふふふ。そうねぇ……少なくとも、貴女達では絶対に解らないわぁ」

「どういう意味だ？」

「ダ～メ。これ以上は教えなぁい」

意地悪な笑顔の水銀燈に、リインフォースは眉根を寄せた。

二人の間に険悪な空気が生じて、リンは口を挟めずに引き攣った顔で、ただ突っ立っていた。

＊

「ホントさ～、頼むよ水銀燈」

椅子に腰かけたリンが、溜め息混じりに言った。

場所は、隊舎内にある一室。建物が大きい割に人数が埋まっておらず、空き部屋が幾つかあったので、その中の一室に二人は案内さ

れた。ベッドに机、タンスと生活に必要最低限の家具が用意されている。窓からは広い外の景色も眺めて、なかなか良い部屋である。

リインフォースが去った後で、リンは水銀燈に言った。

「こっちは世話になる身なんだからさ、あんまり波風立てたくないんだよ」

「だって退屈なんだもの」

水銀燈はベッドに寝そべり、リンが持ってきた漫画を読んでいる。不意に、今度は水銀燈から声をかけてきた。

「そうそう。言い忘れてたわぁ。明日、警備任務があるらしいから、私達も一緒に行くわよぉ」

「はあ!?」

たまらずリンは声を上げた。

「聞いてないよ!」

「だって、今言ったんだもの」

漫画から目を離して、水銀燈はリンに顔を向けた。

「私達の依頼にあった事件が、ソコで起こるかもしれないし、何か関係があるかもしれないでしょう？　それに……ふふ……もしかしたら、面白いモノが見れるかもしれないわよ」

意地の悪い笑いを零す水銀燈を見て、リンは思った。

ホント、イイ性格してるよ。

＊

小型のディスプレイを展開して、通話をしてるのは黒岩セイラ。
場所は、時空管理局本局にある一室。先ほど、部下から連絡を受けて確認をしている。

「確かなのね？」

「そう、解ったわ。とりあえず、しばらくは様子見をしてちょうだい。まだリンと水銀燈に手は出さなくていいわ」

セイラのイヌは、機動六課の中にも居た。

もしかしたら壊れちゃうかもしれないわね、あの子

翌日、機動六課隊舎から一機のヘリが飛び立った。
ヴァイス・グランセニック陸曹と言う男が操縦するヘリは、今回の任務の目的地に向かって飛んでいる。
その機内の中には、部隊長のはやて、部隊長補佐のリインフォース・アインとツヴァイの姉妹、なのは率いるスターズ分隊、フェイト率いるライトニング分隊、医務官のシャマル、自称狼のザフィーラ、そして最後にリンと水銀燈が乗っている。最初は、一般人の同行に反対していた一同だったが、リインフォースの説得とリンの粘りを受け、それから水銀燈の強さも考慮に入れて、渋々ながら許可を下ろした。
機内では、昨日、水銀燈が公園で殲滅したロボット――ガジェット・ドローンの製作者及び、『レリック』と呼ばれる魔力結晶のロストロギアを狙っているのが、違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティである事の判明と、今回の任務の確認が行われていた。
今回、警備に当たる場所はホテル・アグスタ。骨董オークションの会場で、多くの有力者達が参加している。出品される品の中には、取引許可の下りてるロストロギアがあり、ソレをレリックと誤認してガジェットが出現する可能性があるらしい。現場には既に、守護騎士メンバーのシグナム副隊長、ヴィータ副隊長が警備についてるとのこと。
説明の中、リンは何回も欠伸をしていた。起床時間が早かった上に、機内での説明は退屈で眠気が絶え間なく襲ってくる。胸ポケットの中の水銀燈は、クールな顔で黙って説明を聞いていた。
説明と確認が終わり、リンが本日何度目かの欠伸を噛み殺した時、おもむろにキャロが手を挙げた。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って……」

キャロが指差したのは、シャマルの足下に置かれてある三つの箱だった。

「ああ、コレ？　隊長達のお仕事着」

ニッコリ笑って、シャマルは答えた。

＊

ホテル・アグスタ。

スーツにドレスと着飾った有力者達が、入口で受付を済ませて、次々と会場に入っていく。

そんな有力者達に混じって、受付に管理局の身分証明を差し出す女性が居た。管理局の名を見て、受付の男は驚いた顔になる。

「こんにちは。機動六課です」

綺麗なドレスに身を包んだはやて、フェイト、なのはが素敵な笑顔を向けた。

＊

リンのウンザリは、昨日よりも増していた。

自分がダメ人間なだけに、リンが他人に対してウンザリする事は滅多にない。しかし、今確かに、リンは機動六課に、主に隊長陣に対してウンザリしていた。このままウンザリが増せば、軽蔑に変わるだろう。

彼は気だるげな足取りで、ホテルの外を歩いていた。骨董品には興味が無いし、それ以前にいかにも庶民的な自分が会場に入れる訳が無い。

「どうしたんですか？　何だか元気が無いようですが」

心配して声をかけてくれたのは、新人達と一緒に外の警備を任されているリインフォースだった。

リンは、浮かない表情で周りを見回した。警備の新人達が離れているのを確認して、リインフォースに言った。

「リインフォースさん。一つ、大事な事を確認したいんですけど、いいですか？」

「はい。何ですか？」

「コレって、“潜入”じゃなくて“警備”ですよね？」

リインフォースは眉を顰めた。質問の意図は解らないが、とりあえず答えた。

「はい。“警備”ですが、それが何か？」

リインフォースが問い返すと、リンは皮肉めいた笑みを浮かべた。

「ああ、そうですか。ですよね……。いや、ちょっと“ズレてるな”、と思っただけです」

リインフォースからの答えを得て、リンのウンザリは完全に軽蔑に変わった。
怪訝そうにしてるリインフォースから離れ、リンはホテルの裏口に回った。酷く憂鬱な気分になって、壁を背もたれにして溜め息をつく。

「はあ……帰ろう。何かもう、やる気まで削がれちゃったよ」
「ちょっとぉ、貴方があの子達を軽蔑するのは構わないけど、仕事はちゃんとしなさいよぉ？」

胸ポケットからの水銀燈の言葉に、リンは少し驚いた顔をした。

「気付いてたの？」
「当たり前でしょう。私を誰だと思ってるの？」

紅い目を細めて、水銀燈は笑った。
敵わないな、とリンは頭を掻いた。自分では隠せていたつもりだったが、水銀燈にはお見通しだったようだ。だが、バレた相手が水銀燈で良かった。コレがリインフォースや機動六課側の誰かだったら、実に面倒な事になっていた。
安堵しつつも、少しげんなりした様子で地面に腰を下ろした。

「ねぇ、水銀燈」
「何？」
「俺の三十三年間の人生が間違ってたのかな？」
「さあ」

相槌をうつだけで、水銀燈は否定も肯定もしない。
彼女の反応は予想していた事なので、あまり気にしていない。

「こんな所で何をしてる？」
「ん？」
不意に後ろから声をかけられ、振り向いた。
声の主は、建物の裏にある搬入口を警備しているザフィーラだった。大きな体格で、立派な青い毛並みに覆われた狼だ。そのすぐ後ろには、新人のキャロとエリオが立っていた。
「いやぁ、何も……暇なもので。そっちはどうですか？」
「異常無しだ」
渋い声で返すザフィーラ。
もしも人間の姿だったら、強面なんだろうなとリンは勝手に想像した。
何となく搬入口の中を覗いてみると、少し離れた所で別の女性局員が警備していた。ピンク色の長い髪をポニーテールにして、凛とした顔つきの綺麗な女性だ。守護騎士の一人で、ライトニング分隊の副隊長のシグナムである。
昨日も思ったが、機動六課は女性比率が高過ぎる。リンの知る限り、男は少年のエリオと狼のザフィーラ、それに何人かの男性局員を入れて数人だけだ。
「肩身が狭いなぁ……」
ある種の孤独感を、声にして呟いた。
＊

警備についてるティアナは、機動六課と自分について考えていた。
六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常なのだ。隊長格は全員がオーバーS、副隊長でもニアSランクと言う高ランクの実力者揃い。他の隊員達も、前線から管制官まで未来のエリート達ばかりだ。エリオとキャロは幼いながらも高い実力やレアスキルを保有しており、スバルも潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもある。
優秀な上司や仲間達の中で、ティアナは自分のみが凡人だと劣等感を抱いていた。そんな弱気な思考を振り払うように、ティアナはかぶりを振った。特別な才能や凄い魔力が無くても、一流の隊長達の居る部隊で、闘っていける事を証明する。その信念が、彼女を突き動かしていた。
己の誓いを確認した時だった。
屋上の警備をしていた金髪の女性――シャマルの指輪型デバイスのクラールヴィントのセンサーが、ホテルに接近してくるガジェット軍を感知した。隊舎に居るロングアーチから、映像が送られる。今回現れたのは、以前に水銀燈が破壊した?型の他にもう一種あった。大きな丸いボディに、太いアームを出した?型と呼ばれる大型タイプだ。かなりの数で、ホテルに向かって進行している。
連絡を受け、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの二人と一匹が前に出てガジェット迎撃に向かう。新人の四人とリインフォースが、ホテル前で防衛ラインを張る事になった。
その様子を、柱の陰からリンと水銀燈が覗いていた。

「戦闘開始みたいだね。水銀燈は参加するの?」
「しないわぁ。今日は見物」
「そうかい」

二人が見守る中、戦闘が始まった。
最前線に出た副隊長陣は、能力リミッター付きで次々とガジェッ

トを破壊していった。シグナムの剣技、ヴィータの鉄球とハンマー打撃、ザフィーラの防御を攻撃に活かした戦法の前に、ガジェットは鉄クズになっていく。このまま順調にいけば、新人達の出番は無いだろう。

そう思われた時だった。

突然、ガジェットの動きが良くなった。決められた動作しかインプットされていない、自立型機械の単調な動きではない。ロングアーチによれば、先ほど召喚師の魔法が発生して、その効果で有人操作に切り替わったそうだ。

そして、召喚師の魔法によってホテル前の防衛ラインに魔法陣が出現して、ガジェットが二十機程召喚された。

リインフォースが一同の前に出て、ガジェット軍と対峙する。

「私が相手をする。四人は援護を頼むぞ！」

「はい！」

それぞれデバイスを構えて、フォワードの四人も戦闘態勢に入る。

ガジェットの群れに突っ込んだリインフォースの体を囲むように、赤黒いナイフが出現した。

「穿て、ブラッディ・ダガー！」

リインフォースの意思によって、一斉にナイフが周囲に放たれる。宙を飛ぶナイフは、魔法を無効化させる特殊な障壁――ＡＭＦ（アンチ・マギリング・フィールド）を突き破り、ガジェットの装甲を貫いて内部を破壊した。何本か回避されたが、ソコはフォワードメンバーがカバーする。回避した直後を狙って、ティアナが魔力弾を放ち、スバルは接近して籠手型デバイスの拳を叩き込み、エリオは俊足を活かした槍捌きでボディを斬り、キャロも補助魔法で援護している。

それなりにコンビネーションも取れていて、問題ないと思われた。

しかし、ガジェットの数が減ってきたところで、敵の援軍が召喚された。
建物の陰から戦況を見守っているリンは、僅かに顔を顰めた。
「ちょっとマズいんじゃないの？」
「なら、助けに行けばいいじゃない」
「お前……俺が弱っちいの解ってて言ってるだろう？」
リンは、胸ポケット内の水銀燈を睨んだ。
水銀燈が動かない以上、リンも無闇に戦場には出られない。力の無い者は、策も無しに戦場に飛び込むモノではない。
どうしたものかと悩んでいると、戦場で動きが見られた。有人操作で複雑な動きをするガジェットに、思うように攻撃が当たらず、ＡＭＦにも阻まれて焦りを感じたティアナが、勝負に出た。スバルとのコンビプレイのクロスシフトＡでガジェットの殲滅を試みる。カートリッジを四発もロードし、二十発以上の誘導魔力弾を周囲に生成する。スバルが宙に青色の道――ウィングロードを伸ばして、その上を移動してガジェットの注意を引き付けている。
「クロスファイヤァァァァシュート！」
待機させていた魔力弾を、ガジェット目掛けて一斉に発射した。
放たれた魔力弾は、次々と命中していき、ガジェットを破壊する。
しかし、無理な魔法は制御を誤り、狙いを外した一発が宙を駆けるスバルの背中に迫る。
「危ねぇ！」
「え？」
たまらず上げたリンの声に、スバルが振り返る。

だが、その時には魔力弾は目前まで迫っていた。
発射したティアナの顔が、絶望に染まった表情になった時だった。
横から拳が突き出て、着弾寸前で魔力弾が弾かれる。弾かれた魔力弾は、付近の木に着弾して折った。

「ア、アイン曹長!?」

間一髪でスバルを救ったのは、リインフォースだった。
リインフォースは、目を鋭くして地上に居るティアナに怒鳴った。

「ティアナ！　何をしているんだ!?　私は貴女達に、援護を指示したハズだぞ！　こんな危険な事を命令した覚えは無い！」

普段穏やかなリインフォースの怒鳴りは、迫力があった。
その迫力に圧されて、地上に居るティアナは茫然と立ち尽くしている。瞳は揺れ、時折口から震えた声を漏らしていた。相当ショックを受けたようだ。

「あの、アイン曹長……！　今のも、その……コンビネーションの内で……」
「何がコンビネーションだ！」

オドオドしながら言い訳をするスバルも、リインフォースは一喝した。
間近で怒鳴られ、スバルは思わず体が震えた。
リインフォースの紅い瞳が、厳しく見つめてくる。

「今のは直撃コースだ！　ミスをミスと認めずに、仲間を庇おうとするな！」
「で、でも……今のは私も……」

「言い訳は聞かん！」

問答無用なリインフォースの厳しい声に、スバルは黙らされた。

その時、

「ねぇ」

不意に下から猫なで声が聞こえ、三人は顔を向けた。

ソコには、まだ残っているガジェットを破壊している水銀燈が居た。

「説教をするのは構わないけど、この子達を片付けてからの方がいいんじゃないかしらぁ？」

小馬鹿にしたような水銀燈に、リインフォースは顔を顰めたが、言い返す言葉は飲み込んだ。

水銀燈の言う通り、今はガジェットを殲滅させる方が先決だ。

「後は、私と彼女がやる。……貴女達は下がっていろ！」

リインフォースにキツく命じられ、スバルとティアナは最後方まで下げられた。

彼女達のやり取りを、水銀燈は楽しそうに眺めていた。

――ワザとだ……。絶対アイツ、ワザと遅れて出た……！

物陰に残ってるリンは、心中に呟いた。

結局、この後、リインフォースと水銀燈によってガジェットは殲滅された。

＊

全てのガジェットは撃墜され、ホテル・アグスタでの戦闘は終わった。
リインフォースの指示で、最後方に下げられたティアナとスバルは、ホテルの裏手に居た。

「ティア……向こう、終わったみたいだよ」

背中を向けるティアナに、スバルは遠慮がちに声をかけた。
ティアナは、振り返らずに答える。

「……あたしはココを警備してる。アンタはあっちに行きなさいよ」

しかし、スバルはすぐには動かなかった。ティアナを気遣って、励まそうと口を開く。黙っていると、この場の重苦しい空気に押し潰されそうに感じた。

「あのね、ティア……」
「いいから行って……」
「ティア、全然悪くないよ。あたしがもっとちゃんと……」
「行けっつってんでしょう！」

スバルの慰めの言葉を、ティアナは大声で遮った。
今のティアナに、下手な慰めは逆効果だった。

「……ごめんね。また後でね、ティア」

声を荒げられ、スバルは逃げるように場を去った。
一人残されたティアナは、壁に手をつき、肩を震わせ嗚咽を漏ら

す。

「あたしは……！　あたしは……！」

ティアナの目から、涙の雫が落ちた。

＊

現場では、管理局の調査班による現場検証が行われていた。

オークションも無事に終わり、制服に着替えた隊長陣もフォワード陣から報告を受け、現場検証の協力をする。ティアナは戦闘中のミスの件で、なのはに呼び出され、話をする為に少し現場から離れた。

局員が現場検証に勤しむ中、水銀燈とリインフォースはホテル前で向かい合っていた。

「水銀燈。何故あのタイミングで出て来た？　もっと早く駆け付けられたハズだ」

「そんなの私の勝手でしょう？　それに、私は管理局の人間じゃないわぁ」

険しい顔のリインフォースと不敵に笑う水銀燈の間で、激しい火花が散る。

両者の間に漂う険悪な空気を感じて、リンは恐る恐る声を挟んだ。

「あ、あの～、もうこの話はやめませんか？　結果論だけど、一応皆無事だったんだし……」

リンの仲裁に、とりあえず両者は矛を収めた。同時に、場の重苦しい空気が少し和らいだ。
二人の口論が大事にならず、リンは胸を撫で下ろした。

＊

ホテルの任務を終えた一行は、乗ってきたヘリで隊舎に戻った。
ヘリを降りた一行は隊舎に向かったが、ティアナだけは自主練をすると言って皆と別れてしまった。パートナーのスバルも合同練習を断られ、少し落ち込んだ様子をしていた。上手い言葉が思い浮かばず、リンは水銀燈と一緒に隊舎に入り、自分の部屋に入った。
疲れた。特に何かした訳でも無いのに、何だか疲れてしまった。主に精神的にだ。水銀燈とリインフォースの仲の悪さには、いつ爆発するかハラハラさせられる。

「水銀燈……」
「なぁに？」

水銀燈はベッドに寝そべり、今度は携帯ゲームをやっている。
気楽だねぇ、と思いながらリンは問うた。

「そろそろ教えてくれない？　ティアナが不調って言うか、様子がおかしい理由」

正直、今のフォワードメンバーの雰囲気は決して良いモノでは無い。たった一人の異変が、周りに影響を与える事もある。ソレが悪い方なら、悪化する前に防いでおきたい。
今回の場合は、ティアナの異変の原因を知り、ソレを改善する事

だ。
ココに長居するつもりは無いが、居る間はいざこざが無く、平穏に過ごしたい。
すると、やれやれと言った風に溜め息をつき、水銀燈はおもむろに体を起こして振り向いた。

「ティアナの異変の原因は、劣等感よぉ」
「劣等感？」

片眉を上げ、怪訝そうなリンに水銀燈は続ける。

「そうよぉ。
この機動六課と言う部隊は、現在で優秀な功績を挙げた者、将来有望な人材が集まった『エリート部隊』。ソレは、貴方も解ってるでしょう？　けど、いくらエリートでも、集団の中では必ず他の人より劣る人間が出てくるわぁ。例え劣っていなくても、自分より年下の子が同ランクに着いてたら、嫌でも自分は劣っていると思い込んでしまうものよ。
それに、教導官の実力が高過ぎると言うのも問題よねぇ。実力差があり過ぎて、より強い劣等感を知らず知らずの内に教え子に植え付けてしまう。
優秀な仲良し仲間たち、優秀過ぎる教導官……その中であの子が感じてる劣等感は、どれ程かしらぁ？　ふふふ、人間は弱いから、もしかしたら壊れちゃうかもしれないわね、あの子」

語る水銀燈の口調は、どこか楽しんでるように聞こえる。
しかし、説明には納得した。確かに、周りが優秀な者ばかりだと、妙に気負いして劣等感を抱いてしまう。そして、劣等感を振り払う為に、多少の無茶をしてしまう。本人じゃないから本当のところは解らないが、概ねこんな感じだろう。

「劣等感ねぇ……」

感慨深そうに、リンは呟いた。

凡人のリンも、人生の中で劣等感を抱いた事はある。だから、ティアナに共感出来る部分はある。ただ、今回はあくまで『魔導師』と言う枠の中での事だったので、その枠から外れてるリンは水銀燈に教えてもらうまで気付かなかった。

果たして教導官や周りの皆は、ティアナの劣等感に気付いて、解決する事が出来るのだろうか？

もしかしたら、異変には気付いても、原因である劣等感にまでは辿り着いてないかもしれない。何せ、生まれついてのエリートなのだから。少なくとも、魔法に関して他者と比べて、劣等感を味わった事は無いハズだ。それなら、解らないかもしれない。

「この事、やっぱ高町さん達に伝えた方がいいよな」

「ダメよぉ、そんな事したら」

案の定、水銀燈が反対した。

「何で？」

「どうせ教えるなら、インパクトが強い方がいいでしょう？」

楽しそうに笑っている水銀燈を見て、リンは顔を顰めた。

「水銀燈……一つ訊いていい？」

「何かしらぁ？」

「お前……絶対今の状況楽しんでるでしょう？」

「酷いわ、リン。人聞きの悪い事言わないでちょうだい」

絶対楽しんでるよ、とリンは思った。
そして後日、水銀燈も予想外のイベントが発生する事になる。

……まあ、ちったあスッキリ（前書き）

『リリカル銀魂』『魔法が使えない男』と書いてきましたが、ティアナの撃墜話を書くのは今回が初めてだったりします。

……まあ、ちったあスッキリ

リンは、空間シミュレーターに向かっていた。
これから早朝訓練の締めとして、それぞれの分隊での模擬戦が行われるのだ。
空間シミュレーターに向かうリンの胸中には、不安があった。モヤモヤとしていて、振り払えない気持ちの悪いモノだ。原因は勿論、ティアナの事だ。今日も体を小さくして胸ポケットに入ってる水銀燈に、まだ誰にも教えるなと言われたので黙っている。本当はなのは辺りに伝えた方がいいんだろうが、水銀燈が頑として許してくれなかったのだ。
何事も起こらなければいいけど、と願うリンの足は自然と早歩きになっていた。
今日の空間シミュレーターは廃墟で、その内の一つの廃ビルに入り、階段を上がっていく。高(たけ)ーな、と内心で愚痴りながら屋上を目指す。しばらく上がると屋上に続く扉が見えてきた。ドアノブを掴み、扉を押し開けると既に他のメンバーが居た。ヴィータ、エリオ、キャロ、それにフェイトの四人だ。
扉の開く音で、皆が振り向いた。

「おっ、来たんだ」
「はい。おはようございます」
「おはようございます」

ヴィータに声をかけられ、朝の挨拶をした。
フェイトやエリオ達から挨拶を受けて、リンは皆に混じって屋上の外を見る。廃墟の空には、何本ものウィングロードが敷かれており、その中心辺りにバリアジャケットを身に纏ったなのはの姿が見えた。

もう既に、模擬戦は始まっているようだ。

「ああ、もう始まってるんだ」

「今はスターズで、この後はライトニングの番だ」

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けるつもりだったんだけど」

ヴィータとフェイトが言うには、最近の訓練密度は濃いらしく、なのはは疲れが溜まっているらしい。そんななのはを気遣って、フェイトが模擬戦を引き受けようとしたのだが、デスクワークに思った以上に時間をかけて間に合わなかったそうだ。

そんな二人の話を、リンはふ～んとあまり興味なさげに聞いていた。それだったら、この模擬戦以降の訓練は、なのはの担当数を減らしてやればいい。なのはの疲労は、ソレで済む話だ。

しかし、下に居る少女――ティアナはそんな簡単な話では無い。

ティアナは足下にオレンジ色の魔法陣を展開させ、射撃魔法を使おうとしている。魔力弾の数から察するに、おそらくクロスファイヤーだろう。数はホテル・アグスタの時より減らしているが、複数の魔力弾操作となるとソレ以外に思い付かない。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータの呟きを聞いて、模擬戦を観戦してる皆の集中が増した。

「クロスファイヤーシュート！」

声を上げると同時に、ティアナの周囲に待機していた魔力弾が、空中に佇んでるなのはに向けて放たれた。

弾道を見て、ヴィータが顔を顰めて言った。

「ん？　何か、キレが無ぇな」
「コントロールは良いみたいだけど……」
フェイトも違和感を憶えたらしい。狙いは問題ないが、弾道に普段のキレの良さが見られない。
素人のリンには、イマイチ判断つかなかった。
飛行を続けるなのはは、ティアナの魔力弾の追跡を振り切ろうとしていた。速さと動きにキレが無いので、これなら容易に振り切る事が出来る。
この時、なのはもティアナの異変に気付いていた。ティアナの射撃は、いつも精密機械のように正確で、速さも動きのキレもあった。今までの訓練でも、たまにティアナの様子がおかしい事は薄々感づいていた。もしかしたら、ソレと関係があるのかもしれない。
模擬戦が終わったら、話をしようと思った時だった。
前方から、ウィングロードを走って向かってくるスバルの姿を確認した。それも、本物だ。
「フェイクじゃない……？　本物！？」
てっきりティアナの幻術魔法のフェイク・シルエットかと思っていたので、なのはは少し驚いた。
しかし、動揺も最初の一瞬だけで、すぐに桜色の魔力弾を生成して、発射した。
ソレに対してスバルは、右手を前に突き出して障壁を展開する。壁と弾が衝突して爆発が起こり、爆煙が生じる。灰色の爆煙の中を突っ切り、眼前に居るなのは目掛けて突っ込む。突進の勢いを乗せたスバルの突きと、素早く反応してなのはが展開した障壁が、激突する。拳と障壁の間で火花が散り、眩しい閃光を発する。
なのはが杖型デバイス『レイジングハート』を横薙ぎに振り抜き、スバルを弾き飛ばす。何とか別のウィングロードに着地して、スバ

ルは安堵する。

「コラ、ダメだよスバル！　そんな危ない軌道！」
「すみません！　でも、ちゃんと防ぎますから！」

スバルの声を聞いた時、なのはふと違和感を憶え、周囲を見回した。

「ティアナは何処？」

スバルに気を取られて、見落としていた。
視線を巡らす彼女の目に、一つの廃ビルの屋上でオレンジ色の光を見つけた。
二丁のクロスミラージュの銃口が輝き、サッカーボール並の大きさの魔力弾が生成されていた。
ソレを見て、フェイトが驚きの声を上げた。

「砲撃？　ティアナが？」
「え？　何かおかしいんですか？」

怪訝に思ったリンが尋ねた。
過去に、セイラが銃型デバイスで大型の魔力弾を放った事がある。
砲撃では無いが、同等の威力の魔法には違いない。
セイラとティアナに実力差があるとは言え、技術さえあれば出来ない事では無いだろうとリンは考えていた。
そんなリンに、フェイトが言う。

「訓練では精密射撃を続けてるから、まだ砲撃魔法は習って無いハズなんです」

となると、アレはティアナが自力で編み出した魔法だろう。
訓練で教えていない魔法、訓練と違う行動を取るティアナを見て、なのはは僅かに表情を険しくさせた。

（特訓成果……クロスシフトC！　行くわよ、スバル！）
「応！」

ティアナの念話に、スバルは力強い声で応える。
籠手型デバイス『リボルバーナックル』のカートリッジロードを一発行い、足に装着した『マッハキャリバー』でウィングロードを駆ける。加速するスバルは、再び正面からなのはに迫った。
正面突進のスバルに対して、なのはは誘導魔力弾『ディバインシューター』を放つ。降り注ぐ魔力弾の雨を、スバルは強引に正面突破する。スバルが右拳を突くと同時に、なのはは障壁で防御する。両者の魔法がぶつかり合い、再び小競り合いが始まる。ここまでは、さっきの再現だ。
スバルの攻撃を防ぎつつ、なのはは屋上に居るティアナにも意識を向けた。
すると、ティアナの姿が忽然と消えた。
観戦してる一同は驚く。

「あっちのティアさんは、幻影！？」
「本物は？」

エリオの言葉を皮切りに、一同は場を見渡してティアナの姿を探す。
場の皆があっちこっち視線を巡らせる中、ティアナはウィングロード上を走っていた。このまま行けば、ちょうど膠着状態のスバルとなのはの真上に着く。ティアナの手にある銃型デバイス『クロスミラージュ』の銃口には、魔力弾ではなく魔力刃が付いていた。遠

距離の彼女が、近距離での勝負に出たのだ。魔力刃で障壁を突き抜け、一気に叩くつもりだ。
ポイントに着いたティアナは、魔力刃を向け、落下するようになのはに迫る。

「レイジングハート……モードリリース」

蚊の鳴くようなマスターの呟きに、レイジングハートは応えて待機モードになった。
次の瞬間、なのは達が居た地点で大爆発が起こった。灰色の爆煙が立ちこめて、中の様子は全く見えない。
爆風は、観戦しているリン達にまで届いていた。

「なのは!?」

友人の身を案じて、フェイトが叫んだ。
爆風は収まり、爆煙も晴れていき、ぼんやりとだが中の様子が見えてきた。

「おかしいな……。二人とも、どうしちゃったのかな……？」

煙の中から、顔を僅かに俯かせたなのはの姿が見えてきた。
そして、彼女を見て驚きの顔で動きが固まっているスバルとティアナの姿も。
二人が驚くのも無理は無い。なのはは、素手でティアナの魔力刃とスバルの拳を掴み、受け止めていたのだ。魔力刃を掴む手からは、内側が切れて血を滴らせている。
なのはは、静かな声で続けた。

「頑張ってるのは解るけど……模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ。練

習の時だけ言う事聞くフリして、本番でこんな危険な無茶するなら、練習の意味、無いじゃない」

今のなのはは、明らかに普段と違う。淡々とした口調で、その豹変ぶりは恐れを抱いてしまう程だ。

そして、ティアナは自分の魔力刃を掴んで血を流すなのはの手を見て、短い声を漏らし、ショックを受けたように目を見開いた。

「ちゃんとさ……練習通りにやろうよ。ねぇ？」

「あ、あの……！」

顔を上げたなのはと目が合い、思わずスバルは後ずさってしまう。いつもと違う雰囲気に、気圧されたのだ。

それからなのはは、ティアナに顔を向けた。

「私の言ってる事……私の訓練……そんなに間違ってる……？」

哀しそうな顔で問われ、見つめられ、ティアナは身を震わせる。

ティアナは魔力刃を消して、跳び退いて離れたウィングロードに着地して、なのはから距離を取る。

「あたしは……！」

二丁拳銃をなのはに向けるティアナの目から、涙が流れていた。

「誰も傷つけたくないから……！　亡くしたくないから……！　だから、あたしは強くなりたいんです！」

涙を流す少女は、必死に自分の想いを声に出して伝えようとした。

「少し……頭冷やそうか」

しかし、少女の想いは届かなかった。
なのははティアナを右手で指差し、足下に魔法陣を展開させた。
右手の周囲に、複数の魔力弾が生成される。

「クロスファイヤー」
「うわあああああああああ！　ファントムブレイ――」

想いが伝わらなかったショックから、ティアナは引き金を引こうとした。

「シュート」

だが、なのはの魔法の方が速かった。
クロスファイヤーが放たれ、ティアナに直撃した。爆音と共に、ティアナの姿は煙に包まれる。

「ティア！」

すぐにスバルが駆け付けようとした。
しかし、桜色のバインドによって体を拘束されてしまう。

「バインド！？」
「ジッとして……」

スバルの耳に、酷く冷めたなのはの声が聞こえた。
見ればなのはは、周囲に新たな魔力弾を生成して待機させていた。

「よく見てなさい」

晴れていく煙の中から、ティアナの姿が見えてきた。直撃を受けた事で、体が左右にフラついている。意識も朦朧としてる感じだ。
そんなティアナに冷たい眼差しを向けたまま、なのはは指先に魔力弾を集束して、大型の魔力弾を作った。
ソレを見た瞬間、スバルは目を見開いて高い声を上げた。

「なのはさん！」

しかし、スバルの呼び止めも虚しく、砲撃は発射された。
そして、二度目の直撃を受けたティアナは、撃墜された。

「ティアァァァァァァァァ！」

スバルの悲痛な叫びが、廃墟に響き渡った。
観戦してる一同は、何も言わず、動かず、ただ黙って見つめているだけだった。
その中で、リンは溜め息をついた。ウンザリ。本当に、もうウンザリだ。
幸い、彼の軽蔑の溜め息は誰にも気付かれなかった。
しかし、

「ふふふ……」

彼よりも厄介な人物が、

「あーはっはっはっはっはっ！」

大笑いを上げた。
突然上がった大笑いに、一同は弾かれたように顔を向けた。

屋上には、いつの間にか普通サイズに戻った水銀燈が、場の空気や周りの事など一切気にせず、笑っていた。大口を開けて、それはもう愉快そうに。

笑い続ける水銀燈を見て、リンの顔色がサーッと蒼くなった。

「オイッ！　何笑ってんだよ!?」

水銀燈の笑いにキレて、ヴィータが怒鳴った。

ヤバいと思い、顔色を悪くしたリンは何とかごまかそうとする。

「あ、ああっ！　きっと、さっきの爆風で頭がおかしくなっちゃったんじゃないかな!?　うん、多分そうですよ！　じゃあ、僕、水銀燈を医務室まで連れて行きます！」

「あっ！　オイッ、待て！」

ヴィータの制止を無視して、リンは水銀燈を抱えて屋上を出た。

逃げるように、いや、実際リンは逃げていた。水銀燈の笑いで、明らかにヴィータ達は不快な思いをしていた。言わば、アウェーだ。とてもじゃないが、居合わせられる空気では無かった。

必死に階段を駆け下りて、廃ビルを出た。切らした息を整え、キッと水銀燈を睨む。

「お前は、何考えてんだァァァ!?　あんな衝撃場面見た後で笑うなんて、おかしいぞ!?　空気が読めないなんてもんじゃないぞ！」

「ふふふ。だって、笑わずにいられなかったんだもの」

リンの怒鳴りを受けても、水銀燈は笑顔のまま動じない。

「何であんな馬鹿笑いしたんだよ?」

「貴方が軽蔑した理由と同じよ。私にとって、ソレが軽蔑ではなくおかしな事と捉えただけ」

水銀燈の言葉に、リンは言葉を詰まらせた。笑いこそしなかったが、軽蔑したのは確かだ。

さっきの軽蔑の念まで、水銀燈は見抜いていたようだ。

「それにしても、思った以上に楽しませてくれたわぁ。ふふ」

この女は悪魔だ、とリンは思った。

＊

リンと水銀燈は、誰も居ないロビーに居た。

結局、ティアナが目を覚ましたのは夜の九時を過ぎた頃だった。

なのはに撃墜されたダメージに加え、今まで皆に黙って続けていた自主練の疲れもあって、熟睡していた。死んでるんじゃないか、と思うくらいにだ。それでも、後遺症や目立った外傷も無いので、とりあえず一安心した。付き合いが殆ど無い他人とは言え、目の前であんなモノを見せられたら、嫌でも心配してしまう。

ティアナが無事な事には安心した。

しかし、今回の一件で、ますますココに居辛くなった。ミッドチルダに来てから、気分の悪い事ばっかりが続いている。リインフォースとの再会は嬉しい事だったが。

リンは、憂鬱な溜め息をついた。

「こんな気分になる為に、ミッドに来たんじゃないんだけどなぁ……」

リンの中には、後悔の念も少しあった。
もし、水銀燈から聞いたティアナの劣等感を、なのは達に早く教えておけば、今回の件は未然に回避出来たかもしれない。水銀燈に口止めをされ、グズグズ引き延ばした結果がコレである。ティアナに対して、申し訳ない気分になっていた。
一方、隣に座ってる水銀燈は、普段と変わらない様子で缶コーヒー・ブラックを飲んでいる。時々、彼女の性格を羨ましく思う。
その時、隊舎内でアラームが鳴った。事件発生――おそらく、またガジェットとやらが現れたのだろう。
隊舎の中は慌ただしくなり、局員が行き交う。その中には、隊長、副隊長陣やフォワードメンバーも見られた。ロビーを通って外に行き、少し離れたヘリポートに向かっていった。壁はガラス張りになっている為、ロビーからでも外の様子が見える。リンは壁際に座ってるので、少し身をよじって外の様子をうかがう。ヘリの前で、何やら話をしている。多分、出動内容の確認か何かだろう。
そう思った時、突然シグナムがティアナを殴り倒した。

「えっ!?」

思わずリンは声を上げて、目を丸くした。

「ちょっ……教導官の高町さんだけじゃなく、シグナムさんまで何してるんだよ!?」
「ふふふ。また面白い事になってるわね」

隣に居る水銀燈も、いつの間にか外の一同の様子を見ていた。
なのは達はヘリに乗って出動して、外にはシグナムとフォワード四人が残された。そこへ、茶髪で眼鏡をかけた局員、シャリオ・フィニーノ――通称シャーリーが現れ、会話を交わして一同を連れて

ロビーにやってくる。
ロビーに入ってくると、シャーリー達が近付いてきた。

「すみません。これから大事な話をするので、少し席を外してもらえませんか？」
「はあ……」

言われてリンは、腰を浮かせた。
すぐに場を離れるつもりだった。
しかし、ティアナが殴られた事が気になり、歩みを止めて一同に振り返った。

「あの……」
「何だ？」

遠慮がちに声をかけると、シグナムが答えた。
凛とした顔つきの彼女と目を合わせ、ティアナを殴った映像が脳裏を過って少しビビる。が、何とか質問を口にした。

「さっき、ソコから見えたんですけど……何でランスターさんを殴ったんですか？」
「駄々をこねていたのでな。少し灸をすえてやっただけだ」

シグナムの返答を聞いたリンは、自然と溜め息をついた。何回目かになる、軽蔑の溜め息だ。
その溜め息は、今度は場に居る者に知られた。癪に障ったようで、シグナムは眉根を顰めた。

「何だ？　言いたい事でもあるのか？」
「え？　ええ、まあ、はあ……」

鋭い睨みを利かせて、尋ねてくるシグナムにリンは気だるげに声を返した。
かぶりを振り、リンは呟いた。
「いいですよね……上司は暴力を振るえる立場で」
「何だと？」
リンの爆弾発言に、シグナムの顔が険しくなる。
途端に、二人の間に険悪な空気が生まれた。シャーリーやフォワードの四人も、下手に口出し出来ずに固唾を飲んで見守っている。
その中で、水銀燈だけが可笑しそうに見ていた。
重い沈黙を破ったのは、シグナムだった。
「言いたい事があるなら、ハッキリ言え」
「はい。言いますよ」
怯えながらもリンは、正面からシグナムを見つめ返して続ける。
「見た通り、僕は小心者なんで、他人に意見するなんて事は殆どした事ありません。でも、そんな小心者でも、我慢の限界があるんですよ」
震える足で、精一杯の虚勢を張るリンに、水銀燈から念話が入った。
（リンも怒る事があるのねぇ）
（……水銀燈、もしかして俺がこうなる事狙ってた？）
（さあ、どうかしらぁ？）
（……一度くらい、サシで勝負するか？）

＊

海上に現れたガジェットの撃墜を終えたなのは達が、ヘリに乗って帰還した。

ヘリポート付近で待っていたシャーリーが、彼女達を迎え、事情を説明してロビーの一角に案内した。ソコには、リン、水銀燈、シグナム、フォワードの四人、それから後からやってきたリインフォースとシャマルも加わっていた。

ティアナとなのはは、目を合わせるなり気まずそうな顔になった。思わず、ティアナは顔を逸らしてしまう。なのはは特に何も言わず、フェイトとヴィータと共に空いてるスペースに座った。

全員が揃ったところで、シャーリーが説明を始める。リンからの意見は、その後だ。

「昔ね、一人の女の子が居たの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、闘いなんてするような子じゃなかった……」

操作パネルを叩き、一同に見えるように大型モニターを展開した。映っているのは、小学三年生の高町なのはだ。

「友達と一緒に学校に行って、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るハズの子だった。だけど、事件が起こったの」

映像を使ってのシャーリーの説明が続いた。

普通の日々を過ごしていたある日、なのはレイジングハートを持って傷付いた魔導師、ユーノ・スクライアと言う少年と出会う。

彼は、街に散らばったジュエルシードと呼ばれるロストロギアを回収する為に来たのだ、しかし、封印作業の途中で怪我を負ってしまい、たまたま魔法の素質があったなのはに協力を仰いだ。魔法の才能に目覚めたなのはは、手伝いではなく自分の意思でジュエルシード集めを決意する。そんななのはの前に現れたのは、フェイトだった。彼女もまた、ジュエルシードを求める魔導師だった。互いに譲れないモノを胸に、二人は何度も命懸けの実戦を繰り返した。

そして、さほど時を置かずに次の闘いが起こった。リン達も最後のみだが関わった事件――『闇の書事件』だ。当時はシグナム達も敵として立ちはだかり、初の敗北を喫したなのはとフェイトは、勝つ為に当時まだ安全性が危うかったカートリッジシステムを起用した。

事件が終結し、管理局に入局して二年目の冬、今まで無茶を続けてきたなのはは、負担の溜まった体で動きを鈍らせてアンノウンの攻撃を受けて、命の危機に瀕してしまう。復帰不可能と宣告されたが、半年の辛いリハビリを経て回復する。

シャーリーとシャマルによる説明が終わり、シグナムが後を継いだ。

「無茶をしてでも、命を懸けてでも、譲れぬ闘いの場は確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を懸けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったのか？」

シグナムの問い詰めに、ティアナは答えられない。

「訓練中のあの技は、一体誰の為の、何の為の技だ？」

たま、ティアナは答えられない。

シグナムの一言一言が、心に重く乗りかかる。今までの自分の失敗の光景が、脳裏を過る。

「なのはさんは、皆に自分と同じ思いをさせたくないんだよ。だから、無茶なんかしなくていいように、絶対絶対、皆が元気に帰ってこられるようにって……本当に丁寧に一生懸命考えて教えてくれてるんだよ」

シャーリーが静かに語り終えて、説明は終わった。

フォワードメンバーは、なのはの教導の意味を理解して黙っていた。

メンバーの顔を一瞥して、シグナムが言った。

「こちらからの説明は以上だ。お前の意見を聞こう」

すると、場に居る全員の注目が一斉にリンに集まった。

注目の的となったリンは、少々緊張した様子でおもむろに口を開いた。

「その前に……一つだけいいですか？」

「何だ？」

シグナムから目を逸らし、リンはなのはと顔を合わせた。

「高町さん、貴女どうして『教導の意味』を皆に言わなかったんですか？」

「え？　そ、それは……言わなくても、皆解ってくれると思って……」

いきなり話を振られ、戸惑いつつもなのはは答えた。

するとリンは、

「ああ……そうですか。はい、解りました」

アンニュイな口調で返事をした。

そんなリンの態度が癪に障ったようで、シグナムやヴィータが顔を顰め、不快感を露にする。

一方、水銀燈は先ほどから笑いを堪えていた。顔を俯けて、皆には悟られないようにしている。

「ええっと……何から話そうかな……」

少し逡巡して、リンは話の順番を整理した。ややあって口を開き、話しだした。

「あの、隊長や副隊長の皆さんはランスターさんだけが悪いみたいな事言ってますけど、高町さんにも落ち度はありますよ？　誰も指摘してませんけど、二発の過剰攻撃は勿論、さっきの説明にも出てきた『教導の意味』――コレをもっと早くフォワードの皆に話しておくべきだったと僕は思います。だって、別に隠す事じゃないですよね？　だったら、入隊の時とか、訓練前とかにでも前もって話してもいいんですよ。大事な事なんですから。本当に皆の事を想ってるなら、事前に話しておくべきです。他人は自分じゃないんですから、何か言うなり行動を起こさないと、意味なんか解りっこないですよ。コレが、高町さんの落ち度その1。

その2は、ランスターさんの事情を解ってなかった事です」

「ちょっ……ちょっと待って下さい」

ここでなのはが話を遮った。

こちらが話終える前に、早くも反論かと身構えるリンになのはが言う。

「ティアナの事情は知ってたよ。亡くなったお兄さんの魔法の強さを証明する為に、ティアナは自分を傷つけるような無茶をしようとした」

ああ、そういう事か、とリンは内心ホッとした。てっきり、落ち度1に対する反論かと思っていたが違った。そこら辺は、本人も自覚したのかもしれない。

それに、今のなのはの意見は言い返せる。元々、これから説明するところだった。

「いや、違うんですよ。高町さん達は、“知っている”だけで“理解”はしてないんです」

「どういう事だよ？」

言ってる意味が解らない上司メンバーの中から、ヴィータが訊いてきた。

「“知ってる”のと“理解”とじゃ全然違います。例えるなら、本の表紙は知っているが、中身を読んでいない。そんな感じです。皆さんは、ランスターさんが無茶をする理由の表層面だけ見て知ってますが、その奥の方は見向きもしないで理解はしてないんです。

つまり、感情、気持ちの問題です。ランスターさんの場合は、劣等感です。隊長や副隊長の皆さんは、優秀過ぎるんですよ。その『優秀過ぎる優秀さ』が、ランスターさんの劣等感を増幅させて、無茶な行為に拍車をかけてるんです。少なくとも上も下も周りも優秀揃いの中で、とんでもないプレッシャーを感じてたハズです。僕はランスターさん本人じゃないし、お兄さんの件も知りませんけど、概ねこんな感じだと思います。そう、本人に訊かなきゃ解らない。コレが、高町さん、いや、皆さんにも当てはまる落ち度2です」

言い終えると、上司メンバーの反応は困惑してたり、とりあえず頷いてたりと様々だった。まあ、今まで苦労はしてきただろうけど、劣等感を味わってこなかった上司メンバーに、すぐに理解しろと言っても無理かもしれない。

リンは話を続けた。

「高町さん側の落ち度3。コレは当然ながら、模擬戦に見せた過剰攻撃です」

「待って下さい」

声を挟んだのは、またもなのはだ。

いちいち話を途中で止めないでほしい、とリンは心中でウンザリする。

「アレは、私だって好きでやったんじゃありません。……無茶をしたらどうなるか……どんなに危ない事か……ソレを解らせる為に、仕方なく……」

「いや、他にやり方があったでしょう？　さっき言ったばかりですよね？　教導の意味を前もって皆に話しておくべきだった、ランスターさんの事情を理解しておくべきだった、と。そうしてれば、何もあんな暴力行為に出なくてもよかったかもしれないんです」

「暴力行為？」

「暴力行為ですよ。百歩譲って、最初の一発だけならギリギリ体罰。でも、明らかに度を超えた行為は教導でも体罰でもない、ただの暴力です。ランスターさんは必死に叫んで想いを伝えようとしたのに、貴女は全く耳を傾けようとしないで、力で黙らせた。

ああ、そうそう。力で黙らせると言ったら、シグナムさんの鉄拳制裁も同じ単なる暴力ですよね」

「何？」

シグナムの顔が、更に険しくなる。
気圧されたリンは体が硬直した感覚を憶えたが、何とか言葉を口にした。

「だってそうじゃないですか。シグナムさんだって、ランスターさんの事情を本当の意味で理解なんかしてなかった。だからランスターさんの意見に全く耳を貸さないで、力で黙らせて従わせた。しかも、高町さんやシグナムさんはランスターさん達の上司です。上司と新人の上下関係じゃあ、ランスターさん達が逆らえるハズもない。これじゃあ、暴力振るい放題。シグナムさんの暴力行為は、暗に『上司は部下に暴力を振るって良い』と認めてるようなものなんですよ」

話を聞き終えたシグナムは、より一層表情を険しくさせた。射抜かんばかりの鋭い眼光を、リンに向けている。反論してこないのは、思い当たる節があるからだろう。
リンは顔を逸らして、シグナムの目から逃げた。

「つまり、皆さんの事前の対処次第じゃあ、ランスターさんの暴走は止められてたって事です。ソレをしなかった、皆さんにも責任があるんです」

ああ、それと、とリンはまだ話を続ける。

「この説明会も、正直言ってあまり気持ちの良いモノじゃないですね」
「どういう事ですか？」

疑問の口を開いたのは、会を開いたシャーリーだった。
小心者のリンの心臓は、緊張でいまだ早鐘のように高鳴っていた。

「正直、あの過去の映像を見てから、僕はウンザリしてました。何だか、同情を誘ってるような、姑息さが感じられたんですよね。高町さんの過剰攻撃には一切触れないで、重い過去話で皆を引きこんで……正直、気分悪くてウンザリしました。

それに、もし僕がランスターさんだったら、あの映像を見たら余計に落ち込みますね。だって、まだ九歳ですよ？　九歳の女の子が、月日もそんなに経たない内に集束魔法やら色々凄い事をしてる場面を見せられたら、こう思いますよ。『ああ、あの歳で凄いな。今の自分なんか、あんな派手な集束魔法を撃つなんて絶対出来ない。やっぱり自分は駄目なんだ』って。幸い、ランスターさん本人や他のメンバーも今言ったような感想は抱いてないみたいですけど、下手をしたら、ただ単に『才能の差を見せつける』だけで、劣等感を増幅させる危険な行為になってましたよ。まあ、僕は魔導師じゃないので、魔法に関する劣等感は無いですけど。

その可能性は考えなかったんですか？」

「そ、それは……」

シャーリーは困惑の顔を逸らして、口ごもった。その反応だけで、考えてなかった事が容易にうかがえる。

彼女の返答を待たずして、リンは次の話に移った。

「それから、コレはランスターさんの件とは全く関係無いんですけど……高町さん」

「え……？　あっ、はい」

呼ばれると思って無かったらしく、なのはは慌てて返事をした。

「高町さんのバリアジャケットって、何であんなドレスなデザインなんですか？」

「え？　何でって、ソレは……」
「今着てるような、ちゃんとした制服があるのに、何であんなヒラヒラしたデザインなんですか？　正直、機能性を考えてもそんな良いモノじゃないと思うんですよね。
　ぶっちゃけると、アレを見た瞬間、僕は引きました。子供の頃なら、まだいいですよ。魔法と言う未知の存在に出逢って、興奮して、ああいうデザインにした気持ちも、解らないじゃない。でも、大人になって仕事であの恰好はＮＧだと思うんですよね。ふざけてるのかって思われますよ？　ああいう恰好で仕事が許されるのは、フィクションの世界だけです。現実であんな恰好で仕事されると、ドン引きです。少なくとも僕は。せめて趣味にとどめてほしいです。
　それともう一つ……」

　ソコで一旦言葉を切り、リンはリインフォースに顔を向けた。幸い、彼女に機嫌を損ねた様子は見られない。他の上司と比べて、比較的楽に声をかける事が出来た。

「リインフォースさん。また同じ質問ですみません。ホテル・アグスタの任務は、“潜入”じゃなくて“警備”ですよね？」
「え？　ええ、そうですが？」
「ありがとうございます」
「何が言いたいんですか？」

　答えを得ると、なのはが訊いてきた。

「何で隊長の三人は、ドレスを着て中に入ったんですか？」
「え？　ソレは、中の警備の為に……」
「ああ、すいません。言い方が悪かったですね。僕が訊きたいのは、“何でドレスを着たのか”って事です」
「ソレは、オークション会場内で、違和感のない恰好で警備した方

がいいと思って……」

なのはの答えを聞いたリンは、呆れたような顔をした。

駄目だ。この部隊の隊長陣は、仕事の本質が見えていない。

「“潜入任務”なら、変装って手段も納得出来ますよ？　潜入って言うのは、敵の懐に潜り込む危険な任務ですからね。変装は必須条件。

でも、“警備任務”は違う。警備って言うのは、事件が起きないようにする仕事です。なら、ホテルではドレスなんかより制服のまま入って警備に当たるべきです。警備員が、何で制服を着てるか解りますか？　自分が警備員である事を、アピールしてるんです。高町さん達は、結構有名な魔導師なんですよね？　だったら身分なんか隠さないで、制服で堂々と警備した方が万が一会場に居る犯罪者への大きな牽制になると思いませんか？　つまり、貴女達がドレスを着たのは、全くの無意味って事です。

正直、あの時もウンザリ……いえ、軽蔑してました」

ドレスを着ていたなのはとフェイトは、目を大きく見開いて固まっていた。この場に、はやても居合わせていたら、同じ反応をしていただろう。

一呼吸置いて、最後にリンは言った。

「えー、僕からは以上です。何か反論とかありますか？」

誰も、何も言わなかった。

リンの隣では、水銀燈が小さな肩を震わせていた。

＊

話を終えた後、リンと水銀燈は機動六課隊舎を出た。
とてもじゃないが、居座れる場所では無い。今日までの衣食住の礼として、五百万を置いていき、隊舎の外に出た。
鞄を肩から提げ、隊舎敷地内を歩くリンは、顔を上げた。夜空には、宝石のように輝いてる沢山の星が見える。

「あ～、面白かったわぁ」

不意に、耳元で声が聞こえた。
鞄を提げてる右肩とは反対の左肩に、水銀燈が座っていた。

「私の出番が無くなったのは、ちょっと残念だったけど……ふふ、でも、面白いモノが見れたから満足よぉ。悔しいのに言い返せないあの子達の顔……ふふふ、笑いを堪えるのが、とっても大変だったわぁ」

心底可笑しそうに、しかし声を殺して水銀燈は笑う。
一方、リンはげんなりと溜め息をついた。

「俺は全っ然楽しくなかったよ。寧ろ恐かったよ。シグナムさんに睨まれた時は、マジで殺されるかと思ったもん」
「でも、スッキリしたでしょう？」
「……まあ、ちったあスッキリ」

機動六課との、短い生活は終わった。

＊

ある男が、部下を部屋に集めていた。
皆、黒服に身を包み、サングラスをかけてギャングのような出で立ちをしている。軍人のように直立不動で、沈黙を守っていた。数は、およそ二十人と言ったところだ。
部下を前にして、男は興奮した声を上げた。

「いいざんすか？　今回の仕事は、今まで以上に気を引き締めて取りかかるざんすよ！　もし、情報の物（ぶつ）が本物なら、間違い無く莫大な金が手に入る！　まさに、一攫千金ざんす！　失敗は許されないざんすよ！　勝負っ！　商売っ！　大商売っ！
必ず手に入れるざんす！　金のなる木！　『聖王の器』を……！」

再会を祝して、私とゲームでもしましょう……！

誰にも所在が知られていない研究所（ラボ）で、一人の男がモニターを前に佇んでいた。

男の名は、ジェイル・スカリエッティ。機動六課の捜査線上にも挙がった、広域次元犯罪者だ。紫色の髪、年の割には整った綺麗な顔立ち、白衣を羽織った科学者の出で立ちをしている。

彼の前に展開されているモニターには、女性の姿が映っている。スカリエッティの秘書であり、彼が造り上げた作品――戦闘機人『ナンバーズ』の一員で、名前はウーノ。ウェーブのかかった薄い紫色の長髪、創造主と同じく金色の瞳、首元には『?』のナンバーが彫られたループタイを締め、制服を着こなした出来る美人秘書だ。

そのウーノは、映像越しにドクターに報告をしていた。

『機動六課を出てから、今日で二週間になりますが、依然として二人の足取りは掴めていません』

「そうか。ふーむ……残念だね。是非とも、彼女の事を念入りに調べたかったが……」

残念そうな素振りをするが、さして落ち込んだ様子は無い。

ウーノは報告を続ける。

『ですが、首都を出たところは確認していないので、おそらくまだクラナガンに残っていると思われます』

「それなら、いずれ見つかる可能性もあるだろう。解った。御苦労だったね、ウーノ」

『いえ』

スカリエッティが捜しているのは、水銀燈とリンの二人である。

いや、正確に言えば、彼の興味を引いてるのは水銀燈だけで、魔導師でも無いリンにはさして関心も無い。以前、公園に出現したガジェットを水銀燈が破壊した事がある。装甲や能力を向上させたガジェットのテスト動作で、ソコにたまたま現れたのが水銀燈とリンだ。その時、ガジェットを殲滅させた水銀燈に興味を抱いたのだ。

しかし、六課と仲違いしたリンと共に姿を消して、行方が掴めない状態が続いている。

見つからないモノはしょうがないとして、スカリエッティは話題を変えた。

「それはそうと、今日は例のマテリアルが届く日だったね」

『はい。こちらに届き次第、本物かどうかの検査を行います』

「くくく……！　楽しみだねぇ！」

端正な顔が、狂気に歪んだ笑みに変わった。

＊

機動六課の隊舎を出てから、二週間。

ミッドチルダの首都・クラナガンにリンと水銀燈は居た。隊舎を出てから二人はホテルに泊まり、街中で何か異変が無いか歩き回っていた。

しかし、これと言った異変は見当たらず、街はいたって平和そのものだった。何の当てもないまま、毎日街中をブラブラと歩くだけで、新しい情報の入手等の進展は全くと言っていい程に無い。だいたいにして、今回は前もっての情報が少な過ぎる。『事件の真相を世間に明かせ』と依頼されても、その事件が何なのか解らないんじゃあ調べようがない。加えて、リンは捜査官では無い。その辺に転

がってる石っころのような、何処にでも居る凡人だ。捜査能力、情報収集能力など皆無に等しい。勿論、水銀燈もだ。
手元にある情報は、スカリエッティ、レリック、ガジェットと偶然にも機動六課で得た三つのみ。ガジェットの事は、しばしばニュースで報道されているが、別段特別な事は流れていない。
完全に手詰まり。

「あ～、ダリ～」

歩き疲れたリンは、公園のベンチに座り込んだ。
肩に提げている鞄を膝の上に置き、中からペットボトルを取り出す。キャップを外して、中身の炭酸飲料水を喉に流し込む。

「まいったな～。二週間歩き回って、収穫ゼロだよ」
「無駄骨だったわねぇ」

水銀燈が肩に座り、猫なで声をかけた。
疲れた顔で、リンはかぶりを振った。

「こんな事なら、機動六課に残ってるべきだったかな」
「今更そんな事言ったって遅いわよぉ」
「……ですよね」

機動六課を出た事を、リンは少し後悔した。
別に、あの部隊に愛着があったり、隊長陣に申し訳なく思ってる訳では無い。機動六課を出た事で、情報を得る場所を失ったからだ。
隊長陣は未熟者揃いだったが、曲がりなりにも管理局と言う巨大組織の一部隊だ。それなりの情報は流れ込んでくるだろうし、スカリエッティ等の情報は機動六課で得た。気まずさを我慢して居座り続けていれば、何かしらの情報を得られたかもしれない。

しかし、無理だった。とてもじゃないが、リンにはアソコに居る事が我慢出来なかった。

「難儀なモノだ」

呟き、ペットボトルを鞄の中にしまった。
背伸びをしながら、大きな欠伸を一つかいた。

「あ〜、マジ疲れた。水銀燈、ちょっと休憩していい？」
「男のクセにだらしなぁい」
「お前と違って、俺はずっと足で動いてるんだぞ？　ほぼ毎日歩き回ってたら、そりゃ疲れるって」

言う事がキツい水銀燈に、リンは気だるげに言い返した。
すると、水銀燈は肩から離れ、宙に浮いてリンの正面に移った。

「仕方ないわねぇ。私が起きてるから、貴方は休んでなさい」
「ありがとう」

礼を言って、リンは目を閉じた。暖かい日差しの効果もあって、ウトウトしてきた。

「おやすみなさぁい。良い夢見るのよぉ」

眠りに落ちる寸前に、あまり聞かない水銀燈の優しい声を聞いた。

――間抜けな寝顔ねぇ。
リンの寝顔を見て、水銀燈はクスリと笑った。それから鞄をどかして隣の空きスペースに置き、自分は彼の膝の上に座った。

特に何をするでもなく、公園の風景を眺めている。公園には、親と戯れてる子供、デートを楽しんでるカップルと沢山の人の姿が見られる。その光景は、平和一色だった。

眺める事に早くも飽きた水銀燈は、溜め息をついた。退屈だ。平和なのはいいが、水銀燈にとっては少々物足りない環境だった。リンは眠っていて弄れないから、退屈を凌ぐ事が無い。鞄には漫画と携帯ゲーム機が入っているが、短期間で同じ物ばかり扱ってると嫌でも飽きてしまう。

どうしたものか、と悩んでいた時だった。

「小さなお姉さん！」

「ん？」

不意に声をかけられ、水銀燈は顔を向けた。

ベンチの近くに、幼い男の子が居た。

「私に何か用かしらぁ？」

「うん。あのね、コレをお姉さんに渡してって」

男の子は、手に持っている白い紙を差し出した。

水銀燈が受け取ると、用を済ませた男の子はさっさとベンチから離れてしまった。呼び止めようかと思ったが、どうせ大した事は聞けないだろうと考えてやめた。受け取った紙は、白い封筒だった。手探りで危険が無いか確かめ、封を破る。中に入っていたのは、折り畳まれた一枚の紙だった。取り出して開いてみると、文字が記されていた。

紙に記されている文章を読み、水銀燈は目を見開いた。すぐに動揺は消え、険しい顔で公園内を見回す。特に怪しい人物は見られない。

それから公園内の時計に目を向け、時間を確認すると寝ているリ

ンに声をかける。

「リン。起きなさい」

「ん……ん～」

眠りが浅かったのか、水銀燈の一言でリンは目を覚ました。暢気に欠伸をかき、背伸びをする。

「何……？」

「立ちなさい。移動するわよ」

「え……？　え？」

リンは慌てて鞄を持ち、説明も無しに公園の出口に向かう水銀燈の後を追った。

＊

「ねぇ、水銀燈。何処に行くんだよ？　その手に持ってる紙は何？　そろそろ教えてよ」

行き先を尋ねるリンだが、前を飛んでる水銀燈は黙ったままだ。答えようとしない。

諦めの溜め息をついて、リンは質問を断念した。

しばらく黙って水銀燈に従って歩いていけば、人気の無い道路に出た。賑やかな場所から少し離れてるからか、普段の利用数が少ないのか、通る車は一台も見当たらない。道路の先には、地下道に続くトンネルが見える。

「こんな所に来てどうするの？」
「さあ？」
「さあって……」

訝るリンに、水銀燈は持っている紙を見せた。

「何じゃこりゃ？」

紙に書かれてある文章を見て、リンは眉根にシワを寄せた。
ミッドの文字で文章は書かれてあるので、地球出身のリンには、何て書いてあるのか皆目解らない。ちんぷんかんぷんである。
しかめっ面でリンは尋ねた。

「何て書いてあるの？」
「指定の時間までに、ココに来なさいと」
「何で？　誰から？」
「さあ？」
「さあって……」

最後に、さっきと同じ会話をした直後だった。
突然、トンネル内から大きな音が鳴った。重い物が倒れたような派手な音で、思わずリンは驚きに身を震わせ、目を大きく見開いた。
そのまま音源のトンネルを凝視する。

「な……何今の音？」
「さあ？　行くわよぉ」

全く動じてない水銀燈は、トンネルに入ろうとした。
水銀燈の行動に、リンは眉を顰めた。

「え？　行くって、あの中に？　マジで？」
「ええ。私達の仕事に関係あるかもしれないでしょう？」
「はいはい、分かりましたよ」

彼女の性格から、止まらない事を察してリンは渋々ながら後に続いた。
トンネルの入り口を通り、地下道に入る。音が収まった地下道の中は、静寂の空間になっていた。オレンジ色の淡い光が照らす中を、リンは足音を殺して進む。只事で無い事を察して、緊張で心臓の鼓動が早まる。
入口からそれなりに離れた地点で、横転したトラックが見えてきた。その時、前を飛んでる水銀燈が手で制して進行を止めた。
声を抑えてリンが尋ねた。

「どうしたの？」
「魔力持ちの人間が、四人居るわ」

優れた魔力探知能力を持つ水銀燈は、トラックの陰に隠れて見えない人物を捉えていた。
リンも目を凝らして見ると、トラックの側に二、三人居るのを視認した。薄暗くて確認し辛いが、長い髪から察するに女性だと思われる。
水銀燈が静かに言う。

「ココに居なさい」
「え？　いいけど、何するの？　ねぇ、何するつもり？」

問い掛けるリンだったが、トラックに近付いていく水銀燈の後姿を見て、何をやらかす気か薄々感付いていた。

リンを後ろに残して、水銀燈は横転してるトラックに近付いた。
すると、周辺に居た三人の黒服が気付いた。サングラスをかけているが、長い髪やミニスカート等から女性である事が判った。

「こんな所で何をしてるのぉ？　私も仲間に入れてちょうだぁい」

笑みを浮かべて水銀燈が声をかけると、三人は動いた。
待機状態を解いて、拳銃型のデバイスを素早く構えて一斉射撃してきた。迫りくる緑色の魔力弾を、水銀燈は顔色一つ変えずに巨大化させた黒い翼で難なく防御する。普通とは違う防御法に、攻撃を放った黒服の女達は驚く。その隙を逃さず、水銀燈は羽の矢を射る。

「うあっ！」
「ああっ！」
「うぅ……！」

動揺して防御が遅れた三人の黒服は、羽の矢の直撃を受け、呻き声を上げて倒れた。
異変に気付いた残りの一人が、トラックの荷台の陰から飛び出て、同じく発砲をした。
水銀燈は、今度は防御をせず、翼を龍に変えた。弾丸を喰らいながら、黒服の女に迫る。逃げようとする黒服の女を口で捕え、そのまま壁に突進して背中から叩き付けた。

「ぐえっ……！？」

黒服の女は意識を失い、グッタリと動かなくなる。
龍を引くと、黒服の女は地面に倒れ伏した。
片付けた水銀燈は、後ろを振り返った。

「もういいわよぉ」

響く猫なで声を聞いて、リンは恐る恐る近付いた。

まず、トラックの側に倒れてる三人の黒服の女が目に入った。薄暗くて死んでるように見えるが、膨らんだ女性独特の胸は、静かに上下運動をしている。三人共、水銀燈の攻撃を受けて気を失ってるようだ。サングラスをかけて顔はよく見えないが、美人である事は判った。上から下に視線を流して、大股で開いてる足に辿り着く。スカートの丈が短く、セクシーな美脚を露にしている。

黒服の美脚に目を奪われてると、水銀燈の不機嫌な声が聞こえた。

「……いつまで見てるのかしらぁ？」

「え？　ああ、ごめん。ああ、そうだ。運転手見てくるよ」

ごまかすように、トラックの運転席を見に行った。

割れた正面の窓から中を覗くと、運転手が見えた。

「あの、大丈夫ですか？」

呼びかけるが、返事は無い。

中を覗いてた顔を出して、水銀燈を呼んだ。

「水銀燈！　ちょっと手を貸してくれない？」

「仕方ないわねぇ」

水銀燈の手を借りて、運転手を外に運び出した。額から少量の血を流しているが、重傷では無い。呼吸もしていて、気絶してるだけだ。

死人がいない事に、とりあえずリンは一安心した。

それから倒れてる黒服の女を見て、水銀燈に訊く。

「この人達何なの？　何コレ？　何がどうなってんだ？」

「ソレをこれから調べるのよ」

答えた水銀燈は、トラックの荷台に回った。

困惑しながらリンも行く。

「その紙に書いてないの？」

「無いわぁ」

荷台のドアの前で立ち止まる。

ドアには、無理矢理こじ開けようとした傷跡が残っていた。状態を確認した水銀燈は、翼を操ってドアに伸ばし、取っ手を掴む。

リンは、苦笑いでかぶりを振った。

「いや～、水銀燈ソレはヤバいって。この倒れてる人達が、積み荷を狙ってたのは解るけど、だからって俺達が開けなくても……」

しかし、水銀燈は聞く耳持たずでドアを無理矢理こじ開けた。

あ～あ、とリンは頭を抱えた。

そして、中にあるモノを見て顔色を変えた。トラックの荷台には、予想外のモノが入っていた。

子供だ。綺麗な金色の長髪に似合わないボロボロの服を着ている女の子が、倒れている。年齢は、十歳未満と言ったところか。しかも、それだけじゃない。

幼い女の子の体に、とんでもない物が取り付けられていた。

ソレは、爆弾だった。

「はは……何だコレ？」

思わずリンの口から、乾いた笑いが漏れる。
正方形の箱型で、真ん中には試験管のような物が付いており、三本のコードが伸びて本体に繋がっている。中身は、半透明の緑色のエネルギーのようで、不気味な感じがする。試験管の上には、デジタル時計式のタイマー装置があり、『０５：００：００』と表示されたまま止まっていた。
リンは、この爆弾が本物であると、直感的に悟った。
顔を蒼ざめるリンの隣で、水銀燈は冷静に言った。

「爆弾ね」
「そうだな……。馬鹿で間抜けな俺でも、爆弾だって一目で解る爆弾だな……」

その時、気絶してる女の子の隣に小型モニターが出現した。

『久しぶりね。二人共、元気そうで何よりだわ』

モニターに映ってる女性が、挨拶した。
画面を見て、声を聞いて、リンと水銀燈は顔を強張らせた。

『あら？　どうしたの？　折角の再会なのに、嬉しくないのかしら？』

長い金髪、獣のような瞳、黒い眼帯で隠された右目。
その女性は見間違えるハズも無く、過去の依頼で、水銀燈とリンが相対した悪魔――黒岩セイラだった。
狂気染みた笑みを浮かべ、悪魔は静かに言う。

『再会を祝して、私とゲームでもしましょう……！』

魔法世界で、ついに悪魔が誘(いざな)う。
選択賭博――『三色(さんしょく)』！

嵌められた……！

モニターに映る因縁の相手――黒岩セイラの顔を見て、蒼ざめていた顔が更に驚愕の表情になった。

傍に居る水銀燈も、目を鋭くさせてセイラを忌々しく睨む。手に握る手紙を、感情に任せてグシャッと握り潰す。手紙の送り主が何者なのか、コレでハッキリとした。いや、予想が確信に変わったと言った方が正しい。差出人不明とは言え、このミッドチルダで自分達に手紙を寄越す人物など限られている。機動六課の連中は、差出人不明なんて手紙を寄越す訳が無い。性格的に考えて、あり得ない事だ。

そうなると、残る候補は一人しか居ない。ミッドチルダでリン達の存在を知っていて、名無しの手紙で誘い込むなんてやるのは、過去に因縁を持つセイラだけだ。

昔の屈辱を顔に出るのを抑え、水銀燈は余裕を見せる笑顔を作った。

「ゲームですって？　いいわよ。早く出てきなさい。決着をつけましょう」

『そう慌てないでちょうだい』

挑発する水銀燈に対して、セイラは冷静だ。その冷静さが逆に不気味であり、右目を覆う眼帯がより一層引き立たせている。不老のロストロギアの効果で、潰された右目以外に外見の変化は無い。

彼女の左目は、リンに向いた。

『貴女の前に、まずはリンよ』

「お、俺……？」

指名されたリンは、自分を指差して困惑する。
どうして水銀燈では無く、自分を相手に選んだのか解らなかった。
直接セイラを叩いたのは水銀燈であり、この場には居ないが互角の勝負を演じたのは上司の春香だ。相手が、殺し合いを愉しむ狂人なのは解っている。だからこそ、凡人の相手をしようとするセイラの考えが、理解出来なかった。
疑問に思うリンに、セイラは美しくも恐れを抱かせる笑みを浮かべて言った。

『簡単なゲームよ。貴方達の前に、爆弾を取り付けられた幼い女の子が居るでしょう？　タイマーに表示されてる五分以内に、その爆弾の起爆装置を解除しなさい。解除の仕方は、目の前にある三本のコードの内の一本を切る……それだけよ。でも、逃げようとしたり、時間を過ぎたり、間違ったコードを切った場合は、アウト――爆発するわ。管の中で超振動を起こして、魔力エネルギーを爆発させるの。威力は半径二キロ程よ。
選択賭博（せんたくゲーム）『三色（さんしょく）』……！　どうかしら？　シンプルだけど、スリルあるでしょう？　そして、このゲームの参加者はリン、貴方だけよ』
「俺だけ!?」
『ええ。もし、水銀燈が助言や手助けした場合も、即爆発する事になるわ』

ルールを説明するセイラは、愉しそうに口元を歪めた。
対して、リンの顔色はどんどん蒼くなっていった。このままだと蒼白になりそうだ。
セイラの言った事は、嘘やハッタリでは無い。過去に直接会って、彼女の狂気を感じた事があるリンは確信した。
この女は、やると言ったら、やる。
感情が昂ってきたようで、セイラは例の舌舐めずりをした。

『さあ、ゲームを始めましょう！　幸運を祈ってるわ……！』

台詞を言い終えると、モニターは消えた。

同時に、デジタル時計のカウントダウンが始まった。一秒刻みで、どんどん数字が減っていく。

死のゲームが始まった。

「ちょっ……待っ……！　嘘だろっ！？」

開始と同時に、リンは頭を抱えて取り乱す。その場を離れる事が出来ないので、荷台前を落ち着き無くうろつく。

次第に恐怖よりも、自分をこんな状況に嵌めた事に対する怒りが湧いてきた。

「ああっ！　くそっ！　あの女ふざけんなよ！？　美人だからって、何でも許されると思うなよ！　半径二キロの爆弾？　マジふざけるなだよ！　何が魔力はクリーンなエネルギーだよ！　プレシアさんの研究事故に殺傷設定、何より俺自身がそのクリーンなエネルギーで何度も死にそうな目に遭った！　今もだ！

ココから生きて出れたら、絶対訴えてやる！　ココの裁判所に行って、魔法と魔力の危険性を全力で訴えてやるよ、チクショー！」

冷静さを失って、怒り任せに地下道内に声を響かせる。

その時、リンは後頭部を強く叩かれた。

「痛っ……！　何するんだよ！？」

声を荒げて振り返った先に居たのは、水銀燈だ。追い詰められた状況で取り乱すリンとは対照的に、彼女は顔色一つ変わっていない。

「ギャーギャー五月蠅いわよぉ。愚痴を叫んでる暇があったら、どれが解除コードか考えなさぁい」
「何でそんな冷静なの？　何でこんな状況で、冷静でいられるの！？」
尚も取り乱すリンを、水銀燈は紅い瞳で見つめ、言った。
「貴方を信じてるからよ、おばかさぁん」
「俺を信じてる……？」
水銀燈の言葉に、リンは感情の高ぶりが鎮まった。
あれだけ恐怖と怒りが荒れ狂っていた胸中が、急に落ち着いてきた。熱が下がってきた頭の中で、水銀燈の言葉を反芻する。
溜め息をつき、頭を掻いて少女に付いてる爆弾と向き合う。
「解ったよ……！」
一言返して、リンは解除コード探しに知恵を絞り始めた。
残り時間、三分四十秒。
落ち着け、落ち着け、と自分に言い聞かせる。心臓の鼓動は、飛び出そうな程に高鳴っている。倒れてる少女の体を、静かに、ゆっくりと起こす。少女の体に触れてる手が、爆弾に対する恐怖で震えている。手の震えを抑えるように両手を合わせ、深呼吸をして三本のコードを注視する。
確認出来るコードは、赤、青、緑の三本だ。この中から解除コードを探り当てて、制限時間内に切らなければ爆発してアウトになる。
どれだ？　どれなんだ？
皆目見当もつかず、気だけが焦って再び冷静さを失っていく。何度も何度も、三本のコードを見比べる。だが、見ているだけでは、

ヒントも何も掴めない。電圧だか電流を計る計器でもあれば、三本のコードの違いが判るのだろうが、生憎とそんな便利な道具は持ち合わせていない。

自分の勘、運で選択するしかないのだ。

焦るリンの前で、刻々と時間は過ぎていく。

――ああ、くそっ！　解んねぇ！　コードの違いなんて、色しかねーじゃねーか！

残り時間、二分三十秒。

その時、迫る制限時間と恐怖で鈍った頭の中で、ある違和感が生じた。

――そう言えば、何で“三本”なんだ……？

今まで観てきたドラマや読んできた漫画では、爆弾の選択コードは大抵“二本”だった。それも、色は赤と青で統一されている。自分の中の爆弾知識と比べると、目の前の爆弾のコードは本数や色の違いがある。

フィクションの情報が必ずしも基本とは言わないが、どうにも気になる。もしかしたら、コレが突破口かもしれない。三本と言う数と、赤、青、緑の三色がヒントになってるのかもしれない。そう考えたリンは、僅かながら冷静さを取り戻して思考を働かせた。

しかし、どう考えても、この数と色が示す答えが見つからない。手掛かりが少な過ぎる。

色の三原色？　信号機の色？　好きな色？　嫌いな色？

もう何が何だか、サッパリ解らない。答えの見つからない疑問と、過ぎて行く僅かな残り時間に頭の中はパンク寸前まで追い詰められていた。

「だあああああ！　ちくしょう！　皆目解らねぇ！」

イラつきを我慢出来ず、リンは頭を掻き乱して声を荒げた。

残り時間が、二分を切った時だった。

「ん……」

金髪の少女が、小さな声を漏らした。
今のリンの叫び声で、目が覚めたようだ。
幼い少女の瞼が、ゆっくりと開かれる。少女とリンの目が合う。

「や、やあ……」
「ひっ……！」

とりあえず声をかけてみると、少女は怯えた様子で少し身を引いた。目には涙を浮かべて、今にも泣き出しそうだ。
――んだよ。そこまで怯えなくてもよくね？
少女の反応に心を傷つけ、溜め息をついた時だった。
ハッと何かに気付き、リンは弾かれたように顔を上げた。いまだ怯えた表情の少女の、ある一点を凝視する。
残り時間は、一分三十秒。

「あ、あああああああああああ！」

少女の顔を見て、驚きの発見をする。
突然、目の前のリンが驚愕して大きな声を上げたので、少女の体がビクッと小さく跳ねた。
見つけた。探し求めていたコードの答えを、この追い詰められた状況で見つけた。
だが、しかし、とリンは躊躇する。本当にコレで当たってるのだろうか、と不安になる。頭の悪いリンは、自分の考えに自信を持てず、決断に迷う。その間にも、時間は無情に過ぎていく。
残り時間は、ついに一分を切った。
迷うリンの脳裏で、先ほどの水銀燈の言葉が過った。

貴方を信じてるからよ、おばかさぁん。
水銀燈の奴、普段は突き放す事しか言わないクセに。心中で毒づくが、彼女の言葉が決断を後押しした。

「ええい！　コレだっ！」

選んだ一本のコードを掴み、硬く目を閉じて引き千切った。
心臓の鼓動は更に速まり、心中は凍りつく。
爆発は、起きなかった。
物音一つしない地下道の静けさに、リンは恐る恐る細目を開ける。目の前には、薄らとデジタル時計がぼんやりと見える。更に大きく開けて、視界をハッキリさせた。
デジタル時計の数字は、『００：４９：００』で止まっていた。
死のカウントダウンが、止まった。

「はっ……」

停止したタイマーを見て、短い声を出す。

「と……止まった……？」

汗を何筋も流して、リンは呟いた。その目には、零れかけてる涙の粒が溜まっている。

「やれば出来るじゃない」
「す、水銀燈……？」

強張った顔で、リンは後ろを振り向いた。首の動きはぎこちなく、油の切れたロボットのような様だ。
振り向いた先には、笑ってる水銀燈の顔があった。彼女の声を聞

いて、笑顔を見て、ようやく生き残った実感が湧いてきた。極限の緊張状態から解放され、水銀燈に抱き付く。

「やったァァァァァ！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！　水銀燈、俺……俺ぁやったよォォォォォ！」

「男の子のくせに泣いちゃって、情けないわねぇ」

抱きつかれた水銀燈は、嫌な顔をせずに受け止めた。生還に歓喜してボロボロと涙を流し、安心から体を震わせているリンの頭を撫でてやった。

リンが千切ったのは、真ん中にある『青』のコードだった。

残り時間が一分三十秒になる寸前、リンはある発見をした。

ソレは、少女の瞳だった。なんと、少女の瞳は『赤』と『緑』のオッドアイだったのだ。この瞳の二色は、三本のコードの内の二本と同じなのだ。その時、少女の目と同色である二本のコードは、目の前の少女の命綱を表してるのではないか？　と考えた。『赤』と『緑』の二つを消去法で消すと、残るコードは真ん中の『青』となった。

勿論、偶然と言う可能性も考えた。

しかし、手掛かりが殆ど無い中で見えた、答えらしい答えだった。無策の運で挑むより、暗闇の中で見つけたか細い“理”に賭ける方を選んだのだ。

そして、リンは賭けに勝った。もし、少女が途中で目を覚まさなかったら、間違ったコードを切っていたかもしれない。まさに、九死に一生を得た。

水銀燈に抱き付いて泣き続けてると、不意に拍手の音が、地下道内に響いた。

リンは体を離し、二人は音の出所に顔を向けた。

『ふふふ。クリアーよ。生還おめでとう』

少女の隣に、セイラが映ったモニターが復活していた。画面の中で、笑みを浮かべて拍手をしている。
死にかけたリンは、表情を険しくさせた。
水銀燈が前に出て、モニター越しの彼女と向き合う。

「ゲームは貴女の負けよ。さあ、早く出てきなさい」
『慌てないでと言ったハズよ。ゲームはまだ終わってないわ』
「何ですって？」

水銀燈が目を細めると、ガチャンと何かが外れる音がした。
何事かと身構えたリンは、金髪の少女に付いてたベルトが外れてるのを見た。爆弾が外れて、少女も解放された。
すると、セイラが愉しそうに言った。

『今からリモート操作で、爆発させるわ』
「はあ！？」とリン。
『リモート操作で爆破するまでの時間は、十秒よ』
「はああ！？」とさっきよりも大声を出すリン。
『それじゃあ、また会いましょう』

モニターが消えると、デジタル時計の表示が『００：１０：００』に変化した。
そして、再び一秒刻みで数字が減り始める。

「ちょっ……ヤバっ……！」

慌てふためくリンの目に、怯えた様子の少女の姿が入った。
咄嗟に手を伸ばして、少女の腕を掴んだと同時に、足下から輝く青い光に包まれた。

＊

視界が戻ると、目の前には青い空と近未来的な都市が広がっていた。

「コ、ココは……？」

落ち着かない様子で、リンは周囲を見回した。何処かの高層ビルの屋上らしく、周りには人の姿は見当たらない。

「地下道から二キロ以上離れたビルの屋上よ」

傍に居る水銀燈が答えた。

どうやら、水銀燈の転移魔法で咄嗟に地下道を脱出したようだ。

ホッと安堵するリンは、右手に何か掴んでるのに気付く。見ると、あの金髪の少女が居た。記憶を辿って、咄嗟に腕を掴んだのを思い出した。今にも泣きそうな顔をしているが、特に外傷は見られない。

全員無事な事に、改めて安堵の溜め息をつくリンとは対照的に、水銀燈は険しい顔つきをしていた。苦虫を噛み潰したように、彼女が言う。

「またやられたわ」

「え？」

「何処にも煙が立ってない。つまり、爆発なんて起こってないのよ」

言われてリンも、街全体を見渡した。

水銀燈の言う通り、爆発が起こった形跡が見られない。街は相変

わらず平和一色で、煙すら立っていない。残り時間を考えれば、もう爆発してていいハズだ。なのに、その形跡が無いと言う事は、リン達が地下道を脱出して、爆破する寸前に操作を中断したのだ。

「はぁ～！　何だよソレ？　意味解んねぇ……」

脱力感に襲われ、リンはその場に座り込んだ。

隣では、金髪の少女が、不安げな表情でリンを見つめていた。

ややあって、小さな口を動かして言った。

「だ、大丈夫……？」

「え？」

声をかけられ、リンは少女に顔を向けた。

少女は両手を顔の前に置いて、こちらの様子をうかがうように見ていた。

恐がらせないように、リンは努めて笑って答えた。

「ああ、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

すると、少女の顔が少し、ほんの少しだけ綻んだ。リン達に対する怯えの気持ちが、少し払拭されたらしい。

リンも、少女が警戒を緩めた事を嬉しく思った。少し気を許してる内に、自己紹介をする事にした。

「俺はリン。こっちは水銀燈。キミの名前は？」

「……ヴィヴィオ」

少女との距離が縮んだ一方で、水銀燈は厳しい顔で考え込んでいた。何故、爆破しなかったのか疑問に思う。まるで、“自分達を地

下道から追い出そうとした”ような作為が感じられた。
そんな彼女の思考を遮ったのは、耳に届いたニュースだった。
街中に展開された大型ディスプレイで、女性ニュースキャスターが報道をしていた。

『えー、先ほど届いた緊急情報です。地下道を走っていたトラックを襲撃して、積み荷の子供を連れ去る事件が発生しました』

ニュースを聞いた水銀燈が顔を向け、リンも「え？」と大型ディスプレイに目を向けた。

『こちらが、地下道の監視カメラが捉えた犯人の映像です』

映像が切り替わり、オレンジ色に照らされた地下道の様子が映し出された。
オレンジ色の薄暗い地下道で、トラック運転手を気絶させ、荷台のドアをこじ開ける二人組。一人が荷台の中に入り、出てくる時には何かを抱えている。二人組の映像が、アップで映される。黒髪に冴えない顔の男、長い銀髪に黒いドレス衣装のような格好をした小柄の少女が、顔もハッキリと映し出されていた。男の腕には、金髪の幼い少女が抱かれている。
映像を見たリンは、驚愕して目と口を大きく開く。

「こ……これは……！」
「……嵌められたわ！」

忌々しげにディスプレイを睨み、水銀燈は顔を歪めた。
リンと水銀燈は、セイラの策略で誘拐犯に仕立て上げられてしまった。

＊

「何やってるざんすか！？」

一人の男が、声を荒げた。

場所はトラックが横転した地下道に通じるトンネルから、少し離れた森林の中である。周りに屈強な体格の黒服の男を従わせ、部下からの報告を待っていた。

しかし、届いたのは目的の物（ぶつ）の確保失敗の報告だった。

部下の失態に激怒した男は、歯を剥いて怒鳴り散らす。

「このクズ！　ドクズがっ！　今回の物は、今までの商品とは質そのものが違うざんすよ！　特定の人物に売り付ければ、それこそ一生遊んで暮らせる大金が手に入るざんすよ！　ソレを、お前等は逃したざんす！

捜せ！　邪魔する奴は、女子供誰であろうと殺せ！　そして見つけ出して、私の所まで持ってこい！」

男は命令を飛ばして、部下を動かした。

＊

「嵌められた……！　ど、どうするの水銀燈？」

犯罪者に仕立て上げられ、リンは狼狽（うろた）えていた。

「このまま街に残ってたら面倒だわ。とりあえず、ココから離れる

わよ」

その場を離れようと、水銀燈が転移魔法を発動させようとした時だった。

「待ちなさい！」

突然、空から鋭い声が降ってきた。

聞き覚えのある女の声に、リンは嫌な予感を抱きながら頭上を見上げた。目に飛び込んできたのは、白と黒の飛行物体だった。猛スピードで接近してきて、挟み撃ちするように屋上に降りたのは、機動六課のなのはとフェイトだった。二人共バリアジャケットを纏い、手にはデバイスを持って構えている。

「高町さん！　ハラオウンさん！」

現れた二人を見て、リンは名前を口にした。

駆け付けるのが、随分と早過ぎる。おそらく、局員であるセイラが事前に指示を出していたのだろう。

「リンさん……」

「水銀燈……」

なのはとフェイトは、それぞれ辛そうな顔をしていた。

あんな別れ方をした後で、こんな再会をしたので、場には気まずい空気が漂っている。

「リンさん、水銀燈さん。その子をこちらに渡して、一緒に機動六課まで来て下さい」

「いや……いやいや、ちょっと待って下さい、高町さん！　僕らは、

誘拐なんかしてないんです！」
「それじゃあ、その子供はどうしたんですか？」
リンの足にしがみ付いて離れないヴィヴィオを目線で指して、なのはが尋ねた。
「それは……深い事情がありまして……」
ロビーで対決した時とは打って変わり、元の弱腰で言葉を濁すリン。
すると、今度はフェイトが口を開いた。
「事情があるなら、尚更です。私達が話を聞きます」
フェイトの言葉に、リンは逡巡の表情を浮かべた。
他はどうか解らないが、機動六課ならそう手荒な真似はしないハズだ。それに下手に逃げ回るより、おとなしく言う通りにして話をした方が利口である。
いや、駄目だ。
すぐにリンは、自分の意見を否定した。カメラの映像と言う物的証拠がある以上、管理局は疑いを消さない。必ず逮捕に踏み切ってくる。機動六課の人達が信じてくれても、他も信じてくれるとは限らない。
そうなると、残された手段は一つしかない。そう考えに至った時、水銀燈が言った。
「ねぇ、貴女達」
「何ですか？」
「まだあの部隊で、隊長と教導をしてるのかしら？」

現状と関係無い質問に、なのはとフェイトは不審に思った。
構わず水銀燈は続ける。

「もし、まだ続けてるんだったら悪い事は言わないわぁ……大きな失敗をする前に、辞めなさぁい」
「え！？」

なのはとフェイトが、同時に目を見開いた。

「どういう意味ですか？」
「そのままの意味よぉ。貴女達に、隊長と言う地位は早過ぎて重過ぎるし、教導なんて向いてないわぁ」

小馬鹿にしたような水銀燈の発言に、なのはは顔を険しくさせ、フェイトも厳しい顔つきに変わる。
嫌な予感を抱くリンを他所に、水銀燈は言葉を続ける。その顔は、イジメを愉しむ子供の顔だった。

「だってそうでしょう？　リンも指摘した通り、ハッキリ言って貴女達は組織の人間としても、上の立場の局員としても、未熟だわ。警備の意味を履き違えて暢気にドレスアップしたり、自分の優秀さが教え子に劣等感を植え付けてる事に気付かず、挙句の果てには精神的に追い詰められてた教え子を撃ち落とす非情な行為に出た。仕事の本質を理解せず、教え子の心の機微に疎くて……可哀そうなティアナ達に同情するわぁ。優秀過ぎる自分の存在が、教え子にとって決して超えられない壁になってると考えた事は無い？　無いわよねぇ……だって、才能あるエリートの貴女達に格下の気持ちなんて解らないんだから。うふふ、とても人の上に立つ器じゃないわぁ。
ハッキリ言うわよ。貴女達は、魔導師としては優秀だけど、隊長や局員としては最低だわぁ」

容赦の無い水銀燈の暴言に、なのはとフェイトの顔は、どんどん険しくなっていった。デバイスを掴んでる手にも、自然と力が入る。

コレは、水銀燈の策だった。相手を挑発して、冷静さを欠如させる心理操作術である。勿論、教え子のスバル達はなのは達の事を『決して超えられない壁』だなんて思っていない。コレは、水銀燈の嘘である。しかし、上司として、局員としての未熟さは事実である。

なのはとフェイトの雰囲気が、どんどん悪くなっていくのを察して、リンはオロオロするばかりだった。

悔しさに顔を歪める二人に、見下した笑みを向けて水銀燈が言う。

「あら？　恐い顔なんかして、どうしたのかしら？　ああ、本当の事を言われて怒ってるのね？」

「水銀燈さん……今は、そんな話をしてる場合じゃありません。貴女達は、誘拐犯になってるんですよ？」

感情を押し殺した声で話すなのはに、水銀燈は更に追い打ちをかける。

「真実を見る目も無いのねぇ。やっぱり貴女、隊長を――いいえ、局員なんて辞めちゃいなさぁい」

侮辱の言葉を吐き続ける水銀燈に、なのはは目を鋭くさせて、歯を食いしばる。

「水銀燈！　いくらなんでも言い過ぎだよ！」

なのはの代わりに、フェイトが声を上げた。普段は心優しい彼女が、この時は親友を罵倒されて鋭い眼光をぶつけている。

ソレに少しも怯む事なく、水銀燈は不敵な笑みで返す。

「なら、どうするの？　ティアナの時みたいに、自分の事を否定した私を撃ち落とす？　暴力を正当化出来る立場に居るんですものね。そうやって貴女達は、結局は暴力で解決するのよねぇ。リンに指摘された後なのに、全く反省してないなんて……おばかさぁん」

最後の「おばかさぁん」には、リンに向ける時のような親しみは一切無く、言葉通りの侮蔑の念がこもっていた。

言葉のニュアンスから、フェイトもその意を感じ取った。端正な顔が、怒りを露にした険しい表情になる。

なのはも、我慢してる感情が爆発しそうだ。

そんな二人を見て、水銀燈は黒い翼を広げた。

「いいわよぉ、来なさい。多分、この様子もニュースで流れるんでしょう？　だったら丁度いいわぁ。貴女達が使えない子（ジャンク）だって事を、ミッド中の人達に教えてあげるわぁ」

「……お前、自分が『ジャンク』って言われるのは嫌がるクセに、相手には容赦無くジャンクジャンク言うよな。――ぐわあああああああああああああ！」

水銀燈の言葉に、ボソッと呟きを漏らしたリンの両目に二本の黒い羽が突き刺さった。絶叫のような悲鳴を上げ、やられた両目を押さえて地面に倒れた。

「目がぁ……目がァァァァァァ！」

「お兄さん！」

目を押さえて悶えるリンと、彼を心配するヴィヴィオを放っておいて、水銀燈は不敵に笑う。

「さあ、始めましょう！」

管理局のエース・オブ・エース＆金色の閃光　対　漆黒の堕天使の対決が始まる。

“一兎を追って二兎を得た”（前書き）

相変わらず、戦闘描写は苦手です。
やっと今回で一区切り。

“一兎を追って二兎を得た”

高層ビルの真上で、水銀燈となのは、フェイトによる戦闘が繰り広げられていた。

なのはとフェイトは、普段の任務では『能力限定』をかけており、魔導師ランクを下げている。『能力限定』とは、その名の通り能力を制限するリミッターである。

しかし、今の二人は『能力限定』が解除されていた。その証拠に、なのはのバリアジャケットはデザインが少し変化している。エクシードモードと呼ばれる状態だ。

解除権限は、限定された対象の上司に委託されるのが普通なのだが、今回は違った。彼女達の限定解除を命じたのは、『無階級局員』のセイラだった。局内でもトップに等しい地位と権限を持つ彼女が、独断で限定解除の命を下したのだ。ついでに、二人の居所を掴んで機動六課に知らせ、ビル周辺の住民を速やかに避難させ、リン達を誘拐犯と言う犯罪者に仕立て上げたのも、全てセイラの計画である。全ては、水銀燈達となのは達を闘わせる為だ。

そして目論み通り、彼女達の戦闘が始まった。更に都合が良い事に、他のフォワードメンバーは突如現れたガジェットの群れと交戦中で、邪魔は入らない。

能力を解放したなのは達は、空戦Ｓ＋ランクと言う高い実力を発揮して水銀燈に挑んでいた。

砲撃タイプのなのはは一定の距離を保ちつつ、アクセルシューターに砲撃魔法を混ぜて攻撃している。

接近戦に特化してるフェイトは、鎌の形状に変化させたデバイス『バルディッシュ』で水銀燈と接近戦を演じていた。なのはが撃ってくるタイミングに合わせ、離脱と接近戦を繰り返す。

一方、二対一と言う不利な状況でも、水銀燈は一歩も引かずに渡り合っていた。

「はああっ！」

フェイトがバルディッシュを横薙ぎに振るい、金色の線を引く。迫る金色の鎌を、水銀燈も魔力刃を備えた剣で受け止めた。衝突の際に火花が生じ、刃を弾く。更にフェイトは斜めから斬りかかり、黒の翼を羽ばたかせて水銀燈は身を引き、斬撃を避ける。

直後、自分に接近してくる魔力を感知して、咄嗟に翼を大きくして盾にした。ほとんど間を置かずに、翼の外側で桜色の爆発が生じる。なのはが、アクセルシューターを撃ったのだ。

「ハーケンセイバー！」

すかさずフェイトは、バルディッシュを縦に振り下ろし、金色の魔力刃を飛ばす。

回転しながら飛んでくる魔力刃を、水銀燈は剣で弾き飛ばした。翼のガードが開いた瞬間、なのはが動いた。

「バスター！」

離れてレイジングハートを構えていたなのはは、桜色の砲撃――ディバインバスターを放つ。小さな頃から使用してきた、なのはの得意魔法だ。

「はあっ！」

なのはの砲撃に対して、水銀燈は慌てず翼を龍に変えて迎え撃つ。砲撃と龍の突進が激突して、空に衝撃が広がる。両者の力は拮抗して、激しい火花と閃光を発する。やがて、砲撃は打ち消され、龍も頭部が吹き飛び、攻撃は相殺された。

自分の砲撃が相殺された事に、多少驚くものの、なのはは気を引き締めて戦闘に集中する。

一方、水銀燈は考えていた。彼女の中で、負ける気は一切無かった。なのは達がどれ程強くて優秀な魔導師だとしても、水銀燈も自分の実力に絶対の自信を持っている。なので、負ける不安はこれっぽっちも無い。だが、彼女には数や実力とは別の問題を抱えていた。

ソレは、契約者であるリンの体力の限界である。弱い魔法なら、契約者の体力をあまり必要としないが、なのは達のような超一流の魔導師相手となると、それなりに強い魔法を使わなければならない。セイラ程では無いとは言え、魔導師ランクSの二人を相手にすると言う事は、単純に考えてSSランクと闘ってるのと同じ。下手に闘いを長引かせず、早めに決着をつけたい。水銀燈らしくもなく、リンを気遣っていた。

一方で、なのは達も心中では動揺していた。

――水銀燈さん……強い！

なのは達が攻め続け、水銀燈はほぼ防戦一方となっている。だが、その実、二人の攻撃は一度も決まっていない。水銀燈はかすり傷すら負わず、無傷の状態を保っていた。

本気を出して、それも二人掛かりで一度も攻撃が決まっていない事に、なのはとフェイトは動揺していた。

今のままでは、埒があかない。

勝負を決める為に、二人は少々乱暴な手段に出る事にした。

「はあああああ！」

再びフェイトが、バルディッシュを構えて水銀燈に斬りかかる。

水銀燈も剣を振り、迎え撃つ。金色と青色の魔力刃が交わり、小競り合いが始まる。

フェイトは、この時を待っていた。

次の瞬間、水銀燈の体を金色のバインドが拘束した。ほぼ零距離

でのバインドで動きを封じられ、水銀燈は目を見開く。

「はっ！」

「くっ！」

フェイトが刃を振り抜き、水銀燈は身を引いた。

しかし、一瞬フェイトの動作が速く、水銀燈は体に斬撃を受けてしまう。回避行動は起こしていたので、なんとか軽傷で済んだが、黒のドレスは破れ、傷跡を作った肌を晒した。

忌々しげに水銀燈が睨むと、フェイトが言った。

「動きを封じられた今、貴女に勝ち目はありません。もう降参して下さい。コレ以上、貴女と闘いたくない」

「一撃入れたくらいで、勝った気にならないでくれる？　それに、この程度の拘束は、ちょうどいいハンデだわ」

強気に言葉を返す水銀燈に、投降の意思はまるで無かった。

フェイトは、チラッとなのはに目配せした。仕方ないと言った風に、なのはは縦に頷き、フェイトも頷き返した。出来る事なら穏便に事を済ませたかったが、相手が抵抗の意思を捨てないのならば、仕方ない。

フェイトとなのはは、水銀燈を挟んだ前後の位置に着く。眼前にそれぞれ金色の魔法陣と桜色の魔法陣を展開して、砲撃魔法の準備をする。手荒な手段とは、砲撃で意識を昏倒させて捕える事だった。フェイトの左手に、レイジングハートの先端に魔力が集約されていく。

「トライデント――」

二回のカートリッジロードを行い、

「スマッシャァァァァ！」

魔力を溜めた左手を、眼前の魔法陣に突き出す。

次の瞬間、魔法陣から金色の閃光が放たれた。紫色の放電を纏い、縦に並んだ三本の砲撃が宙を翔ける。

「エクセリオン――」

なのはもカートリッジロードを一回行い、

「バスタァァァァァァ！」

極太の砲撃を発射する。その魔力量と大きさは、先ほどのディバインバスターを上回っていた。

挟み撃ちの形で、水銀燈に二つの砲撃が迫る。

「水銀燈！」

下の屋上で見ているリンは、たまらず大声を上げた。

拘束された状態では、回避は不可能。

翼を盾にしても、防御ごと巻き込まれて墜とされてしまう。

誰もが、そう思っていた。少なくとも、撃った本人の二人は。

しかし、この時、誰も気付いていなかった。

まるで、この砲撃を待っていたかのように、悪魔が笑った事に。

砲撃が当たる寸前、水銀燈（あくま）が動いた。

両の翼を伸ばし、左右から迫りくる砲撃に向ける。だが、伸ばした翼は盾に変化せず、力に逆らわずに添える感じで砲撃の側面に触れた。ピタリと添えられた翼は、根元から微妙に向きを捻り、変化させる。すると、翼に沿うように二つの砲撃は軌道を変えて、水銀

燈の前後を通過した。まるで、翼をレール代わりに走る列車のような動きだ。

「嘘っ！？」
「嘘っ！？」
「嘘ォォォォォォォォ！？」

水銀燈の巧みな砲撃誘導に、なのは、フェイト、リンの順に驚きの声を上げた。
砲撃の軌道をズラされ、交互に返されて驚くも、なのはは障壁を展開して防御しようとする。
フェイトも同じように、防御態勢に入ろうとした。
その時だった。

「プレシアは生きてるわよ！」
「っ！？」

水銀燈の言葉に、フェイトは目を見開いた驚愕の顔で動きが止まった。
彼女にとって、『プレシア』と言う単語は特別な意味を持つ。故に、動揺を誘う効果は抜群で、心に隙を作った。そして心の隙は、肉体的隙となって表に現れた。
障壁を展開しようとした手の動きを、止めてしまったのだ。

「フェイトちゃん！」

なのはの呼び声で、ハッと我に返るフェイトだったが既に遅かった。
桜色の閃光は、フェイトの姿を飲み込んで爆発を起こした。
砲撃を防いだなのはは、目の前に起こった事態を愕然とした顔で

見ていた。水銀燈を拘束していたバインドは消え、たちこめる煙の中から墜ちていくフェイトの姿を捉えた。直撃を受けて、意識が弱っているようだ。

「フェイトちゃぁぁぁぁぁぁん！」

目に涙を溜め、泣き叫ぶような声でなのはは親友のもとに飛んだ。

二人の姿を、水銀燈は笑顔で見下ろす。最も残酷な形で、二人に勝利した。

なのは達を放っておき、リンとヴィヴィオが居る屋上に降り立った。

何事も無かったかのように、水銀燈は言った。

「さあ、早くココから離れるわよ」

転移魔法を発動させる水銀燈の前で、リンは顎が外れそうな程に口を開き、唖然としていた。

＊

「何やっとんじゃお前はァァァァァァァァ！？」

正気に戻ったリンの第一声に、水銀燈はやかましそうに顔を顰めた。

場所は人気の無い路地裏。ヴィヴィオは、怒った様子のリンに怯えながらも、彼のズボンを掴んでいた。。

「何よぉ？　そんなに怒鳴らなくてもいいでしょう」

「いや、怒鳴るわ！　さっきの何？　何でプレシアさんの事、ハラオウンさんに暴露してんの！？」

唾を飛ばしそうな勢いで、リンは声を荒げる。

砲撃の弾道を逸らすなんて高等技術にも驚きだが、ソレ以上に衝撃を受けたのはフェイトを動揺させる為に水銀燈が言った言葉だった。あろうことか、プレシアが生きている事を告げたのだ。

フェイト・T・ハラオウンが、プレシア・テスタロッサが造り出した人造魔導師である事は直接話を聞いて知っていた。ミッドで彼女を見た時は、相手に悟られなかったが、かなり驚いた。フェイトがプレシアの『もう一人の娘』のような存在なだけに、ロビーでの対決では気まずさを伴っていた。

怒りで興奮を高まらせてるリンに、水銀燈は普段の調子で言う。

「別に構わないでしょう？　隠し事なんていずれバレるモノだし、あの子が私の言葉を信じるかも解らないんだから」

「そうじゃなくて！　動揺を作る為に利用したのが、ヤバいっての！　この事知ったら、プレシアさん怒るぞ！？」

「バレなければいいのよ」

水銀燈に、反省の心は全くうかがえない。

この世界に来てから、ますます悪（ワル）に磨きがかかっていた。

何を言っても無駄と悟り、リンは溜め息をついた。

緊張した場から抜け出て、気分が弛緩し切った時だった。

突然、一発の銃声が鳴った。

体を強張らせたリンの前で、水銀燈の体が後ろに反れる。何が起こったのか解らない、と言うような唖然とした顔で、水銀燈は自分の体を見た。フェイトの刃を受けた傷跡に、新たな傷が出来ていた。丸い穴が空いている。

直後、続けて二発の銃声が鳴り、水銀燈の体に弾丸が撃ち込まれ

た。弾丸は全て、肌を晒したドレスの裂け目に命中していた。
茫然としてるリンとヴィヴィオの目の前で、水銀燈は地面に倒れた。
突然の出来事に麻痺した脳は、ようやく水銀燈が撃たれた事を理解した。

「水銀燈！」

声を上げて駆け出した直後、

「がっ……！」

後頭部を強く殴られ、前のめりに倒れてしまう。

「お姉さん！　お兄さん！」

涙声のヴィヴィオの声が聞こえた。
すると、近付く複数の足音と共に、別の人物の声が聞こえてきた。

「クホホ……！　やはり武器は、銃器類の質量兵器に限るざんすね！」

男の声だ。
リンは倒れ伏したまま、頭の痛みに顔を歪め、立ち上がろうとした。だが、後頭部を殴られた衝撃で、体が動けなかった。

「女とガキに、厳重なバインドを施せ！　手荒に扱うなよ！」
「やあああああああ！」

男が部下に指示を出した直後、ヴィヴィオの悲鳴が上がった。

「お兄さん！　お姉さん！」

動けないリンは、ヴィヴィオの助けを求める声に心苦しくなる。

ヴィヴィオの喚き声を五月蠅く感じて、部下はガムテープで口を塞いだ。

「クホホホホ！　“二兎を追う者は一兎をも得ず”と言う諺があるが、私は“一兎を追って二兎を得た”ざんすよ！」

目的の物を手に入れ、男は上機嫌に笑う。

「さあ、面倒な管理局の奴等が来る前に引き上げるざんすよ！」

「この男は、いかがいたしますか？」

「放っておけ。顔を見られた訳でも無し……それよりも、局員が来る前に早くズラかるざんすよ」

倒れてるリンを置いて、水銀燈とヴィヴィオを確保した部下を連れて男は場を去っていく。

路地裏には、倒されたリンだけが残された。立ち上がる事の出来ないリンは、拳を硬く握り締め、歯を食いしばる。

「水、銀燈……ヴィヴィ、オ……」

最後に攫われた二人の名前を呟いて、リンの意識は暗闇に落ちた。

謎の集団からの襲撃を受け、リンが気絶してから数分後。

リンが倒れてる路地裏に、二つの人影が現れた。

「あれ？　クア姉、例のマテリアルと銀髪の子が居ないよ？」
水色の髪の少女が、隣の眼鏡をかけた少女に言った。
「あらぁ、本当」
「どうする、クア姉？」
クア姉と呼ばれた少女は、顎に指を当てて考える仕草をした。
ややあって、クア姉は言った。
「そうねぇ……手ぶらで帰る訳にもいかないから、その子だけでも連れて帰りましょう。セインちゃん、お願いね」
「はいよ～」
軽い口調で答え、セインと呼ばれた少女はリンを背中にかついだ。
三人の姿は、路地裏から消えた。

そして物語は、『堕天使奪回篇』へ……！

＊

予告編。

攫われた水銀燈とヴィヴィオを奪回する為に、ゲームを制しろ。

――ようこそ、裏社会へ――

今度の敵は、非情な闇商人。

命懸けのゲームは、まだ終わらない。

「同じざんすよ……！　人の命を商売に使ってる点では、闇商人と管理局は……！」

「金ならある……！」

「力押しの野蛮な魔導師とは違う、正真正銘、本当本物の魔法……！　魔力……！　魔力っ……！　魔力ざんす……！」

この勝負、一人では、勝てない。

「信じたい……！　アイツが信じた俺を……俺自身を……俺の直感を、俺が信じたい……！」

第三章～欲望の渦～堕天使奪回篇

“一兎を追って二兎を得た”（後書き）

次回から、やっと彼女達を出せます。
長かった……！
設定の見直しとかで、多少更新の間を空けるかもしれません。

時には、傷も商品の魅力を引き立たせる材料になるざんすからね

少女は、夢を見ていた。遠い昔の記憶が、夢となって蘇る。
独りにしないで下さい。

「すまない……もう、私ではお前を護れないのだ」

嫌です。他の誰に見捨てられても構わない。
でも、お父様に捨てられるのは嫌です。

「大丈夫だ。ココを出て、私と離れても、お前の事を大切に想い、護ってくれる人にきっと出逢えるハズだ」

お父様以外の人なんて、要りません。

「すまない。……生きるんだぞ、水銀燈……！」

お父様。

＊

水銀燈は、薄暗い部屋の中で監禁されていた。
手足と胴体を光のリング――バインドで厳重に拘束されて、十字架に括り付けられていた。路地裏で突然の銃撃に意識を失っていたが、次第に覚醒してきた。朦朧とする意識の中で、彼女の目に映ったのは、少し離れた所で話をしている二人の男の姿だった。
男の顔を見て、水銀燈の中で撃たれた時の記憶が蘇る。三発目の

銃撃を受け、背中から地面に倒れる直前、狙撃主と傍らに立つ男の姿を見た。その傍らに立っていたのが、今話をしてる男だ。

会話を終えた男が、顔をこちらに向けた。水銀燈が起きてる事に気付くと、男は上機嫌そうな笑みを顔に張り付かせて近付いてきた。

男は髪は黒く、ワックスか何かで綺麗にセットされている。顔から推測するに、年齢は四十代前半と言ったところか。仕立ての良いグレーのスーツを着て、その他に時計や指輪、履いている靴等も高そうな物ばかりを身に付けている。

「お目覚めのようざんすね。よく眠れたざんすか？」

「離れてちょうだい」

紅い目で睨みを利かせ、水銀燈は突き放すように言った。

しかし、男は少しも怯まず、笑いを上げる。

「クホホホホ！　小さいクセに強気ざんすね。いや、結構ざんす。意思を持った武器は、強気な印象の方が高値になるざんすからね」

「息が臭いわ。最悪」

水銀燈は毒舌を吐く。いかに自分が追い込まれても、強気な態度は崩さない。

そして、具体的かつ直接的な毒舌に、男の表情が変わった。二タニタした下卑た笑みを消して、眉根にシワを寄せて怒りを露にする。

おもむろにポケットに手を入れ、何かを取り出す。小さな四角い装置で、真ん中には赤いボタンが付いている。

男は、何の躊躇いも無くボタンを押した。

「あああああああああああ！」

直後、張り付けになってる水銀燈の体に電流が走り、部屋に高い

悲鳴を響かせる。
水銀燈の苦痛な姿を眺め、男は愉悦を感じて再び笑う。
ボタンから指を離して、電流を止める。グッタリと項垂れる水銀燈に、嬉々とした様子で男は言った。

「強気なのは結構ざんすが、あまり図に乗らない方が身の為ざんすよ？　私は、キミを痛めつけ、傷つける事を躊躇しないざんす。時には、傷も商品の魅力を引き立たせる材料になるざんすからね。クホホホホ！」

耳障りな笑い声が室内に響く中、水銀燈は顔を上げた。

「リ……リンは……？」
「あ？　リン？」

男は笑いを止め、水銀燈の呟きに怪訝そうに眉を顰めた。
すると、後ろに控えていた黒服の男は、耳打ちした。部下からの言葉に、思い出したように男は手を叩いた。

「ああ、ああ！　あの男ざんすか！　知らんざんすよ、あんな価値の無いクズの事など。まあ、今頃管理局に捕まって、尋問でも受けてるんじゃないざんすかね？　どっちみち、犯罪者の奴に待っているのは、務所（ムショ）暮らしざんすよ……！」

控えの黒服が、また耳打ちした。
男は頷き、水銀燈に言った。

「それじゃあ、私はこれで失礼するざんすよ」

クホホホホホ！

嬉々とした笑いを上げ、部下の黒服を引き連れて男は部屋を出ていった。

男が出て行き、静まり返った部屋で水銀燈は室内を見回した。起きた時は意識が朦朧としていて、先ほどまでは男と話をして気付かなかったが、微かな嗚咽が聞こえる。それも、一つや二つじゃない。

暗さに慣れた目で、水銀燈は見た。自分以外の捕われの女達の姿を。薄暗い室内には、十人二十人の女が嗚咽を漏らして身を寄せ合っていた。手足には鎖で壁に繋がれ、逃げられないようにしてある。服は薄い布地一枚で、酷く貧相な恰好をされていた。

先ほどの男の言葉と現状で、奴が何者なのか水銀燈は察した。

闇商人。おそらく、人身売買の類の商売だ。

「おねえ……さん……」

蚊の鳴くような小さな声を聞き取り、水銀燈は顔を下に向けた。張り付けの彼女の足下に、金髪の少女――ヴィヴィオが眠っていた。泣き疲れのようで、目には赤い腫れが残っている。

水銀燈は、契約者であるリンに念話を試みた。だが、通じなかった。この部屋か建物に、念話を妨害する結界のようなモノが張られているようだ。これでは、助けを呼ぶどころか、リンの安否も確認出来ない。

そして同じく結界の効果だろう、魔力供給もままならない状態だ。弱っている現状では、自力での脱出も不可能となった。

「リン……！」

水銀燈は目を閉じ、静かに大切な者の名を呟いた。

＊

後頭部の小さな痛みに、リンは目を覚ました。ズキズキと地味に痛くて、若干の怒りさえ湧いてくる。

痛みを和らげようと、手を回して擦る。ついでにかゆみも感じて、爪を立てて掻いた。

それから、リンは、自分がベッドに横になってる事に気付く。低反発素材で、心地良い感触がする。多分、ぐっすりと眠っていただろう。

自分が見知らぬ部屋のベッドで寝ていた事を把握して、ようやくリンは、傍らに立っている少女の存在に気付いた。

「ちょっ……おおっ！？」

ベッドの上で飛び跳ね、後ろに後ずさる。

すると、ガツンッと背中に頭をぶつけ、その場に蹲った。新たな痛みを受け、完全に眠気は吹き飛んだ。

「大丈夫か？」

「な……何で、アンタが……？」

「え？」

手を差し出す少女に対して、リンは怯えた顔で身を引いた。

そんなリンの態度を訝り、少女は眉を顰める。

喉を鳴らして唾を飲み込み、緊張の声でリンは言った。

「セイラ、ですよね……？」

「いや、違うぞ」

即答で否定された。

言われてからリンは、目の前の少女をよく見てみる。
右目に黒い眼帯を付けているが、腰の位置まで伸びた長髪の色は銀色だ。瞳は金色で、恰好は紫と青を基調とした全身タイツの上に灰色のコートを羽織った出で立ちだ。共通点は眼帯だけで、セイラとは特徴が違う。
何より――。

「小さい」

背が小さい。小学校低学年位で、顔も幼い印象を受ける。ついでに、胸も小さい。言葉遣いや雰囲気は大人びた感じだが、外見は完全に子供だ。
人違いだと気付き、ホッと安堵するリンに少女は言った。

「小さい、だと？」
「ああ、背が……」

そこでリンは、自分の失言に気付いた。
ハッと顔を上げて謝罪しようとしたが、もう遅かった。

「そうか……背が小さいか」

少女は、とても素敵な笑みを浮かべて、両手の指の間にそれぞれ四本ずつ黒いナイフを握っていた。
リンは顔色を真っ青にさせて、後ずさろうとする。が、既に背中は壁に付いていて、これ以上後ろに下がれない。完璧に詰んでいた。
振り絞って、震えた声を出す。

「ちょっ……ちょっと待てよ……いや、待って下さい……！　謝ります……！　で、ですから命だけは……！」

涙目で命乞いをするリンを見据え、少女は構えたナイフを放った。
一瞬の後、屈んだリンの頭上をナイフが飛び、壁に突き刺さった。
頭とは数センチずれた位置に、ナイフは綺麗に横一列に並んでいる。
自分にナイフが当たってない事に気付いて、リンは恐る恐る顔を上げた。
少女は腰に手を置き、気持ちを鎮めるように溜め息をついた。

「少し大人気なかったか……。私もやり過ぎたが、お前ももう背の事は言うな。分かったな？」
「は、はい……！　きき、肝に銘じておきます……！」

引き攣った笑顔で、リンは答えた。
気を取り直して、少女は名乗った。

「私の名は、チンクと言う。検査の結果、お前の体に異常は見られなかったが、殴られた後頭部の痛み以外は大丈夫か？」
「殴られた、後頭部……」

訝りながら、まだ少し痛む後頭部を擦った瞬間、リンは思い出した。
セイラの罠に嵌まって誘拐犯に仕立て上げられ、機動六課の隊長二人と水銀燈が交戦して、追跡を振り切って路地裏で突然襲撃を受け、意識を失ったことを。
目覚める前の記憶が蘇って、リンは血相を変えてチンクの肩を掴み、問い掛けた。

「あの、水銀燈は！？　ヴィヴィオって子も！　二人は何処ですか！？」
「落ち着け！　その件について、ドクターから話がある」

取り乱すリンを、チンクが冷静に宥める。身長差がかなりあるにも関わらず、まるでチンクの方が大人のような振る舞いだ。
肩を掴んでる手を外し、チンクは部屋の扉を開けた。

「パートナーの居所を知りたければ、ついて来い」

言われるがまま、リンはチンクの後に続いて部屋を出た。

部屋を出たリンは、チンクを先頭に通路を歩いていた。
通路を照らす光は黄色一色で、目がチカチカする。窓が見当たらないせいか、妙に息苦しく感じていた。
道中、リンは衝撃の物を目撃した。ソレは、ガジェットだった。縦長の円筒型の？型、初めて見る小型飛行機のデザインをした？型、大きな真ん丸ボディの？型――ソレ等が壁にズラリと並んでいるのを見た。
いや、まさかな……。リンの脳裏に、ある次元犯罪者の姿が過った。信じたくないが、物的証拠を目の当たりにした後では、否定しきれない。
胸中に不安を膨らませる中、リンとチンクは一つの部屋の前に立ち止まった。

「ドクター。目覚めたリンを連れてきました」
「ああ、入りたまえ」

俺の事は知ってるのか、と警戒するリンの前で、扉がスライド式に開いた。
部屋の中は広いが、やはり照明の色は黄色で目が疲れる。それに、先ほどの部屋と通路同様に、この部屋にも窓が無い。外の景色が見

えないと、広い空間でも狭苦しく感じる。窓が無いと言う事は、場所が地下である可能性が高い。

殺風景な空間に居るのは、数人の男女だった。ほぼ全員が女性で、その内僅か一人だけが男性と言う酷い偏りだ。しかも、女性は一人を除いて全員がチンクとお揃いの全身タイツを着ていた。正直言って、目のやり場に非常に困る状況だ。ある意味、なのはのバリアジャケットより酷い。更に、唯一の男も最悪だった。

リンの不安は的中してしまった。

「やあ、目覚めの気分はいかがかな、リン？」

妙に馴れ馴れしく声をかけてきた白衣の男は、広域指名手配犯のスカリエッティだった。

「ええ、まあ、はあ……」

本物の犯罪者を前に、素直に「最悪です」なんて答える事も出来ず、リンは曖昧に返事をした。

「ああ、自己紹介がまだだったね。私は、ジェイル・スカリエッティ。キミの好きなように呼んでくれて、構わないよ。

そしてこの娘達は、私の自信作の戦闘機人『ナンバーズ』だ」

「は、はあ。その、初めまして」

とりあえず、リンも頭を下げて挨拶した。ココで対応を誤れば、酷い目に遭うかもしれない。何せ、相手は犯罪者なのだから。

スカリエッティの周囲に佇んでる女性陣は、殆どが警戒心を宿した目をしている。彼女達の視線を一身に受けるリンは、精神的に追い詰められていた。心なしか、胃の辺りが痛む。

手近な椅子に座り、スカリエッティは笑顔で声をかけてきた。

「まあ、そう固くならず、楽に話そうじゃないか」
「はあ……」
無理に決まってんだろ、と心中で悪態をつく。
「キミの事は、ニュースを観て知っているよ。幼女誘拐の犯人だそうだね」
「いや、アレは違うんです。アレは、嵌められたんです！」
「ほう。詳しく聞かせてくれないかい？」
リンは、必死になって事情を説明した。
この際、相手が犯罪者だろうと何者だろうと関係無かった。無実だと言う証拠は無いが、このまま犯罪者扱いされるのは物凄く不本意だ。それに、水銀燈の事もある。ココに来る前にチンクが、水銀燈とヴィヴィオの件でドクターから話があるとも言っていた。もしかしたら、何か手掛かりが掴めるかもしれない。
リンの話を聞いたスカリエッティは、何か得心したように頷いた。
「なるほど……。ふむ、キミの連れを攫った連中が何者なのか判ったよ」
「えっ！？　マジ……本当ですか！？」
驚いたリンは、目を丸くして声を上げた。
相手の顔も見てないのに、どうして犯人が判ったのか不思議でならなかった。
ニヤリと笑い、スカリエッティは言う。
「説明に出てきた、『ざんす』と言う語尾を付けた男に心当たりがあるのだよ。彼の職業や性格から考えるに、十中八九その男だろう」

たった一つの手掛かりで、スカリエッティは犯人の正体を見抜いたようだ。
リンの中で小さな希望の光が灯るが、続けてスカリエッティは申し訳なさそうに言った。

「ただ、その男は私が長年付き合ってきた取引相手でね。それも、なかなか厄介な性格をしている」
「そ、そうですか……」

残念そうに、リンは項垂れた。
相手が取引先なら、水銀燈達の奪回に協力はしてくれないだろう。
そもそも、犯罪者に協力を煽いでみよう、なんて考えを一瞬でも抱いたのが間違いなのだ。取引先から子供二人を奪い返しても、スカリエッティ達には何の得も無い。自分にとって“利”の無い事に、協力する人間など居ないのだから。
それなら、とリンは意を決して言った。

「あの……」
「何かね？」
「その、男の名前と居所を、僕に教えてくれる訳にはいきませんか？　勿論、皆さんから教えてもらった事は、相手には言いません」

何とか情報を得て、単独で助けに行くしかない。

「キミ一人で、助けに行くつもりかい？　だとしたら、やめといた方がいいと忠告しておこう。あの男は、自分の利益の為には殺しも厭わない人間だ。キミが一人で行ったところで、部下に始末されるだけだよ？」
「そ、そうかもしれません。でも……でも、行かなきゃ……！　行

かなきゃいけないんです！　約束したんです！　独りにしないって……！　だから、僕は……俺は助けに行きたいんです！　お願いします！」

リンは頭を下げて、必死の思いで懇願した。

例え殺されると解っていても、水銀燈を見捨てる事だけは出来ない。ココでジッとしていても、何も解決しない。情報料として金が欲しいのなら、幾らでもくれてやる。報酬で得た金は、全額こちらの世界に移してある。お金はあった方がいいが、水銀燈は掛け替えの無い存在なのだ。

決死の思いで頭を下げると、スカリエッティの笑い声が聞こえてきた。

「ククク。何か勘違いしてないかい？」

「え……？」と顔を上げるリン。

「私は、一人で行っても始末されるだけ、と言ったのだよ」

意味深に言うスカリエッティだが、リンは意味を理解出来ずに怪訝そうに首を傾げる。

「実は、キミの連れの一人であるヴィヴィオ――本来なら彼女は、真っ直ぐ私の元に届くハズだったのだよ。だが、キミの言う襲撃者に襲われ、奪われてしまった。私も取引相手に、大切な作品を盗られてしまってね。奪われた物を取り返す、と言う点では、私達の目的は共通している」

ようやく言ってる意味を理解し始めたリンは、思わず口元がつり上がる。

「そ、それじゃあ……！」

「ちょうど先ほど、その取引先から連絡が来てね。……これから出向くところなのだが、キミも一緒に行くかね？」
「は、はい！」
思わぬ展開に、リンの顔は笑顔に変わった。
「あの、ありがとうございます！」
チャンスを手にしたリンは、スカリエッティに感謝の意を伝えた。
これから行く所は、きっとまともな場所では無いだろう。犯罪者が関わってる所なのだから、当たり前だ。
しかし、それでも行くと決めたのだ。大切な者を取り戻す為に。
「待ってろよ、二人共っ……！」

第三章～欲望の渦～堕天使奪回篇

闇商人と管理局は全く同じざんす……！

スカリエッティ一味の協力を得て、リンは水銀燈達が監禁されている場所に向かっていた。

メンバーは、リン、ウーノ、トーレ、クアットロの四人だ。取引の際には、いつもウーノがスカリエッティの代理を務めているらしい。ちなみに、他のナンバーズのメンバーは、アジトで着ていたような全身タイツではない。上下黒のスーツと言った、いかにも悪（ワル）な出で立ちをしている。トーレ曰く、「取引先では、それなりの身だしなみと恰好をしていく」だそうだ。それでも万が一の事態に備え、護衛としてついているのでスーツの下に例のタイツを着用している。全身タイツは所謂『戦闘服（バトルスーツ）』と言うヤツで、常に着ているそうだ。説明を聞いた当初のリンは、某メガヒットバトル漫画の戦闘服を思い浮かべていた。

一行の先頭を歩くのは、長身のトーレだ。濃い紫色の短髪で、かなり高い身長が特徴的だ。目の色は金色で、常に厳しい顔つきをしている。完全な戦闘タイプの戦闘機人で、実力はナンバーズ一らしい。どことなく、顔つきや雰囲気が機動六課のシグナムに似ている。

もう一人は、クアットロと言う女性だ。丸眼鏡をかけ、栗色の髪を左右に結んで“おさげ”にしている。何が楽しいのか、今もアジトでもニコニコと笑っている、笑顔の絶えない女の子だ。その笑顔のせいか、黒服が全く似合っていない。

ウーノは、アジトに居た時と同じ秘書服のままだ。

夜の首都・クラナガンを、リンは緊張した面持ちでナンバーズと共に歩いていた。一行は、人気のない夜道を進んでいる。場所が何処であれ、“人気の無い夜の場”と言うのは不気味である。しかも、これから行き着く先は闇商人の店なのだ。恐がるな、と言われても無理である。

不安を拭いきれないリンは、先頭を歩くトーレに声をかけた。

「あの……」
「何だ？」
振り返らずに背を向けたまま、トーレは返事をした。声は低く、リンと違って不安の色が一切無い。
「その、もしヤバい事態になっても大丈夫、なんですか？」
聞いた話では、相手の闇商人は兵士を所有してるらしい。そんな危険地に、たった四人で行くのは少々、いやかなり不安だった。失礼かもしれないが、彼女達（ナンバーズ）がどれ程優秀で強いかをリンは知らない。この人数では心細い、と言うのが正直な気持ちだ。
「心配しなくても大丈夫よぉ、リンちゃん」
答えたのはトーレでは無く、リンの後ろを歩くクアットロだった。水銀燈のような猫なで声で話して、ちゃん付けで名前を呼んでくる。キャラ作りなのか素なのか、イマイチ判別出来ない。
笑顔を張り付かせて、クアットロが言う。
「いざとなったら、私の幻術ＩＳで惑わして、その隙にトーレ姉様の高速移動ＩＳで離脱しますからぁ」
ハア、とリンは頷いた。
クアットロの言う『ＩＳ』とは、戦闘機人が身に付けている先天固有技能だ。魔法とはまた別の力（ちから）で、個人によって能力の内容は違う。
戦闘機人とは、簡単に言ってしまえばサイボーグである。何故、魔法世界に科学やサイボーグと言ったジャンル違いの技術が存在し

てるのか疑問に思ったが、彼女達にツッコむ度胸は無かったのでリンは胸の奥にしまいこんでいた。
とにかく、リンよりは遥かに優れていて頼れる事は確かなので、彼女達を信じるしかない。

「着きました」

ウーノの言葉を聞いて、リンは顔を上げた。
辿り着いたのは、何の変哲もないビルだった。壁にはひび割れや汚れが見られ、古い建物だと言う印象を受ける。健全で無いのだから当然だが、表には店の看板らしき物は見当たらない。窓を見ても、室内には明かりすら点いていない。
人の気配すら感じられず、リンは訝(いぶか)んだ。

「本当にココなんですか？」

ナンバーズに尋ねた直後、古びたビルの入り口から人が出て来た。サングラスをかけた二人の黒服の男女で、立ち振る舞いに油断が無い。明らかに、機動六課や一般人とは違う異質な感じがする。別の世界の住人だ。
これで、もう後には引けなくなった。

「ようこそいらっしゃいました。中へどうぞ、社長がお待ちです」

女の黒服が丁寧に迎え、一同をビル内に案内する。
建物に入って、リンの緊張は更に高まった。エレベーターに乗り、地下に下がっていく。重い沈黙の中、一分も経たない内にエレベーターはＢ３に到着した。銀色の扉が左右にゆっくりと開き、広い空間に足を踏み入れる。
ソコには、更に沢山の黒服が待ち構えていた。口を閉ざして、サ

ングラス越しに視線だけを向けてくる。
異様な空間に入ったリンの緊張は、ピークを迎えていた。額からは脂汗を流し、心臓は早鐘のように高鳴り、胸が苦しくなる。
室内には、黒服の他に壁にかけられた武器があった。どれも魔法世界には似つかわしくない、拳銃やマシンガン、ショットガンにバズーカ等々、質量兵器のオンパレードだ。思わずリンは、驚きに目を丸くした。
周りに展示されてる武器に度肝を抜いてると、奥の扉が開いた。目を向けると、新たに男が部屋に現れた。
セットされた黒髪に、周りの黒服と違って灰色の仕立ての良いスーツを着ている。指輪に腕時計と豪華な出で立ちをした男は、ウーノ達を見てニヤリと笑った。

「いやぁ、ようこそようこそ……！」

この男が、闇商人のキルス・サイモックだ。見るからに悪人ヅラと言った顔をしている。
商売スマイルを作り、ウーノ達に歩み寄る。

「お待ちしてましたよ、ウーノ様。いやぁ、今日もお美しい……！惚れ惚れしますぞ……！」
「ありがとうございます」

サイモックの挨拶に、ウーノは会釈して答えた。
するとキルスは、一同の中で唯一の男であるリンに気付いた。

「おや？　コレはまた、珍しい客をお連れのようざんすね」

驚くサイモックの声を聞いて、リンは顔が険しくなる。
この男だ。耳に残ってる路地裏での声と、完全に一致した。俺の

大事なモノを攫っていったのは、間違い無くこの男だと確信した。
飛び付きたい衝動を抑えて、ウーノとサイモックの会話を見ている。

「彼の同行もよろしいでしょうか？」
「ああ、構わないざんすよ。何か不都合がある訳でもなし……さあ、こちらざんす」

サイモックに案内され、ウーノ達は部屋の奥に進む。
室内に佇む黒服は、ウーノ達が妙な動きをしないか、サングラスの奥で目を光らせている。
十人以上の黒服に囲まれても、ナンバーズは少しも動揺したり気圧された様子は無い。
サイモックが入ってきた扉を開けて、奥の部屋に入る。室内は真っ暗で、何も見えない。
先に入室したサイモックが、部屋の明かりを点けた。急に明るくなり、リンは一瞬怯んで目を覆った。
目が慣れてきて、衝撃の光景が見えた。透明なガラスのような壁の向こう側に、鎖で繋がれた沢山の女性が居る。薄い布地一枚だけで体を隠して、まるで奴隷のような扱いだ。表情に覇気が無い者、肩を震わせて嗚咽を漏らす者、皆自分の置かれた状況に絶望して恐怖している。
その中で、十字架に張り付けられた少女を見つけた。水銀燈だ。

「水銀燈！」

見つけた途端、リンは透明な壁に駆け寄って声を上げた。

「水銀燈！」

壁を乱暴に叩き、声をかけると水銀燈は気付き、顔を上げた。
目が合うと、水銀燈は驚きの表情に変わった。

「リン！」
「水銀燈！　無事か！？」
「ええ……。ヴィヴィオも無事よ」

視線を下げると、眠っているヴィヴィオの姿が見えた。
二人が生きてる事に、リンは安堵の溜め息をついた。
すると、サイモックが笑い声を上げた。

「クホホホホ……！　心配要らないざんすよ。彼女達は、私の大事な商品ざんす。殺しなんて勿体無い事は、絶対にしないざんすよ……！」

今のリンに、サイモックの声は酷く耳障りで不快だった。
傍に立つサイモックを睨んだ時、別の声が上がった。

「貴方……！」
「え？」

声を聞いて、再び壁の向こう側を見る。
水銀燈の声では無い。室内を見回すと、一人の女性が目に止まった。水銀燈や他の女性達と違って、見覚えのある茶色の制服を着ている。かなりの美少女で、紫色の長髪で青いリボンを後ろに結んでいる。

「誰……？」

服装から管理局の人間だと解るが、リンは彼女を知らない。機動

六課でも、見かけた覚えは無い。
顔を顰めていると、女局員は名乗った。
「私は、時空管理局の捜査官、ギンガ・ナカジマ……！　機動六課に所属している、スバル・ナカジマの姉です！」
「ナカジマさん!?」
思わぬ人物と出会い、リンは驚きの声を出す。
ナンバーズの面子も、初めて動揺の色を顔に浮かべていた。彼女がココに捕われている事は、予想外だったらしい。
一同の反応を見て、サイモックは愉快げに笑った。
「クホホホホ！　驚いたざんすか？　あの誘拐騒動の時に、ガジェットとの交戦に乗じて、隙を衝いて部下が確保したざんすよ……！　貴女達のドクターが求めている、『タイプゼロ・ファースト』ざんす……！」
聞き慣れない単語に、リンは顔を顰めるばかりだった。
その時、ギンガが険しい顔で声を上げた。
「キルス・サイモックっ……！　貴方は、自分が何をしているのか解ってるんですか!?」
「よく解ってるざんすよ」
「人の人生を……命を弄んで……こんな酷い事をしてまで、お金が欲しいんですか!?　貴方のせいで、何人の女性が犠牲になったと思ってるんですか!?」
犯罪者を憎み気持ちが昂り、ギンガは声を荒げる。冷静そうに見えて、実は感情的なようだ。
捜査官として許せない気持ちもあるが、ギンガは個人的にサイモ

ックを嫌悪していた。彼女自身の事情もあって、人の命を弄ぶ所業を人一倍憎んでいるのだ。

そんなギンガの怒鳴りを受けても、サイモックは全く動じない。それどころか、彼女の言葉を可笑しそうに笑う。

「クホホホホ！　欲しいに決まってるざんすよ！　この世は、勝って金を得る事こそが全てであり、人間社会の真理ざんすよ！　それに、私と貴女は同類ざんすよ……！」

「どういう事……？」

目を細めるギンガと壁越しに向き合い、サイモックは続けた。

「いいざんすか？　管理局（あなたたち）から見れば、闇商人（わたしたち）は単なる犯罪者でしょうが、それは違う……！　管理局は、誰のお陰で稼いで毎日飯を食べてるざんすか？　ソレは、犯罪者ざんす……！　犯罪者を逮捕して、ムショに送って金を得ている……！　つまり、管理局は犯罪者の人生を犠牲にして、金を稼いでるざんすよ……！　闇商人と同じ……！」

「ち、違う……！　他人を悲しませて、犯罪を犯す貴方達と私達は違う！」

否定するギンガだが、声は動揺で震えていた。

心の動揺につけ込むように、サイモックは言葉を続ける。

「同じざんすよ……！　いいですか、ナカジマさん？　他人の人生を奪って、人の命を商売に使って金を得ている、と言う点において、闇商人と管理局は全く同じざんす……！　その違いは、周囲の人間による善か悪かの『認識』だけ……根本的なところでは違いなんて無い……！　綺麗か汚いか……些細な違いざんす……！

全くの同類ざんすよ……！　犯罪者だろうが誰だろうが、人の命を商売に使ってる点では、闇商人（わたしたち）と管理局（あなたたち）は……！」

サイモックの言葉に、ギンガは目を見開いて言葉を失う。

認めたくないが、サイモックの言ってる事は的を射ている。今まで気にも留めず、考えてもいなかったが、言われてみると頷けてしまう部分がある。他人を犠牲にしてる点では、確かに同じだ。

自分の今までの行為が、犯罪者と同じと考えると心が揺れた。まるで、自分達の『正義』を否定された感覚だった。他人を食い物にする犯罪者と同じと思うと、項垂れて自分の在り方に苦悩する。

彼女の様子を見て、愉快そうにサイモックは笑う。

「クホホホホ！　そういう事ざんす……！　世の中にあるのは、善と悪では無い……！　支配者と奴隷ざんすよ……！」

ギンガとの話を打ち切り、サイモックはウーノ達に振り返った。

「随分と余計な時間を取らせてしまい、申し訳ありません。本日、私が勧める商品は、珍しい意思あるデバイス、タイプゼロ・ファースト、そして貴女方が最も欲している『聖王の器』の三点ざんす……！」

「ちょっとよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

壁の向こうに居るヴィヴィオを一瞥して、ウーノは言った。

「『聖王の器』は、元々私達の所に輸送される物でした」

「ですが、今は私の手元にあるざんす。私の手元にある以上、どんな事情があろうと私の商品ざんす。物が欲しければ、お金を払ってもらうしかないざんすよ」

下卑た笑みを浮かべ、サイモックは買取を要求してきた。何が何でも、金を払わせて得ようと言う魂胆のようだ。
スカリエッティが言っていたように、相当に厄介な性格だ。まさに、金の亡者である。
サイモックの言い分に、トーレは不快そうに顔を顰めた。傍らに立つクアットロは、相変わらず笑顔のままでいる。
正面から向き合ってるウーノは、涼しい顔を保っていて感情の変化が見られない。

「あの……」

商談をする二人の間に、リンが声を挟んだ。
一同の視線が向けられ、一層緊張が高まる。一度深呼吸をして、言った。

「水銀燈達を、返してくれませんか……？」
「言ったハズざんしょ？　彼女達は、私の商品ざんす。欲しければ金を払うざんすよ」
「金ならある……！」

リンの言葉に、サイモックは怪訝そうに目を細めた。
ポケットに手を突っ込み、一枚のカードを取り出した。

「１９億強ある……！」

見せたのは、銀行のカードだ。
金額のデカさを聞いて、サイモックの目の色と表情が変わった。
リンは、見るからに庶民的な男だ。こんな男が、１９億なんて大金を持ってるなんて誰が思うだろうか。

サイモックは、愛想を良くした顔で言った。

「いやいやいや、これは驚きざんす……！　１９億とは……金持ちざんすね……！」

「コレで文句ないでしょう？」

「クホホホホ！　非常に申し訳ないが、それだけでは足りないざんす……！」

強欲社長に、リンは内心に舌打ちした。

「キミはアレの価値を知らんでしょうが、今回の品はこれまでの物とは質そのものが違う……！　当然、値段も十何億なんかじゃ釣り合わないざんすよ……！」

サイモックは、全て知っていた。

聖王の器と呼ばれるヴィヴィオが、どんな重要な役割を持っているか。その少女を利用しようと狙うスカリエッティ一味が、何を動かそうとしているのか。

だからこそ、先にヴィヴィオを手に入れて、スカリエッティ一味から莫大な金を搾り取ろうとしたのだ。

「だが……」

リンが思わぬ大金を持ってる事を知り、サイモックはそれしらも手に入れようとした。

「あの人形に限るなら、その金で渡さない事も無いざんすよ」

「え……？」

訝るリンに、サイモックは口の端を釣り上げ、不気味に笑った。

「私が趣味でやっている、あるギャンブルに勝てば人形は渡してやるざんす。勿論、キミには金を賭けてもらうざんすよ？」
「……ギャンブルって、何ですか？」
嫌な予感を抱きつつ、リンは内容を尋ねた。
サイモックは更に笑みを歪め、言った。
「死地渡りゲーム『地雷』ざんす……！」
ギャンブルの名前を聞いて、リンの嫌な予感は更に強くなった。
得体の知れないギャンブルに、恐怖を抱く。
「どうする……？　受けるざんすか……？」
笑顔を近付け、サイモックが返答を求めてくる。
壁の向こうに顔を向け、リンは考える。ヴィヴィオは、捕われてる女性達の中で飛び抜けた価値があるらしい。先ほどアッサリ断られた事から、ヴィヴィオの即救出は無理だ。
そこでリンは、サイモックに提案をした。
「あの……ナカジマさんも一緒にってのは、ダメですか……？」
リンの提案を聞いて、壁の向こうに居るギンガは意外そうな顔を上げた。
驚いたのは彼女だけでなく、サイモックやナンバーズもだった。
あのクアットロも、目を丸くしている。
しかし、商人であるサイモックは動揺を消して、すぐに思案顔になる。

「う～ん……。普通の魔導師なら、ソレもアリざんすが……彼女は数少ない稼働している、希少な戦闘機人ざんすからね……」

腕を組んで考える素振りをして、サイモックは考え込む。

頭の中で金額の計算を行い、ややあってサイモックは口を開いた。

「分かったざんす……！　認めるざんすよ、今回に限り……特別に……！」

サイモックの承諾を得て、リンは内心で意気込んだ。

そして、再度サイモックが確認してくる。

「それじゃあ、受けると言う事でよろしいざんすか？」

殆ど間を空けずに、リンはハッキリと答えた。

「受ける……！」

力押しの野蛮な魔導師とは違う、正真正銘、本当本物の魔法……！　魔力……！

※今回は、オリキャラ同士のギャンブル話なのでご注意ください。

……『リリなの』でギャンブルって、他では絶対無いですよね。

力押しの野蛮な魔導師とは違う、正真正銘、本当本物の魔法……！　魔力……！

黒岩セイラは、局員が利用している寮の一室に居た。
業務を終えて帰宅した後でも、制服を着たままでいる。帰宅した彼女は、休むでも食事をするでもなく、リビングの中央で椅子に座っていた。足組みをして見つめる先には、複数のモニターが展開されていた。ミッドの街の至る所の様子が映されており、その中にはある建物の中も混じっていた。
薄暗い室内で、中央のテーブルに向き合って座っている二人の男。リンとサイモックだ。このモニターは、サイモックの部屋の様子も映し出しているのだ。
モニターを眺めるセイラは、薄笑いを浮かべた。

「ふふ、既に準備は万端……！　局内は勿論、街の状況も私の部下のお陰で完璧に把握してるわ……！　私の『目』に死角は無い……。何時何処でゲームが始まろうと、見逃す事は絶対に無いわ……！」

操作パネルを弄り、モニターの映り度合いを調整する。
部屋全体を映し出すモニターの隣に、リンの顔をアップさせたモニターを出す。

「思えば、貴方自身が、一人で直接勝負をするのは今回が初めてね。相手は闇商人のキルス・サイモック……見た目通りの悪人（クズ）……。狡い手を打ってくるわよ。
さあ、リン……！　貴方の初めての勝負で、私を愉しませてちょうだい……！」

悪魔は、静かに観戦する。

＊

部下に命令して、サイモックはテーブルに椅子、勝負の道具を準備させた。

対戦する者以外の人は、全員テーブルから離して壁際に下がらせる。ウーノ達は、壁際に並んで部屋の中央を見つめている。

勝負の舞台が整い、リンは緊張した面持ちで静かに席に着いた。まだ、勝負の内容についての説明はされていない。内容が解らない事で、余計に不安が増してしまう。

対するサイモックは、不安を抱くリンとは対照的に全く動じていない。相変わらず、顔にニヤニヤとした笑みを張り付かせている。大切な商品を賭けていると言うのに、まるで気負った様子が見られない。余程勝負に自信があるのだろうか。

リンが席に着いたのを確認して、サイモックが口を開いた。

「時にリン君……商人にとって一番必要な要素とは、何だと思うざんすか？」

「え……？」

急に質問を受け、リンは少し当惑した。

「ああ……物の良し悪しを見る目、ですか？」

「うんうん。確かに、ソレも必要ざんす。悪い商品を店に置いたりなんかしたら、客に買われた後で文句を言われてしまうざんすからね。ですが、見る目よりも重大な要素があるざんす。

それは、ズバリ『運』ざんす……！」

「運？」

答えを聞いたリンは、怪訝そうに片眉を上げた。
サイモックは笑顔で続ける。

「そう、運ざんすよ……！　いいですか？　例え完璧に物の良し悪しを見分けるずば抜けた目を持っていても、その良き物自体に出会わなければ、話にならないざんす。他の店が仕入れている商品よりも、更に良い商品に出会う強力な運こそ、商人に必要な要素ざんす……！
その運を計るのが、これから行う『地雷』ざんす……！」

いよいよ、ギャンブルの説明が始まる。
リンは、食い入るように話を聞いた。

「この『地雷』に使うのは、1から6までの数字が彫られた石――数石（すうせき）を計十二個。コレを両陣に、それぞれ六つずつ配るざんすよ。
勝負の方法は、いたってシンプルざんす。まず、片方が地雷となる数石を一つ選び、数字が彫られている表面を伏せて場に置く。その後で、相手側が自分の持ってる数石から、地雷で無い物を選んで一個ずつ場に出していくざんす。地雷を選択する者を『待ち』、数石を出していく者を『走（そう）』と呼んでいる。地雷となる数石を出したら、その時点で負け。決着ざんす。もし、地雷を踏む事なく完走しは場合は、決着は次戦（じせん）に持ち越しとなり、『待ち』と『走』を交代して同じ要領で続けるざんす。
よろしいか……？」
「……はい」

とりあえず、ルールは理解した。
同時に、このギャンブルがサイモックが言うように、運比べの勝負である事を再認識する。ルールが単純な故に、勝負に求められるのは読みよりも己の勝負勘と勝負運だ。

大して頭が良くないリンは、複雑なギャンブルで無い事に安心するも、やはり不安は残っていた。勝負事の運に関しても、リンは自信が無いのだ。

しかし、だからと言って、四の五の言ってる場合では無い。不安でも自信が無くても、勝たなければ水銀燈達を救う事が出来ない。まずは、このギャンブルで勝利して水銀燈とギンガを解放させる。そして、戦力が増えたところでヴィヴィオを救出する。ソレがリンの狙いだった。

ルールを理解したところで、サイモックがジャンケンを申し込まれた。『待ち』か『走』かを決めるジャンケンだ。

結果は、サイモックの勝ち。

「クホホホホ！　幸先が良いざんすね……！　では……私は、『待ち』を選択するざんす……！」

『走』となったリンは、汗を流して苦い顔をした。

出来る事なら、先に『待ち』を選びたかった。最初に『待ち』を選択すれば、早い段階で『走』である相手の自滅を狙う事が出来る。先に『待ち』を選んだ方が、圧倒的に有利なのだ。

苦しい表情のリンを前に、サイモックは不気味さすら感じる笑みで宣言する。

「では、始めるざんすよ……！　死地渡り『地雷』……！」

そして、二人の勝負が始まった。

まず、『待ち側』による地雷選択を行う。六つの数石の中から、地雷とする数石を選択するのだ。サイモックは、相手の見られぬよう数石を立てている。数石は麻雀の牌と同じ形をしてるので、立てれば真っ白の裏側を見せる事になる。

「う〜ん……どれがいいざんすかね……」

顎に手を添え、数石をジッと眺めて思考する。

向かい側に居るリンは、ただ相手の様子を見ているだけだ。この待ち時間が、酷く辛い。相手が何を選ぶのか気になり、落ち着く事が出来ない。勝負開始前から、既に心臓は高鳴っている。そして勝負が始まった事で、場の空気は一気に張り詰めたモノへと変わった。肌で空気の変化を感じて、リンの顔は険しくなる。

透明の壁の向こうでは、水銀燈とギンガが見守っていた。いや、彼女達だけではない。他の捕われの身となり、商品とされている女性達も騒がず、静かに見守っている。例え自分が救われなくても、あの極悪社長に一泡吹かせてほしい、と皆心中で願っているのだ。

重い沈黙が支配する場で、サイモックは地雷選択を続けていた。

「それじゃあ、コレにするか……」

ようやくサイモックは、一つの数石を掴んだ。

そして次の瞬間、驚きの行動に出る。

「えっ……！？」

その驚きの行動に、目を丸くしたリンは思わず声を上げた。

何とサイモックは、選択した数石を表に倒してリンに晒したのだ。明らかにワザと倒した、見せ石。

サイモックが見せ石にしたのは、２の数石。

それからサイモックは倒した数石を元に戻し、再び列に加え、片方の手で壁を作って隠して数石をシャッフルした。念入りにシャッフルを済ませた後、改めて地雷にする数石を選択した。

横一列に並べられた数石の中から一つ掴み、列から外す。他の五つの数石を隅に移して、地雷の数石を目の前にポツン、と置く。

顔を上げ、笑顔をリンに向けた。

「番ざんすよ、リン君の……！」

地雷選択が終わり、『走』であるリンが打つ番が回ってきた。

受けてリンは、険しい顔で自分の数石を見下ろす。サイモックと同じように、相手に裏面が見えるように数石を立てていた。1から6まで並んだ数石を、睨むように見つめてリンは苦悩する。

――くっそ～！　あの2が離れねぇ……！

歯を食いしばって苦悩するリンの脳裏に、先ほどサイモックが見せ石にした2がこびり付いていた。

先ほどのサイモックの見せ石は、コレが狙い。ワザと選択石を見せて、相手を混乱させること。普通の運否天賦の勝負では、開き直って思いっ切り出される事がある。

しかし、今回のようにワザと見せられると、考えてしまう。アレは本命か？　それともブラフなのか？　気が付けば、質（たち）の悪い思考の泥沼に足を踏み込んでしまっている。考えれば考える程、深みにハマって抜け出せなくなってしまう。振り払おうとしても、決して消える事が無い。通常の運否天賦より、更に悪い状況に陥る。

悩んだ末、リンは一つの数石を選択した。掴み、場に出す。

リンが選んだのは、6。見せ石から一番離れた数字を選択したのだ。

ドキドキしながら様子をうかがうと、サイモックは抑えた声で笑った。

「クホホホ！　大丈夫大丈夫……！　通ってるざんすよ……！」

リンはホッと安堵するも、まだ終わりでは無い。

後、まだ四回も通さなければならないのだ。最初の選択だけでも苦悩したのに、数が減って更に難しくなった。ゴールに近づくにつ

れて、生還の難易度も上がっていく厄介なゲームだ。
数石を睨むリンの脳裏には、しつこく見せ石の2がチラついていた。残った数石は、1、2、3、4、5の五つ。この中からリンは、2の周囲は危険と判断して、またも見せ石から離れた5を選択した。数石の列から出して、場に提出する。
笑顔を絶やさず、サイモックが言う。

「ご安心を……。通ってるざんす……！」

二回目も通ったのを確認して、水銀燈は溜め息をついた。この勝負、見てる方も緊迫感が伝わってきて、落ち着かないのだ。
果たして、異様な緊迫感の真っ只中で勝負をしてるリンは、どれほど神経をすり減らしているのだろうか。

「リン……！」

性格故に顔には表さないが、水銀燈は心中でリンの事を心配していた。
二回目を凌いだリンは、緊張を吐き出すように溜め息をついた。この一瞬で気を緩めるも、すぐに緊張が襲い掛かってくる。拷問にも等しい状況に、気疲れして頭を抱えて俯く。

「さあ、三回目の選択ざんすよ……！」

サイモックに促され、リンはゆっくりと顔を上げた。
視線の先にある地雷石が、まるで高く聳え立つ壁のように錯覚する。かぶりを振って、リンは自分の残り四つの数石と向き合う。1、2、3、4の中から一つを選択するのだ。今まで通りにするなら、ココは見せ石の2から通り4を出すところだ。
しかし、とリンは考え直す。ココはあえて、見せ石の2を出して

みてはどうか。あの意地の悪そうな社長の事だから、ブラフの見せ石と思わせて実は本命、と言う可能性もある。だが、そういう縛りのようなモノを仕掛けて、2以外の数石を地雷にしてるかもしれない。

あえて2か、今まで通りの見せ石から離れた数石を出すか。

プレッシャーで息苦しさを感じるリンの中で、葛藤が繰り広げられる。

苦悩して迷った末、リンが選んだのは、2だった。2の数石を掴み、場に出した。

――頼むっ……！　通れ！　通ってくれっ……！

硬く目を閉じて、リンは心中で必死に祈った。

恐る恐るリンは、目を開けた。

向かいの席では、サイモックが笑みを一層深くなっていた。

相手の笑顔を見た瞬間、リンの心臓が跳ね上がった。一瞬にして、背筋が寒くなる。悪寒と言うヤツだ。

「爆破っ……！」

サイモックは、地雷石を倒した。

現れた数字は、2だった。

勝負は、リンの負け。敗北。

「なっ……！？」

驚きの声も短く、リンは愕然となる。悪寒は強くなり、足が震えだした。

「クホホホホ！　見事に踏み込んでくれたざんすね……！」

ショックを受けるリンの前で、サイモックは歓喜の笑いを上げる。

その笑いには、敗者を嘲笑う念もこもっていた。
運否天賦の勝負の中で、相手の仕掛けでも僅かながらに“理”があると、迷走して飛び付いてしまう。サイモックが生んだ“理”は、いわば撒き餌。敗北へ誘う死神の誘導灯である。
――相手の心を操り、敗北へと誘い込む……！　力押しの野蛮な魔導師（サルども）とは違う、正真正銘、本当本物の魔法……！　魔力……！
魔力っ……！　魔力ざんす……！
勝負を見守っていたウーノ達も、この時は表情を険しくさせた。

「あ～あ、アッサリ負けてつまらないわぁ」

ただ一人だけ、クアットロは周りと違ってしらけた顔をした。勝負が早く決して、拍子抜けしたのだろう。
彼女の態度に、水銀燈は嫌悪感を露にして睨んだ。
そんなギャラリーの反応など意に介さず、サイモックは嬉々とした様子で言う。

「いやいや、悪いざんすね……！　お陰で、こっちは安いリスクで１９億強の儲けざんす……！」

勝った事よりも、金を手にした事を喜ぶサイモック。
一方、リンは悔しさに歪めた顔を俯けていた。たった一度のミスで、水銀燈救出のチャンスを棒に振ったのだ。敗北の悔しさとミスをした自分に対する怒りが湧き起こり、汗で濡れた拳を固める。
怒りと後悔の念で胸中が荒れ狂ってるリンに、サイモックが声をかけた。

「さてさて……金を失ったリン君は、もう勝負する事は出来ないざんすね」

非情な宣告に、リンは顔を上げて抗議する事すら出来ない。
だが、そんなリンに耳を疑うような言葉が届いた。

「本来なら、コレで勝負は終わりざんすが……一つ、続行する方法が無くは無い……！」
「えっ！？」

思わぬ言葉に、弾かれたようにリンは顔を上げた。
成り行きを見守っているウーノ達や水銀燈も、怪訝そうに顔を顰めた。
皆が訝る中、サイモックは笑顔を絶やさず言葉を続ける。

「キミも、もう知っての通り私は人間と武器を商品に商いをしてるざんす……。人間の方は、切り刻んで部位ごとだったり、体を一つまるごとで売ったりするざんす……！　まあ、多少は本人の希望も汲むざんすが、どんな形であれ結局は売りに出されるざんすよ……！」

下卑た笑みで楽しそうに語るサイモックの話に、リンは嫌な予感がした。
薄らとだが、何が言いたいのか解った。
そして、予感は的中する。

「つまり、リン君自身を賭けに出すのであれば、特別に勝負を続行しても構わないざんすよ……！」

嬉々狂喜とした笑いを浮かべ、サイモックが言った。
途端に、リンの全身に悪寒が走った。冬でも無いのに、体が酷く寒く感じる。
――狂ってる……！

この男は本気だ。もし勝負に負ければ、人間以下の扱いを強いられ、奴隷として売りに出される。場合によっては、体を切り刻んでの臓器でも何でも売れる物は売る。人間扱いなどしない。この鬼畜社長の手に堕ちた時点で、物扱いだ。

恐ろしい、悪魔のような男。

だが、その悪魔の提案は切り捨てられない。

頭を抱え、どこか諦めたような、決心したような顔でリンは言った。

「……分かりました。それでお願いします……！」

「おおっ！」

「なっ……!?」

リンの返答にサイモックは嬉々とした顔、ウーノ達や水銀燈は驚きの声を上げた。

たまらずウーノは早足に歩み寄り、声をかけた。

「リン！　貴方は、自分が何を言ってるのか理解してるのですか？」

「……解ってるつもりです」

「この勝負に負ければ、壁の向こう居る彼女達と同じ……いいえ、ソレ以上の酷い目に遭わされるかもしれないのよ!?」

大声こそ上げないものの、ウーノの声は緊張味を帯びていた。彼の身を案じていると言うより、言動に理解し難いと言った感じだ。

彼女の言い分は尤もだし、リンも解っている。ココに居る誰よりも臆病で、恐い思いも痛い目に遭うのも御免だ。

しかし、ソレでも今は引く訳にはいかなかった。

「解ってます……。でも、俺……どうしても水銀燈を助けたいんです……！　アイツが居るから、現在（いま）の俺が在るんです……！」

ウーノは言葉を失う。
叱る気も起こらず、逆に呆れてしまう。他人を助ける為に、自分の命を投げ出そうとする人間をウーノは見た事が無かった。魔導師の中にも、ここまでの人間はそうはいない。
頼り無い感じだが、その決意は本物だとウーノは解った。何を言っても無駄だと悟り、ウーノは無言で壁際に下がった。
タイミングを図って、笑顔のサイモックが言った。

「話はまとまったざんすか……？」
「はい……続行です……！」
「そうでなくては……！」

勝負の続行を、サイモックは嬉々として承諾した。

「あの、馬鹿っ……！」

壁の向こうのやり取りを見ていた水銀燈は、表情を険しくさせた。普段は臆病で、自分の後ろに隠れてるクセに、妙なところで意地を張って逃げ出さない。初めてセイラと闘った時もそうだった。ただ、あの時と違って今回は一緒に闘えない。助けに行けない。

そして、勝負再開。
ジャンケンの結果、リンが『待ち』でサイモックが『走』となった。
まずは、『待ち』のリンが地雷となる数石を選ぶ。一通り石を見て、一つの数石を選択した。選んだのは、先の勝負でサイモックが選択した2だ。先ほどでた数石は使わないだろう、と言う考えの裏をかきにいった。他の数石を隅に寄せて、準備が整う。

「それじゃあ、私の番ざんすね……！」

クリア困難な『走』でありながら、サイモックは笑顔が崩れない。リンが見る限り、心が揺れている様子は無い。その妙な自信が、不気味に感じてしょうがない。

言い知れぬ不安を抱くリンの前で、サイモックが数石を切り出した。

「まあ、まずは……コレざんすかね」

最初に出したのは、1だった。

出た数石を見て、リンは期待の感情が顔に出るのを抑えた。リンが選択した間近の数字で、零れ得ると思った。

リンの沈黙を通ったと見たサイモックは、笑って眼下の数石の列を見た。

「クホホホホ！　こういう時は、思いっ切りが一番ざんすよ……！」

あまり間を空けず、サイモックは二回目の選択を決めた。

場に出たのは、6だった。

一気に数字が離れて、リンは心中で舌打ちする。

下手に間隔を空けずに、サイモックは三回目、四回目と数石を出していった。

気が付けば、もう五回目――最後の回だ。

――マ、マジかよ……！？

信じ難い光景に、リンは戦慄を禁じ得なかった。六分の一で爆破とは、確率的に意外と高い。それなのに、サイモックはあまり地雷を踏み込む恐れも無く、数石を切ってきた。

リンの嫌な予感は、現実化しようとしていた。

顔色を悪くするリンの前で、サイモックは二タニタ笑いながら数石を選ぶ。

「ん～、どちらざんすかねぇ……コレは迷うざんすよ……」

考える素振りを見せて、数石の上で手を左右にさ迷わせる。

サイモックの手の動きを、リンは緊張の面持ちで凝視している。

「あ～、迷うがコレか……」

ややあって、一つの数石を手にした。

そして、場に数石が出された。

サイモックが選択したのは、地雷の2……では無く、その激近の3だった。

「ぐっ……！」

出された数石が外れ、リンは歯を食いしばって場に出された3を睨んだ。

「くぅ～！」

悔しがるリンに対して、

「クホホホホ！　いやいや、私の運も大したものざんすね！」

完走を果たしたサイモックは、歓喜の笑いを上げていた。

サイモックの笑いが響く中、リンは苦汁の顔でテーブルの一点を睨んでいた。相手の罠に嵌まったとは言え、自分が失敗した完走をサイモックはやり遂げた。それも、いともあっさりとだ。選択に迷

ってる素振りを見せていたが、どこか余裕のある様子をしていた。
——クソッ……！　そりゃあ、完走する可能性もあるけど……この場面で……。何で振り込まないんだよ!?　コイツ、ホントに運を持ってるのか……？
心に妙な引っ掛かりを感じながら、リンの『走』でサイモックの『待ち』の番が来た。
サイモックが、地雷の数石を選択した。
そして、『走』であるリンが数石を出す番が回ってきた。
数石を眺め、出す石を選んでる時だった。

「今度は、４を選んだざんすよ……！」
「っ……!?」

またもサイモックから揺さぶりをかけられ、リンの顔が強張る。
４の数字が、頭の中に飛び込んで離れない。
テーブルに肘をつけ、頭を抱えてリンは苦悩する。何度も何度も、同じ手で嵌めようとしやがって。ちくしょう。
また宣言と同じ数字、と思わせて今度は違う数字に張る。と読む考えの裏をかいて、さっきと同じく宣言通りの数字と言う可能性もある。考え出すと切りが無い。
答えの出ない問題に、イラついて髪を掻き乱す。
頭から手を離して、数石に触れる。プレッシャーと恐怖で、小刻みに手が震えている。数石に沿うように、指を滑らせる。
その時、ふと指の動きを止めた。
——何だ……？　今、妙な感触が……。傷……？　いや、まさか……。
ある仮説が浮かんだと同時に、不運が起こった。
震える手が、本人の意思に反して勝手に数石を倒してしまったのだ。

「あっ……！」
「爆破っ……！」

リンが気付いた戻そうとするも、間髪入れずにサイモックが声を上げた。
倒した数石は3で、サイモックの数字も3だった。
不幸。
不運な事故。
この結果にリン本人だけでなく、水銀燈やウーノ達も愕然として言葉を失っていた。
ショックで声も出ないリンに、サイモックは歪んだ笑顔で残酷な宣告をした。

「クホホホホ！　いやいや、残念ざんすね、リン君……！　コレで二連敗……！　もう賭ける物が無い以上、完全敗北ざんすっ……！」

＊

部屋で勝負の行方を観ていたセイラは、例によって舌舐めずりをしていた。
アップになってる絶望したリンの顔を見つめて、言った。

「あらァ？　折角、二戦目に突入して面白くなると思ったのに……もうお終いなのかしらァ……？　私を失望させないでちょうだい、リン……！」

アイツが信じた俺を……俺自身を……俺の直感を、俺が信じたい……！（前書き

まだまだ続くギャンブル。

僕は、格好悪いを主人公を書くんだな。

格好良い主人公は、周りのチートオリ主で充分じゃないかな。

アイツが信じた俺を……俺自身を……俺の直感を、俺が信じたい……！

リンは、アッサリと二連敗してしまった。

水銀燈達の救出に失敗したどころか、敗北した自分もサイモックの商品となるのだ。魔導師で無い自分は、おそらく体をバラされて臓器や体の部位を売られるのだろう。最悪の結果に頭の中が真っ白になって、思考力が失われていた。手だけに留まらず、恐怖に体全体が小刻みに震えている。

小心者故の不運なアクシデント一つで、僅かに残されていた生き残りの希望を自ら蹴ったのだ。

恐怖と絶望に支配されたリンは、茫然自失となっていた。何かの間違いだ、夢か何かに決まってる。愕然とした顔で、現実逃避に走っていた。

意識が遠のいているリンに、サイモックが嘲笑うかのように言った。

「クホホホホ！　残念だったざんすね、リン君……！　それでは約束通り、キミの体を貰うざんすよ……！」

非情なサイモックの言葉で、リンは現実に引き戻された。

笑顔でサイモックが片手を上げると、室内に控えていた三人の黒服が駆け寄り、リンの体をガッチリと掴んだ。

「ちょっ……ちょっと、待った……！」

今にも泣きそうな顔で、リンは叫んだ。

「待って……！　待って下さい……！　もう一回……もう一勝負お願いします……！」

「言ったざんしょ……？　賭ける物が無ければ、勝負する事は出来ないと……」
「待って……！　待って待って！　少しだけ待って下さいっ……！」

冷酷に突き放すサイモックに、リンは必死に訴えて片手をズボンのポケットの中に入れた。
漁る仕草を見せて、ポケットの中から何かを取り出した。手に握ってるのは、数枚のミッド紙幣だった。

「ま、まだ金はあるんです……！　五、六万くらいですけど……コレで……コレで何とか、勝負を……！」
「クホホホホホホ！」

リンの行為を嘲笑うかのように、サイモックは高笑いを響かせた。
そして席を立ち上がり、次の瞬間、

「ダメっ……！」

リンの手を思いっ切り叩き、握っていた紙幣をバラつかせる。
冷徹無情、非情な行為をするサイモックは、悪魔の笑いを顔に張り付かせて続ける。

「ダメ、ダメ……！　ダメざんすよ、リンっ……！　五、六万なんて端金（はしたかね）では、賭け金不足です……！　今回の勝負には、金で言えば最低でも一億……人間なら最低一人は必要ざんす……！　残念ですが、資金不足のリンはココで退場……！
奴隷決定ざんすっ……！」

醜悪な笑顔を深くして、サイモックは最悪の現実を突き付ける。
藁にもすがる思いで訴えた願いを冷たく拒否され、リンの顔から

血の気が引いて真っ青になる。
金の亡者であるサイモックは、何万程度の金では決して動かない。そんな事は解っていたが、それでも頼まずにはいられなかった。ココで何とか繋げないと、死んだも同然となるのだ。サイモックの手に落ちれば、家畜扱いで、更に臓器販売の為に体をバラされる可能性が高い。死んだも同然だ。
――嫌だ……！
リンの目に、大粒の涙が浮かぶ。
――嫌だ、嫌だ……！　嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だっ……！　死にたくないっ……！
死の恐怖を抑え切れず、涙を流す。止めどなく流れる涙は、頬を伝って下のテーブルに雫を滴らせる。
その時、力強い腕力で体を引っ張られた。無表情の黒服が、リンを別室に連れて行こうとする。
「わああ……！　あああああ！　待って……！　やめてくれ……！」
泣きの顔で、リンは叫んだ。抵抗を試みるが、黒服の男女の力が強くて振り解けない。
無駄な抵抗と解りつつ、泣き喚いて抗い続ける。傍から見れば、酷く無様で滑稽な姿だ。
「やめて！　一勝負……！　お願いします、もう一勝負だけ……！　助けて……！　嫌だっ！　逝きたくないっ！　誰かァァァァ！」
黒服に引き摺られながら、リンは熱を帯びた無駄な咆哮を上げた。壁の向こうの痛ましい光景に、捕われの女性達は次々と悲痛な顔を逸らす。辛過ぎて、とても見ていられない。その中でギンガは、水銀燈の他に自分の為に無茶な賭けに挑んだリンから目を逸らさず、

心中に申し訳ない気持ちを抱いていた。何も出来ない、情けない自分の無力さを呪った。

水銀燈も、同じような気持ちだった。気弱なクセに、馬鹿な勝負に挑むからこうなる。一時の異常なテンションに身を任せた結果が、この様だ。本当の本当におばかさんだ。顔を険しくさせて拘束の破壊を試みるが、やはり体に力が入らなくて不可能だった。そうしてる間にも、リンは別室に近付いている。

リンは、まだ喚き続けてる。

醜態を晒すリンを見て、クアットロは「惨めねぇ」と小さく呟く。彼女の呟きは、リンの大声に掻き消されて傍に立つ姉達には聞こえなかった。

そして、ついに黒服が別室の扉の前に着き、地獄への扉を開けようとした時だった。

「待って下さい！」

突然、部屋に鋭い声が上がった。

壁の向こう側の女性達も含め、一同は声の出所に顔を向けた。黒服も動きを止め、喚いていたリンも大人しくなって涙に濡れた顔で皆の視線を追った。

一同の視線を一身に受けるのは、ウーノだった。冷静で落ち着いた物腰で、彼女は言う。

「サイモック社長」

「な、なんざんす……？」

「もう一人、賭けに名乗り出れば勝負を続行してくださるのですね？」

ウーノの質問に、サイモックは眉を顰めた。

「まあ、そうなりますが……何故そんな事を……？」

するとウーノは、自分の胸に手を当て、とんでもない宣言をした。

「勝負続行の為に、私の体をベットします！」

「らっ……！？」

「えっ……！？」

驚く一同の中で、サイモックとリンが一際大きな声を上げた。

皆が驚くのも、無理は無い。誰が進んで、自分の身を賭ける勝負に名乗りを上げようか。しかも、二連敗した方に託すなんて気がおかしいとしか思えない。

笑顔の消えた驚きの顔で、サイモックはウーノに確認した。

「マジ……？」

「はい」

「……マジざんすか？」

「はい」

殆ど間を置かず、ウーノは答えた。

彼女の瞳には、揺るぎない意思が宿っていた。この無謀な決断を、変えるつもりは無いようだ。

しかし、彼女の仲間は黙ってはいなかった。

トーレが声を上げた。

「ウーノ……お前、正気か！？」

「ええ」

一つ頷いただけで、ウーノは撤回する様子は無い。

トーレはしかめっ面のこめかみを手で押さえ、「馬鹿な事を……」

とかぶりを振った。ウーノは、一度自分で決めた事はそう簡単には覆さない。彼女の頑固な面を知ってる故に、コレ以上止める言葉を出さなかった。

一方で、サイモックも困惑していた。

「いや、しかし……貴女の身に何かあれば、スカリエッティから何を言われるか……」

「その点についてはご心配なく。妹達の方で上手くやらせますので、社長にはご迷惑はおかけしません。約束いたします」

「そうですか……なら……」

途端に、サイモックの顔に再び笑みが浮かんだ。カモを見つけたと言う、獣（ケダモノ）の笑顔だ。

「構わないざんすよ、私は……！　勝負続行っ……！」

ウーノのベットを、サイモックは笑顔で受けた。

サイモックは黒服に、リンを放すよう目配せをした。指示を受けた黒服は無言で頷き、リンの拘束を解いた。

一時的に解放されたリンは、その場に座り込んだ。ほったらかされて勝手に話が進んで、先ほどまでパニック状態に陥ってたリンは、何が何だか解らず茫然としている。理解出来ない意味不明の展開に、ただただ呆けて口を開けてるだけだ。

事態を把握してないリンに歩み寄り、ウーノが手を差し伸べた。

「立てますか？」

「え……？　あ、ああ、はあ……」

ハッと我に返り、おもむろにリンは差し出されたウーノの手を掴む。引っ張られ、立ち上がった。

目の前に居るウーノと席に着いてるサイモックを交互に見て、遠慮がちにリンは言った。

「あ、あの……一ついいですか？」

「何です？」

「その……トイレ、いいですか？」

緊張のせいで、リンは腹の具合を悪くしていた。

＊

案内されたトイレの洗面台で、リンは顔を洗っていた。

既に用を足した後で、腹具合はスッキリさせている。だが、頭の中はスッキリとしていなかった。どうしてウーノが、あんな無謀な申し出をしたのか理解出来なかった。自分で思うのも何だが、この三戦全く良いところが無い。普通に考えて、そんなダメ野郎にベットするなんてあり得ない。

いくら考えても解らないので、リンは考えるのをやめた。

ペーパータオルで顔を拭き、リンはトイレを出た。

出入り口の前に、ウーノ、トーレ、クアットロの三人が待っていた。

「御気分はいかがですか？」

「ええ、まあ、大分よくなりました」

少し逡巡して、リンは訊いてみる事にした。

「あの……」

「何でしょう？」
「ウーノさん、どうして自分を賭けに……？」
怪訝に思うリンに対し、ウーノは真面目な顔で答えた。
「そうですね……ドクター風にお答えすれば、貴方に興味を抱いたからです」
「……それだけの理由で？」
「はい」
頷くウーノに、リンはいまだ怪訝そうに顔を顰めていた。
ウーノが嘘をついてるとは思えないが、どうも納得出来ない。興味を抱いたと言うが、あんなダメダメな場面を見て一体どこに興味を持ったのか疑問に思うばかりだ。
しかし、あまり深く考えなかった。考えたところで、彼女の本心は解らない。それに、今は現状を喜ぶべきだ。理由は何であれ、ウーノがベットを申し出てくれたお陰で、水銀燈達を救う可能性が見えてきたのだから。
そう思うと、リンの顔に自然と笑顔が浮かんだ。
「はは……あの、ありがとうございます」
「お礼でしたら、勝った後にして下さい」
ウーノは厳しい人だった。
「しかし、勝負したところで勝ち目はあるのか？」
壁に寄りかかり、腕を組んだトーレが尋ねた。
彼女の懸念は尤もだ。勝負を再開出来ても、勝たなければ意味が無い。

その事について、リンは一つ気になる発見をしていた。

「あの、実は……」

その時だった。

トーレに目を向ける為に、振り向く際にクアットロの姿が映った。

頭に、何か引っ掛かった。顔を顰め、話しかけた口を閉じて考え込む。よく解らないが、先ほどの自分の発見と関係がありそうな事に思える。

急に口を閉ざしたので、トーレは目を細めた。

「どうした？　“実は”何だ？」

「もしかして～、今更怖気づいちゃったのかしらぁ？」

猫なで声を出したのは、クアットロだ。

ニコニコ笑っているが、本心はどうなのか解らない。リンの苦境を愉しんでるのか、姉をベットされて怒ってるのか、窺い知れない。

「もし逃げるんでしたら、私のＩＳでお助けしますわぁ。けど、リンちゃんはどうしようかしらぁ？」

「クアットロ」

ウーノが少し口調をキツめにして、クアットロを咎めた時だった。

リンは目を見開き、頭の中である閃きが走った。色んな情報が飛び交い、やがて一つにまとまり、答えを生み出す。ある戦略が出来上がった。

自身の閃きに驚きつつ、リンは呟く。

「見つけた……！」

「え？」

小さな呟きを聞き取った三人は、振り向いてリンを見た。
三人の視線を浴びるリンは、拳を固めた。

「究極の必勝法っ……！」

＊

薄暗い部屋では、サイモックが席に着いていた。
一同がトイレに出た扉を見て、いまかいまかと待ち侘びている。
あと数分で、更に戦闘機人の商品が増える事になるのだ。魔導師や戦闘機人等の道具を必要としてる者は、大勢居る。皆、惜しみなく大金を払って買ってくれるハズだ。そう考えるだけで、胸が躍る。
今夜は最高の夜だ。
上機嫌で待っていると、部屋の扉が開いた。
目を向ければ、リンとウーノ達が入ってきた。

「あはっ……！」

思わず笑いが零れてしまう。
――来たざんすね、狩られる哀れな兎が……！
険しい面持ちで、リンはテーブルに歩み寄り、席に着いた。
ウーノ達は壁際に寄り、テーブル全体がよく見える位置に立っている。

「待たせてすみません」
「いやいや、構わないざんすよ。腹具合だけは、しょうがない事です」

上機嫌のサイモックは、ニコニコの笑顔を絶やさない。
一言詫びたリンは、透明な壁の向こうを見た。拘束されてる水銀燈が、見るからに不機嫌そうな様子で見つめ返している。思わずリンは、苦笑いをした。
それからリンは、サイモックに向き直る。
笑顔で受け、サイモックが言う。

「それじゃあ、始めるざんすよ……！　四回戦……今度こそ、正真正銘最後の勝負……『地雷』を……！」
「はい……！」

両者、手を出してジャンケンの構えをする。勝負の結果を左右する、重要な行為だ。
リンの手はパー、サイモックの手はチョキだった。

「クホホホホ！　それじゃあ、私は『待ち』ざんす……！」

嬉々として笑うサイモックの前で、リンの表情は暗く険しくなった。
この大事な場面で、最初の選択をしくじった。コレでリンは、五歩と言う一見短いが、長く辛い道のりを歩む事になった。出来る事なら、『走』は避けたかった。しかし、決まったからにはやり切るしかない。
初っ端から苦しむリンの前で、サイモックは笑顔で地雷選択をしている。

「そうざんすね……それじゃあ、今回は……」

ややあって、一つの数石を選んだ。

そして、相手を嘲笑うかのような笑顔で、呪いの言葉を口にする。

「5、ざんすよ……！」

瞬間、リンの顔が強張った。

またしても、同じ手に出てきた。しかし、この作戦が効果絶大なのは、嵌まったリンがよく知っている。

他の数石を隅っこに寄せて、地雷となる数石を一つ立てて選択を終了した。

「さあ、リンが打つ番ざんす……！」

受けてリンは、目の前にある自分の数石を見つめる。

やはり、サイモックの言葉が頭に残っていて、考えが縛られる。

リンが苦悩する様を見て、サイモックは愉快そうにほくそ笑む。

相手がもがき苦しむ様は、いつ見ても面白いモノだ。その顔が見れる『地雷』は、自画自賛したい位に素晴らしいゲームだ。

サイモックの魔法によって、リンは苦しむ。

ウーノ達は、ただ黙って彼の様子を見守っている。

――やっぱり、コレしかないか……。

半ば諦めたように溜め息をつき、リンは決心した。

サイモックの呪縛から逃れる為に、リンは驚きの行動に出た。立てている数石を、全部テーブルに伏せたのだ。

「あ……？」

目の前のサイモックは、行動の意味が解らず、怪訝そうに片眉を上げた。

対戦相手だけでなく、見守っている水銀燈やギンガ達捕われ組も解らないと言う風に首を傾げる。

そんな一同の反応も構わず、リンの奇妙な行動は続く。目を閉じて、なんと数石をバラバラに混ぜ始めた。ジャラジャラと数石がぶつかる音を鳴らして、混ぜていく。

混ぜる。

混ぜる。

混ぜる。

しばらく混ぜて、リンは手の動きを止めて目を開けた。

「よし……！　始めよう……！」

「え……？　始めるって……」

不審に思うサイモックに構わず、リンは混ぜた六つの数石の中から、おもむろに一つ選択した。

そして、テーブルの空きスペースを見つめて、選んだ数石を表表示で出した。

「なっ……！？」

サイモックは目を見開き、動揺した。

リンが出した数石は、3。

地雷となっている数石は、4。

激近（げきちか）だが、ギリギリでかわされた。

しかし、サイモックにとって驚きなのは地雷をかわされた事ではなく、リンの無茶苦茶な行動だった。

――こ、この餓鬼（ガキ）……！　なんて無茶苦茶な打ち方をするんだ……！？

顔から笑顔が崩れ、初めてサイモックはリンを睨んだ。額に汗を滲ませ、動揺を露にする。

――私の縛りから逃れる為に、思考を放棄したざんす……！

サイモックの思考の縛りから逃れる為に、リンは驚くべき大胆な

手段に出た。
　完全思考放棄。
　なまじ選択肢があるから、人間は迷うのだ。そのせいで、相手の罠に嵌まってしまう事がある。三戦目までのリンのように。そこでリンは、勝負に挑む前に作戦を立てた。作戦とも呼べない粗すぎる戦略だが、もし自分が初っ端で『走』になった場合、自分の数石を見えないようにした上で混ぜ、どれが何か解らない状態にする。コレでは、考えようが無い。
　トイレで立てた作戦だが、出来れば初っ端から『待ち』で臨みたかった。
　しかし、『走』となった今では、この完全思考放棄で乗り切るしかない。
　ただ指で掴んだ物を切る、指運だ。
　一つ切って、残り五つ。残り四歩。
　裏表示の数石から、一つの石を掴んだ。持ち上げようとして、手の動きが止まった。
　ぐっ、と険しい表情になる。本当にコイツでいいのか？　と新たな迷いが生まれた。迷いは不安となって胸中に広がり、手の震えとして表に出てくる。
　チラッとリンは、横目で水銀燈を見る。
　彼女も見つめ返し、固唾を飲んで見守っている。
　手にした数石に目を戻して、リンは大きく深呼吸をした。
　――信じたいっ……！
　迷いを払うように、石を持つ指に力をこめる。
　――アイツが信じた俺を……俺自身を……俺の直感を、俺が信じたい……！
　意思を固め、迷いを振り払ってリンは掴んだ数石を出した。
　場に出したのは、６。
「ぐっ……！」

またも外れ、サイモックは更に顔を顰める。
――餓鬼がっ……！　クソ度胸のメチャ切りざんす……！
心中で悪態をつくサイモックの前で、リンは次々と数石を切っていく。
2。
5。
切り出される数石は、どれも地雷をかわした。
そして、最後の回がきた。
リンの前に残されたのは、1と4。
二者択一。
天国か地獄。
見事かわせば、生還の完走。
重苦しい沈黙の中で、リンは決断して片方の数石を掴んだ。
苦い表情のリンと向かい合うサイモックは、物凄い形相で念じる。
――来いっ……！　出せっ……！　地雷である4を出せっ！　踏み込んで来いっ……！
数石を掴むリンの手を、睨むように凝視する。
サイモックの負の念か、リンの運か。
――頼むっ……通ってくれっ……！
数石を掴む手を高く掲げ、テーブルに叩きつける。
その場の全員の注目が、出された数石に集まった。
出されたのは、1か、4か？

「くっ……！」

数石を見た瞬間、サイモックの顔が歪んだ。
リンが出したのは、1。
かわした。
完走した。

地雷が眠る死地を、走り切った。

「く～！」

悔しがるサイモックの反応を見て、リンは通った事を察してホッと安堵する。

それは、見守っている者も同じで、水銀燈にギンガ、ウーノ達も同様に胸を撫で下ろしていた。

安心したのもつかの間、『走』と『待ち』の役を交代する。

運命の延長五回戦。

ウーノは腕組みをして、短く息を吐いた。

――勝ちなさい、リン……！

心中で激励を送り、勝負を見守る。

そして、一同が見守る中、リンの地雷選択が始まった。並べられた数石を見つめ、緊張感を表した険しい顔で考え込む。まだ一分も経過してないが、緊迫した空間に身を置く者には感覚が狂って五分や八分に感じられる。

そして、リンは動いた。おもむろに手を動かし、ゆっくりと一つの数石を掴んだ。目線を上げて、向かい合うサイモックを見据える。

――最後……！　コレが最後だ……！　行けっ……！　最後の、運命の、一打っ……！

勢いをつけ、テーブルに数石を叩き出した。

サイモックは、苦渋の顔で指に隠された数石を睨むように凝視する。

ゆっくりとリンの指がどかれ、数石の裏面が現れる。

ソレを見た瞬間、サイモックは内心で快哉を上げた。

――よぉぉぉし！　見えたざんすよ、数字が……！

嬉々とした感情を抑えて、顔に出ないように努める。

――クホホホホ！　そうだ！　何も恐れる事は無い……！　私が踏み込む事は、絶対に無いのだからっ……！

サイモックの余裕――ソレはイカサマ。
数石の真っ白い裏面に、細工が施されているのだ。普通なら触る事が無い四方の隅の内の一ヶ所に、小さな印を彫ってある。印は小さい上に触り難い箇所で、部屋は薄暗くて視認し辛い。まず気付かれる事は無い。
サイモックは、視力を強化させる特殊なコンタクトレンズを目に付け、確認出来るようにしている。
これがサイモックの余裕と自信の正体。
そして、肝心の数石に刻まれてる印は、3を示していた。
――私は踏み込まない……！　だから私は、次戦で奴が惨めに敗北するのを、ただ待てばいいざんす……！　いわば、コレは通過儀礼……！
リンの強運に驚くも、自分の優位性に心を落ち着け、余裕を取り戻したサイモックは数石を手に取る。
彼が手にしたのは、2。印で確認した数石以外なら、何を切っても大丈夫。
選んだ数石を手に、下卑た笑みを顔に張り付かせ、リンの苦しい顔を見る。
――所詮お前は、喰われる側の人間（クズ）ざんすよっ……！
手を伸ばし、テーブルに2の数石を出した。

「あっ……！？」

場に出された2の数石を見て、リンは驚いて目を見開いた。
リンの反応を、サイモックは可笑しそうに笑う。
――クホホ！　地雷の激近の2ざんすからね。まあ、驚くのも解るざんすよ……。
印によって地雷の数字を看破してるサイモックは、次に切る数石を選ぼうとした。
その時、

「待った……！」
「あ……？」

リンに止められ、サイモックは顔を上げた。
見れば、リンは地雷の数石を見つめたまま、目に涙を溜めていた。
泣いている理由がサッパリ解らず、サイモックは訝しげに眉を顰める。
そしてリンは、衝撃の宣言をした。

「爆破っ……！」

宣言と同時に、地雷石を倒した。
現れた数字は3……では無く、2。

「その2……！　2で爆破だっ……！」
「なっ……!?」

信じられない光景に、サイモックは驚愕絶句する。
一方でリンは、勝利に涙して歓喜の咆哮を上げた。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

彼にとって初めての勝利であり、水銀燈達を取り戻す権利を得たのだ。腹の底から、あらん限りの声を絞り出す。

「がっ！　がっ!?　がっ……!?」

サイモックは動揺が大き過ぎて、頭の中が混乱していた。
そして、衝撃は周りに広がり、透明の壁の向こう側の女性達にも

伝わっていた。皆がリンの勝利に歓声を上げ、喜びの涙を流していた。ギンガも彼女達に混じって、喜びを分かち合っていた。

水銀燈はと言うと、心配していた分、リンが勝って生き残った安心が大き過ぎて派手に騒がず、深い深い溜め息をついていた。

そして、ここまで好調だったサイモックが、地雷を踏んだ事に少しながら疑問を抱いていた。

当の本人も、納得がいかなかった。イカサマで地雷の数字を確認してたのだから、当然だ。

「バ、バカな……！？　何ざんす、コレは……！？　あり得ないざんす、こんな事っ……！」

「は……？　あり得ないって、どうして……？」

あたふた取り乱すサイモックに、今度はリンが笑みを浮かべて尋ねる。

「え……？　いや、ソレは……」

イカサマの事を言えないサイモックは、口ごもってしまう。

すると、小馬鹿にしたような笑い声が室内に上がった。露骨に狼狽えるサイモックが振り向いた先には、口に手を添えて笑っているクアットロが居た。

「隠さなくても、貴方のイカサマはもうバレてますのよぉ、サイモックさん」

「ぐぅ……！」

歪むサイモックの顔を面白そうに眺め、クアットロが続ける。

「リンちゃんは三回戦での『走』の時に偶然、数石に仕掛けられて

る印に気付いたのよ。それで、四回戦を始める前にトイレ前で、私達にある作戦を持ち掛けてきましたの。

実に単純……それは、印の偽装……！　まず、数石に刻まれてる印をトーレ姉様の強化された視覚で見つけて、どの印が何の数字を指してるのか確かめる。その情報を私が受け取り、ＩＳ『シルバーカーテン』で貴方の視覚に偽の印を見せましたの。作戦通り、貴方は偽りの印を本物と勘違いして地雷を踏んでくれましたわぁ。

うふふ。私ぃ、人を欺くのって大好きだから、すぐリンちゃんの案に乗っちゃいましたわ～！」

実に楽しそうに、クアットロは笑顔で説明をした。余程サイモックが動揺してる様子が、気に入ったらしい。性格の悪さがうかがえる。ＩＳの能力も、彼女の性格を現してるようなモノだ。彼女のＩＳ『シルバーカーテン』は、人の五感は勿論、レーダーやシステムも欺く高度な幻覚能力である。

話を聞いたサイモックは、驚きを禁じ得なかった。

自分のイカサマが、バレていた。

「バ、バカな……！　バカな、バカな……！」

認めないと言った風に、サイモックはかぶりを振る。

――あり得ないざんす……！　だって、そうざんしょ！？　数石に彫った印は、彫りは浅いし、触り難い位置だし、部屋は薄暗いから見つけるのもまず無理ざんすよ……！　ソレを、あの精神的にも追い詰められた状況で見つけて、たまたまスカリエッティの秘書がベットに名乗りを上げて首の皮一枚繋がって、あまり時間を空けない内に攻略法を思い付き、しかも土壇場で完走を果たすなんて……。あの三戦目だって、私が体を賭けになんて言い出さなければ、成立すらしなかったざんすよ……。無茶苦茶ざんす……！　あり得ない展開……ご都合主義展開ざんすよ……！

驚愕に目を剥いた顔で、サイモックは目の前のリンを見る。歯を食いしばり、忌々しげに睨む。

――こ、この餓鬼……ただの餓鬼じゃなかったざんす……！　本物っ……！　信じられないが、コイツは正真正銘、本当本物の『強運』……！　魔法、腕力、知力も関係無い、一切の混じりっ気なしの強力な『純運（じゅんうん）』ざんすっ……！

振り返ってみれば、リンはその強運の片鱗（へんりん）を何度も見せていた。職を失って自堕落な日々を過ごしていたところに改運屋に出逢い、リインフォースの中に巣食っていた闇と水銀燈との戦闘の場に居合わせた時は契約を結んで勝ち残り、洞窟でセイラと相対した時は最後の最後に凄腕魔導師の春香に助けられた。ミッドチルダに来てからは、セイラが仕掛けた『三色』を偶然ヴィヴィオが途中で目覚めた事でクリアし、路地裏では殺されずに済み、管理局よりも先に現場に現れたナンバーズに拾われた。あの時、もし管理局に発見されていたら、水銀燈達が捕まってるこの店に来る事はおろか存在を知る事も無かった。

まさに、強運である。

「社長さん……！」

その強運の持ち主が、サイモックに当然の要求をした。

「勝負は俺の勝ちです……！　約束通り、水銀燈とナカジマさんを返してください……！」

敗者は、勝者に従わなければならない。

ソレはこの場に限らず、勝負の世界の掟だ。

しかし、

「バーカ！　んなモン渡す訳ないだろ……！」

「は……？」

サイモックは目をギョロつかせ、舌を出して要求を拒否した。

断られたリンは、あからさまに不満顔でサイモックを睨んだ。ウーノ達や壁の向こうに居る女性達も、顔を顰めた。

全員の注目を一身に浴びて、サイモックは続ける。

「言ったざんしょ？　このゲームは、私にとって単なる趣味ざんす……！　その趣味で、大切な商品を本当に賭ける訳ないだろ、バーカ……！」

「なっ……！？　でもアンタ、負けた俺を連れて行こうと……」

「バーカ……！　お前と私とじゃ、社会的に地位も格も違うんだよ……！」

無茶苦茶だ、とリンは思った。

自分に都合の良い時は続けてやりたい放題して、負けて都合が悪くなった途端に全てを無かった事にしようとしている。典型的な自分勝手な性格の人間だ。

理不尽な理由で拒否するサイモックに、リンは怒りと不満を抱く。

――コイツ、俺以上に最悪だな……。

リンも出来た人間では無い。さっきも負けた時、見苦しい醜態を晒した。

だが、目の前の男はもっと最低だ。言い訳の仕方や、態度が悪過ぎる。最低過ぎて、怒りを通り越して逆に呆れてしまう。

壁の向こう側の捕われの女性達ですら、サイモックを哀れみの目で見たり、呆れた眼差しを向けていた。水銀燈とギンガ、果てはウーノ達も例外無く呆れていた。クアットロなんか、あまりの見苦しさに呆れだけでなく侮蔑の念も目にこもっていた。

拒否するサイモックだが、当然リンが納得するハズが無い。

「冗談じゃないですよ……！　今すぐ二人を返してください……！」
「うるさいぞ、バーカ……！」

サイモックが言葉を返した直後、二人の黒服が駆け寄って両サイドからリンを捕まえた。
突然の事態に、リンは動揺する。

「な、何するんですか！？」
「向こうの商品部屋に、ぶち込むざんすよ……！　人形の傍に置いてやるだけ、有難く思え……！」
「ふざけんなっ……！　放せっ……！」

抵抗するが、黒服の男女の方が力強い上に拘束も上手く、振り解く事が出来ない。成す術も無いまま、黒服に引き摺られていく。
これにはウーノも、抗議の声を上げた。

「社長！　いくら何でも、横暴です！　貴方は勝負に敗れたのですから、潔く彼の要求に応えなさい！」
「やかましいざんす……！　今夜の勝負は、最初から最後までぜ～んぶ無しざんすよ……！」

客に対する態度を失う程に、サイモックは堕ちていた。
この男と口論をしても、不毛なやり取りである事をウーノは悟った。

「放せっ！　水銀燈ォォォォォ！」

叫ぶリンは、既に部屋の扉の前まで引き摺られていた。
このままサイモックと口論しても、埒があかない。手荒な真似はしたくなかったが、ココは実力行使で取り戻すしかないようだ。

ウーノがトーレとクアットロに、通信で指示を出そうとした時だった。
突然、轟音と共に天井の一部が崩れた。コンクリの天井は粉々に砕け、大小の破片が床に落ちる。埃が室内に広がり、一同は咳き込む。
「な、何事ざんす……！？」
埃を手で払いながら、サイモックが声を上げた。
その直後、
「ぐあっ！」
「ぎゃっ！」
二つの呻き声が聞こえた。
埃が立ち込めて視界が悪く、室内の状況が判らない。
徐々に埃が晴れていき、視界が戻ってきた。
回復した視界に捉えたのは、一人の女性の姿だった。少し茶色がかった長い黒髪で、無表情だが顔は綺麗に整っており、胸も突き出てスタイルも良い美少女だ。胸元に赤いリボンの付いた学生服をイメージしたような黒い衣装を身に纏い、ミニスカートから覗く足には白の二ーソックスを履いている。そして後ろ側の腰には、鞘に収められた二本の刀が交差してる形で提げられていた。
正体不明の闖入者に、一同は警戒心を抱いて身構える。
透明の壁の向こうに居る女性達も、身を寄せ合っていた。
ギンガは鎖の長さ一杯に前に出て、闖入者を見据える。魔力を感じるところから、魔導師である事は解る。だが、それよりも重要なのは女が敵か味方かであった。
ふとギンガは、動揺したような小さな声を聞き取り、横を向いた。
視線の先には、目と口を大きく開いて動揺を露にしてる水銀燈が

居た。

「どうしたんですか……？　あの女性を知ってるんですか？」

声を抑えてギンガが尋ねるが、水銀燈は答えなかった。

「だ、誰ざんすかお前……！？」

部屋では、サイモックが本人に直接問い掛けていた。

しかし、闖入者はサイモックを見向きもしないで踵を返して歩き出した。

歩く先に居たのは、リンだった。唖然とした顔で闖入者を見上げる彼の傍には、黒服の男女が倒れていた。

座り込んでるリンの前で歩みを止め、闖入者は口を開いた。

「捜したぞ、義弟（おとうと）よ」

僕は、その……ヒーローなんかじゃないです……。（前書き）

ギャンブルが終わって、『リリカルなのは』らしく魔法バトル再開です。
久しぶりに、あのキャラが出ますが……果たして何人の読者が覚えてるだろう？

僕は、その……ヒーローなんかじゃないです……。

謎の美少女が天井を破って派手に乱入して、場は再び緊迫した空気になった。

サイモックの部下である黒服は勿論、ウーノ達も警戒して身構えた。下手に動かず、まずは相手を観察する。制服の恰好をしているが、管理局の物とは違う。だからと言って、局員である可能性は完全に否定出来ない。敵か味方か判らない以上、警戒するに越した事は無い。

様子をうかがっていると、美少女は茶色がかった長い黒髪をなびかせ、歩き出した。向かう先には、黒服の拘束から解放されて床に座り込んでるリンの姿があった。

彼の目の前で立ち止まると、美少女は驚きの言葉を口にした。

「捜したぞ、義弟(おとうと)よ」

「ちょっ……！？」

即座に反応したのは、呼ばれたリンだった。慌てて立ち上がり、恥ずかしそうに顔を赤くして詰め寄る。

「蓮花(れんか)さん！　人前では“義弟”とか言わないって約束でしょう！？」

「そうだったか？　済まない、忘れていた」

相手の美少女――蓮花は謝るものの、涼しい顔をして悪いとは思っていない様子だ。

蓮花がリンを義弟と呼び、にわかに透明の壁の向こう側も含め、室内はわざついた。見るからに地味なリンに、あんな綺麗な義姉がいる事に驚いてるのだ。

しかし、本当はリンと蓮花は義理の姉弟では無い。

蓮花の正体は、過去の依頼で改運屋社長の春香が義妹として引き取った、不死の少女なのだ。十年前の蓮花は、体内に不老不死のロストロギアを所持していた影響で、幼い姿を保っていた。ところが、セイラに不老のロストロギアだけを奪い取られ、異変が生じた。奪われる際に大量出血を起こし、更に不老のロストロギアを失った影響で、身体が急成長を遂げたのである。一ヶ月もしない内に、肉体が二十歳近くまで成長した事には、春香達も驚いた。だが、不老のロストロギアの効力がまだ残っているようで、二十歳近くになってから、また成長が止まっている。いや、成長が物凄く遅くなっているのだ。

現在、蓮花はリン達と同じく改運屋に就いて行動している。ココに来る前も、別の依頼をこなしていた。

どうして蓮花がやってきたのか、リンは疑問に思った。

「蓮花さん、どうしてミッドチルダに……？」

「お義姉様から、リン達からの定期連絡が来なくなったと聞いて飛んできたのだ」

「ああ……忘れてた」

理由を聞いて、リンは得心した様子を見せた。

今回の仕事が長引く事を報告したリンと水銀燈は、春香から状況報告も兼ねて無事である事を知らせる定期連絡を入れるよう指示されていた。誘拐犯に仕立てられて以降は、機動六課との交戦や水銀燈達が攫われたりと大変な事態が続き、定期連絡の事を忘れていた。

その結果、仕事を終えて手が空いた蓮花が、駆け付けたのだ。

リンが納得した後、蓮花は思い出したように言った。

「ああ、それからもう一人来ているぞ」

「え？」

疑問の声を出した直後、空いた天井の穴から新たな乱入者が降ってきた。
現れたのは、またも美少女だ。

「蓮花ちゃん、置いていくなんて酷いよ～！」
「済まない。急いでいたものでな」

天井から現れた美少女に、蓮花は素直に謝った。
降ってきた美少女は、長い金髪を綺麗に流し、まだ少しあどけなさが残った可愛い顔をしている。年齢は、十五、十六歳と言ったところか。水色のシャツの上に白い上着を羽織り、青いフリルスカートを履いている。彼女も、蓮花に勝るとも劣らないスタイルを誇っていた。
金髪の美少女は、蓮花の前に居るリンを見つけて笑顔になる。

「あ、リンさん！　良かったぁ、無事だったんですね」
「う、うん。アリシアさんも元気そうだね」
「はい！」

場にそぐわぬ明るい笑顔で、金髪の美少女は、アリシア・テスタロッサ。
機動六課に属しているフェイトの生みの親である、プレシア・テスタロッサの娘である。成長したアリシアも、自ら改運屋に就いている。
連絡が途絶えたリン達を心配して、蓮花と一緒にミッドチルダに訪れたのだ。

「リンさん、水銀燈さんはどうしたんですか？」
「あっ！　そうだ、水銀燈！」

アリシアに言われて、リンは透明の壁の向こうを見た。
十字架に張り付けられてる水銀燈も、蓮花とアリシアの登場に目を見開いて驚いていた。
他にも捕われの身となってる女性達の姿を見て、アリシアは動揺して口に手を添えた。

「水銀燈さん！　それに、あんなに沢山の女性が……酷い……！」
「なるほど……大体の事情は把握した」

室内を見渡して、蓮花は素早く現状をほぼ把握した。
そして目を鋭くさせ、黒服に混じって仕立ての良いスーツを着てるサイモックを見据えた。

「ひっ……！」

目が合ったサイモックは、一睨みで怯え、思わず後ずさった。
すると、部屋に居る黒服が護るようにサイモックの前に出た。それぞれのデバイスを構え、サングラスの下を険しい顔つきにして臨戦態勢に入る。目の前の二人が、タダ者で無いと気付いてるようだ。
黒服に護られたサイモックを見据え、蓮花が言った。

「貴様等か……私の義弟に危害を加えようとし、水銀燈を捕えたのは」
「今すぐ皆を解放して下さい！」

アリシアも憤りを表した顔で、声を上げて訴えた。
二人の迫力に、サイモックは気圧されていた。特に、恐ろしいと思ったのは蓮花だ。アリシアのように声を上げず、表情も小さな変化だが、全身から放たれる威圧感は並ではない。間近に居れば、足

が竦んで動けなくなるか、尻餅をついていただろう。
水銀燈と捕われの女性達の解放を迫られるが、サイモックは従う気は無かった。

「ふ、ふざけるなざんす……！　天井をぶち壊して無粋に入ってきて、大事な商品を手放せだと……？　そんな事する訳ないだろ、バーカ……！」

恐れを抱きながらもサイモックは、精一杯の虚勢を張って拒否した。
蓮花は恐ろしいが、距離が離れており、部下達に護られた状態にある。そして何より、欲深い性格ゆえに商品を手放すなど出来なかった。
サイモックの返答を聞いて、蓮花は溜め息をついた。

「そうか。まあいい……貴様等が謝罪して女達を返そうがしまいが……」

一拍間を置き、蓮花はカッと目を見開いた。

「貴様等に重い罰を与える事に変わりはないっ……！」

その瞬間、場の空気が明らかに変わった。
鋭い目つきの蓮花を中心に、まるで冷凍倉庫内のように空気が冷たくなった感覚に襲われる。黒服はゾッと全身に寒気を感じて、額に冷や汗を浮かべた。殺気にも似た、静かだが強烈な怒気をその身に当てられる。目を合わせているサイモックは、気を当てられて完全に体が竦んで動けなくなっていた。
直接当てられていないウーノ達も、微動だにする事が出来なかった。数々の任務をこなし、実戦経験が豊富なトーレでも、これ程の

怒気は感じた事はなかった。
――れ、蓮花さん、やっぱ恐ェェェ！
後ろに居るリンも、静かに怒る蓮花に怯えていた。味方なのに。

「な、何が罰を与える、だ……！　何様ざんすか……！？」

蒼ざめた顔で、サイモックは絞り出すように声を上げると、スーツの内ポケットの中に震える手を突っ込んだ。内ポケットの中には、緊急事態に備えて部下を呼ぶ為の装置が入っている。サイモックは、その装置のボタンを押した。
殆ど間を置かずに、待機していた部下が部屋にやってきた。集まった護衛役の黒服は、総勢三十人ほどだ。中にはデバイスの他に、質量兵器である銃器を持った黒服の姿が見える。デバイスの方は全員、非殺傷設定を解除している。本気で殺す気のようだ。
兵を従えた事で、サイモックの顔に余裕の笑みが戻った。

「どうざんす……？　この数を目にしても、やる気ざんすか……？」
「数に物を言わせる……弱者の常套手段だな」

部下を従えて強気なサイモックを、蓮花は鼻で笑った。
一触即発のピリピリした空気の中で、ふとアリシアが気付いた。

「リンさん。アソコに居る三人は、誰なんですか？」

アリシアが指差したのは、様子見をしてるウーノ達だった。
思い出したように、慌ててリンは言った。

「ああ、そうだ！　また忘れてた！　あの三人は敵じゃないですから！　寧ろ、水銀燈達を助ける為に協力してくれた味方ですから！」
「そうか。分かった」

蓮花は振り向かず、背中で返事をした。
今の蓮花には、眼前の敵軍しか見えていなかった。腰の差した二本の刀を逆手に掴み、僅かに姿勢を沈める。

「いくぞ、アリシア」
「はい！」

アクセサリーを付けた右手を掲げ、アリシアは答えた。

「が、餓鬼共が……ナメおって……！　お前等皆殺しざんすよ……！　かかれェェェェェェェ！」

サイモックが号令を下し、部下の黒服が一斉に襲い掛かった。
その直後、蓮花は床を蹴り、黒服の群れに突っ込みながら鞘から刃を抜き放つ。瞬間、四、五人の黒服が同時に吹き飛んだ。周囲に強風のような剣圧を吹き荒らし、吹き飛ばした黒服は壁や天井に叩きつけられる。
一瞬の出来事に、黒服は動揺を禁じ得なかった。
二刀抜刀術一式・疾風交差（しっぷうこうさ）。
春香から叩き込まれた、二振りの刀型デバイスを用いた魔剣術だ。刃に魔力を通して滑りを良くして、最高速度の抜刀した刀を交差させながら風の如き速さで相手に斬りかかる技。相手が密集してるところに放てば、同時に複数の敵を倒す事が出来る。
滅多にお目にかかれない刀型デバイスの剣戟に、黒服が面食らってる隙に、アリシアも動いていた。

「サンダーウィップ、セーットアップ！」

アリシアが、自分のデバイスを起動させた。黄色い輝きに包まれ、

身に付けてる衣服が消えて全身の素肌を晒す。相手の黒服と似たデザインで、下は動きやすいようミニスカートになっている。バリアジャケットを身に纏ったアリシアの左右の手には、甲の部分に青い球体が付いた手袋型デバイスを装着していた。
戦闘準備を整え、アリシアも参戦する。

「いくよ、サンダーウィップ！」
『イエス、マスター！』

球体部分が点滅して、デバイスから機械音が発せられた。アリシアのデバイスは、ＩＡが搭載されたインテリジェンスデバイスなのだ。
両腕を交差させる指先から、淡い黄色の光を発する糸が出る。顔から穏やかな笑顔を消して、真顔で敵を見据えて両腕を振り抜く。
指先の複数の糸が伸び、黒服目掛けて宙を走った。
そして、光の糸が黒服の体に触れた瞬間、

「ぎゃあああああああああああ！」

全身に電流が走り、受けた黒服達は絶叫を響かせた。煙を立てて、意識を失った黒服が倒れる。
魔力を電気に変換して、電撃の鞭とかした糸で感電させたのだ。
可愛い顔して、アリシアもなかなかエグい攻撃をする。

「この餓鬼っ！」
「小娘がっ！」

黒服もデバイスを狙って構え、魔力弾の一斉射撃をする。
銃器を手に持つ黒服も、弾丸の雨を発射した。
だが、黒服が放つ魔力弾と銃弾は二人に当たる事は無かった。蓮

花は二振りの刀で銃弾の雨を弾き、ただの一発も通さない鉄壁の防御を敷いている。使用してる刀は、刃が通常の刀より短く、その分小回りが利く小太刀と呼ばれる代物で、高い防御力を誇る。

アリシアも、糸を何重にも重ねて張ったネットバリアで防ぐ。隙間も極小で、弾丸すら通さない。それにいちいち障壁を張る手間もかけず、魔力消費も抑えられるエコな防御でもある。

射撃では埒があかないと判断して、剣や斧を手にした黒服が突っ込んできた。アリシアの頭を真っ二つにせんと、黒服の集団が刃を振り下ろす。しかし、目の前にアリシアの姿は無く、刃は虚しく空を切った。

「えっ！？」

眼前で敵を見失い、動揺する黒服の集団の頭上にアリシアは居た。攻撃の直前に上に跳んで、かわしたのだ。

「はっ！」

「ぐあああああああ！」

標的を定めて、アリシアは電撃の鞭を振り抜く。強烈な電撃を受け、黒服は意識を飛ばして倒れた。

一方、蓮花は逆手に掴んだまま刀を腰の鞘に収めた。抜刀術の構えを取る蓮花に、黒服の動きがピタリと止まる。先ほどの高速抜刀術を警戒して、距離を保っている。

警戒して、下手に踏み込まないのは正しい。

しかし、距離を離していれば安全、と言う考えは間違っていた。

次の瞬間、神速の域に達する速さで刃が抜かれ、刃から銀色の物体が放たれた。ギョッとする黒服に、銀色の刃が襲い掛かった。剣戟を受けた黒服は、吹っ飛んで床に転がった。

二刀抜刀術二式・魔刀鎌鼬（まとうかまいたち）。

刃に纏った魔力を、抜刀した俊足の勢いに乗せて放つ飛び斬撃。
黒服が応戦するが、全く話にならなかった。
実力が違い過ぎる。
黒服の魔導師とて、ＡランクやＡＡランクの者も多くいるが、まるで歯が立たなかった。
まさに完全無双。
蓮花とアリシアは、圧倒的実力で黒服の集団をあっという間に制圧した。部屋には、死屍累々と気絶した黒服が転がっている。勿論、二人は非殺傷設定で闘ったので、死人は出していない。
ちなみに、戦闘中に二人は一度も“技名”を口にしてはいなかった。二人の闘いの師である春香曰く「漫画のように発動前に技名を口にするのは、愚の骨頂です」とのこと。技名を口にするのが発動条件になってるならまだしも、そうでないのに口にするのは相手に攻撃の気配を悟られ、タイミングを計られる愚行となる。そんな事をするのは、二流三流や果ては素人のやる事だ。
そう教え込まれた二人は、余計な事は一切口にしなかった。
戦闘の一部始終を観ていたウーノ達は、驚きを隠せなかった。

「凄いわ……！　コレは限定解除した機動六課隊長格と互角――いいえ、もしかしたらソレ以上の実力……！」
「こんな奴らがいたとはな……」
「ほ～んと、ビックリですわ～。でも、同時に良いデータが取れましたわぁ」

驚くウーノ、感嘆するトーレ、ご機嫌なクアットロと反応は様々だった。
そんな三人に、すがりつく者が一人居た。

「た、助けてください……！」

情けない声で助けを求め、這いつくばっているのはサイモックだった。涙と鼻水でグシャグシャにした汚い顔で、必死にウーノ達にすがりつく。

「ウ、ウーノ様……！　どうか、どうかお助け下さいっ……！　長年の付き合いの誼（よしみ）で、どうか、どうかお助けをぉぉ……！」

頭を下げ、必死に助けを請う。

ウーノとトーレは、哀れみの念で彼を見下ろしていたが、やがてクアットロが口を開いた。

「サイモックさん」

「ク、クアットロ様……！」

見上げるサイモックの前には、クアットロの笑顔があった。普通に見れば可愛らしいが、妙な違和感がある。その微妙なニュアンスの違いに、助かりたい一心で必死なサイモックは気付いていない。

ニコニコの笑顔とは対照的に、クアットロの口から残酷な事実が告げられる。

「残念ですけど～、貴方の事は助けられませ～ん」

「なっ……！？」

瞬間、サイモックの顔が凍りつく。

相手の反応を愉しみながら、クアットロは続ける。

「本当でしたら、穏便に事を済ませるつもりでしたのよ～。でも、欲に駆られて貴方はリンちゃんに無茶なギャンブルを持ち掛けて、お終いには敗れた後に見苦しく言い訳をして勝者であるリンちゃんの要求を拒んで、結果、こ～んな大事にまでなってしまったでしょ

う？　あの二人の魔導師は、トーレ姉様一人ではキツそうですし、貴方を見捨てて戦闘を避けられるのなら、ソレに越した事はないでしょう？」

「で、ですが……わわ、私には、聖王の器が……！」

「貴方の部下は、み～んなやられちゃって使い物にならない状態ですから、奪い返すなんて簡単な事ですわ～。

可哀そうですけど、貴方、よ・う・ず・み・なんですよ～」

妙に優しい声音で、非情な宣告をサイモックに突き付ける。凄みを帯びた脅しより、時にこの優しい声音の方が恐ろしく感じる事がある。相手の苦境や絶望を愉しむ、悪魔の甘ったるい囁きだ。

見放されたサイモックは、絶望の淵に立たされた。大きく見開かれた目から、ボロボロと大粒の涙を流す。

「そんな……！　そんな、あんまりざんす……！　私はこれまで、貴重な実験体を提供してきたざんすよ……！　ソレをこんな形で……手のひら返しっ……！　酷いざんすよっ……！」

「社長」

見苦しく抗議をするサイモックに、今度はウーノが声をかけた。

「確かに、実験の被験者確保には私達はお世話になってきました。ですが、その見返りは充分にお支払いしました。

それに……貴方は彼の制裁を受けるべきです」

「へ……？」

ウーノの言葉に嫌なモノを感じて、サイモックは恐る恐る後ろを振り向いた。

背後には、笑みを浮かべて見下ろすリンが立っていた。リンは腕を振りかぶり、固めた右拳を思いっ切りサイモックの顔面に叩き込

む。グシャッ、と鼻が潰れる感触がした。

「ぶがっ！？」

モロに拳を受けたサイモックは、仰向けに倒れて頭を後頭部を床にぶつけた。頭を打って、そのまま気絶して白目を剥いた。

サイモックの敗因は、欲深さの一言に尽きる。今まで通り通常の商売をしていれば良かったものの、思わぬ儲け話を耳にして、欲に駆られてあろうことか客の物を横取りして金を得ようとした。その時、リンから水銀燈とヴィヴィオを奪い取る形になった。奪い取った相手が悪かった。この件でリンと対峙する事になり、体を賭ける事を提示して、リンの逆転の気質を刺激して強運を覚醒させてしまった。己の欲深さが、自分を破滅へと追い込んでしまったのだ。

気絶したサイモックを見下ろして、リンが言う。

「撃たれた水銀燈の分だ……！　――いって～！」

柄にもなく恰好よく決めようとしたが、殴った拳を抑えて痛みを訴え出した。

「本気で殴ると、殴った方も痛いんだな～！　ちくしょう！」

「リン！」

「大丈夫ですか？」

蓮花とアリシアが、駆け寄ってきた。

リンは、首を横に振って答えた。

「ううん、大丈夫じゃない……！　地味に痛い……！」

蓮花は溜め息をつき、アリシアは苦笑する。

地味に痛む拳を擦るリンは、ハッと顔を上げた。

「そうだ！　水銀燈！」

弾かれたように駆け出して、別室に続く扉に向かった。
幸い鍵はかかってなかった。乱暴に扉を開けて、透明の壁の向こう側の部屋に入る。捕われの女性達の中で、磔（はりつけ）にされてる水銀燈を見つけた。

「水銀燈！」

笑顔で声を上げて、リンは水銀燈に駆け寄った。
勢いを緩めず、そのまま飛び付くように抱いた。目からは涙、鼻からは鼻水を垂らしている。

「水銀燈～！」

「ちょっと、汚いわねぇ！　服に付いたらどうするのよ、おばかさん！」

顔を顰めて、突き放すように水銀燈は言った。
だが、リンは言い返すでもなく、嬉しそうに笑った。

「あぁ、またその言葉が聞けた……！」

「……貶されて喜ぶなんて、貴方って本当に変態な馬鹿ねぇ」

呆れる水銀燈に、リンは嗚咽混じりに言う。

「だって……だって、もう何度もダメかと思って……！　だから、こうやってまた水銀燈と一緒に居られて、嬉しくて……！　それに……ゲームに勝てたのは、水銀燈のお陰だから……！」

「私の？」
「水銀燈が、俺の事信じてくれてたから……俺、自分一人じゃあ自信無くて、石を切るなんて出来なかった……！　でも、俺を信じてくれる水銀燈がいたから、俺……俺、勝てたんだよ……！」

サイモックとの『地雷』勝負の終盤で、リンが完全思考放棄をやり遂げる事が出来たのは、自分一人の力では無い。自分の事を信じている水銀燈の信頼が、後押ししてくれて決断を下して数石を切る勇気を振り絞れたのだ。彼女の信頼が無ければ、あの勝負負けていた。

水銀燈を助ける事が出来たと同時に、リンは感謝していた。自分を信頼してくれた事に圧倒的感謝をした。

リンの震える肩に顔を埋め、水銀燈は呟いた。

「おばかさぁん」

お父様。

私は最初、お父様の代わりなど要らない、と思ってました。

けど、私の事を本気で心配して、大切に想ってくれる人間（ひと）に私は出逢いました。

＊

サイモックとその部下は倒され、捕われの女性達も解放された。

ギンガも拘束を解いてもらい、気絶してるサイモック一味を縛り上げた。地下（ここ）を出たら管理局に連絡を入れ、解放された女性達を保護してもらい、サイモック一味の身柄も連行させるそうだ。

ヴィヴィオも無事で、リンの腕に抱えられて眠っている。

「リンさん」
「はい？」

呼ばれたリンが振り返ると、捕われていた女性達が揃っていた。

「貴方のお陰で、私達は自由になれました……！　本当に、感謝しています……！」
「リンさんは、私達を救ってくれたヒーローです！」
「本当にありがとうございます！」

女性達は涙を浮かべた嬉し泣きの顔で、リンの感謝をした。
彼女達のお礼に対して、リンは照れ隠しするように頭を掻いた。

「いえ、そんな……僕は、その……ヒーローなんかじゃないです……。それに、お礼はウーノさん達や蓮花さんとアリシアさん達に言って下さい。この人達が居なかったら、僕だけじゃどうしようもなかったですから……」
「でも、貴方が居たから私達が助かったのも事実です！」
「はい！　リンさんは、私達のヒーローです！」

沢山の女性達からの感謝の気持ちを受けて、思わずリンは泣きそうになった。こんなに沢山の人から感謝されたのは、初めてだった。
嬉し泣きしそうなリンを見て、肩に乗ってる水銀燈は笑みを浮かべつつ溜め息をついた。アリシアも、微笑ましく見ている。

「あの……」

そこへ、遠慮がちにギンガが声をかけた。

「貴方達からもお話を聞きたいので、一緒に来ていただけませんか？」

「え……？　あ、それは……」

途端にリンは困り顔になって、目を逸らした。

世間では、リンはいまだ幼女誘拐の犯罪者として扱われている。出来る事なら同行は断りたいが、ギンガが許してくれるとも思えない。

どうするか悩んでいると、後ろから腕を回されて腰を掴まれた。同時に、背中に柔らかい感触がしてリンは振り返った。

背後から蓮花が密着して、後ろからリンの体を掴んでいた。背中に受ける感触は、蓮花の弾力ある大きな胸だ。

興奮するリンは、顔を赤くさせた。

「れ、蓮花さん！？」

「エスケープするぞ」

言うや否や、蓮花は水銀燈とヴィヴィオを持ったリンを抱え、素早く部屋を出て自分が空けた天井の穴に飛び移った。続いてアリシアも後を追った。

「あっ！」

追いかけようとしたギンガだったが、もう手遅れだった。気を抜いていた事もあり、咄嗟に反応する事が出来なかった。

ついでに、ウーノ達も既に穴を通って出たらしく、部屋から姿を消していた。

誘い方が悪かったわ、とギンガは自分の不器用さに顔を顰めた。ただ話を聞くだけなら、局に連れて行かなくてもこの場で出来た。相手に余計な警戒心を与えて、話の機会を失ってしまった。

しかし、ギンガはめげなかった。

「今度会った時は、必ず話を聞かせてもらいますからね。……それに、まだ私もお礼を言ってないんですから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2827x/

コンビ　運命改変ゲーム

2011年11月10日04時38分発行